

プロレタリア革命党建設と

我々の緊要の任務

(上)

—— 総括・綱領・戦術・組織の問題によせて ——

八木健彦 著

プロレタリア革命党建設と

我々の緊要の任務 (上)

——総括・綱領・戦術・組織の問題によせて——

八木健彦 著

目次

第一部 われわれの運動の到達点と緊要の任務

第一章 われわれの運動はどのように成長してきたか 2

第二章 二年間の階級闘争の諸結果と展望 15

第三章 革命運動の二年間とわれわれの緊要の諸任務 27

- ① 諸流派はどのように進化してきたか
- ② 新たな胎動と諸要素の成長
- ③ 緊要の諸任務

第四章 戦後革命運動とプロレタリア革命党建設 82

- ① 日本革命運動はどのような歴史をたどってきたか
- ② 戦後革命とその敗北の根本問題
- ③ 敗北の徹底と革命的共産主義・プロレタリア運動の新たな再生

第二部 世界革命の過渡期と戦略戦術問題によせて

第一章 世界革命の過渡期としての現代① 118

—— 帝国主義・ロシア革命・三〇年代

第二章 世界革命の過渡期としての現代② 132

—— 第二次大戦・現代帝国主義・中国革命

第三章 世界情勢と世界革命の新たな発展 167

—— 諸階級の相互関係（六〇、七〇年）

第四章 現情勢の特徴・世界革命とわれわれの任務 193

あとがき 219

第I部 われわれの運動の到達点と 緊要の任務

第一章 われわれの運動はどのように成長し てきたか

一九五八年、共産主義者同盟が新たな前衛党建設の最初の烽火を上げ、安保闘争の中で新たな革命運動の始まりを告げ知らせた時から我々の運動は始まった。この共産主義者同盟が小ブルジョア民主主義の波の中で解体した後、党をめざす革命的インテリゲンチヤのサークルはこの烽火を様々に継承し、離合集散しつつ、徐々に拡がっていった。そしてこの戦列には、六一年に構造改革派が、六四年にソ連派が、六六年に中国派が、日本共産党から脱党、あるいは除名されて、優柔不断にはあつたが、種々な傾向をもつて加わり、かくして多種多様な思想的傾向をもつたインテリゲンチヤのサークルと、相互間の思想闘争が拡げられていった。この過程は、日本共産党がその内部の汎ゆる反対派を追放し、自己の一枚岩的変質¹¹現代修正主義を完成していく過程であつた。また、労働運動が、三池闘争におけるあの屈強な労働者軍

隊が、全ブルジョアジーとブルジョア国家権力の結末の前に、組合主義へと解体集約され、ホッパー前の敗北へ雪崩をうって以来、潰走と解体・風化をとげていった過程でもあつた。この日本共産党の一枚岩的変質¹¹修正主義への純化と、労働運動に於ける小ブルジョア民主主義派の帝国主義への屈服・移行という、共産主義運動と労働運動の二重の潰走・解体・風化・変質の中で、革命的インテリゲンチヤのサークルが、若干の先進的學生と結びつきつつ、多種多様な思想的傾向をもつて、その純化と定着のための思想的苦闘を行なつてきた。〔注1〕これら全ては六五、六年に一つの絶頂に達したのであつた。

<3>
六五、六年頃から、インテリゲンチヤのサークルはいくつかの連合体を形造り始め（その第一のものとしてバンド再建）、その政治的傾向を明らかにしていき、思想運動から政治運動へと成長した。それは、米帝が北爆を開始し、侵略戦争を拡大し、インドネシアで反革命クーデターをひき起し、日帝が國際的権力要素¹¹アジア侵略反革命へ公然たる第一歩を踏み出し、他方、ベトナム人民の英雄的な抗米革命戦争が全世界に轟きを發し、ゲバラが革命戦争の旅に旅立ち、中国のプロ文革が始まり、アメリカで反帝黒人解放闘争が激しく湧き起り、急進的反戦闘争が欧米で成長するという、世界階級闘争の新たな昂まり、激化に促進されてであつた。それはまた、青年學生、とくに學生の大学闘争の新たな大衆的昂揚の始

まりと結びついてであつた。大衆的運動と結合し、政治運動に成長した革命的インテリゲンチヤのサークルの連合体は、最初の政治的格闘の中で、自己の政治的立場を現実批判¹¹帝国主義批判¹¹現代修正主義批判を¹¹三プロック世界同時革命¹¹國際主義と組織された暴力¹¹として確立し、この¹¹批判¹¹が現に帝国主義に抑圧され、圧迫される諸階級層¹¹最初に學生層を把え、その先進分子を結集し、組織し、六七、八年の暴力闘争・大衆闘争として物質化した。この¹¹三プロック世界同時革命¹¹國際主義と組織された暴力¹¹の現実批判の立場・政治的立場こそ、先行した種々の思想傾向と相互闘争に全く新しい画期を切り拓き、政治運動への成長の基調を確立し、以後の全運動を導いたものであつた。まさにこの基軸をめぐって、全サークルとその連合体は左右に分裂し、左派は結局のところこの旗の下に結集していったのであつた。（バンドのマル戦派との分裂、中核と革マルの抗争、青解の動揺と左傾化、ソ連派や構改派の分裂とオズオズした左傾化、中国派の左右分岐と左派の抬頭etc.その一頂点が五派¹¹八派の過程であつた。）これは革命的マルクス主義の旗であつた。

「この時期の學生青年が、あげてマルクス主義に心酔したということを我々は既に指摘しておいた。勿論、この心酔は理論としてのマルクス主義に対する心酔であつただけでなく、というより、むしろ『なにをなすべきか？』という問いへの答としての、敵に向かつて出征せよ

という呼びかけとしての、マルクス主義に對する心酔であつた。そして新しい戦士たちは、驚くほど原始的な裝備と訓練をもつて出征した。殆んど何の裝備もなく、まるつきり何の訓練も受けていない場合さえ多かつた。生粋の百姓と同様に、たゞ棍棒一本つかんで戦争に出かけたのだ。学生のサークルは：革命的活動の個々の部門を組織することも全くせずに、いくらかでも長期をみこした系統的活動計画などは何一つもたずに：仕事にとりかかる。：しかも驚嘆するほかないのは、戦闘員がこのように全く訓練を欠いていたにもかゝらず、運動が拡がり、成長し、勝利を獲得していった、その生活力である。（『レーニン』何をなすべきか？）

この物質化された「批判」によつて、革命的インテリゲンチヤのサークルは、徐々に、全人民の指導者として帝国主義を打倒する階級労働者階級の新しい世代（小ブルジョア民主主義派の屈服と変質をのみ眼のあたりにし、それだけその影響から自由な世代）との結合を進め労働者の先進部分を輩出し、結果していった。（労働運動内における活動は、それまでの労研や社研を中心とした、小さなサークルの宣伝から、地区反戦を中心とする政治問題に基く大衆的煽動に移行し、一つの画期を切り拓いたのであつた。）

こうして革命運動が徐々に大衆的基礎をもつた政治運動として成長し、革命的サークルの連合が新たな成長を開始した時、批判の武器を武器の批判へと打ち鍛える最

初の革命的大衆闘争が、まず学生層から湧き起つた。全共闘運動がそれである。それは、先行する闘いによつて政治的に組織され、ある程度訓練された先進分子を中核に、中国プロ文革や仏「五月革命」の影響と結合して、自然発生的な社会主義革命への要求として全国の大学を津々浦々まで席卷した。（注2）また、「国際主義と組織された暴力」と、漠然たるベトナム反戦や個々の反基地・反軍産闘争の結合は、沖繩問題をめぐつて具体的な根本的な政治闘争に転化し始めた。そして、両者の結合が政府打倒闘争の端緒を形造り、政府の警察力との激しい衝突をよび起した。更に、この闘いにプロレタリアートの最初の先進層が結集し、引き入れられた。

革命運動はこの最初の革命的大衆闘争の波の中で打ち鍛えられ、成長し、ブンド・革共同・構改派・ソ連派・中国派・社民内左翼分派の全てにおいて、左派の優位や左傾化や、左翼の分離etcが獲得され、革命的サークルとその連合体は広汎につくり出され、成長した。（ブンド及び中核派に主導された三派↓五派↓八派・全国全共闘・反戦）だが、革命運動はこのような広い基礎を獲得し、一つの社会的な政治勢力となることによつて、その上に立つことによつて、逆に自己の運動の狭さ（その政治・組織・活動の狭さ、非系統性・手工業性・原始性・分散主義、言いかえればサークル的な狭さ、非系統性・手工業性・自由分散主義）との矛盾に陥つた。とくに革命的大衆闘争が政府打倒闘争の端緒につき、政府の警

察力と激しい衝突をよび起し、そして政府の警察力によつて抑えつけられると共に、この矛盾は一層明瞭になつた。

「まさにこれらの戦闘行動が長期にわたる頑強な闘争のために、あらかじめ周到に考えぬいて、順を追つて準備してきた系統的計画の結果でなく、伝統的にやられていたサークル活動が自然発生的に成長したものにすぎなかつたからである。：なるほど、歴史的見地からすれば裝備の原始的なことは、はじめの頃には避けられないことであつたばかりでなく、戦士達を広く引き入れるための一条件として正当でさえあつた。けれど、一担、真剣な戦闘行動が始まるや否や（そしてこれは実質上すでに一八九六年の夏のストライキー一九六九年の大学占拠と街頭行動ーをもつて始まつた）、我々の戦闘組織の欠陥はいよいよ痛切に感じられ始めた。」そしてはやくも「革命的活動全体の規模が狭く」「誰も彼もが何もかもやり、全員が全員、投票遊びに打ち興じているような原始的サークルの『原始的民主主義』」からなる「常備軍は民衆に踏みつぶされ、押しつけられ」てしまつたのである。（以上引用は『なにをなすべきか？』）

<5> また、プロレタリアートの最初の先進層がこの革命的大衆闘争に結集し、引き入れられ、積極的に登場し始めるとともに、プロレタリアートの革命運動が始まるとともに、サークル的な、動揺的な、分散的な、組織性や規律性の弱く、非系統的な組織と活動は既に極端となり、も

つと強固な組織と、もつと広い革命的活動と、もつと強力な指導者を、もつと強固な中央集権的な組織性と規律性を、系統的で堅固な活動を要求し始めたのであつた。

言いかえれば、その下で「たゞ夜分のひまな時間だけでなく、自分の全生活を革命にさゝげる」ことのできるような組織、「忍耐とがんばりを發揮して職業革命家に、職業的な煽動家、組織者、宣伝家、配布者などに育てあげ」（『なにをなすべきか？』）ていける組織を要求し始めたのであつた。そうして我々の運動は、その基本的思想や組織や活動の欠陥を露呈し、この欠陥はいよいよ痛切に感じられ始めた。かくして革命運動は、成長の病いに陥り、混乱と分解を深めた。無数の革命的サークルとその連合体が広汎な規模でつくり出されると同時に、連合体は内部で分解を深め、無数のサークルへと分解し混沌と混乱を深めた。これは、革命運動が本格的なプロレタリア革命運動へと、強固に組織された革命党とその闘いへと飛躍し、成長するための過度期の病いである。このような混乱と分解が、何よりもまずブンドに集中し革命的大衆闘争の波のたゞ中で始まつていったのは象徴的である。何故なら、ブンドこそ、五八年以来、真先に

新たな前衛党建設の烽火をあげ、それを革命的大衆闘争の基盤の上におし上げ、成長させるべく、必死に闘い、そのように烽火をかゝげ続け、全ての革命的サークルを牽引してきたからである。（この基盤の上でのみ烽火は物質的に転化しうるのであり、また、そのように全力

をあげることが烽火を維持し、発展させる唯一の方法だった。

六〇年代末の最初の革命的大衆闘争の波と、革命運動がこの広い基盤の上に立ち、一つの政治勢力として全階級の前に登場したことは、このブンドの歴史的役割が終ったこと、"ブンドの時代"が終ったことを示したのであった。それは、烽火をかゝげる時代、種をまき土壌をつくり出していく時代、サークルとその連合の時代、大衆闘争とともに自然成長的に前進していく時代(目前の闘争とその戦術的追求を軸とする組織の自然成長)が終ったということであった。そこからどこへどのように前進するのか、どのように本格的な訓練、組織的な革命運動の訓練を自己に課していくのか、そのために我々はなに着手し、何をなすべきなのか、ブンドこそいちはやくこの課題につきあたった。ブンドは、激しい内部闘争によって、この課題に答えるべく闘った。だが、ブンドはこの闘いにその意志と全組織勢力を集中し、統合することができなかつた。その政治と組織と活動を、より広いより確固とした、より系統的なものへと高めていく環、全論争を發展させつゝ、その組織的实践を打ち鍛えていく革命運動の環を把みだすことができず、組織的闘争を打ち鍛え、練りあげ、そうして自分自身を止揚していくことができずに分解し、混乱と分解を深めていった。これは、その後の革命運動の全体を規定した。結局のところ、六九年の問題は、「共産主義と労働運

要な日常活動をたゞの「瞬間も忘れない」という計画性をもった闘いが必要なのだ。まさしくこのような内容として、共産主義と労働運動の結合が打ち鍛えられねばならない。(技術の問題はこの基礎の上で、組織と活動の「環」として取り上げられ、厳格に技術として準備されていくものである。)"蜂起の準備を開始すること"は、サークル連合たるブンド(地区反戦や地域労働運動の指導サークルとしての"地区党"、社会学同の指導サークルとしての"学生組織委員会"、地区反戦と"地区党"を混合したような共青の指導サークルとしての"青年組織委員会"、それらの連合体としての"中央委員会とその頭部たる政治局。これはまさに我々が"自然発生的に形造られる組織形態のまゝに拝跪していること、我々の組織活動がどれほど狭くて原始的であるか、この重要な分野で我々がどのような手工業者であるか"——なにをなすべきか?)より一を示している)を徹底的に変革し、共産主義者の強固な、中央集権的な戦闘組織へと打ち鍛え高めていく闘いと一体であった。それはそれでまた、全組織的な実践と論争を打ち鍛え、その内容・質を変革し、「専門的に共産主義的活動に全身を捧げる」我々が、「忍耐とがんばりを発揮して、職業革命家に自分を育てあげなければならぬのだ」という意識を組織的に確保し打ち鍛えていく一時期の頑強な闘いを必要とするものであった。まさしく問題は「何から始めるべきか」であつた。

動・プロレタリア運動の結合を一層真剣に頑強におし進め"その基礎の上で"蜂起の準備を開始すること"「蜂起を闘い取る党の建設に着手すること」が日程に上ったことであつた。言いかえれば、「蜂起の準備の開始・蜂起を闘い取る党の建設の着手」の点から「共産主義と労働運動・プロレタリア運動の結合を強固に打ち鍛えていく」ことであつた。しかし「共産主義と労働運動の結合」(以上引用は『なにをなすべきか?』)のためには、我々の運動にまつわりついできた小ブルジョア性、戦術における小ブルジョアの幻想との苛借なき闘いと、その克服を要求した。また「蜂起の準備を開始すること、蜂起を闘い取る党の建設に着手すること」は、レーニンの「我々の運動の緊要な諸任務」(一九〇〇年末)と第二回大会(一九〇三年夏)がそうであつたように、また、ベトナム八月革命の一斉蜂起の準備を開始した三九と四一年がそうであつたように、綱領—組織—戦術—活動態度全体の問題であり、これらが分かち難く結びついて革命党組織として集中し、党—階級—大衆の相互関係として打ち鍛えていく問題である。蜂起の主体は、一時期にわたる堅忍不拔な、頑強な闘争によって、綱領—政治内容—戦術—活動態度—組織—組織性—規律性を、党—階級—大衆の相互関係を、目的意識的に打ち鍛えていくことによって形造られ、建設されていくのである。「汎ゆる側面から今すぐ蜂起の準備を始めると同時に、自分の緊

だが、過去の汎ゆる革命運動の経験から断絶したところから運動を開始し、民主主義的動員の時期(しかも組織的運動の解体した)だけを経験し、その組織や活動態度や政策態度に深く影響されていた我々は、レーニンの『なにをなすべきか?』や蜂起の党を口には上せつつも、その内容については殆んど理解しえないか、自分の甲羅に似せてそれを理解していたのである。(とくに我々の運動が、その生成と全人民の前への登場の過程でブルジョアジーや現代修正主義との闘いのために、種々の「合法マルクス主義者」—種々雑多の新左翼の「イデオログ」や、講壇的な理論的支柱や、急進市民派—と連合し、この連合によって革命的左翼の思想が非常に巾広く拡がったこと、逆にそのために、殆んどもっぱら合法マルクス主義文書で教育された活動家の層が優勢を示すということによって、レーニン主義は著しく歪められ合法化されて理解され—第二インター中央派風に—、広がっていたのであつた。)だからこのような我々の運動の急激な転換が問題になったとき、誰も「共産主義とプロレタリア運動の一層強固な結合」「蜂起の準備を開始すること」「蜂起を闘い取る党の建設に着手すること」「何から始めるべきか」を正しく提起することができなかった。(レーニンの『なにをなすべきか?』は「いかに蜂起を準備すべきか」をテーマにして、政治的煽動の性格と主要な内容の問題、組織上の任務の問題、全国的な戦闘組織を同時にいろいろな側面から建設する計画の

問題について書かれている。即ち、綱領―組織―戦術の全体から「蜂起の準備」が提起されているのである。これはレーニンが「我々の運動の緊要な諸任務」で最初に提起し、以来、心血を注いだ点であった。(我々(赤軍派)は「蜂起の準備の開始」を「前段階蜂起」として、「蜂起を闘い取る党の建設の着手」を、前段階蜂起への集中とその実現を通しての革命的左翼と運動の再編として提起し、追求した。「前段階蜂起」とは「蜂起の準備を開始すべきこと、蜂起を闘い取る組織の建設に着手すべきこと」を、自身の闘い、その経験、その敗北をもって、全運動に、運動の全参加者に告げ知らせ、その政治・組織・活動の転換を自覚させ、また迫ろうとするものであった。しかし、その企図と目的の壮大な革命性にもかかわらず、やはりそれは自然発生の性格を免れることはできなかった。ロシアの〇一年の学生と専制の衝突、〇二年の農民蜂起、〇三年の南部労働者の政治ストライキが、また、ベトナムの四〇―四一年のバック・ソンのナム・キ、ドン・ルオンの自然発生の蜂起が、来るべき一斉蜂起の先駆となったのは、プロレタリア人民の運動自身の自然発生的成長としてであった。そして、敵の弾圧に敗北したのもそれ故であった。だからこそ、レーニンも、ホー・チ・ミンも、それだけ革命家の目的意識性を、一斉蜂起の、全人民蜂起の、一層精力的な、組織的な、計画的な強固な準備においたのだった。我々(赤軍派)の闘いが、組織や活動についての貴重な教訓を残し

我々の革命運動の転換をおし進めはしたが、それは、階級闘争や革命運動全体の観点からみる時、やはり狭い戦術主義として自然発生的であった。そして、運動の自然成長的な生活力としては、一つの頂点・限界・転換点にたっただけに、この鋭い戦術主義は尚更に狭く部分化したのであった。何故なら、本来、綱領―戦術―組織の凝縮として、党―階級の相互関係の凝縮として闘い取られる蜂起を、逆にその端緒として闘い取ろうとしたこと、だがそれを闘い取るべき主体は、蜂起の主体として、一時期にわたって組織され、訓練され、打ち鍛えられたものではなく、「伝統的にやられているサークル活動が自然発生的に成長したものにすぎなかったからである。」従ってこの「前段階蜂起」は、基本的に当面の闘争戦術という点をこえるものではなかった。だが、問題は、当面の闘争戦術をこえた領域、組織に集約される綱領―組織―戦術・活動態度全体の問題であり、これら全体において我々の運動を変革し、高めることであり、そこから当面の闘争戦術をも規定し、導くことであった。(我々は逆に当面の闘争戦術から一切を規定し、導くという転倒に不可避的に陥った。) 企図と目的の壮大な革命性とその方法、闘いの領域と内容、自己に課した任務の狭さと自然発生の矛盾、そこから導かれる無政府性をはらんだ鋭い戦術主義、その鋭鋒の前にブンドの全サークルが右往左往し、分解していったのであった。この分解は、ブンド内一切のウミ(従って革命運動全体一切

のウミ)を吐き出す「積極的役割」をももっていたが、それとの組織闘争によって自らをも一層目的意識性へと高めるよりも、当面の闘争戦術によって直接大衆に訴える道、自らの闘いの経験とそれによる運動全体の再編の道を選んだ我々は、この分解によって、逆に自らの狭さや自然発生の固定化する危険をも付与された。かくしてブンドからの前進は、ブンドの分解と混乱という成長の病いへと陥ったのであった。我々(赤軍派)は、その最も革命的な部分であったが故に、この分解と混乱に対して、自らの狭さや自然発生の責任を負っている。〔注3〕

< 9 >
 その後の二年間、この混乱と分解は革命運動全体の中に広く深く拡がっていった。この二年間、我々の革命運動は一層多くの革命的サークルをつくりだし、先進的活動家の層を拡大し、「種々の部分的任務の実現にその力を集中する運動活動家の数は、増々多くな」り、あるいはこれまでとは異なった新たな組織と活動と戦闘の勇敢な試みが増大し、困難な中で、徐々にかつ自然成長的ではあれ、拡大してきた。だが、この二年間、我々の革命運動には、指導的組織、政治的領袖となる組織、我々の運動全体に確固さと精力と継承性を保証できるような組織、そのような潮流は存在しない。それは、今日の自然成長性と手工業性の主要な要因である。このような組織と潮流が存在しないこと、このような自然成長性と手工業性に眼を向けない者、それを美化するものは、明

白に経済主義者である。では、何が必要なのか。我々はこの自然成長性と手工業性をいかに克服すべきなのか。我々は何に着手すべきなのか。ブンドからどこへどのように入進すべきなのか。その緊要な任務は何なのか。我々の革命運動の現在の環は何なのか。私は、このつきつけられている課題に、できるだけ明瞭に、精力的に答えたいと思う。そのためにも、その前に、この二年間の階級闘争と革命運動の諸結果についてふれておくべきだと思われる。その発展・成長・拡がり、矛盾・混乱・分解について分析することが必要だと思われる。

〔注1〕
 この種々の思想的傾向と相互間の闘争の内容についてふれば、それ自身、一つの論文を必要とするだろう。たゞ言えることは、どのサークル、どの傾向に於いても、旧世代、旧い活動家達、旧来の思考方法が瓦解し解体し、衰退し、後景に退き、戦後資本主義の成長・成熟そのもの、中で登場してきた世代、その下で闘いを開始した活動家達、その闘いに耐えうる思想への欲求が、その持続力・生活力であり、結局、それこそ全てを規定していたことである。このような世代・闘い・欲求は、とりわけ学生の知的精神的上昇への欲求が他方での生産力主義・プラグマチズム・経済主義の浸透によって解体されていくという、存在の希薄感とそれを克服しようとする思想的、心情的、行動的衝動と

現実の社会・政治体制との衝突として、先進的学生の
中から絶えず生み出されたのであった。(「国際主義
と組織された暴力」や全共闘運動は、その政治的練磨
として到達した共通項であった。)この時期を代表し
た思想は黒田哲学であり、字野経済学であり、吉本自
立思想であった。また、種々の疎外論や主体的唯物論
やアナキズムであった。この時期のサークルの生活
力や思想に関するこのような傾向は、六〇年代後半の
我々の運動をも少なからず規定し、それは今もなお、
尾を引いている。それは思想的傾向にも、活動態度に
も、組織にも現われている。それは、疑いもなく小ブ
ルジョアの傾向である。だがまた、不可避的な小ブル
ジョアの傾向であった。革命運動が、現代修正主義に
対抗し、格闘しながら成長し、自己の生存権を確保す
るためにどうしても必要な連合、通過しなければなら
ない「マルクス主義」であった。(ちょうど、ロシア
社会民主主義派がその初期にナロードニキとの闘争の
ために、「合法マルクス主義」とも同盟し、自己の思
想を巾広く広げ、自己の生存権を確保したように。)し
かし今では既に極端になっている。思想傾向として
も、組織としても、活動態度としても、極端になっ
ている。今や徹底的に克服され、革命的マルクス・レー
ニン主義・ボルシェヴィズムへ純化されねばならない。
〔注2〕

大学闘争—全共闘運動は、結局のところどのような闘

資本主義の下では、労働力の養成・労働技能の習得自
身が、私的交換・私的過程として現われ、労働力の価
値・価格として規定されていく。活動そのものは社会
化され、この私有は多くの場合、仮象にすぎないの
だが—と、それによる「歴史的に規定された社会的生
産の体制のなかで占めるその地位、社会的労働組織の
なかでの役割」の、小ブルジョアインテリゲンチヤ的
性格—これは一層希薄化されつゝあるのだが—と闘い
克服し、この同盟の一部隊として打ち鍛えようとする
ものであった。そしてその方向を、政治的には、日帝
のアジア侵略反革命と闘う全人民的政治闘争の拠点と
して体现し、打ち鍛えようとするものであった。また
金融寡頭制の強化の下で、戦後ブルジョア民主主義の
幻想性・仮象性の批判、現実の金融資本の支配と階級
対立の非和解性を陰蔽する幻想性・仮象性を批判し、
バクロし、現実の階級対立を、その暴力性をアバきた
てることであつた。それは、ブルジョア社会における
精神的生産手段の批判の一内容として、戦後ブルジョ
ア民主主義の実体の批判・解体であるよりも、ブルジ
ョアイデオロギー批判であり、幻想性・仮象性の批判
と実体のバクロであつた。まさにこの徹底化こそが、
バリケード死守—徹底自衛防禦・徹底抗戦であつた。
以上、「精神的生産手段」の金融資本からの収奪と、
全勤労人民の共同所有と統制・管理への転化—の要求
と、そのような全勤労人民の同盟を求め、自己をその

いであつたのか。その自然発生的な社会主義革命への
要求の内容と、それが提起した諸問題は何であつたの
か。革命運動はその経験と教訓をくみかさねばなら
ない。大学闘争—全共闘運動のスローガンは「大学の帝
国主義的再編粉碎—近代主義批判、大学解体—自己否
定、大学占拠を安保闘争の全人民的拠点とせよ!、バ
リケード死守。徹底抗戦」であつた。これは、六〇年
代に、大学の資本主義再生産構造への一層直接的包摂
—金融資本による一層直接的支配・従属化が進み、ア
ジア侵略反革命と金融寡頭制の手段へと組み入れられ
その様々な手代。寄生者が大学上層部に形成されたこ
と。言いかえれば、精神的生産手段が、物質的生産手
段の所有者—金融資本による一層露骨な直接的な私的
所有へ隷属化し、その手代。寄生者が、近代主義—資
本主義イデオロギーに支えられて大学上層部に形成さ
れたこと、かくして新たな帝国主義的な、全資本主義
関係から帰結する抑圧・隷属・収奪関係が生じたこと
このことに対する闘いであつた。従つて、大学解体—
自己否定は「物質的生産手段の所有者が、また、精神
的生産手段を所有する」関係の下で、精神的生産手段
を金融資本から奪取し、その私的所有を廃絶し、それ
を全勤労人民の共同所有と、統制・管理に転化せよ!
—という要求であり、そのような全勤労人民の同盟に向
けて、自らをも、自己の小ブルジョアの側面(資本へ
の隷属の下での、技術・知識・理論・研究の私所有—

一部隊として打ち鍛えようとし、それを政治的には侵
略反革命批判—戦後ブルジョア民主主義批判として打
ち鍛えようとしたこと、もつと単純化すれば、金融寡
頭制批判—侵略反革命批判—戦後ブルジョア民主主義
批判と、この批判を物質力として打ち鍛えるプロレタ
リアートを指導階級とする全勤労人民の同盟への要求
と、その一部隊としての自己形成と訓練、こゝに、全
共闘運動の、帝国主義打倒—社会主義革命を要求する
革命的な大衆闘争としての性格。内容があつた。と同時
にまた、それは、小ブルジョアの観念的性格を濃厚に
もっていたのであつた。例えば、資本主義批判を分業
批判として直ちに精神労働と肉体労働の分業の廃絶を
求め、そのことによつて、所有関係とブルジョアジ
ーを見失ひ、ブルジョアジ—との闘争・階級闘争の観点
を見失うロマン主義や、大学占拠—生産管理—二重権
力とするアナルコサンディカリズムや、大学革命の提
唱によつて、自己の小ブルジョアの側面と闘い、克服
し、全勤労人民の同盟へ、その一部隊へと打ち鍛えて
いく任務を解消する改良主義や、戦後ブルジョア民主
主義の幻想性。仮象性の批判と実体のバクロを、戦後
ブルジョア民主主義の解体そのものと取る違える観念
論的傾向、あるいは、戦闘手段たるバリケードそのも
のに、また、占拠そのものに、何か社会革命的意味を
頭の中で思い描き、階級的意識性と組織性を打ち鍛え
ることを放棄してしまふ観念論的自然成長性、闘いと

闘争対象と獲得物を頭の中でつくりあげたり、解体したりする観念的闘争傾向と主観主義、そして、気分による闘いや活動の左右と、組織性や規律性の欠除、それを頑強に打ち鍛えていく堅忍さ・粘り強さの欠除と無政府性、個人主義 etc である。(この小ブルジョア性を細々と指摘したのは、今日の革命運動がその影響を深く蒙っており、それが現在の混乱や混沌の一因となっているからである。)この革命的大衆闘争によって、革命運動は次のような飛躍を要求されたといえるだろう。第一に、思想的には資本主義批判・帝國主義批判を一層深め、鮮明にし、それが内包している革命的要求を明確にするとともに、同じく内包されている小ブルジョアイデオロギーと容赦なく闘い、克服すること。第二に、自己の政治を、反政府運動の、狭い、それ、個別的なそれから、綱領的な政治・より広い、高い権力問題の政治・革命的政治へと高めること。第三に、組織や規律や活動態度・方法や闘争方法において、主観主義や気分による左右、無政府性や分散主義・個人主義の小ブルジョアの傾向と頑強に闘い、頑強さ・堅忍さ・強固な組織性・規律性を打ち鍛え、柔軟でかつ首尾一貫した系統的な粘り強い活動力を打ち鍛え、革命的理論に導びかれて考え抜かれた方策によって闘い、意志の統一と組織勢力の統一を一層確固としたものとしていくこと、このような訓練を自らに組織的に施すこと。第四に、このような思想・理論―政治

―組織―活動態度・闘争方法において、革命運動自身も濃厚にもっている汎ゆる小ブルジョアの、インテリゲンチヤ的傾向と頑強に闘い、それを克服し、そうすることによって、闘いに決起してくる学生・インテリゲンチヤの漠然たる根本的欲求をより明確にし、それに意識性と組織性を与え、その創意性や積極性を粘り強く組織し、自己の独自性を堅持しつつ、革命的中核となって、彼らを全勤労人民の同盟へ、その一部隊へと打ち鍛えていくこと、そのことによって、全人民の指導階級としてのプロレタリアートを、プロレタリアゲモノーを、プロレタリア隊列を、政治的組織的に築き、打ち鍛えていくことであった。(この全勤労人民の同盟の一部隊という方向は、例えば、武装宣伝工作隊として生まれていく芽をもっていた。即ち、五一〇人単位の組を組織し、あるいは宣伝隊、あるいは工作隊として、全国各大学―三里塚―各地区反戦・地域労働運動―入管闘争や部落解放運動―街頭闘争・安部沖繩闘争の交流・結合のパイプとしての役割を追求する、いや、この交流・結合の粘り強い追求そのものによって、自ら学び、自己教育し、訓練し、全勤労人民の同盟の一部隊として打ち鍛えていくというものがある。しかしこのためには、革命運動そのものが、もっと広い政治と活動規模を、もっと系統性や計画性を頑強さ・粘り強さと自己教育の謙虚さをもつことが絶対的な必要事であった。結局これは全共闘の解体後に

様々な方向と方法でもって、様々なサークルによって自然発生的に追求されている。)

〔注3〕

赤軍派について言えば、そのフラクの形成過程自身のうちに、根本的問題をはらんでいた。『世界革命戦争への飛翔』にヴィヴィドに、かつリアルに描かれているところによれば、四・二八闘争によってその闘争の指導サークルが生まれ、このサークルが特別の確固たる立場・政治的傾向なしに、半ば人脈的にフラクとなり、そしてフラクとなるや否や、自己を「ブンドの上に立つ党」と規定し、「ブンドと統一戦線を結ぶ」関係にたっていること、そして、秋の闘争戦術をめぐって、四・二八闘争の戦術的技術的エスカレート―蜂起を打ち出し、そのために、四・二八闘争の主体の技術的技術的エスカレート―ブンドの軍事化―「党の革命」を提起し、その追求としてフラクを組織化していくというものであった。ブンドの歴史的役割は、本文の中で述べたように、革命的マルクス主義と大衆運動とを結合して、革命的大衆闘争へおし上げることに全力を尽すことであった。そして革命的な大衆闘争が現実のものとなったとき、ブンドからの前進・飛躍が課題となったのであるが、それは、目前の闘争とその戦術的追求を軸とした自然成長性・組織の自然成長性を克服し、権力問題をめぐる革命的政治(綱領)を打ちたて、その実現に向けて、蜂起―権力奪取の観点から

その組織と活動を計画化、系統化し、打ち鍛えていくという根本的転換が必要だったのである。だがまさにその点において、赤軍派フラクの形成過程は旧来の自然成長性をそのまま踏襲し、徹底化したものであった。これは、組織と戦術における自然成長的反抗主義である。そしてその基礎の上で蜂起が提起され、四・二八闘争とその主体の戦術的技術的エスカレートとして蜂起と「党の革命」―ブンドの軍事化が追求されるという矛盾にあった。だからこそ、ブンド―社学同―共青を混合した党内闘争となり、決意と憤激―無政府性をもったのであった。(四・二八闘争の中からフラクが生まれ、戦術的技術的突出、即ブンドの上に立つ「党」となり、その党派性を秋の闘争の戦術的技術的エスカレートに純化していくという過程はこのことを物語っている。)だがこの矛盾は七・六をもって爆発し、以後は、軍事が主体の質的飛躍と結合され、「軍事を単に党の機能、技術・武器としてではなく、主体。組織の問題、党の本質として把握する」という方向に進化した。これは自然発生的軍事から、目的意識的実践として軍事を取り扱おうとする点で、大きな前進であり、伝統的な「目前の闘争とその戦術的追求を軸とした自然成長性」を克服しようとするものであった。しかしそれが、政治・組織・活動の総体、綱領―戦術―組織の総体として追求され、打ち鍛えられないならば、逆に軍事を観念化し、理念化し、情念

化・ロマン化していく傾向を情結する。即ち、一切が軍事に解消され、軍事の観点からのみ評価されるか、あるいは逆に軍事が思想や宣伝や暴露や組織化の問題、その手段として取り扱われることである。だが軍事は敵権力の実体的に解体するための闘争手段であり、闘争技術である。手段や技術以上のもの、それはあくまで階級闘争の内容としてあるのである。軍事をリアルにこのような技術として取り扱うには、敵権力を実体的に解体する点に向けた、権力奪取に向けた政治。組織・活動が日々打ち鍛えられねばならず、それは、軍事によって解決されるものではなく、階級闘争の目的意識的政治―共産主義的政治そのものである。それをこそ、綱領―戦術―組織、権力をめぐる党―階級の相互関係として問題にしなければならぬのだ。

私はここで我々(赤軍派)の形成過程の弱点を厳しく追求した。それは当時からすれば厳しすぎるかもしれない。だが、これは苦い真理である。我々は今ではもはやそれを曖昧にして通り過ぎてしまうことはできない。この苦い真理をしっかりと教訓化し、克服すること、それが我々と日本革命運動の本当の成長の糧となるのである。我々の運動は、我々にとって心地よい真理によってばかりでなく、それ以上に、苦痛と恥しさをともなう苦い真理によってこそ打ち鍛えられ、前進するのである。この苦い真理は同時に、当時右往左往し、日和見主義と官僚的自己保身を決めこんだ全分派

の破産、大衆運動の論理から対抗した分派の破産と、ブンドの解体をも立証しているのだ。四・二八闘争の指導サークルが既にフラクティックな性格をもたざるをえなかった時、ブンドの解体は始まっていたのである。(目前の闘争とその戦術的追求を軸とする組織の自然成長という進み方の限界、その克服は六八年一〇・二一―一一・七闘争とその結果として明らかになっていったのだから。勿論このことは、目前の闘争の精力的遂行という任務自身を否定するものではない。)

第二章

二年間の階級闘争の諸結果と展望

<15> この二年間、日本階級闘争と革命運動は、大きな転換の過渡期を経験してきた。それは本格的な試練と成長への不可避的な転換過程―過渡期であった。この過程は、階級闘争が一層広く、深く、根本的になっていくと同時に、革命運動の分解と混乱が広く進んだ時でもあった。ブンドの六九年七・六から始まった分解は、今では革命運動全体に波及し、当時のブンド議長の内傷と同志望月の死は、今では一層テロル化する内ゲバと、増大する死者としてみることができている。だが、驚くべきことは、革命運動のこのような分解と混乱にもかかわらず、階級闘争は一層広く、深く、根本的になってきていることである。革命運動の土壌と、革命運動が自己に結びつけ、動員しうる勢力は拡大しているのである。いや、それ故にこそ、革命運動の自然発生性・自然成長性がそれに矛盾し、混乱を来しているのだ。だがこの過渡期は、今一つ

の終局を迎えようとしている。階級闘争の深まり・激化。根本化が(敵権力の反動の激化、"反動と暴力への熱望"を含めて)、このような過渡期に終止符を打ちつゝあるのだ。だが、どのような方向へ終止符を打つか。自然成長的なやり方、即ち一層分解と混乱を深め、散を乱す方向、後方へ向ってか。これは、革命運動が経済主義(合法主義・手工業性)と自然発生的テロリズムの沼地に迷いこむことを意味するだろう。それとも、過渡期を止揚し、「政治闘争に一層精力と確固さと継承性を保証する」方向、「汎ゆる側面から今すぐ蜂起の準備を始めると同時に、自分の緊要な日常活動をたゞの一瞬間も忘れない」方向、「広汎であると同時に、統一された整然たる活動を組織」し、運動に一層、強固さ、堅固さ、確固さをつくりだしていく方向へか。即ち、本格的成長と前方へ向ってか。(以上引用は『なにをなすべきか?』)この解決のために、革命運動が今程目的意識性と精力さを要求されている時はない。我々はそのためにも、この二年間の階級闘争と革命運動の経験について、それがこの解決のためにつくりだしてきた諸条件について、簡単にではあっても総括しておかねばならない。

△国際的諸関係においてV―この二年間、インドシナ―アジア国際革命の巨大な前進は、米軍のベトナム撤退と、中国―台湾問題を、国際政治の具体的・現実的焦点へ登場させた。他方、国際反革命の内部では、盟主たる米帝の後退の下で、日帝の前線進出が、沖繩問題を焦点

に、また、朝鮮を重点に大きく進んだ。かくして、インドシナーアシア国際革命の前進と、日帝の前線進出との激突は、台湾―南朝鮮―沖繩問題を環にして（更にこの間には尖閣列島―釣魚台島の問題が存在する）、インドシナー―中国―朝鮮の国際革命の勝利的前進と、日「韓」台同盟体制（日帝の「勢力圏」）との激突として現実化した。更に、国際通貨危機と市場問題を焦点に、米帝を中軸とする資本主義世界経済の動揺と再編もまた、中国―台湾問題と沖繩問題を環にしている。かくして、インドシナーアシア国際革命の勝利的前進―米帝の歩一歩の後退―日帝の前線進出と国際革命との激突―日米矛盾の激化―国際反革命の再編と巻き返しは、国際的な革命と改良と反革命のせめぎあいの中で、動揺と危機と激突を拡大し、増幅しつつ、その国際的一焦点を、台湾―南朝鮮―沖繩に形造りつゝある。

この二年間、日本階級闘争は国際階級闘争に一層深く結びつけられ、深まりゆく国際政治の動揺・再編・危機・激突の中心部へ一層深く導き入れられてきた。そして今や、日本階級闘争は、台湾―南朝鮮―沖繩問題を自身の直接的な最大の焦点とすることによって、この環を通して、国際階級闘争全体と、その中心部と、分かち難く結びついているのである。この環・焦点の中に、日本をとりまく国際的諸関係総体が集約され、かつ日本の諸階級―諸潮流の相互関係・政治的相互関係が形造られているのである。（インドシナー―東南アジアと米帝の政治的

軍事関係と、タイ―マラヤ―インドネシア・フィリピンと日帝の政治的・経済的関係の縦横的結合と矛盾、及びそれとインドシナ革命戦争―東南アジア諸国解放戦争の縦横的闘争の関係は、極東では米帝の政治的・軍事関係と日帝の政治的・経済的関係の一層直接的な結合と矛盾、及びそれと中国―北部朝鮮・南部朝鮮―沖繩―日本本土人民の闘争の関係として凝縮されている。日本階級闘争にとつて、台湾―南朝鮮―沖繩問題は、インドシナー―東南アジアの諸関係全体を包括するものである。）我々はこの環・焦点を通して、米―日帝國主義の侵略反革命を打ち破り、労働者勤労人民の国際的同盟・融合を打ち鍛えるべく闘わねばならない。ベトナム―インドシナ革命戦争勝利・米帝をアジアから叩き出せ！安保紛争・日帝のアジア侵略反革命阻止というこれまでの闘いの基調の上に、更に中華人民共和国の即時承認―日台条約即時廃棄、朝鮮民主主義人民共和国即時承認―日「韓」条約即時放棄、朝鮮への一切の帝國主義的干渉反対・諸権益の即時放棄―南北統一朝鮮革命勝利・朝鮮人民の抗米反日救国闘争支持、沖繩基地撤去・米軍即時撤退―自衛隊派兵阻止・日帝の沖繩統治政策粉碎―沖繩をアジア―日―米プロレタリア人民の団結の砦・世界革命の砦へ転化せよ！のスローガンを、具体的・現実的任務として登場させた。当面の情勢と闘いは、様々な迂余曲折を経つつも、この環・焦点をめぐる国際的諸関係全体を一層鮮明にし、その動揺・危機・激突を一層広

く、深く、増幅しておし進め、また、この環・焦点をめぐる諸階級―諸潮流の相互関係・政治的相互関係を一層鮮明に、広汎に、徹底しておし進め、深化し、全階級と全潮流の相互関係についての一つの決着づけを要求する方向へ向うであろう。また、そうせねばならない。

△国内的諸関係において――日帝のアジア侵略反革命への一層の重心の移行と、列強間の矛盾の激化―市場再分割は、資本の集中―金融寡頭制とその圧迫を激しく強め、それに対する憤激と闘いもまた昂まり、激しくなってきた。この二年間、その最大の焦点・攻防の環は三里塚闘争であった。今日の一握りの金融資本の支配とそのあくことなき搾取欲・膨張欲がもたらしている農民に対する圧迫、龐大な小農民の零落、それを暴力的に促進する土地収奪に対して、三里塚の農民は真向から頑強に闘ってきた。そしてその頑強な粘り強い闘いの前進の中で自己の一面での小土地所有者・小商品生産者としての性格を自ら克服し、「土地ではなく土だ」と、勤労人民としての団結を打ち鍛え、三里塚を、全国の勤労人民の団結の砦として打ち固めてきた。また、日帝のアジア侵略反革命と闘い、アジアの革命的人民との団結を打ち鍛えてきた。このようにして三里塚闘争は、金融資本―政府の暴力的土地収奪との闘いを通して、土地の全勤労人民の共同所有への転化の要求を培い、それを實現する全勤労人民の同盟―社会主義労働同盟を打ち鍛えてきたのである。（注1）そしてこの闘いは、資本・金融資本を取

奪し、生産手段と流通手段を全勤労人民の共同所有へと転化するプロレタリアートの闘い、全勤労人民の同盟の指導者となり、社会的生産と分配の人民統制を實施するプロレタリアートの闘い、そのようなプロレタリアートの指導力を求めている。だからこそ、三里塚闘争は政府打倒の闘いに一歩踏みこんだのであった。（このような社会主義労働同盟とその要求は、権力をめぐる闘争、政府打倒の闘い、権力闘争における労働同盟と、プロレタリアートの指導性として集中され、打ち鍛えられることによって、社会革命の第一歩を踏み出すことができるのである。）

この三里塚闘争を焦点・環にして、労働者の闘いは、一方で最下層の臨時・日雇労働者、失業―半失業者、またプロレタリアの闘いが激しく始まり、（ex:釜ヶ崎の闘い）、他方で、激しい圧迫と労働苦の下に抑えつけられてきた、そして更にそれが強まりつつある大工業プロレタリアの闘いが新たな昂揚を開始した。（ex:国鉄労働者の闘い）また、勤労住民の闘いが、資本の傍若無人・生活破壊・暴虐に対して、都市と農漁村とを問わず、徐々に昂まってきた。（ex:反公害闘争）これらの要求と闘いの方向は、三里塚闘争のそれが明らかにしているのである。他方では、金融資本の市場再分割の下で矛盾を集約され、圧迫されている軽工業を中心とする中小零細ブルジョアジーの独自の要求と運動が始まり、一つの勢力を形造りつつある。かくして金融寡頭制

と諸階級—諸潮流の相互関係が形造られつゝあり、それは政府をめぐる政治的相互関係へと成熟し始めている。三里塚闘争はその最大の焦点・環であり、この環を通して、労農同盟が、全勤労人民の力強い団結が、金融寡頭制の打倒—生産手段・流通手段の全勤労人民の共同所有への転化・社会的生産と分配の人民統制の方向へ、その意識性と組織性、自覚と力が打ち鍛えられねばならない。それこそがまた、中小零細ブルジョアを一層金融資本から切り離し、動揺させ、中立化させ、プロレタリアートにそれを利用する力を与え、手工業者や小商人を自己の陣営に引きつけるのである。当面の闘いと情勢は、この三里塚闘争を環に、金融寡頭制と諸階級—諸潮流の相互関係を一層鮮明にし、政府をめぐる政治的相互関係へと一層成熟させ、激しくし、プロレタリアートの進出を促進し、プロレタリアートを全勤労人民の指導的・中心的地位へ押し出し、打ち鍛えていくであろう。また、是非ともそうしなければならぬ。

〔注1〕

三里塚闘争の五年間、とくに七一年の第一次強制収用阻止闘争—第二次強制収用阻止闘争は、日本階級闘争に画期的地平を、経験をもたらした。私は今その全容を殆んど知ることができないが、この経験を綱領的領域で教訓化するための一つの視点を提起しておきたい。

六七年來の大衆的暴力闘争とともに成長してきた三

いは一つの凝縮にすぎない。(まさしくそれが「戦いの時」ではあるにしても。)我々はその背後、その基底、闘いの真のルツボへ眼を向けねばならない。三里塚闘争は、政府—公団の強権的土地取り上げに対する、土地防衛・農業経営防衛の闘い、反政府抵抗闘争として始まり、進んできた。その中心は小農民—とくに農業経営の比較的安定した専業自営農—中農であった。長期にわたる闘いは、地域の諸関係・家族関係・農業経営そのものをも闘いの領域に引き入れ、再編変革を進め、農民の全生活領域を闘いに組み込んでいった。(その一つの頂点は第一次の闘いにおける少年行動隊の闘いであった。)それは今日の農村が戦前から農村の地域的・家族的諸関係の残存物と、戦後農地改革—戦後資本主義の発展とともにつくりだされてきた自作農とその小所有者—小商品生産者のな、ブルジョア的な上昇欲求と、そして六〇年代に急速に進行してきた商業的農業の拡大・機械化の促進・経営の大型化等の、より直接的な資本主義商品経済への包摂それに加えて農産物低価格政策と農産物自由化、「開発輸入」(略奪)等による農民層分解の進行—とくにその分解点が増々高くなっていく歴大な小農民の零落—半プロレタリア化、これらによる農村の地域的・家族的諸関係や農業経営の激変という三重の歴史的関係にあること、その下で、土地防衛—中農経営防衛というそれ自身では小ブルジョアの側面をもつ要求が、金

里塚闘争は、六九年秋の闘いの敗北と全共闘運動の解体後、日本階級闘争の最前線に位置してきた。それだけに六九年の運動や攻防戦を踏みこえて突き進むことが、闘いの客観的必然的要求となっていた。闘争戦術の側面からみれば、第一次強制収用阻止闘争における地下壱壕戦—砦死守・バリケード戦は、安田守戦から秋に至る全国各大学での砦死守—バリケード防衛の、徹底自衛防衛の闘いを継承し、それをより徹底化し、深め、頑強にしたものであった。そして、夏の三—四カ月連続した、機動隊・公団との衝突。激しいゲリラ的戦闘は、六九年一月の闘いや砦死守に呼応した街頭戦を一層連続化し、徹底化し、深め、組織化し、激しくするものであった。この激しい緊張と対峙をもって意識性と組織性を打ち鍛え、戦闘力を打ち鍛え、戦線を再編強化することによって、第二次強制収用阻止闘争では、駒井野砦死守の徹底自衛防衛を一点の結び目としつゝ、それをこえて、革命的攻撃—革命的ゲリラ戦闘。機動隊殲滅へ突き進み、更に北総台地一帯に闘いの炎を赤々と燃えさせたのであった。まさしくこれは「人民の大逆襲」であり、内乱のヒドラ、全人民武装蜂起のヒドラを培い、打ち鍛え、赤々と燃えたくせるものであった。これは戦後日本階級闘争にあって、初めて踏み込まれた地平であった。

だが、闘争戦術はたゞそれ自身としてのみあるのではない。それは闘い全体の一側面を表わすもの。ある融資本—政府の農村の資本主義的・帝国主義的解体再編(金融資本の搾取欲・膨張欲・その再生産構造への一層直接的包摂・再編の暴力的遂行)と衝突し、この衝突—闘いが農民の動揺する全社会的関係—全生活領域を不可避的に包括していき(それが闘いの不可避的な前進・深化なのだ)、その要求に執着すればするほど、闘いそのものがそれを対象化していかざるをえないということなのである。だがこのように前進・深化していく闘いも、一つの問題に蓬着する。それは、金融資本—政府の土地収奪が暴力をその手段としつゝも土地買いあげという形式をもつこと、暴力的強圧がそれだけ農民を土地売買の関係・投機者小商人の關係に直面させていくこと、従って反対同盟は不断に土地不売同盟として自己を現わさざるをえないこと、即ち、「商品としての土地」"小土地所有者・小商品所有者・小商品生産者としての農民"という自己の一面を突き出し、バクロしていかざるをえないことである。そしてこの商品関係こそが、今日の農村の帝国主義的再編の形式であり、増々浸透し、拡大していく形式なのである。農民の闘いはその前進・深化によって必然的に資本主義社会での自己の小ブルジョアの側面—小土地所有者・小商品所有者としての農民という側面を自ら突き出し、バクロし、それとの闘い、その克服に直面する。「土地ではなく土だ」という農民の叫びは、この闘いの内容、到達した地点を示している。即ち、

「商品としての土地ではなく、商品の生産手段としての土地ではなく、自然的・本源的生産手段そのものとしての土地、生活資料・労働生産物の生産手段・労働手段そのものとしての土地」であり、金融資本―政府の「商品としての土地、商品の生産手段としての土地」に対して、このような土地こそその死守である。まさにこのことよって小ブルジョアの農民・所有者・小商品生産者としての農民を克服し、勤労農民・働き手としての農民へ自己を一元化し、打ち鍛えたのである。(プロレタリアートとして純化した農民)。「プロレタリアートは、勤労農民と所有者としての農民とを、働き手としての農民と小商人としての農民とを―働く農民と投機者としての農民とを―区別し、画分しなければならぬ。この画分のうちに社会主義の全核心がある。」(レーニン『プロレタリアート独裁の時期における経済と政治』) 第一次強制収用阻止闘争を通して農民が自己を打ち鍛え、到達したのはこの地点であった。この点こそ戦後の全ての農民の土地防衛闘争―基地闘争―「平和と民主主義」闘争が遂に踏みこめなかつた地点である。それらの闘いは、小土地所有者としての農民の保守性が最もラジカルな抵抗になるとともに、革新勢力が保守化する(小土地所有者としての農民に拝跪し、それを「民主勢力として固定化する」という関係をもちたらし、闘争の終了とともに全てが元の状態に帰すという農民の小ブルジョア性と労働者の組合

7

二次闘争における革命的攻撃―燃えあがった内乱のヒドラ、全人民武装蜂起のヒドラに他ならない。こうして三里塚闘争は「資本・金融資本に対する仮借ない闘争と勤労者の同盟」「資本・金融資本を収奪し、生産手段と流通手段の全勤労人民の共同所有への転化、社会的生産と分配の人民統制への全勤労人民の同盟」「社会主義労働同盟」を、政府打倒・全人民武装蜂起・プロレタリア独裁(プロレタリアートに指導された労働権力)の同盟として打ち鍛えることを要求し、その方向へ偉大な歩を進めたのである。この過程は同時にまた、日帝の侵略反革命批判―アジアの革命的人民との同盟を打ち鍛えていく過程でもあった。第一次の闘いにおける「地下壟壕はベトナム人民の地下壟壕に、沖繩人民の闘いを通じている」という観点は、このことを明瞭に示している。農業―農村の帝国主義的再編(暴力的土地収奪・小中農の圧迫と零落、プロレタリア・半プロレタリア化、少数の富農の育成、独占商社―農協の支配系列、農業の破壊と工場進出etc)の金融資本の支配・再生産構造への一層直接的暴力的包摂と再編)は、アジア侵略反革命と車の両輪であり、一つの全一体をなしている。(あるいはアメリカへの工業製品輸出と引きかえにした農産物自由化、あるいは東南アジアへの資本輸出・商品輸出と農産物の「開発輸入」略奪、あるいは原料と食糧の一層の海外からの貢物への依存と国内の一大重化学工場化・一切のそれ

主義が温存されたまゝの「平和と民主主義」であった。こうして農民は「資本家に反対し、投機者に反対し、小商人に反対して、労働者との同盟を求め」(同前)の方向に向つたのである。(レーニンは統いて「経済的環境、商品経済の環境が、不可避的に農民を―いつでもというわけではないが、圧倒的多数の場合に―小商人に、投機者に変えるのである。」と述べている。)

「土地ではなく土」を、全国労働者の、全勤労人民の団結の砦として死守せよ!のスローガンである。より深めていえば「自然的・本源的生産手段としての土地、労働生産物・生活資料の生産手段・労働手段そのものとしての土地を、金融資本―政府と闘う全勤労人民の同盟の砦とせよ」であり、「土地の全勤労人民の共同所有への転化・社会的生産と分配の人民統制!」であり、まさにそのような全勤労人民の同盟を求め、そのための拠点へと、その一部隊へと自己を打ち鍛えていくということである。事実、第一次の闘いから夏の闘いを通して、青行隊等の戦闘主力の中心部への登場等の闘争の再編、地域―家族―農業経営の一層闘争への緊密化、闘いへの包摂、現地反対同盟―支援部隊という関係をこえた一層普遍的な同志的結合・単一の勤労人民としての結合・全国的結集・結合・支援体制etcが進んだのであった。このようにして三里塚闘争は、反政府闘争、反政府抵抗闘争から、政府打倒闘争、権力闘争へ踏みこんだのであった。これこそ、第

への動員・国内農産物の低価格政策と農民の圧迫・零落―このかつてのイギリス帝国主義型の道は他方で寄生性を増大させている―、軍事力の増強と基地拡張etc)だからこそ農民が金融資本―政府の暴力的土地収奪や帝国主義的再編と闘い、全勤労人民の同盟に打ち鍛えていく時、それは日帝のアジア侵略反革命と闘い、アジアの革命的人民との国際的同盟、融合を打ち鍛えていく闘いと結合するし、またしなければならぬのである。三里塚闘争はこの地点をしっかりと踏み固めた。(新空港が日帝のアジア侵略反革命の拠点たることに対して) 第一次から第二次への発展は、インドシナ革命戦争の勝利的前進―沖繩全島ゼネスト―本土沖繩闘争・爆弾闘争の発展とともにあったのだ。更に三里塚闘争は、戦後ブルジョア民主主義批判を、その実体的批判・解体へとおし進めた。機動隊殲滅である。第一次の徹底抗戦―敵の実体バクロの闘いは、第二次の敵を打ち破る闘いへ発展した。戦後ブルジョア民主主義の解体―階級支配の道具としてのみ組織された暴力―激化する「反動と暴力への燃望」を打ち砕く攻勢的武装闘争へ転化したのである。このように三里塚闘争は、帝国主義批判を実践的に深め、徹底化し、それを貫徹しぬく力―帝国主義を打倒する力、その意識性と組織性を力強く打ち鍛えたのである。三里塚闘争は今この地平から更に激しい「革命の煉獄」の中で闘いを掘り進め、その力を打ち鍛えつゝある。三里塚闘

争はまきしく社会主義革命への闘いである。そしてこの点では、全共闘運動の継承・徹底化・奔解・飛躍である。全共闘運動より汎ゆる点で進んだ地点にある。この継承・発展・前進・飛躍は、階級闘争の歴史的継起性としてのそれであると同時に、また階級的な前進・深化である。全共闘運動から三里塚闘争への発展・前進・飛躍・進化は、階級闘争の時間的持続とともに階級的前進・深化—学生・インテリゲンチヤから農民への主体の移行があるのである。「階級とよばれるのは、歴史的に規定された社会的生産の体制のなかで占めるその位置が、生産手段に対するその関係が、社会的労働組織の中での役割が、従って彼らが自由にしうる社会的富の分け前を受け取る方法と分け前の大きさが、他と違う人の大きな集団である。」(レーニン『偉大な創意』)学生・インテリゲンチヤと農民の「歴史的に規定された社会的生産体制のなかで占める位置・生産手段に対するその関係、社会的労働組織の中での役割」の差異が、階級闘争の質的前進・深化を規定しているのである。物質的生産手段の所有関係が、精神的生産手段の所有関係を規定し、物質的生活過程が精神的生活過程を規定し、物質的生産の諸関係が労働力の育成・練磨の過程、諸関係を規定する。この意味で、三里塚闘争は、全共闘運動の必然的な階級的前進・深化である。(こうして少年行動隊の「教育的意義もまた明らかとなる。')それだけ「物質的精神的生産

略反革命と、金融寡頭制の激しい圧迫は、「政治的には反動と暴力への熱望」を激化し、警察的反動・暴虐は「社会の汎ゆる息の穴を塞いでしまう」程に強まった。又軍隊の増強・弾圧出動体勢は一層進められた。更に行政諸機構は一層「社会の上に立ち、社会から増々外的なもの」となり、高級官僚への権力集中と、その金融資本の融着・従属・腐敗は激しくなり、また司法機関も警察的反動の一環に一層深く組み入れられてきた。労働者被抑圧人民の政治的自由—資本の支配の下での、資本の支配のためのブルジョア民主主義的自由、だがまたプロレタリアートにとってもこの支配の打倒めざして自分達の勢力を準備するためにそれだけ利用しうる政治的自由—は一層制限された。また部落差別・民族差別が煽られ、強化され、排外主義・差別イデオロギ—・天皇制イデオロギ—が吹聴され、動員されてきた。(これらは反動化一般ではなく、階級対立の非和解性の激化—内乱の切迫性を示しているのである。その意味でこれらは内乱予防—組織されたボグロムの体系である。現代ではそれがブルジョア民主主義の装いの下で進められている。「民主主義が発達すればするほど、ブルジョアジーに危険な汎ゆる深刻な政治的意見の不一致の際に、ボグロムまたは内乱がそれだけ切迫したものとなる。」(レーニン『背教者カウツキー』)今日、政治的意見の不一致が増々深刻化しつつあるが故に、ブルジョアジーは被抑圧人民に対して増々ボグロム的手段に訴えつつある。)それととも

生産手段の全勤労人民の共同所有への転化と、社会的生産と分配の人民統制」の闘いに近づいているのである。それだけ全勤労人民の同盟は階級的になり、現実的になっていたのである。そしてこの闘いは、不可避免的に、今日の基本的な社会関係である資本・金融資本との仮借なき闘い、その収奪と廃絶のための闘い、この全勤労人民の同盟につき当り、それを要求している。まさにそれこそ、プロレタリアートの歴史的任務である。プロレタリアートこそ、全勤労人民の指導階級として、この同盟を、この闘いを組織し、この任務を達成する。それは何よりも現在の帝国主義政府・帝国主義国家権力。資本の権力・金融資本の権力を打倒し、プロレタリア独裁・プロレタリアートの指導下の勤労人民の権力。プロレタリア革命政府を樹立することから始まらねばならない。「資本・金融資本の打倒、収奪、生産手段と流通手段の全勤労人民の共同所有への転化、社会的生産と分配の人民統制!」この力を、この意識性と組織性を、この全勤労人民の同盟を、プロレタリアートの指導性を、帝国主義政府—帝国主義国家権力—金融資本の権力の打倒、プロレタリア独裁—労働者勤労人民の権力樹立のそれとして、打ち鍛えねばならない。階級闘争は今、この「革命の煉獄」の中を掘り進み、その力を培っているのだ。

△政治的民主主義の問題においてV—日帝のアジア侵

に労働者被抑圧人民の政治的民主主義への要求は、一層広汎に、一層鋭く、一層根本的に、一層緊切のものとなってきた。政治警察—機動隊廃止の要求、自衛隊解体の要求、労働者勤労人民の武装の要求、あるいは警察的政治裁判廃止の要求、政治犯—政治被告即時釈放、人民抑圧の強制施設の廃止の要求、一切の民族差別・身分差別(部落差別と天皇制)撤廃の要求、また工場—学校—街頭—地域を問わず政治活動の完全な自由の要求、そして官僚機構にとつてかわる住民の自主的に行動する大衆組織による国家活動への要求etcが現実的な緊切なものとして追求され始め、それを実力で闘い取るべく、その運動と力が打ち鍛えられてきた。即ち、ブルジョア議会主義的共和制をこえた「より高度な型の民主主義、より高度な型の国家」IIプロレタリア民主主義への要求である。その下でのみ、労働者勤労人民の本当の民主主義、政治的自由が実現され、搾取者に対する闘い。その一掃への闘いが最も広汎に行われ、今日の社会生活に累積する破局的な矛盾・混沌・荒唐を唯一解決していく手段となる「より高度な型の民主主義」IIソヴェト型民主主義・プロレタリア民主主義への要求である。「現存の国家機構の破壊と武装した労働者勤労人民の自主的大衆組織に基づく国家の創設」これが政治的民主主義の要求の全核心である。我々は政治的民主主義の全ての諸要求を「改良主義的でなしに、革命的にまともあげ、実行しなければならぬ。ブルジョアの合法性の枠に局限しないで

それを破壊し、議会的行動や口先の抗議に満足しないで大衆を積極的な行動に引き入れ、一切の根本的な民主主義的要求のための闘争を、ブルジョアジーに対するプロレタリアートの直接の攻撃にまで、即ちブルジョアジーを取奪する社会主義革命にまで拡大し激成しなければならぬ。「民主主義のための全面的な、一貫した、革命的闘争を行なわないプロレタリアートは、ブルジョアに対する勝利を準備することはできない。」(レーニン『社会主義革命と民族自決権』)我々は政治的民主主義の諸要求を、この核心を軸に、「一連の革命」をもって実現し、ブルジョアジーの取奪まで拡大・激成していかねばならない。政治的民主主義の要求のこの環・核心はこの二年間、とくにこの一年間、確実に深まり、激化し鋭くなってきた。即ち、機動隊殲滅・爆弾闘争・一層よく組織された大衆的武装闘争の発展であり、ガードマン右翼ファシスト等、汎ゆる反革命武装との闘いである。そしてこの闘いは、更に軍隊をも巻き込み、プロレタリア人民と軍隊との衝突、軍隊内の動揺と叛乱、革命兵士の獲得という方向への発展を秘めている。いや、部分的にそれは始まっており、拡大しつつある。政治的民主主義と諸階級―諸潮流の相互関係は、この軍隊(自衛隊)・政治警察機動隊と労働者勤労人民の武装の現実的対抗を環に、一層鮮明に、一層深刻に、一層鋭くなっている。その中で自らの階級性を純化していくだろう。我々は、この武装をめぐるプロレタリア人民の意識性と組織性を

一層確固として打ち鍛えていかねばならない。(ブルジョアジーの火炎ビン立法と全議会内反政府党の屈服追従またそれが左翼諸党派に与える影響は、これを一層促進するだろう。)

△政府問題において▽――以上の総体を結合・統合し、権力問題へと集約し、高めていく環こそ政府問題に他ならない。そして、階級闘争はこの二年間、政府問題へと更に歩を進めたのである。即ち、佐藤政府―この七・八年間、アジア侵略反革命と金融寡頭制強化と「反動と暴力への熱望」を一身に担い、おし進めてきた政府、略奪と暴虐と圧迫をほしきままにし、傍若無人に振舞ってきた政府、この政府の打倒を現実的課題として登場させたのである。そして、諸階級―諸潮流の相互関係は、政府と諸階級―諸潮流の相互関係の環へ深まり、それだけ全面的かつ明瞭になってきた。第一に、ブルジョアジー内部では、その基本方向は日米同盟の堅持とアジア侵略反革命については一致しつつも、この基本方向が、日米矛盾の激化とアジア国際革命の前進に直面して、異常に困難な矛盾に満ちたもの、危機的なものに陥っており、当面の方向をめぐって、正面対決・正面突破か迂回・欺瞞・独自性強化かをめぐって、対外政策と市場問題において動揺・亀裂を生んでおり、また、金融寡頭制の一層の強化・国際的な巨大独占の市場争奪は、中小ブルジョアジーと広汎な農民を離反させている。この故に、佐藤政府はその政治能力・集約力を大きく衰退させつつ、そ

れだけに、また一層腐朽的な反動的な性格を強め、露わにし、一握りの金融資本の「全能」を暴力的に体現し、自己の暴力的維持に一切を集中している。露骨な略奪と反動と暴力の政府。第二に、ブルジョアの改良主義的反抗政府プロックの形成・抬頭とその無力さの露呈。このプロックは、一方では日帝の侵略反革命とその対外的危機に対する改良主義的・小ブルジョア民主主義的対応をテコに、他方では、金融寡頭制と諸階級の矛盾の激化。「反動と暴力への熱望」に対する小ブルジョア民主主義的・改良主義的対応をテコに、二つの傾向が重なりあっている。反撥しあいつつ形造られ、抬頭してきた。このプロックはその階級の基礎を中小ブルジョアジー、都市と農村の小ブルジョアジー、そして、労働者の若干の上層部と小ブルジョアの翼・小ブルジョアの幻想においている。(このプロックは、都市と農村の小ブルジョアジーを平均的内容としつつ、その上の中小ブルジョアジー・労働貴族と、その下の小ブルジョア下層、労働者の薄れていく小ブルジョアの幻想の二つへ不断に動揺し、分解する)しかし、この小ブルジョア民主主義的改良主義的プロックは、その形成抬頭と同時に、またその無力さをもバクろしてきた。この無力さは、政府の動揺とともに、また、この動揺が一層反動と暴力によって補強され、揺り戻されるとともに、その改良主義的議会主義戦術によってバクろされていっているのだ。第三に、全勤労人民を率いて進むべき革命的プロレタリアートの進出は徐々に

進みつつある。佐藤政府の打倒・この打倒を、ブルジョアジー内部の動揺や亀裂・小ブルジョアの改良主義的プロックを利用しつつ、自らの独自性でもって、実力をもって闘い取ること、それは、帝国主義政府を打倒し、プロレタリア権力樹立へと到る一連の闘いの明確な第一歩である。その闘いによって、全人民の憤激を積極化し結集し、自己の指導性・統率力を打ち鍛えていくことは一層広大な戦線を切り拓くであろう。だが、この革命的プロレタリアートの進出は、まだ始ったばかりである。その自覚と力、意識性と組織性は、まだ六九年の敗北を克服しきっていない。それはいまだ不十分である。その率いている人民勢力は、まだ遙かに部分的である。そして何よりもその内部に、明確に牽引力、確固たる指導潮流・革命的統率者を持ちえていないで、戦列がバラバラであり、混乱し、混沌としていること、これこそ最大の弱点である。

以上、政府の政治能力・集約力の衰退、もっぱら暴力的維持の腐心、ブルジョアジー内部の動揺・亀裂・離反とヘゲモニーの欠除、小ブルジョアの改良主義的プロックの無力さのバクろ、革命的プロレタリアートの未進出、あるいは遅々たる歩み、その内部の明確な牽引力の欠除、これらが政治情勢を、激しい対立・矛盾の累積・それが全階級によって意識されつつも、緩慢的たらしめている。政治情勢は、その基底では激しいテンポで進みつつも、表層においては緩慢的となつていく。危機の前

段階、あるいは端緒段階のある種の均衡、この均衡の下での政府の腐朽化と反動化と暴力化の一層の進行、それが現在の特徴である。しかし、これはいづれにせよ、動揺と危機の一層の進行・拡大深化へ進まざるをえない。政府の腐朽化・反動化・暴力化の進行と、諸階級の動揺・分解の拡大・深化、人民の憤激の拡大と昂まり、小ブルジョア的改良主義的傾向の抬頭と動揺・無力化の増幅、そして情勢の動揺と危機の拡大・深化・発展・増幅まさにこのようにして内乱へ歩一歩と近づいていくのである。革命的プロレタリアートは更に一層自覚と力を強め、意識性と組織性を強め、自己の隊列を強固に打ち鍛え、階級的独自性を鮮明にしつゝ、更に多くの人民勢力（第一に農民、貧農と中農、更に都市の小手工業者や小商人とそれに照応する層）を結集し、自己の進出を闘い取っていかねばならない。そして一層公然と進み出、政府打倒（まずもって佐藤政府打倒）の闘いを発展させ、その中で一層広汎な人民運動をおし進め、全人民的指導性を打ち鍛えていかねばならない。そのようにして内乱とプロレタリア権力の樹立の力、意識性と組織性を打ち鍛えていくのである。当面の情勢と闘いは、この政府打倒―佐藤政府打倒をめぐる、政府と諸階級―諸潮流の相互関係を一層鮮明に、一層鋭く、一層激しいものとする方向へ向っている。また、そうしなければならぬ。まさにその中で、内乱のヒドラ、全人民武装蜂起のヒドラを育み、培い、打ち鍛え、一層力強く、一層組織的に

発展させ、燃えたくせていかねばならない。「労働者階級の自己認識は、現代社会の全ての階級の相互関係について、完全に明瞭な理解―たんに理論的な理解だけではなく更に：理論的な理解よりもむしろ、といったほうが正しくさえある：政治生活の経験にもとづいてつくりだされた理解―と、切り離せないように結びついているからである。」（この知識（階級的・政治的意識）を汲み取ってくることのできる唯一の分野は、全ての階級および層と国家および政府との関係の分野、全ての階級の相互関係の分野である。」我々は、このことをしっかりと肝に銘じておかねばならない。我々は「住民のどの部分に向けられたものを問わず、経済的・政治的・民族的・社会的抑圧の一切の現われに対する闘争へ、プロレタリアートを呼びかけ」、また「既存の政治的及び社会的体制に対する一切の革命運動と進歩的改良政府運動とを支持」し、「零落させられ、生活の不確かさと失業・搾取の圧迫と、汎ゆる屈辱の下にある」勤労大衆を、プロレタリアートの資本主義に対する闘いに引き寄せ、「商品経済・資本主義の社会とはすっかり手を切って」「自身の立場を捨て、プロレタリアートの立場に立つようになすべし」なければならぬ。（引用はレーニン『全集』六巻より）

第三章

革命運動の二年間とわれわれの緊要の諸任務

1. 諸流派はどのように進化してきたか

二年間の階級闘争の深化・政府問題の実践的登場は、また、それを実現する主体の問題、即ち、革命運動の再編、革命党建設の問題を一層鋭く、徹底的につきつけてきた。そして、旧来の革命的左翼の全潮流がこの問題につきあたり、この問題をめぐって一層深い分裂・分解を進めてきた。混乱と分解は、六九年のブンドから七〇年のML同盟へ、そして更に全潮流へと拡大し、革命運動の成長の病いは頂点にまで達したかのようである。（この成長の病いは、今では、更に昂じれば我が身を滅ぼしかねない危機にまで達しつつある。）階級矛盾の激化

・階級闘争の深化によって、この分解と混乱が促進されていること、まさにそここそ、今日の革命運動の内的な弱さがある。「大衆の自然発生的な高揚が大きければ大きいほど、運動が広まれば広まるほど、社会民主主義派の理論活動においても、政治活動においても、多くの意識性をもつ必要がくらべものにならないほど一層急速に増大する。ロシアでは、大衆の自然発生的高揚が、はなはだ急速におこなわれた（そして今も引き続いておこなわれている）ので、社会民主主義的青年はこれらの巨大な任務を果たすだけに訓練されていなかった。この訓練の不足は、我々の共通の不幸、ロシアの社会民主主義者全部の不幸である。大衆の高揚は、一度始まった場所と停止しなかったばかりか、新しい地方と新しい住民層とをまき込みながら、中断なく、次々に受け伝えながら進行し拡大していった。ところが革命家達は、その「理論」でもその活動でも、この高揚にたち遅れてしまい、全運動を指導する能力のある、中断のない、継承性のある組織をつくりだすことができなかったのである。」（レーニン『なにをなすべきか？』）

この二年間、大衆の高揚は、学生運動の高揚に続いて労働者の中へ、農漁民の中へ、在日中朝人民の中へ、未解放部落人民の中へ、都市の勤労住民の中へと、それほど急速にはなっていないが、しかし着実に広がってきた。そしてそのことによって、共産主義的青年の訓練の不足が汎ゆる面で露呈されてきたのであった。そのためにまた、

全運動を指導する能力のある組織・潮流をつくりだすことができず、逆に分解と混乱を深めてきたのである。だが、我々の運動には、この訓練の不足とともに、更に他の要因が絡みあっている。我々はそれをえぐりださねばならない。

私は前に、我々の運動が、トロツキー主義・構改派・ソ連派・中国派・社民分派の各左派の連合として形造られてきたこと、更にこれと種々雑多な「マルクス主義」、マル存主義や、合法マルクス主義や講壇マルクス主義に到る諸「反スタ・反修・反代々木マルクス主義」の連合として形造られてきたこと、また、革命的インテリゲンチヤと学生大衆運動との結合を主要な基礎として形造られてきたことを指摘した。それを牽引したのはブンドであり、ブンドは上述の特殊な立場・特殊な先験化されたあるいは過去の遺物や外因との関係による党派的・イデオロギー的立場に立つことなく、徹底して現実批判の立場に立ち、この現実批判の徹底性の中に自己の党派的・階級的立場を表現し、この批判の物質化を追求したのであった。だからこそブンドは、革命運動の普遍的な代表者・指導者となり、全潮流を革命的に牽引し、革命的大衆闘争を組織し、牽引し、革命運動をこの基礎の上におしあげたのであった。それはいわば全潮流(革命運動内の)、諸「マルクス主義」が、現実批判の深化・徹底化・物質化によって止揚されていく過程であった。だが、現実批判と

た時、ひき起されたブンドの瓦解は、我々の運動が濃厚にはらみ、我々の運動に根深くまわりついてきた種々雑多の小ブルジョアの傾向が、我々の一層の前進・成長・純化にとって決定的な桎梏になったことを示したのであった。分解と混乱のはじまりは、我々の運動の拡がり階級闘争の深化、階級的内容の深化と階級の純化の要求が、我々の運動には生まれ、まわりついていて小ブルジョア性と矛盾し、その解決が与えられないまま、矛盾を深めたことの証しであった。(ブンドに続いてML同盟が瓦解したのも、彼らが比較的ブンドに近く、特殊な立場・特殊なイデオロギーをもたなかったことからしてブンドが瓦解するや必然となったのである。)

<29> この二年間の分解と混乱の拡大、それはまぎれもなく小ブルジョア性の病いである。それは、階級闘争の拡がり、深化とともに、革命運動が真に共産主義的プロレタリアの革命運動へと成長するための不可避的な病いであった。成長のために、体内に宿している一切の小ブルジョアの膿・癌をすっかり吐き出してしまわねばならない成長の病いであった。しかし、成長の病いも長びき、昂じれば、我が身を滅ぼす命取りとなりかねない。そして今、成長の病いはそのような危機に近ずいている。敵階級―敵権力が、一〇年間を圧縮した攻撃をもって革命運動に立ち向い、潰しかゝっている時、病いは治療されるより激化しているのである。いや、敵階級―敵権力の、我々の一〇年有余の革命運動を決算しようとする攻

は、現実の真の内的関係の全体、即ち社会Ⅱ階級関係の全体。諸階級の政治的諸関係全体を明らかにし、唯一の真に革命的階級たるプロレタリアートに到達すること、その歴史的任務、歴史的な社会的Ⅱ政治的任務を明らかにし、この任務の実現のために、プロレタリアートの意識性と組織性を打ち鍛える闘いの任務を明らかにすることである。そして、批判の物質化とは、共産主義とプロレタリア運動の結合であり、共産主義運動、共産主義的運動が唯一の真に革命的階級たるプロレタリアートと結合し、一体となることである。それはまた、諸「マルクス主義」を止揚しつつし、真紅のマルクス・レーニン主義を復活させ、その旗を打ち樹てることである。まさしく我々の革命運動は、諸「マルクス主義」の連合―反帝(及び反修・反スタ・反代々木)の諸政治傾向の連合―革命的インテリゲンチヤの諸サークルの連合をもって始まり、現実批判の深化・徹底化・物質化を通して、真紅のマルクス・レーニン主義―共産主義革命運動(我々のプロレタリアートの歴史的任務・歴史的な社会的Ⅱ政治的任務の明確化、即ち綱領)―革命的階級Ⅱプロレタリアートへと接近していったのであった。まさにそれこそ我々の運動の階級的内容の深化、階級の純化・革命化・共産主義化の過程であり、革命勢力としての確立・発展の過程であり、敵階級・敵権力との闘いの激化の過程であった。だが、革命的大衆闘争が始まり、プロレタリアートの革命運動が始まり、我々が一個の革命勢力となっ

撃が、小ブルジョア性の病いを激化させ、極点にまで達せしめているのである。階級矛盾の激化と革命運動の小ブルジョアの危機、これが現在の「革命的左翼」の危機の内容なのだ。我々は、今これを、全力をあげて克服しなければならぬ。今日の日本には、小ブルジョアや「どのような確然たる社会的地位をもまだ占めたことのないインテリゲンチヤ、あるいは生活によって自己の正常な地位から既にたゞき出され、プロレタリアートの側に移りつゝあるインテリゲンチヤ」(レーニン『革命的冒險主義』)の「浮動性を育み、急進的気分をもつ個人に寿命のすぎた古いものと生命のない流行品とを結びあわせようとする願望をおこさせ」(『ロシア社会民主主義者の任務』第二版の序文)、種々の小ブルジョアの急進的諸傾向と動揺を発生させる多くの歴史的な社会的・政治的要素と条件がまだあるので、日本のプロレタリア革命派は、帝国主義の矛盾の深化と階級矛盾の激化とが、それらの流派・傾向から一切の基礎を奪い去るまでは、この小ブルジョアの病い、もしくはそれに似た様相と頑強に闘わねばならない。この小ブルジョア性は、思想・理論の面にも、政治的傾向にも、組織の面にも、活動態度や戦術にも、色濃く現われている。とりわけ八内ゲバの激化・退廃・テロル化の現象として現われている。だから我々にとつて、小ブルジョア性の病いと闘い、それを克服することは焦眉の課題であると同時に、全面的な課題である。

その前に我々はこの二年間の諸傾向の進化について考察しておく。今日六〇年代から引きついで主要な潮流をなしているのは、革共同革マル派と八派の両翼たる革共同中核派と革労協（社会党―社青同解放派）である。

革マル派はこの二年間、そのブルジョアの自由主義・合法マルクス主義としての性格を一層顕著にした。「人間労働力が商品化されていること」「人間労働が疎外された労働となっていること」その苦痛に対する人間的（小ブルインテリゲンチヤ的）憤激をもって出発し、人間的（小ブルインテリゲンチヤ的）主体性の強調をもって出発した革共同現代のナロードニキは、既に一〇年近く前に、現実には一歩踏みだしたとたんに分裂したのであったが、その一分派たる革マル派は自由主義的ナロードニキとして、人間的苦痛―人間的憤激―人間的主体性を組合主義的政治で染めあげることによって、階級闘争の激化とともに、ブルジョア陣営に一歩一歩引き寄せられていったのであった。インドシナ―中国―朝鮮の闘いに対する軽蔑的・排外的な敵対・民族問題に対する冷笑的な事実上のブルジョア民族主義、沖繩闘争からの早々とした逃げ込み、三里塚闘争や部落解放運動等、被抑圧階層の闘いに対する冷笑・蔑視、労働運動を組合主義的政治へ、ブルジョア民主主義の道具へ引き入れる傾向と闘うどころか補完してやまない（それを党派性とする）組合主義、度しがたい合法主義（「広汎な大衆に立脚し、広汎な組織を利用し、合法的活動家の政治的教育

をたすける革命的活動を、合法性の枠で制限される活動と混同することほどに、闘争の事業に大きな害悪をもたらすものはありえない。」レーニン『自分の協力者に暴露されたストルーヴェ氏』）etc。これら全てが彼らをブルジョア陣営に導いていったのであった。現代のストルーヴェ・黒田寛一を頭に戴く「人民の権利」派は、小ブルジョアジーの多種多様な層の間に自由主義的民主主義的潮流が非常に強いこと、そしてまた労働運動における組合主義的（小ブルジョア民主主義的）潮流が根強いことに立脚している。いや、その指摘だけでは不十分である。それらの潮流が帝国主義によって分解され、屈服解体と再編のたゞ中にあり、かつ共産主義的（プロレタリア的）革命運動の成長が立ち遅れていること、未進出であること、まさにこの間隙にこそ、彼らの現在の基盤がある。この曖昧な、自由主義的ナロードニキのえせ社会主義を、自由主義的・小ブルジョア潮流として一層純化させることは、革命的労働者党建設にとって大きな前進となるであろう。「もし自由主義者がその反政府運動によって、専制（帝国主義）とブルジョアジー（労働運動内の親帝国主義的、あるいは小ブルジョア民主主義的潮流）とインテリゲンチヤの若干の層との同盟（革命的プロレタリアートに対する）をぐらつかせるならば、我々は彼らに感謝するであろう。我々が『もし』と言うのは、自由主義者は専制（帝国主義）に媚を呈したり、平和な文化活動を礼讃したり、『傾向的』な革命家に対し

して闘ったり、などすることによって、専制（帝国主義）をぐらつかせるより、むしろ専制（帝国主義）に対する闘争をぐらつかせているからである。」（レーニン『ロシア社会民主主義者の任務』第二版の序文）まことに今日の自由主義者もこの通りである。

他方、同じところから出発しつつ、今やその対極に立っているのが中核派である。中核派は、資本主義に対する人間的（小ブルインテリゲンチヤ的）苦痛―憤激―主体性を急進主義の方向へ純化してきたのであったが、それはまさしく急進市民主義・小ブルジョア民主主義左派・戦闘的組合主義としての自然発生的急進化であったが故に、この二年間、最も大きな動揺と内的空洞化を経験してきたのであった。この中核の人間的苦痛―憤激―主体性は、六七年―六九年には、ベトナム反戦の急進平和主義、反米沖繩奪還の急進小ブルジョア民族主義、大学闘争における破壊の思想、街頭闘争におけるプラカードの権利から肉弾の思想・騒乱主義へ到る急進市民主義、民同に学び戦闘的労働運動を防衛し、社民と革命的左翼の統一戦線を基調とする戦闘的組合主義、そして、危機の呼号と危機における人間的（実存的）主体の強調（革命的直観や、泥沼化こそ展望という主張）etcとして、戦闘化と急進化の道をたどり、そうして急進的労働者・学生・インテリゲンチヤの一定層を引き寄せたのであった。だが、このような戦闘化・急進化が限界に達するとともに、七〇―七一年には別の方向へ転じた。即ち、人

問解放の強調と、人間的立場（小ブルインテリゲンチヤの立場）からの汎ゆる運動への自己批判である。被抑圧民族への、民族解放闘争への自己批判と血債の思想、未解放部落大衆への自己批判、農民への自己批判、臨時工や中小企業労働者への自己批判etc。抑圧民族の労働者の排外主義の、一般民としての労働者の差別意識の、労働者の農民蔑視の、大企業本工労働者のエゴイズムの自己批判etcである。これはプロレタリアートの階級的教育と縁もゆかりもない。これは「理論に対する軽蔑的態度、社会主義的イデオロギーに対する回避的で曖昧な態度」であり、「小ブルジョアの思想的浮動性と社会主義の小ブルジョアの俗流化」（レーニン『なぜ社会民主党は社会革命党に戦争を宣言しなければならぬか』）であり、小ブルジョアインテリゲンチヤの「人間的苦痛に対する人間的憤激」の裏側にある「人間的罪意識」からする自己批判―自己否定であり、プロレタリアートの階級闘争の局外にある、同伴的な小ブルインテリゲンチヤの個人的心情をプロレタリアートにおっかぶせたものに他ならない。プロレタリアートの階級闘争を強化し、その階級的独自性と全人民的指導性を強め、唯一の真に革命的階級としての階級性を強化していくのではなく、逆にそれを弱め、薄め、小ブルジョア民主主義へ解消しているのである。それは結局のところ「インテリゲンチヤ・プロレタリアート・農民といった社会層や階級を同列におき、インテリゲンチヤにも、労働者にも、農民に

も、同時に、また同じ程度に立脚しようと望み、まさにそれによって不可避的に日本プロレタリアートを日本の小ブルジョア民主主義に、政治的にも思想的にも隷属させる結果を招く」(レーニン・前掲書)。「労働運動を、従ってまた社会主義運動全体をも、革命運動全体をも、エスカモチーロヴァチ(手品で消えさす)しようとする小ブルインテリゲンチヤの企図に他ならない。」(レーニン『エス・エルに反対する基本命題』)(例えば三里塚闘争の農民の戦闘性に対する彼らの賛美も、決して三里塚の農民が商品経済及び資本主義の社会とはすつかり手を切つて、プロレタリアートの立場に移ることによつて革命的となつてゐること、その闘いを把えたものではなく、自己の即自的・自然発生的立場からするものである)まさにそうであるが故にこそ、運動の沈静期にはとゞまるところをしらず、合法主義・カンパニア主義・議会主義へ傾斜したのであつた。「系統的な非合法活動だけが実際上党の特性を規定する」ことも、「政治闘争に精力と確固さと継承性とを保證できるような革命家の組織」「堅固な中央集権化された革命家の戦闘組織」も問題になりえず、ひたすら平身低頭をもつて時を過ぎたのであつた。このような「自己批判運動」と「平身低頭」は、この党派の内部空洞化・退廃を促進し、新たな激闘がその破産を明瞭にするや、今度は一転して、確固たる首尾一貫した組織的準備と活動に裏付けられない、中途半端でぐらつた、自然発生的暴動主義へと舵を變

えたのである。「『さわごう、兄弟、さわごう』—これが諸事件の旋風に熱中させられながら、理論的基礎も社会的基礎も持ちあわせない多くの革命的気分をもつた人々のスローガンである。」(『革命的冒険主義』)か

つての「騒乱を！」という呼びかけは「暴動を！」の呼びかけと「内乱の死闘の絶叫と、歴史を、時代を担う飲び」に「高められ」たが、それは本質的に「無思想性と無原則性は、実践のうえで彼らを『革命的冒険主義』に導いており」(前掲、第二版への序文)、「内的に矛盾し、無原則で、ぐらつており、無内容を大ぶろしきで隠蔽し、従つて不可避的に破産の運命を担つた—革命的党派の冒険」(『エス・エルに反対する基本命題』)なのである。まさしく革命的冒険主義である。(それにしてもは大胆さが欠除しているが。)その組織・活動態度・戦術の提起の仕方・宣伝煽動の内容、一貫性と計画性etcの全てからして革命的冒険主義なのである。この流派の組織・活動・政治・思想からは「暴動」が最後の結論である。暴動でもつて内乱を望み、暴動の内乱への自然発生的転化を期待すること、これがこの流派の戦術である。

中核派が一つの流派として主要な一潮流となつていたのは、この派が六〇年代末に「ひとえに同派が疑いもなく革命的な気分をもち、英雄的な自己犠牲心にさえ満ちている人々、衷心から自由のため、人民のために身を賭そうと望んでいる人々を自派に引きつけた」という事情

のおかげであることを私は疑わない。しかしながら、人が衷心から、信念をもつて、ある社会的・政治的立場をとつてゐるといふ事情は、それだけではまだこの立場が無条件に虚偽のものでなく、内的に矛盾してゐないかどうかという問題、またこの立場からなされた最良の活動の結果が不可避的に(それが行動する人々の意識に無関係であろうと、また彼らの意志に反してであろうと)革命運動をエスカモチーロヴァチすることに、正しい道から革命運動をそらせ、それを袋小路に引き入れることにならぬいかどうかの問題をあらかじめ解決するものでは決してない。」(『エス・エルに反対する基本命題』)のである。

最後に、レーニンのエス・エル批判論のプランに従つて中核派の特徴をまとめておこう。

(イ)理論上の無原則性。黒田—梅本—宇野の小ブルジョア的に改作された「マルクス主義」プラス第二インター中央派風に改作された「レーニン主義」プラス反スタロツキズムプラス急進市民主義と戦闘的組合主義。動搖性と意識の朦朧化。

(ロ)小ブルジョア・イデオロギー。プロレタリアートの階級意識を腐敗させて、小ブルジョア民主主義に対して独自の立場をとりえないようにする。(なぜなら、中核派は実質上小ブルジョア民主主義の一分枝であつて、共産主義と小ブルジョア民主主義とを融合させ、もつれあわせようといつとめてゐるからである。)

(ハ)理論と戦術における空文句・虚勢—革命活動に対するふまじめな態度・誇張・ほら。「美文口調」

(ニ)粗雑な戦術上の誤り—暴動主義・その説教、組織性・計画性の弱体化と自然発生性の讃美。

(ホ)幻想の撒布—当面の昂揚・爆発の時期に、労働者階級に小ブルジョア民主主義的幻想を撒布し、その昂揚から労働者階級が幻滅をいだいて出てくるというこれまでの歴史を「くり返そうとしてゐる」。我々の義務は、日本のプロレタリアートがきたるべき昂揚・爆発から、幻滅をいだいて出てくるのではなく、自分自身の力に対する新しい信念、きたるべき一層大きな闘争を行なうための一層大きな勇氣、確固たる純プロレタリア的組織の萌芽をたずさえて出てくるようにするため、断固としてこれと闘争することである。

革共同ナロードニキは「諸階級の基本標識となるのは社会的生産における彼らの地位、従つて生産手段に対する彼らの関係である。…一定の経済的カテゴリーをなしているのは労働ではなく、労働の社会的形態、労働の社会的組織、または別の言葉でいえば、社会的労働に参加するにあつての人々の間の関係だけである。…賃労働の搾取こそが現代の略奪体制全体の土台であり、それこそが和解除しえず対立した諸階級への社会の分裂を呼びおこすこと、そしてこの階級闘争の見地からするときのみ、曖昧さと無原則性に陥ることなしに、搾取のその他の汎ゆる現われを首尾一貫して評価することができ

る」ことを遂に理解することができず、「人間労働力の商品化」や「人間労働の自己疎外」に対する「人間的憤激」と「人間解放」の「人間的主体性」共産主義イデオロギイから出発し、階級関係―階級対立―階級闘争をわきへおしやり、あるいはそれを小ブルジョアインテリゲンチヤの頭脳で解釈し、一つの集団を形造つたが、そのために現実の階級闘争に一步足を踏み入れるや否や、日本階級闘争を色濃く染めあげていた二つの傾向、ブルジョアの自由主義組合主義的政治と急進的小ブルジョア民主主義―アナキズム的な急進市民主義に結合、融着し、それらの意識的代表者となつたのであつた。今、両者は対極に立つて対立している。だが、その思想の根・発生源は同じなのだ。この分裂と対立は戦後一時代にわたつて階級闘争を支配した戦闘的組合主義―急進的小ブルジョア民主主義が、日本帝国主義の金融寡頭強化―アジア侵略革命とともに分解し、一方ではブルジョアの労働官僚・労働貴族とブルジョア合理主義的インテリゲンチヤの層が形成され、進出し、他方では労働者大衆が徐々に戦後の小ブルジョア民主主義から急進化し、脱却しはじめ、小ブルジョアインテリゲンチヤの多くの部分がプロレタリアートの側へ移りつゝあることの表現である。まさにこの分裂・対立・葛藤を、小ブルジョアのな粹で表現し、退廃を深めていたのである。(一方が冷笑と軽蔑をもつてするところを、他方は自己批判をもつてし、一方がブルジョアの合法主義をもつてするところを、他方

は危機と破壊の絶叫をもつてする。一方が密教的な空中楼阁たる組織現実論―サークル主義の一変種―で革命運動・労働運動を「エスカモチーロヴァチ」するところを他方は小ブルインテリゲンチヤの危機感と自己否定と主体性でもつて「エスカモチーロヴァチ」する。(一方の進む道はブルジョア自由主義―純然たる組合主義的政治―ブルジョア合法主義であり、他方の進む道は、無思想性と無原則性を特徴とする無政府的戦闘団―(左翼)エス・エルの道しかありえない。(もしそれだけの革命的熱意と自己犠牲の精神があれば、それとも戦闘的組合主義へ帰るのか。)

今日の主要なもう一つの流派、革労協(社会党―社青同解放派)は、この二年間、そのアナルコ・サンディカリズム―経済主義を一層深めた。もともとこの潮流は、「労働運動の主流は社会党である。だから現実的共産主義運動・革命運動は、社会党内分派闘争から始まる以外にはない」と、五〇年代の特殊な歴史的一時期を絶対化し、労農派合法マルクス主義を基礎に出発し、一貫して意識的要素の役割を否定してきたのであつた。(この流派にあつては、資本主義社会批判・帝国主義批判は問題となりえない。何故ならそれは労働運動の外から、独自の思想闘争として始まる以外にはないからである。)この流派は、社会党・民同の小ブルジョア民主主義的・戦闘的組合主義的潮流の支配・指導下にあつて噴出してくる労働者の自然発生的戦闘性を賛美し、神聖化し、そ

れに「深遠な」意味を見出すことを、この分派闘争の内容としたのであつた。労働者の資本への隷属、その感性的苦痛、それに対する憤激・反抗の衝動、「受苦的にして情熱的存在」、この衝動の解放―人間的解放―社会革命、これがその全てであつた。この二年間、この流派は「資本に隷属する労働者の感性的苦痛と、反抗―解放への衝動」をどのように「深め」たのか。いわく「帝国主義工場制度こそ支配の根幹であり、それに対する反乱を！」―「先進国同時革命を！」―「行動委員会の中から党建設を！」である。彼らが「先進国同時革命」に固執するのは必然である。民族解放革命戦争も革命的プロレタリア国家も、「資本に隷属する労働者の感性的苦痛と反抗の衝動」にとつては外的であるからである。従つてそれは革命でも、プロレタリアートの階級闘争でさえもないのである。コンミュニオンだけが意味をもつというわけである。こゝには「世界体系としての帝国主義」を打倒する世界革命の観点、いや、世界階級闘争の観点の一カケラもない。いや、そもそもこの流派には、階級関係―階級対立―階級闘争の一貫した観点がなないのである。この「先進国同時革命」は、露骨な帝国主義的経済主義であり、五〇年代の、戦後革命の敗北と米帝の国際的軍事反革命の上に開花した一国主義―小ブルジョア民族主義・平和主義、その代表者であつた社民の一派としての彼らの基礎がバクロされているのである(帝国主義に対する左翼改良的反対派)。「帝国主義工

場制度が支配の根幹で、それに対する反乱がプロレタリアートの階級闘争の中心内容」だつて!?「工場でのゲリラ戦を基礎に政府打倒へ」だつて!?「感性的苦痛と反抗―解放の衝動は、かくも経済主義へ練りあげられたのだ。これはまさに「ラボー・チェ・デエロ」そのものではないか。工場内制度の暴露に力を集中し、「労働者階級の政治闘争は、経済闘争の最も発達した、広汎な、効果的形態にすぎない。」「経済闘争そのものにできるだけ政治性を与える。」「経済闘争は、大衆を積極的な政治闘争に引き入れるために、最も広汎に適用しうる手段である。」「「雇い主と政府に対する経済闘争」「もつぱら経済を基盤とした政治的煽動」を主張し、全面的政治暴露を否定し、労働者階級の注意や観察力や意識をもつぱらこの階級自身に向けさせたラボー・チェ・デエロとそつくりではないか。彼らが「意識的要素の過大視と、自然発生的要素の過少視」を非難し、「労働者階級が自分の革命を指導者達(革命的指導者からも)の手からもぎとつて自分の手にそれをとりあげること」を主張し、「純労働運動」を擁護し、「労働者階級もまた、試練を経た職業的に訓練され、多年の修業によつて修練を積んだ指導者をもたねばならないこと」「多年にわたつて職業革命家に自分を育てあげることが必要なこと」を否定し、「労働者達の心に、政治的知識と革命的経験とを、わきから労働者に伝える人々全体に対する不信の念をおこさせ、そういう人々全体に反抗しようという本能的願望を

おこさずにはおかない」点でも、ラボーチェ・デューロと同じである。資本主義生産機構の基軸が機械制工場制であることは、今更、帝国主義的工場制度というまでもないことである。だが、機械制工場制に階級関係―階級対立の基礎があると述べたマルクス主義者は誰もいなかった。又、機械制工場制が資本主義社会のあらゆる搾取・収奪・略奪・抑圧の基礎であると述べたマルクス主義者は誰もいなかった。この流派には、階級―階級関係―階級対立についての、資本主義生産様式についての、初步的な、かつ決定的な誤謬がある。「共同労働の共同支配の衝動を基礎とする階級協同の運動」だつて?! 問題なのは労働の社会的組織・社会的関係なのだ。こゝまでくれば、アナキズム的なロマン主義である。「地区ソヴェト運動」は、個別闘争・個々の改良闘争が結合し、寄木細工のように合流すれば社会革命になるという改良主義である。せいぜい最高の闘いもゼネストであり、権力奪取には思い及ばないのである。「行動委員会」の中からの党建設」は、労働者の多種多様な階級的諸組織と、革命家の組織とを混同し、両者の境界を抹消し、手工業・非系統性・合法主義を正当化する路線であり、強固な中央集権的な革命家の組織・全国的戦闘組織の否定である。この流派の騒々しい、「深遠な」「美文口調の」哲学的言辭は、大杉栄の生の哲学・労働者の相互扶助論・知識人排撃・直接行動論を根本的にこえるものではない。いや、同じであり、当世風に理論化され、巾広くされ、

社民に受け入れられやすくなったものにすぎない。この流派の本質は経済主義である。昂揚期にはアナルコ・サンディカリズムへ、沈静期には改良主義へ、これがこの流派の全てである。この流派が現代の全社会に政治体制・帝国主義と、思想的にも、政治的にも、組織的にも闘うことができないことは明瞭である。この流派は、労働者大衆の自然発生の一面を動搖的に体現するにすぎないが、労働運動を戦闘的経済主義に迷い込ませる役割を果たすが故に、共産主義と労働運動の結合のために、我々はこの流派と闘わねばならない。階級矛盾が激化し、帝国主義の危機が深まり、それだけ階級闘争が激烈になり、峻烈になるうとして現在の現在、この流派は「政治闘争に―層精力と確固さと継承性を保証する」方向にはなく、経済主義としての本質を一層鮮明にする方向に向つていくであろう。労働者の経済闘争の昂揚はその基盤を提供するだろう。だからこそ我々はこの流派と闘い、労働者の経済闘争の昂揚をも、「この組合主義的政治を社会民主主義的(共産主義的)な政治闘争に転化すること、経済闘争が労働者のうちに生み出した政治的意識のひらめきを利用して、労働者を社会民主主義的(共産主義的)な政治意識に引き上げる」べく、闘わねばならないのである。

2. 新たな胎動と諸要素の成長

だが、革命運動はこの二年間、このような流派の外に徐々に広がり、新しい芽を育んできた。六〇年代のサークル連合の分解と無数のサークルの簇生は、その消長再編を通して二つのグループ、二つの傾向をつくりだしてきた。一つは労働運動の革命的カイドル、プロレタリア運動の革命的カイドルとして自己を訓練していく方向であり、もう一つは、軍事グループ、軍事活動・戦闘グループとして自己を訓練していく方向である。革命運動の成長の病、その小ブルジョアの病を克服しようとする自然発生的努力、革命運動をより高い水準へ引き上げようとする自然発生的努力は、この二つの傾向においてなされてきた。自然発生的―というのは、それが系統的計画的体系的にはまだなっていない、革命運動が要求する水準からみれば部分的であり、「伝統的にやられているサークル活動が、自然発生的に成長したものにすぎない」からである。しかし、この二つの傾向は、六〇年代のサークル連合・主要に学生大衆運動―活動家組織に基礎をおいた革命的インテリゲンチヤのサークル連合、目前の個々の闘争を遂行することに精いっぱい(「デモンストラーション」一つやるにも、全勢力を必死に「息も絶えな

んばかりに」ふりしぼったり、ありつただけの人間を駆り出して矢おもてに立てたりする「レーニン」なをなすべきか?)、その戦術的追求を軸とする組織の自然成長としての革命サークル連合として形造られてきた革命運動が、本格化し、帝国主義の打倒を、権力奪取を、蜂起(の準備)を日程に上せ(最も広い意味での革命戦争)また、それ故に唯一の真に革命的階級たる労働者階級との結合・融合を課題として登場させ、それに立ち向っていくために、六〇年代のサークル連合の分解から生まれた不可避的な傾向であった。この本格的なプロレタリア革命運動への胎動といえるこの二つの傾向の意義と限界・直面する問題を明らかにし、掘りさげること、そこから我々の次の一步を把み出すことができる。もう一度言おう。これは六〇年代のサークル連合が不可避的に分解し、揺籃期から本格的なプロレタリア革命運動(その任務・敵階級―敵権力との関係からいっても、また、革命的階級との関係からいっても本格的なのである。)へと到る過渡期の胎動であり、その先に我々の緊急の任務がある。

六〇年代末に始まったプロレタリアートの新たなめざめは、この二年間、着実に広がり、労働者の新たな層を次々と闘いに引き入れてきた。プロレタリアートの新たなめざめは、多種多様な階級的諸組織をつくりだし、生み直しながら進んでいる。(戦後形造られた労働組合の大半が、六〇年代半ばまでにブルジョアジーにからめ取

られてしまった地点から、新たな階級的闘争組織の形成・生み直しが、戦闘的左派組合を含めて進みつゝあるのである。言うまでもなく、その力量・性格は革命運動の働きかけによって、またそれとの結びつきの度合・方法によつて主要に規定される。しかしそれはまた、労働者の個々の闘争を發展させ、強める上に大いに役立つことができるだけでなく、「政治的煽動と革命的組織のためにもきわめて重要な補助者となることができる」し、「これらの組織が広汎であればあるほど、それに対する革命運動の影響も一層広汎になるであろう。」(レーニン『なにをなすべきか?』) それとともに、六〇年代末に最初に結集し、組織された先進的労働者層を中心に、労働者の革命的サークルが生まれ、成長し、訓練されたカイドル集団へと打ち鍛えられてきた。(訓練されたカイドル集団)「最も確かな、経験に富み、鍛練された労働者たちからなる、固く結束した小さな中核」) 少なくとも訓練された労働者のカイドル集団の形成、あるいは、先進的労働者の訓練されたカイドルへの成長が、プロレタリア運動の中で課題となつてきた。学生運動においても、全共闘の敗北と瓦解の中から、かつての先進的学生の政治組織・活動家組織の弱点を克服した真にプロレタリア的隊列を築く闘い、堅忍不拔の共産主義者へと育み、訓練し、打ち鍛えていく闘いが始まり、訓練されたプロレタリア的隊列と固く結束した共産主義者の中核が生まれ、成長しつゝある。それは学生運動内の新しい

前進である。だがそれは、革命的労働者サークル自身が革命運動のカイドルとしてしつかり打ち鍛えられ、訓練されていくこととして実現しない限り、必らず経済主義の道に迷ひこむ。我々は、この点においては、「労働者階級の政治的発達と政治的組織化をたすけることは、我々の主要な基本的任務である。この任務を背後におしやるもの、全ての部分的任務や個々の闘争方法をこの任務に従属させないものは、全て誤つた道に踏みこみ、運動に重大な害悪をもたらす。……この任務を背後におしやうっているものは、第二に、政治的宣伝・煽動・組織の内容と規模をせびめている人々」(レーニン『我々の運動の緊要な諸任務』)だということ、「社会民主主義は、労働運動と社会主義との結合である。その任務は、労働運動のそれぞれの段階で、この労働運動に受動的に奉仕することではなく、総体としての全運動の利害を代表し、この運動にその終局目標とその政治的任務とを示し、この運動の政治的・思想的独自性をまもることである。」(前掲文)ということを銘記しなければならぬ。我々は、全面的政治暴露・包括的な政治的煽動・全人民的政治闘争を組織する点に力点をおかねばならぬ。それはまた、当然にも組織や活動の点においても留意されねばならない。「運動の成長につれて、社会民主主義派の活動舞台は増々広まり、活動は増々多面的になり、宣伝・煽動の日常の必要によつて提出されてくる種々の部分的任務の実現にその力を集中する運動活動家の数は、増々

多くなつていく。この現象は全く正当で、不可避的なものであるが、そのことによつて、活動の部分的任務や個々の闘争方法がなにか自己満足的なものに仕立てあげられたり、準備活動が主要な唯一の活動にまつりあげられたりしないように、特別な注意をはらうことが必要となる。」(前掲文) これはまさに今、我々がさしかつてきている状態である。「このようなサークル・組合・組織は、いたるところに、極めて多数に、また極めて多種多様な機能をもつものがなければならぬ。しかし……大衆運動に『奉仕する』ためには、専門的に社会民主主義的・共産主義的・活動に全身をさへげた人々が必要でそういう人々は忍耐とがんばりを發揮して職業革命家に自分を育てあげなければならぬのだという意識——そうでなくとも信じられないほどぼんやりしてしまつていて意識——を、大衆の間から消滅させるのは、ばかげた、有害なことである。」(『なにをなすべきか?』) まさしく現在の問題は革命的労働者サークルの成長、革命運動のカイドルとしての訓練が自然成長性に委ねられている点にある。そしてこの自然成長性は、運動の拡大・多面化そのものによつて、政治を狭く、日常の要求や個々の部分的闘争へと局限していく傾向、部分的活動で自己満足していく傾向をもたらし、また「それら(上述のサークル・組合・組織)を革命家の組織と混同して、この両者の間の境界を抹消する」(前掲文)傾向、厳格な強固な革命家の組織の必要性を否定する、とまではいわな

くても、軽視、あるいは必要性についての意識を薄れさせる傾向をもたらすのである。我々は、共産主義と労働運動を結合しなければならぬ。「労働運動と社会主義との結合だけが、すべての国で、前者のためにも後者のためにも堅固な基礎をつくりだした。」我々にとつてこの結合は今ようやく始まつたばかりであるが、始まつて間もなく、徐々につくりあげられていくところである。革命的労働者サークルの成長や、プロレタリア運動の訓練された運動活動家の形成は、この結合の組織的表現であり、この結合の具体化である。我々はこの結合を一層強めねばならぬ。だが、この結合の強化は、革命的労働者サークルが、プロレタリア運動の運動活動家が、革命運動のカイドル、共産主義的・革命的労働者サークルとして、意識的・組織的・系統的に訓練されていくことを不可欠の要件とするのだ。そのためには、常に「個々の譲歩の要求を、帝国主義に反対する革命的労働者党の系統的な、不退転の闘争に高めるために十分の心づかい」(『緊要な諸任務』)をし、帝国主義に反対する全面的政治暴露・包括的政治的煽動・全人民的政治闘争を組織し持ち込み、「たゞ夜分のひまな時間だけでなく、自分の全生活を革命にさへげる人々を養成し、我々の活動の種々の形態の間に厳密な分業をおこなうことができるほどに強大な組織を育成しなければならぬ。」(前掲文)その核心は「プロレタリアートの解放闘争全体を指導する能力のある革命家の組織」「訓練を経た、職業的に訓

練され、多年の修業によって修練を積んだ」「確固たる継承性をたもった指導者の組織」「堅忍不拔な、頑強な闘争によってプロレタリアートを教育する強固な革命家の組織」「政治闘争に精力と確固さと継承性を保証できるような革命家の組織」「堅固な中央集権化された革命家の戦闘組織」(『なにをなすべきか?』)の建設である。

他方、階級闘争が非和解性が激化し、革命運動も政策反対闘争や反政府運動を主とした揺籃期から、帝国主義の打倒を闘い取る段階、蜂起を準備し、闘い取る本格的な革命運動(最も広い意味での革命戦争)へと到るとともに、敵権力との激しい衝突・戦闘が始まり、軍事活動を組織する任務が登場した。とくに六〇年代末の青年学生を主とした最初の革命的大衆闘争が、政府の警察力によっておし潰されて以来、この軍事活動を組織する任務は青年学生活動家の中で強く意識された。そして数多くの青年学生活動家がこの任務にとりかゝった。それが「疑いもなく革命的な気分をもち、英雄的な自己犠牲心にさえ満ちている人々、衷心から自由のため、人民のために身を賭そうとのぞんでいる人々」の試みであり、そういう観点からの試みであることを私は疑わない。そこに最良の革命的闘士の一群があることを私は疑わない。そしてとくにそれが強固な革命的組織への要求であり、日常の諸要求や目前の個々の闘争に革命的活動が限定従属されていることからの脱却の要求であり、その時々の

れた部分でさえ、サークル的な政治や組織や活動の質。狭さあるいは一面性を根本的に克服しえていない。軍事活動が広汎な革命的諸活動の一環、系統的、体系的に組織され、計画化された革命的諸活動の一環になりえないで、軍事が自立し、それに一切が解消されているような現象、従って軍事が観念化されている状態(それが、活動し、行動する人々の意図とは無関係に、それに反してでさえ)をもたらしている。いわば、軍事の狭さ・観念化・自立化・自然発生性ともいべきものである。これはあるいは、その自然発生性・非系統性・非計画性の故に、敵権力の攻撃の前におし潰されるか、あるいは革命家の大衆からの遊離をもたらし、社会主義的活動と革命的階級の大衆との切っても切れない結びつきを破壊し革命家と人民との結合、革命運動と労働運動との融合、大衆の中の活動・大衆の攻撃を組織する活動を弱め、「我々の極めて数少ない組織者勢力を、革命的労働者党を組織するという彼らの困難な、まだ決してなしとげられていない任務からそらせ」「大衆を指導する力と手段とのしつかりした結びつきもたなければ、明確な社会主義的信念の強固な基礎もたないわが国のインテリゲンチヤの間の、大衆の労働運動に対する不信」「労働運動への『教条主義』的信仰から解放されたインテリゲンチヤ」の「個人的反撃」「捕捉しえない個々の個人、または小サークルによる政府との断固たる闘争」への熱望や激昂に拝跪し、融着していく危険、このような種々の

大衆闘争の状態。気分・要求に合わせた部分的活動で自己満足する傾向との闘いの要求であること、このことを私は高く高く評価する。それはまた、厳格な革命的組織、厳格な秘密活動、厳格な組織性・規律性の問題を、我々の革命運動の中に初めて登場させたのであった。非合法組織・非合法活動を初めて実践的に登場させ、打ち鍛えたのであった。そしてそこに自己を革命運動のカードルとして献身的に打ち鍛えていこうとする人々の一群が存在する。だが、その多くは「革命的活動の個々の部門を組織することを全くせずに、いくらかでも長期を見こした系統的な活動計画などはなに一つもたずに仕事にとりかゝり」「これらの戦闘行動が、長期にわたる頑強な闘争のために、あらかじめ周到に考えぬいて、順を追って準備してきた系統的計画の結果でなくて、伝統的にやられているサークル活動が自然発生的に成長したものにすぎ」ず、「また、まだ学生の時分から『名の売れた』地方の運動―サークル―の主要な活動家達はみな、当然殆んどいつでも警察に知られており」「襲撃が極めて頻繁にくりかえされ、極めて多くの人々を引っかけ、地方的な―地域や学校の―サークルをじつに洗いざらい一掃するようになり」「地方の活動家が驚くほどちりぢりばらばらになり、理論上・政治上・組織上の分野における訓練が不足し、視野が狭くなった」(『なにをなすべきか?』)という傾向をもつものであった。いや現にもっている。その最も優れた、最も確固たる、最も訓練さ

危険をばらんでいる。即ち、テロリズムへの危険である。とくにそれが「テロルが『何カ月もの口頭宣伝よりも確実に、革命家とその活動の意味とに対する幾千の人々の……見解を変えることができる』かのような、テロルが『動揺し、力をおとし、多くのデモンストレーションの悲しむべき結末によって衝撃を受けた人々の中に、新しい力を吹きこむ』ことができるかのような、テロルが『人々に、不本意ながらも政治的にものを考えることをよぎなくさせる』かのような、等々の有害な幻想」と結びつき、「革命の唯一の『頼み』は『群衆』(お望みなら人民と言おう。)であるということ、ひとりこの群衆を指導する(言葉のうえではなく、実際に)革命的組織だけが警察と闘うことができるということ、これはイロハである」ことを否定する見解と結びつき、「英雄の決闘の一つ一つが、我々全てのうちに闘争心と勇気とをよびます」とか「テロルの一つ一つの閃光は知性(階級意識)を啓発する」という考えと結びつき、「成果が直接目に見え、センセーショナルであるということ、実践的であるということとを混同」したり、「確固として階級の見地に立ち、運動の大衆の性格をまもるという要求」を否定する見解と結びつき、それらによって打ち固められていくなら、明白にテロリズムへと転落するであろう。まさしく「人々が衷心から、信念をもって、(疑いもなく革命的気分と英雄的な自己犠牲心をもって)ある社会的・政治的立場をとっているという事情は、それ

だけではまだこの立場が無条件に虚偽のものではなく、内的に矛盾していないかどうかという問題、またこの立場からなされた最良の活動の結果が不可避的に（それが行動する人々の意識に無関係であろうと、また彼らの意志に反してであろうと）プロレタリア運動をエスカモチーロヴァチすることに、正しい道からプロレタリア運動をそらせ、それを袋小路へ引き入れることにならないかどうかという問題を、あらかじめ解決するものではないかでない。」のである。（以上の引用はレーニン『革命的冒険主義』『なぜ社会民主党は社会革命党に戦争を宣言しなければならぬか？』『新しい事件と古い問題』等の一連のエス・エル批判論文）

我々は「大衆運動の新しい形態、または大衆の新しい層の自主的な闘争への覚醒だけが、実際に、全ての人間の中に闘争心と勇気を呼びさますこと」「大衆自身が登場人物となる事件、あれこれの組織によって『特殊な目的のために』演出されるのではなくて、大衆の気分から生まれ出る事件だけが、真に真剣な『煽動的な』効果的な、単に興奮させるだけでなく（これがはるかに重要なことであるが）教育的効果を及ぼすことができること」「また『万人の目に一目瞭然と見てとれる労働者階級の政治的意識と革命的積極性との成長に結びついたこのような大衆運動だけが、真に革命的行為と呼ばれるに値するものであり、革命のために戦っている人々を真に勇気づけることができること』」さらに「このような労働者―

共産主義的運動の基礎であり、そこにこそ一切の力の源泉がある。（以上引用はレーニン『なにをなすべきか？』『革命的冒険主義』『新しい事件と古い問題』）

我々はこの一年間においても、このことを六月の沖繩闘争の中で部分的に、そしてとくに九月の三里塚闘争の中ではっきりと経験したのではなかったか。我々の軍事活動もまた、以上の基礎の上で、以上の一環として独自の意識的計画的要素として組織されねばならない。我々にとって軍事活動の問題が課題として登場したのは、デモンストレーションに一層多くの組織性・計画性・強固さをもちこむこと、また「我々の目の前で真に戦っている群衆の中へ増々多くの組織性と準備をもちこむ任務」としてであった。（純軍事的側面はその技術的側面に他ならない。）「なによりもまず、最も多くの力を組織化に注がなければならぬ。我々がデモンストレーションのあらゆる側面の指導のために、いくつかの精鋭部隊を出動させる能力のある、固く結束した革命的組織をもたない間は失敗は避けられない。だが一担このような組織が形造られ、活動そのものの過程でいくたの経験に基づいて強固となるなら―その時にはこの組織は（この組織だけが）いつ、どのように武装しなければならぬか、いつどのように武器を行使しなければならぬかという問題を解決することができるであろう。この組織は「動

員の速度」をはやめるためにも、積極的なデモ参加者の数をふやすためにも、『好奇心にかられた群衆』を『こ

政治警察と職業的に闘争する能力など全くもたない労働者―や、大衆中の中位の人々は、ストライキや警官と軍隊相手の街頭闘争で、巨大な精力と自己犠牲心とを発揮する能力をもっており、我々の全運動の帰結を決定する能力をもっている（また、これは彼らにしかできない）」こと、「労働人民なしにはどんな爆弾も無力であること」を根本前提として確認しなければならぬ。だからこそ我々は「運動の『現実』の歩みを進めるための長期かつ困難な活動」を一瞬間も拒否することなく、「自分の緊要な日常活動をたゞの一瞬間も忘れることなく」、大衆の革命的積極性を培い、発展させ、彼らをたちあがらせる活動。「今日の社会で幾千万回、幾億回となくくり返されている労働者の『圧迫・貧困・隷属・屈辱・搾取』の事実から彼らの意識の覚醒。彼らの『憤激』の増大、この憤激の革命的現れへの移行」へ「人々に対する系統的な、原則的に一貫した、全面的な革命的（共産主義的）働きかけを継続し、拡大し、強化する」活動、大衆的攻撃を組織する活動を、頑強に、粘り強く、「より精神的に、より大胆に、より整然と、集団として」組織し進めなければならぬ。この点では「社会民主主義者（共産主義者）が仕事ながびくという問題を『気に病む』ことは許されない。」我々にとって、「革命家の組織の意識的破壊力と民衆の自然力的な破壊力とを近づけ、一体に融合させる」こと、我々の組織された意識的力と、大衆の創意性・積極性・英雄主義とを結合させることは、

の仕事に」参加させるためにも、軍隊を『はぐらかす』ためにも、真剣に行動しなければならぬだろう。武装市街戦への移行というような措置は『峻烈なもの』であり、しかも『遅かれ早かれ不可避である』からこそ、運動を直接指導する強固な革命的組織だけがそれを行うことができるし、また行なわなければならないのである。（レーニン『デモンストレーションについて』）

まさしくこの通りである。我々は、六九年四・二八闘争で初めてこの精鋭部隊を出動させた。それは必然的に固く結束した革命的組織を要求した。まさにその要求から赤軍派は生まれ出た。そして秋には一層よく組織され、一層多くの訓練を積んだ、武装した精鋭部隊を出動させようとした。だが、それには堅忍不拔の共産主義者。多くの経験と訓練と訓練を積んだ革命家から成る強固な革命的組織、「我々の活動の種々の形態の間に厳密な分業を行うことができるほどに強大な組織」が要求されたのだ。まさにその一環に軍事活動、軍事を嚴格に技術として取り扱い、日常的に厳格な秘密活動として準備し、組織する活動が要求されたのであった。では、このような精鋭部隊はどのように組織され、打ち鍛えられるのか。それはまさしく組織全体の同一的問題である。我々の政治の広汎さ、高度さ、組織の強さ、堅忍不拔の共産主義者の組織としての、中央集権的組織性・規律性。完全な同志的信頼、日々の活動における頑強さ、堅忍さ、嚴格さと柔軟さ、プロレタリア的気風、革命的階級との結合の深

さ、緊密さ etc. によってである。そしてもちろん、方針や戦術の正しさ、あるいは正しさへの確信によって常に基礎づけられねばならない。それ以上のものは、まさしくリアルに技術として習得し、更に戦闘の諸経験によって学び、訓練されていくものである。このような精鋭部隊は、六月の沖繩闘争の中でも、また七、九月の三里塚闘争においても出動し、とくに後者においては、連続した戦闘そのものによって経験を積み、成長し、闘争全体を牽引し、九・一六〜二〇の高みへと導いたのであった。我々は、ここで次の事をはっきりと指摘しておかねばならない。我々は軍事を宣伝の手段・組織化の手段・党派性として取り扱ってはならない。軍事を宣伝や組織化の手段、党派性として取り扱うことは、必ず観念論へ導き、あらゆる政治活動・組織活動が軍事に解消され代行されるか、あるいは冒険主義・センチシヨナリズム・利那主義や、技術的準備の軽視や場当たり主義や、技術的思想・党派性への解消と、精神主義や主観主義や玉碎主義をもたらすであろう。我々は軍事をリアルに技術として、敵と戦う技術として取り扱わねばならない。軍事は敵権力を実体的に粉碎し、解体する闘争の手段であり、技術である。現実の戦闘において、純軍事的側面・技術的側面を担うのであり、だからこそ、我々はリアルに敵格に技術として準備し、組織し、駆使しなければならぬ。軍事から闘いが出発するのではなく、軍事から戦闘意志が生まれるのではなく、闘いの一側面・技術的

他の何物によっても代替されることはできないのであり、ましてや軍事に代行させることは、両者にとって自殺行為である。軍事の発展は、その技術的練磨を別にすればこの組織の実体的発展・成長を基礎としてのみある。いうまでもなく、あらゆる活動・闘いがそうであるごとく軍事活動・武装闘争もまた、逆に組織を打ち鍛える。組織をそのような水準・質において打ち鍛える。しかしまた、そのような水準・質をあらゆる面で意識的に追求し高めるべく努力しない組織を解体させるものである。まさに、今日多くの軍事活動・武装闘争の組織が陥っているのは、この軍事の観念化・主観主義化である。即ち、軍事をリアルに技術として取り扱う主体に組織へと到っていないこと、そのような組織へと打ち鍛え、高める方途を見出しえていないことである。(そこから孤立や狭さやテロリズムへの傾斜が不可避となっていく。)それは旧来の我々の革命運動の政治(部分的な反政府的な狭さ・低さ)、活動(革命的活動全体の規模の狭さ・部分性・サークル的な手工業性・非系統性・非計画性)、組織(サークル性・自由分散主義・強固な組織性、規律性頑強さ、堅忍さの欠除)、革命的階級との結合の度合い・質(漸く若干の先進分子を結集しはじめたばかりであり、いまだ訓練されたカードを生み出しえていない)等を、根本的に克服しえず、それらの基礎の上に軍事があり、軍事が突出し、そこに実践が狭く収れんされていることによってもたらされている。そのことによつて

側面として、戦闘意志を実現する手段・技術として軍事がある。軍事が主体を築くのではなく、主体の行使する手段・技術として軍事がある。軍事が革命を実現するのではなく、革命の手段・技術的側面として軍事がある。軍事をリアルに技術として取り扱うには、そのような主体に組織が前提される。結局のところ、組織・組織の実体的諸系列こそが、敵権力を実体的に粉碎し、解体する。しかし、軍事をリアルに、敵権力を実体的に粉碎・解体する闘争の手段・技術として取り扱うということは、同時に、組織の質・強さが、組織の政治や活動や組織性の質・広さ・強さがそのようなものとして高められ、打ち鍛えられることが対応し、基礎とならねばならない。即ち、権力問題―全人民武装蜂起・プロ独に系統化され、集中されていく、綱領(権力問題を中心とする綱領的な革命的な政治)・堅忍不拔の共産主義者の、強固な中央集権的戦闘組織としての組織性・規律性、あらゆる頑強さと堅忍さ、自己犠牲・献身性。英雄主義を日々あらゆる活動において打ち鍛える活動態度、また革命的階級との緊密な、広汎な結びつきを要求するのである。もしそのように不断に自己を訓練し、打ち鍛えていくことができなければ、軍事はそのような組織を解体するであろう。まさにそこから無政府の戦闘団やテロリズムへの転落がおこるのである。そして、このような組織を建設し、訓練し、打ち鍛えること、また、政治的宣伝煽動・組織化、政治―組織工作等は、それ自身としてあるものであり、

また、政治・組織・活動・革命的階級との結合等、全体において訓練し、打ち鍛え、根本的に変革していくそのような革命運動の全体性が制限され、狭められていること、ここに困難さがある。この困難さと、その中で激しい葛藤と苦闘、そこに我々の革命運動の現在の問題が凝縮されている。敵格な秘密行動・非合法活動・成員の敵格な選抜、政治警察との職業的闘争、敵格な非合法組織、秘密機構、強固な組織性と規律性、完全な同志的信頼、自己犠牲・献身性・英雄主義・忍耐力 etc.、それは、我々の革命運動において初めて強固な革命家の組織・革命家の戦闘組織をつくり出した。それは初めて職業革命家の層をつくり出し、我々の革命運動の新しい地点・本格的な革命運動への転化の地点を刻した。だが、同時にそれは一面的で、革命的活動全体の規模が狭く、大衆から遊離させ、不可避的に主観的存在たらしめたのである。我々は、それを克服し、止揚しなければならぬ。我々はまさにレーニンの「人民の意志」―「土地と自由」派―「人民の自由」派の批判と継承の作業を、現在の日本において果さねばならない。最後にレーニンの次の言葉を引用しておこう。

「革命党は、それが実際に革命的階級の運動を指導する時に初めてその名に価するものとなることを、我々は銘記しなければならぬ。あらゆる人民運動は、たえず新しい諸形態をつくりあげ、古い諸形態を捨て、いろいろの変種や、古い諸形態と新しい諸形態の新しい組合せ

やをつくりだして、無限に多様な形態をとるということを、我々は銘記しなければならない。そして、我々の責務は、闘争の方法・手段をつくりあげるこの過程に、積極的に参加することである。……デモンストレーションが強固になったとき、我々はその組織化を、大衆の武装を、呼びかけはじめ、人民蜂起を準備する任務をかけた。暴力とテロルを決して否定せずに、我々は大衆の直接の参加を予定し、またこの参加を保証するような暴力の諸形態を準備する活動を、要求した。我々は、この任務の困難なことに目を閉ざすものではないが、我々はそれは『いつも知れない遠い将来のことである』という反論にまよわされずに、確固として、粘り強くこの任務のために働くであろう。さよう、諸君、我々は過去の運動形態に賛成するだけでなく、未来の運動形態にも賛成する。我々は、すでに過去によって断罪された事柄を『安易に』繰り返すよりも、将来性のあるものゝために長期にわたる困難な活動をするほうを選ぶ。』（『革命的冒険主義』）三里塚の七と九月の闘いは、まさしくこれを我々の事実でもって示した。労働人民の武装とその革命的積極性と創意性、それに結合し、そこに持ち込まれた意識的組織的計画的準備と闘い、この結合した力は他のどのような闘いよりも偉大な闘いとなり、内乱のヒドラ、全人民武装蜂起のヒドラを培い、打ち鍛え、赤々と燃えたとせた。そして、多くの人民を「煽動」し、感動させ、教育し、勇気づけた。「さよう、蜂起である。

たとえ遠い地方都市（農村）におこった、この一見ストライキ運動（土地防衛闘争）とみえた運動の始まりがどれほど『本物』の蜂起に遠いものであったにしても、その継続。その終局は、いやおうなしに、他ならぬ蜂起の思想に導きつゝある。」「全人民的武装蜂起が、たんに革命家の頭脳や綱領のなかの概念としてだけでなく、また、運動そのものの不可避的な、実践的・自然的な、つぎの一步として、ロシア（日本）の現実から極めて貴重な教訓、すばらしい教育を受けつゝある大衆の高まっていく憤激、増大する経歴、増大する勇敢さの結果として成熟しつゝあること」（『新しい事件と古い問題』）を示した。「大衆に方向を示す能力をもった真の戦闘組織をつくりだすという、我々に迫りつゝある任務、我々の上にかゝっている任務を、一步でもあえて回避さへしなれば、という条件」をもつて。我々は徹底して階級闘争の見地に立ち、それをどのような情勢と条件の下でも最後まで貫かねばならない。今、この時期にこそ、これは改めて強調されねばならない。我々は革命的階級と固く結合し、この階級を帝国主義打倒の全人民的政治闘争の首領へと組織し、動員し、その解放闘争全体を指導しその自然的な破壊力、革命的積極性・創意性・英雄主義と一体に融合していく、堅忍不拔の共産主義者の強固な戦闘組織。確固たる革命的組織をつくりあげねばならない。そして、その広汎な革命的諸活動の重要な一環として、軍事活動を厳格な秘密活動として組織し、秘密機

構をつくりだし、軍事をリアルに技術として準備し、組織し、かつそれをこの階級の大衆闘争、革命的な大衆闘争の中で、その意識的・組織的・計画的要素・推進力として駆使し、發揮していかねばならない。〔注1〕

私はこの一年間の武装闘争とその主体に対して少し厭しすぎたかもしれない。あるいは過大な要求をしているのかもしれない。もちろん、この一年間の武装闘争の実践と経歴。その意義は、偉大なものであった。それは階級闘争と革命運動の新しい時代を告げ知らせ、その巨大な一步を踏み出し、六九年の敗北からの立ち直りとそれをこえて突き進む新しい力の勃興を牽引し、あらゆる人民の闘いを鼓舞してきた。とくに六・一七首都の沖繩闘争のたゞ中で闘い取られた××闘争と、三里塚闘争をはさんでその十月への連続は、おし寄せる波のように、大衆的攻撃。革命的攻撃への進路を切り拓いていった。事実、三里塚の九月の闘いは、この大衆的な革命的攻撃を実現し、政府・支配者階級を慄えあがらせ、恐怖に突き落とし、人民をして蜂起を意識せしめた。だが、まさにそれが沖繩闘争に継承され、一層高められて、政治闘争の中枢。政治的環につきささり、打ち抜いていく大衆的攻撃。革命的攻撃へと前進しようとした時、とりわけ十月の××破壊戦の拡大がこの波を引きつぎ、前哨戦を形成し、そして十一月の頂点に向った時、それは一つの壁に直面したのだ。この壁を単に敵権力の反動的革命的暴力体制として客観化してしまうことはできない。それ

はあらゆる面で六九年の敗北を克服して、強固に組織され、訓練され、打ち鍛えられた勢力、革命主体の未成熟である。その意味では、六九年に直面した情況と課題は依然未解決であり、引きつがれている。六九年の問題は厳然として我々の前にある。もちろん同じようにはない。二年間は無為にあつたのではない。この二年間、支配階級―敵権力の攻撃と支配体制の再編や国際階級闘争を含めて、階級闘争は表層でも深部でも、一層深化し、激化してきた。また、革命運動、革命勢力の転質や再編も、隠然であれ、公然であれ、可視的であれ、不可視的であれ、進んできた。だから、正確に言えば、我々は六九年来の過渡期にあり、依然過渡期の苦闘を闘っているのである。武装闘争は、その初期には避けられない試行錯誤を経つゝも、その大胆さ、勇敢さ、献身さ、英雄主義によって、この過渡期を先頭に立って切り拓いてきた。それは新しい萌芽を様々に育み、新しい力を勃興させた。それはとくに五年間にわたって闘い続けられてきた三里塚闘争の大衆的な階級の深さと結合して、九月のあの闘いを実現した。しかし、六九年来の過渡期の政治的中心的環である沖繩闘争ではその未成熟を露呈した。こゝにこそ過渡期の中心問題があるのだ。他方、六九年の敗北から何ものも学ばず、無為に時を経過し、そして再び六九年を繰り返そうとした部分は、中核派のあの、革命的空語と幻想とセンチメンリズムで塗り固められた中途半端な脆弱な暴動主義として破産し、その他の部分も

また、そのミニ版を追求し、たゞミニ版であることによつて破産の度合も浅からしめたゞけであつた。ブンド閥西派の三分解も、六九年のブンドの分解を一層小型化してくり返したにすぎない。まさに問題は、勃興し、育くまれ、培われつゝある諸々の新しい萌芽。力を、いかに強固に組織された革命勢力、階級闘争全体を全人民武装蜂起へと牽引し、組織し、打ち鍛えていく、真に前衛的勢力へと組織し、訓練し、打ち鍛えていくかにある。七一年秋の沖繩闘争は、一年間の武装闘争の実践と経験の上で、六九年に続いてもう一度、一層進んだ地点で、一層鮮明にこれを突き出したのだ。まさにその意味では、この一年間、武装闘争を担ってきた部分も、このような革命主体の見地、階級闘争の未来をも体現すべき革命主体の見地、我々の運動の未来の見地からするならば、やはりまた過渡的であることを認めねばならない。過渡的ではあれ、新しい実践と力と主体をつくりだし、打ち鍛えてきた限りでは、我々は六九年より遙かに進んだ地点にいるし、課題は半ば解決されている。あるいは解決しうる主体を獲得した。だがしかし、残り半分の解決—これこそ真の課題であり、それは単に大胆さ、勇敢さ、献身さ、英雄主義だけでは解決できず、これ自身の訓練を必要とするものであり、最も目的意識的であらねばならないものである—に向わなければならない。あるいは課題の解決に全力で立ち向う意識性を發揮しないならば、それ自身、一つの自然成長性IIテロリズムへ転落する危険をは

らんでいるのである。この危険を自覚し、それと闘う意識性をもたねばならない。それだけが真にボルシェヴィズムへ到る道なのだ。だから我々は『我々の運動の緊要な諸任務』と『なにをなすべきか?』を学ばねばならないし、また学びうるのだ。(もう一度言及するが、レーニンは『緊要な諸任務』で、綱領—組織—戦術を一つの全一として提起し、『なにからはじめべきか?』で『政治的煽動の性格と主要な内容の問題、組織上の諸任務の問題、全国的な戦闘組織を同時にいろいろの側面から建設する計画の問題』を提起し、『なにをなすべきか?』ではそれを『組合主義的政治に対する社会民主主義政治、手工業性に対する革命家の組織、あらゆる側面から今すぐ蜂起の準備を始めると同時に、自分の緊要な日常活動をたゞの瞬間も忘れない、最も実践的な計画』として深め、具体化している。いうまでもなく、その基礎には『ロシア社会民主主義者の任務』の提起以来一貫した、社会主義と労働運動の結合、労働者階級の政治的組織化の追求がある。) この綱領—組織—戦術の全体性と、この全体性をもって、堅忍不拔な、頑強な闘争によつて教育され、訓練され、打ち鍛えられることによつてのみ、課題を解決し、過渡期を止揚し、全人民武装蜂起を組織しうる真に革命的・前衛的の主体・勢力が築かれるのだ。武装闘争をその一環として組織することこそがテロリズムへの転落を免れ、武装蜂起へと鍊成していく推進力となりうるのだ。我々は、レーニンにならつて次

のように言おう。『その(武装闘争の)階級性は、それを組織し、指導するものが、我々共産主義者であるということ—その戦術・指導方針・革命闘争のリアリズムにおける現実的機能、運動全体、階級闘争全体、敵—味方の相互関係全体の現実—に立脚した具体的規定性等、武装闘争の全側面を、マルクス主義の少しの歪曲をも大目に見ない、一貫した共産主義的精神に立って考え抜き、提起されるということ、—全人民の名による政府に対する襲撃をも、プロレタリアートの政治的独自性をまもりながら行なわれるプロレタリアートの革命的教育をも、労働者階級の経済闘争(労働者・学生・農民・その他労働人民の個々の諸政治—経済闘争)の指導をも、即ち、次々にプロレタリアート(被抑圧・被搾取人民)の新しい層を立ちあがらせて我々の陣営に引き入れる、労働者階級とその搾取者との間の自然発生的な衝突の利用をもこれら全てを結びつけて渾然たる全一とする党が、この武装闘争を組織し、指導するということ、こういうことに現われるのである! 現代では、真に全人民的意義をもつ武装闘争を組織する党だけが、革命勢力の前衛となるべきか?』(『なにをなすべきか?』)

今や、共産主義とプロレタリア運動の結合、綱領—組織—戦術の全体性から武装闘争を打ち鍛えることが必要である。即ち、この全体性から大衆的攻撃を頑強に組織し、打ち鍛え、堅忍不拔の革命勢力を築き、革命的攻撃へと高めていくこと、武装闘争をその一環、その尖端と

として組織していくことである。我々は、あらゆる形態の武装闘争を、それが必要で有効な限り承認する。しかし、真に大衆的な革命的攻撃を組織し、打ち鍛え、発展させるという基本任務と結びつかないもの、それから逸脱したものは拒否しなければならぬし、この基本任務を曖昧にし、無視し、その外で武装闘争の発展を夢想する見解を斥けねばならない。敵の攻撃が一段と激しくなり、鋭くなり、階級矛盾が激化しつゝある現在、これは是否とも確認しなければならぬ。武装闘争は、今、真に革命的武装闘争への発展の困難な道に踏み込むのか、テロリズムへ転落するののかの分岐点。訓練に達している。これは大きい小さいか、激しいかおとなしいか、武器の性格・性能が高いか低いか、センセーショナルか否かによつてではなく、主体の思想的II政治的II組織的質、その政治や革命的諸活動の広さと高さ、階級の基礎、その結合の深さと強さ、戦術に関するマルクス主義的厳格さ、組織性・系統性・計画性等によつて規定されるのである。我々は、過渡期を止揚するこの最大の試練・困難に全力で立ち向わねばならない。この緊張の下では、自らの革命的熱意・気分・勇敢さ・献身性・英雄主義をも統制し、訓練することを学ばねばならない。導きの糸はマルクス・レーニン主義の原則をあくまで堅持し、それを実践しぬぎ、現実に学ぶことである。

〔注1〕 私はこのまで書いてきて次のような想いから

がく然とした。それは、世界階級闘争の現実と我々の運動の歴史的位相が、特殊に現在非マルクス主義的革命運動を燃え立たせる可能性である。いや、我々は今新たな革命運動・真に革命運動といふものもの生成期にあり、漸く革命運動に踏み込んでいること、それとともに真にマルクス主義の道を進むかどうかの試練にたつていているということである。六〇年代、我々の運動が未だサークルであり、思想的論争であつた間は、このような問題はおこらなかつた。だが今では、それは、深い鋭い実践的問題として提起されている。我々の運動は、今、第一に革命派と非革命派への分岐を深く進めつゝある。と同時にまた、革命派の中で、マルクス・レーニン主義と非マルクス・レーニン主義との分岐をつくり出しつゝある。その試練に我々は直面している。かつて十九世紀にも、ブランキやブルードンやバクーニンの有力な非マルクス主義革命運動があつた。むしろパリ・コミューンはこれらの潮流によつてより多く担われたが、このパリ・コミューン、プロレタリア革命の事実と経験そのものが、これらの潮流を没落させた。ロシアの革命運動においても、土地と自由派—人民の自由派—エス・エル—左翼エス・エルの潮流も有力な部分を占めていた。(とくに第一次革命)この潮流の占めた位置や役割は今では殆んど無視されているか、遙かに過少評価されている。ボルシェヴィキとメンシェヴィキの闘争は重視されても、ボルシェ

ヴィキとこの潮流との相剋は省みられることは少ない。十月革命とそれに続く革命戦争という、世界プロレタリア社会主義革命の現実の進行は、この潮流を磨滅したのであつた。世界プロレタリア社会主義革命の始まりが、この英雄的な自己犠牲性と革命的気分に満ち、衷心から自由のため、人民のため、革命のために身を賭したが、しかし遂に確固たる思想・綱領をもちえず、革命的階級プロレタリアートの中に基礎をもちえなかつたこの潮流を、歴史の舞台から退場させた。即ち、この潮流ではプロレタリア革命・社会主義革命を勝利に導くことはできなかつたのであり、また、革命的マルクス主義の、共産主義的プロレタリア的潮流に導かれない間は革命は勝利しえなかつたのだ。その後、これに似た傾向は別の形態・別の姿をとつて、アナキズムと革命的サンディカリズムとの結合として、ロマン系諸国の中に現われたが、それもスベイン戦争を最後に消え去つた。(それはラテンアメリカに受けつがれ、その土壌からカストロ主義は誕生したかの如くである。それがまたレーニン主義—たとえスターリンの歪曲を蒙つていたとしても—から出発した毛沢東主義をはじめとするアジアの人民戦争の党との異質さをもたらしめているかの如くである。だが、社会主義革命への前進は急速にマルクス・レーニン主義へ近づけていったのだが。)この消滅の時期は、先進諸国の共産主義運動、プロレタリア運動と革命運動として

も、変質と長い反動と停滞の時期であつた。今漸くこれを打ち破つて新たな革命運動が生まれつゝある。だが、この生まれたばかりの革命運動は、未だしっかりと革命的マルクス・レーニン主義の旗をその手中に握りしめてはいない。未だ確たる綱領を確立していない。未だ唯一の真に革命的階級プロレタリアートに到達・結合し始めたばかりで、その確固たる階級的基礎の上には立っていない。だから様々な動揺と流派の分立は避けられない。今、この本格的な試練と成長を迎えているが故に、非革命的流派への退化・変質が不可避に生まれるとともに、同時にまた、本格的な革命運動へ前進しようとするものの中にも、分岐が、いくつかの傾向が生まれる。しかし、一時期には「エス・エル」やアナキズムもまた可能であり、それが舞台の正面に立つことさえありうる。(世界階級闘争の現実を支えられて) だが、この革命は世界プロレタリア社会主義革命としてしか、その主要な一環としてしかありえない。だからそのような流派は革命を勝利に導くことができな。今日の革命がロシア革命より一層徹底して世界プロレタリア社会主義革命であるだけに尚更である。結局のところ、真に共産主義的プロレタリア的潮流のみが革命を勝利に導くであろうしまた、そのような潮流に導かれぬ間は、革命は勝利することができないであろう。我々は今、新たな一歩を踏み出そうとしている時、このことをしっかりと心

に留めねばならない。この一歩の踏み出し方、その方向が、真に共産主義的プロレタリア的潮流としてその将来を闘い取るのか、エス・エルの潮流としてその将来を運命づけるかを決定するのである。「前世紀の九〇年代の前半には、革命的青年の小サークルの間での闘争であつた闘争が、今では成熟した政治的諸流派や諸政党の断固たる闘争として復活されている。」今日はまだ小さな、些細な理論的・政治的相違も、階級闘争の発展によつて、明日には大きな政治的・階級的相違に発展する。このような時にこそ、我々はマルクス主義にたえず立ち返り、真剣に深く学び、その原則を堅持し、それを実践することに力を注ぎ、具体的実践と結合し、現実から学ばねばならない。この旗を更に高く掲げ、この旗の下に更に固く結束せよ。我々はこの自分の革命的熱意・気分・英雄主義に拝跪することなく、それ自身を訓練しなければならぬ。一見最も戦闘的にみえる革命性、直接眼にみえる効果よりも、原則を確保しぬぎ、実践しぬぎ、実践を原則によつて点検し、打ち鍛えぬく革命性こそが、現在の混乱・混沌・試練の下ではそれだけ困難であり、必要であり、意義あるものである。それだけが真に将来性あるもの基礎となるであろう。長い歴史的時期にわたつて、あらゆる理論闘争・階級闘争・革命運動の試練に耐え、その試練をくゞり抜けて打ち鍛えられ、豊富化されてきたマルクス・レーニン主義のみが、我々の運動の導

きの糸となり、我々の運動を真に共産主義的プロレタリア的運動へと打ち鍛え、成長させていく導きの糸となるのである。(六〇年代後半に生まれ出た北米、ヨーロッパ、アラブ、アフリカ、中南米の革命勢力は、今全てマルクス・レーニン主義に接近し、真剣に学んでいるではないか!) マルクス・レーニン主義に疑問を呈し、異論を唱え、新解釈と改作を施す人々に注意せよ! 我々は更に固くマルクス・レーニン主義の旗の下に結束し、足を踏みはずして隣の沼地に落ちこむことなく、密集した一団となってこの険しい困難な道を進んでいかねばならない。我々は、将来性のあるもの、ためにこそ、長い困難な活動を続けなければならぬ。「社会民主主義派(共産主義者)の目的が全人類の生活条件を根本的に改造することであり従って社会民主主義者(共産主義者)が、仕事なが長びくという問題を『気に病む』ことは許されない」(『なにをなすべきか?』)のである。

3, 緊要の諸任務

革命運動はこの二年間、激しい動揺・分解・混乱と葛藤・胎動・勃興を経験してきた。旧来の路線・質・運動を固守しようとした部分は、固守しようとするればするほ

ど、自己の思想的・組織的傾向を曝き出し、純化し、内的な空洞化と退廃を深め、古壁が崩れ落ちるよう加速度的に腐朽し、瓦解していった。それは今や頂点に達しているかの如くである。新しい胎動・勃興は、かつて革命運動の最先頭・要にあり、それ故最初に分解と混乱に踏み込んでいった部分と、それに自己の六九年の敗北と以後の苦闘を重ね合わせていった部分の中から生まれ、漸くかすかに結晶した姿を現わし始めている。だが、それは旧い部分の腐朽・腐敗・瓦解の腐臭の中で、そのあらゆる汚濁・弱点を全身に浴び、それと闘わねばならないと同時に、自身が引きついでいる過去の弱点・諸傾向(それがかつてと反対の表現をとって現われるとしても)とも闘わねばならない。それだけに当然にも、不可避的に多くの混乱・混沌・偏向を伴ってきたし、今もなお伴っている。この意味で革命運動は瓦解していくものと、生まれ出ようとするものとの間で、二重の混乱・混沌・動揺を経験してきたし、現にしている。新たに胎動し、勃興する部分はこの二重性と二重に闘わなければならない。瓦解し、脱ぎ捨てられていく混乱・混沌・動揺と闘うことは比較的たやすい。だが未来へ生まれ出るものの混乱・混沌・偏向と闘うことこそが、真の試練である。そして後者の闘いと克服なしには、本当の前者の闘い・克服もありえない。両者は結局のところ共通根、即ち、六〇年代の我々の運動の小ブルジョア性や諸々の弱点に根ざしているのだから。この二重の闘いを組織することによ

って、この未だ萌芽にある新しい、胎動し、勃興する力に、「自分自身の個性をつくりあげ、定型を与えねばならない。今、過渡期が一つの終局に近づきつつあることは深く意識されている。直接には支配階級・敵権力の攻撃と、旧い運動・潮流の分解・混乱・腐朽・瓦解。退廃が頂点に達しつつあることによってもたらされている。これは、成長の病いが昂じて危機となる危険をもたらしている。他方、新たに胎動し、勃興する力も、この一年間の武装闘争が登りつめた秋の三里塚闘争と沖繩闘争との対比のうちに、その主体的飛躍・過渡期の克服・新たな段階への移行を要求し、意識しつつある。我々はこれに全力を傾注せねばならない。新たに胎動し、勃興する力を、あらゆる面で打ち鍛え、その混乱・混沌・偏向を克服し、政治的・組織的定型を獲得し、その個性をつくりあげていく基礎を確立し、確たる潮流へ高めねばならない。これは緊急を要する課題である。これは我々の十数年の運動における最大の試練であり、我々の運動が、真に共産主義的プロレタリアの革命運動として、将来性のあるものとして成長してゆくための、最初の決定的試練である。我々は今こそ最大の精力、最大限の意識性を集中し、この試練・この煉獄を通して、灼熱の革命的労働者党の基礎を築かねばならない。我々はこの闘い、最良の革命家の勢力と最良のカードルの勢力との固い結合・結束として闘い取らねばならない。我々の十数年の運動の中から生まれ出、多年にわたって試練を経、訓練

され、経験を積み、とくにこの数年間の試練によって打ち鍛えられ、その苦闘によって真に革命家へと成長し、最良のカードル達の中に権威と信頼をえつつある、数少ない——そうだ、我々の未熟な革命家社会は、このようになんたを未だ決して多く生み出しえはしない——最良の革命家の勢力と、この数年間の運動、とくにこの二年間の困難な闘いによって成長し、訓練され、打ち鍛えられた最良のカードルの勢力——これもまた、この二年間の混乱や瓦解のために決して多くはないが、しかしそれだけに、この混乱や瓦解の中で、必死に、頑強に武装闘争と非合法活動を実践してきた部分、あるいは頑強に、堅忍さをもって大衆闘争を組織し、その先頭で闘いを切り拓き、真剣に実践と理論を点検し、革命運動の発展を模索してきた部分、この両者の堅忍不拔の共産主義者へと打ち鍛え、訓練してきたカードルの勢力は、たとえ目立った存在ではなくても必らず成長しつつある——との固い結合・結束、この結束と、その質・内容・形態のうちに革命運動の未来がかかっている。それは必らず、この二年間の武装闘争と大衆闘争の、更に両者を貫く革命運動の実践と経験を厳しく点検し、総括し、教訓化し、その普遍化を綱領・組織・戦術の全体性において打ち鍛え定型化していくものとして獲得しなければならぬ。それを七二年前半期の連続する包括的な激しい闘いの中で打ち鍛え、過渡期を止揚しつつし、新たな大道についていかねばならない。これが我々の緊要の任務である。

この固い結束を固く取っていくために、我々が掲げねばならない任務・基本点は何か。第一は、我々の運動の中のあらゆる小ブルジョア性と闘い、徹底的に克服し、我々の運動の中に共産主義的プロレタリア的な堅固さ・確固さ・頑強さを確保することである。第二は、共産主義とプロレタリア運動の堅固な結合に力を注ぐことである。武装闘争と大衆路線を結合することはその主要な内容である。これ（共産主義とプロレタリア運動の結合に力を注ぐこと）は別の面から言えば、「敵の要塞の正規の攻囲」を組織するよう要求すること、言い換えればプロレタリアートの革命的な中核・常備軍を集め、組織し、動員することに全力を注ぐように要求することである。第三は、手工業性・分散性・サークル性を克服し、我々の活動の種々の形態の間に厳密な分業をおこなうことができるほどに強大な組織を育成すること、堅忍不拔の共産主義者の、堅固な全国的戦闘組織、軍事をその内部にリアルに技術として準備し、組織する、中央集権的な確固たる組織性と規律性をもった全国的戦闘組織の建設。非合法党組織の建設に着手することである。そして、以上の集約・結論・要として、第四に、堅固な革命家の組織を建設すること、綱領的な革命的政治・革命的戦術に首尾一貫して系統化される活動、厳格な秘密活動、堅固な中央集権の組織性と規律を組織する堅固な革命家の組織、包括的な政治的宣伝活動と、組織工作活動と、軍事活動と、秘密業務の諸活動の一切の糸をその手に集

中し、統率し、組織的に系統づけ、組織系列をつくりだしていく堅固な革命家の組織を建設すること、訓練を経、職業的に訓練され、多年の修業によって訓練を積み、互いにみごとな協調をとり、完全な同志的信頼によって結束した指導者の組織、確固たる、継承性をもった指導者の組織、徹底した分業を行ない、職業的に訓練されたあらゆる兵種の革命家をもち、すぐれた秘密機構をもった革命家の組織を建設することである。綱領の獲得はこの一環である。

政治―組織―活動、綱領―組織―戦術の全般にわたる意識性・組織性・計画性・系統性を、このような権威ある堅固な革命家の組織として確立すること、これが「めざめつゝあるプロレタリアートの全勢力と日本の革命家の全勢力とを結合して、日本における生命あるもの、誠実なもの全てを引き寄せる単一の党とする」ための焦眉の課題であり、一切の核心である。最良の革命家の勢力と、最良のカードルの勢力は、固く結束してこの組織をつくりあげねばならない。（言うまでもなく、このような組織は少人数からなる厳格な、秘密の、狭い組織である。だからこそ、それは訓練を経、訓練され、経験と修練を積み、完全な同志的信頼によって結束した革命家の組織、最良のカードルの中に権威と信頼をかちうる革命家の組織でなければならぬ。）

第一の小ブルジョア性の病いと闘い、それを徹底的に克服することは、今日の退廃的な内ゲバの激化、蔓延し

つゝある思想的・政治的無原則性・無思想性や、動揺と瓦解の激しさ、投機主義や利那主義の横行の下では、緊急の絶対的な前提である。腐臭を放ちつゝある小ブルジョア性の病から我々の運動を洗い清めることなしに、新たな前進はありえない。私はこれまでの中で、我々の運動に根深くつきまとっている小ブルジョア性、その歴史的根拠についてたびたびふれてきた。また、次章で、その社会的・政治的基礎を一層深く分析するだろう。こゝでは、この小ブルジョア性は、思想や理論の面にも、政治的傾向やその狭さにも、組織の性格・組織性・規律の面にも、日々の活動態度にも現われていることを指摘しておこう。だから我々は、それと思想・理論や政治的傾向の面において頑強に闘うと同時に、それを、組織や日々の活動態度において、組織性・規律性・頑強さ・堅固さ・プロレタリアの気風・自己批判と自己教育の謙虚さを培い、打ち鍛えることと結合しなければならぬ。献身性・自己犠牲・英雄主義は日々のあらゆる活動において打ち鍛えられねばならない。また、我々もつゝ真剣にマルクス・レーニン主義を繰り返して学び、それを実践と結びつけ、それによって実践を点検しなければならぬ。（とくに思想態度・活動態度・組織生活・作風については、毛沢東思想に深く学ばねばならない。）我々は不断にあらゆる面で自己を訓練し、教育し、点検し、打ち鍛えることを学ばねばならないのだ。その独自の思想闘争―組織闘争を意識的に行なうこと、それが組織を

形造り、点検し、内的に強化する。かくして我々は、堅忍不拔の共産主義者へと自らを高め、訓練し、組織し、固く結束した共産主義者の堅固な戦闘組織を建設していきうのだ。私はこのように書く時、六〇年代の我々の運動を恥づかしさをもって想起せざるをえない。それは一面では大胆さ・勇敢さ・英雄主義をもっていたが、自己を訓練し、教育し、点検し、打ち鍛えていく、頑強な。粘り強い独自の思想闘争―組織闘争を殆んど持ち合わせる事ができなかった。だから、自然発生的戦闘性や動揺性・非系統性や気分による左右・分散性・ひとりよがり、また官僚主義を免れることができなかった。それは、理論の面にも、政治方針の面にも、組織の面にも、日々の活動態度の面にも現われていた。この組織の自然成長性が、階級闘争の激化とともに耐えられなくなり、一つの決議・決定、一つの方針・指令のみでは解決されえなくなつたのである。一つの決議・決定、方針・指令が、日々の粘り強い独自の思想闘争―組織闘争に裏付けられねばならないのだ。その欠除は、必らず一方で官僚主義・家父長制、他方で個人の決意主義と無政府的な自由分散主義をもたらす。それともう一つ、我々は党派の青年学生政治組織―活動家組織が、即前衛であるとかあるいは自然成長的に前衛になりうるかのような幻想（無意識的なものにせよ）を払拭しなければならぬ。とくに六〇年代では、党派そのものがこれらの指導サークルの連合体にすぎず、これが党派の実体をなしたため、党

派性とこの組織・先進的活動家の自然発生的気分や戦闘性・動揺とが結合し、革命運動としての独自の組織的訓練が自覚されないという状態をもたらし、党派そのものが自然発生的戦闘性に拜跪していたのである。(典型、中核派の無思想性) このような青年学生政治組織は先進的活動家組織は、革命運動の観点からみれば必要な準備期間・訓練期間にすぎない。だからこそ、日常の実践活動とともに、この準備・訓練に力を注ぐことが必要なのだ。(ところで今では党派ごとのこのような組織は無意味である。それは党建設の任務を曖昧にし、低め、党派性を低次元に終始させ、従ってセクト主義をばひこらせる温床となっている。必要なのはもっと広い大衆的活動家組織、大衆的闘争組織である。各派の青年―学生同盟はこれと同じ水準で、これをセクト的に分立したものにすぎない。) この小ブルジョア性の病とその克服が、かくも絶頂に達し、緊切の課題となっているのは、根本的には階級矛盾の激化・階級闘争の階級的深化・前進に規定されている。すでに六九年の全共闘―沖繩闘争が、プロレタリア社会主義革命を要求する最初の革命的な大衆闘争として登場した時、この問題は突き出されたのだ。全共闘の波は各党派を呑み込み、全勤労人民の同盟・その一部隊へと導きうる、確固たるプロレタリア隊列の確立を要求した。だが、呑み込まれた各党派は、全共闘には含まれた濃厚な種々の小ブルジョアの傾向と融着するか、単純反撥するかで、それと内在的に闘い、克服

し、プロレタリア隊列を確立することができなかった。かくして全共闘の解体と革命運動の混乱が二重に始まった。過渡期はそこから、プロレタリア社会主義革命の主体・唯一の真に革命的階級へ到達することであった。この過渡期は、三里塚―沖繩闘争によって担われた。私は前に、三里塚の農民が、「商品経済・資本主義社会と完全に手を切り、小土地所有者・小商品生産者としての自己の一面を克服し、プロレタリアートの立場に移行する」闘いを、どのように頑強に、深く、全面的に進めていったかについて述べた。現実の闘いがそこまで進んでいる以上、小ブルジョア性は完全に極枯となり、危機に頻し、小ブルジョアの流派は危機とあがきの中でその本質を明らかにし、腐臭を放つ退廃を進め、自らを純化していかにざるをえないのだ。まさにこれから、第二の任務・共産主義とプロレタリア運動の結合に力を注ぐことが生じる。我々は今、革命運動としても、階級闘争としても、この結合に力を注がねばならないし、また真にこの結合を問題にしうる地点に達している。この結合は始まってまだ間もなく、まだ弱々しく、細い糸でつながっているにすぎない。ブルジョアジーはこの結合をたち切ろうと、あらゆる側面から陰に攻撃を組織している。六九年―七一年の闘いは、この結合に向って突き進み、それを要求している。我々はこの結合を一層強め、打ち固めねばならない。「労働運動と社会主義とが互いに別々に存在し、それぞれ別個の道を歩んだ時期が全ての国

にあった。――そしてこのような分離は、全ての国で社会主義と労働運動を弱める結果になった。労働運動と社会主義との結合だけが、全ての国で、前者のためにも、後者のためにも、堅固な基礎をつくり出した。(レーニン『我々の運動の緊要な諸任務』) だが、この結合がまだ始まったばかりであり、この結合のための我々の精力的な意識的活動・努力がまだ圧倒的に不足しているその時に、インテリゲンチヤや学生活動家の間では、プロレタリアートへの不信、大衆的労働運動への不信が叫ばれ、「その成果や、革命的力の形成と発揮が、いつともしれぬ遠い将来のために」長期にわたる活動に力を注ぐよりも、「今すぐ小グループによって政府に対する突撃を開始し、その戦闘の一つ一つの閃光によってプロレタリアートを刺激しなければならぬ」といった主張が叫ばれた。革命的気分と自己犠牲的な英雄主義をもった人々の多くがこれにひかれていく他方では、労働運動との結合は経済主義的・組合主義的の流派によって主張されてきた。だが前者はプロレタリアートが自らを革命主体として意識的・組織的に打ち鍛え、訓練し、教育することなしに解放を闘い取ることができないということを無視する点で、後者は共産主義との結合に力をおかずプロレタリアートの政治的独自性を失い、他の諸党の後尾とならせる点で、いずれも「労働者階級の解放は、労働者自身の事業でなければならぬ」という偉大な教訓にそむくことになる。「労働者階級の組合主義的政治と

は、他ならぬ労働者階級のブルジョア的政治」であり、それは「とりもなおさず、労働運動をブルジョア民主主義の道具にかえる地盤を準備する」(『なにをなすべきか?』)ということ、現に戦後二〇数年にわたってそれに影響され、染めあげられ、ブルジョア民主主義の道具にかえられてきたことを理解しなければならぬ。それと闘い、克服するには、たゞ共産主義・共産主義政治と労働運動・プロレタリア運動との結合を強めること、これを頑強に追求する以外にはない。「この結合をつくりあげる過程は、非常に困難な過程であって、この過程がさまざまの動揺や疑惑を伴ったからといって、何もとくに驚くにはあたらない。」(『緊要な諸任務』) 我々はこの結合にもっと精力的な意識的努力を注ぎ、「労働者階級の政治的発達と政治的組織化をたすけ」(前掲文)労働者階級を帝国主義に対する全人民的政治闘争の先進闘士、プロレタリア社会主義革命の主体へと高めていかねばならない。我々は、労働者階級の中に、精力的に、頑強に、粘り強く、系統的に全面的政治暴露を、包括的な政治的宣伝煽動を組織し、持ち込み、全人民的政治闘争を組織し、「個々の譲歩の要求を、帝国主義に反対する革命的労働者党の系統的な不退転の闘争に高めるために」力を注ぎ、労働者階級の革命の中核を組織し、打ち鍛え、共産主義者の強固な革命的組織・確固たる戦闘組織を建設していかなばならない。(ここで言う全面的政治暴露・全人民的政治闘争を、六〇年代の個々の政策阻

止闘争とその自然成長としてのそれ、狭い反政府的なそれと解してはならない。全社会に階級関係、国際政治と国内政治の全体を包括する真に全面的な政治暴露であり権力—政府をめぐる闘争としての全人民的政治闘争である。まさにこの意味で、綱領が実践的要求になっているのである。私はこれについて後に述べるであろう。それともう一つ、「このような暴露—全面的な政治的暴露—による以外には、大衆の政治的意識と革命的積極性とを培養することはできない。だからこの種の活動は、国際社会民主主義派の最も重要な機能の一つをなすものである。」「こうした全面的な政治的暴露こそ、大衆の革命的積極性を培養するに必要な、基本的な条件である。」（『なにをなすべきか？』）を否定することは、ブルジョアイデオロギーへの屈服を意味するであろう。我々の運動は未だ「煽動によって提起される一切の問題が、故意のものか故意のものでないかを問わず、マルクス主義の少しの歪曲をも大目にみない、一貫した共産主義的精神にたつて解明される」全面的政治暴露を組織した経験をもっていない。「労働者に自然発生的に最も多く押しつけられてくる、最も普及している、そして絶えず多種多様な形で復活しているブルジョアイデオロギー」との闘争は、圧倒的に不足している。言うまでもなく、この闘いは、いわゆる「イデオロギー闘争」ではなく、レーニンが『なにをなすべきか？』第三章、ハ、「政治的暴露」で、「もし労働者が、専横と抑圧……と、切り離せ

ないように結びついているからである。」と述べている内容である。レーニンの経済闘争の外部から、労働者と雇い主との関係の圏外から、階級的・政治的意識をもたらずということが全く歪曲されて理解され、実践されたり、批判されたりし、経済主義が温存されているが故に我々ももっと深く学ばねばならない。」

共産主義と労働運動・プロレタリア運動の結合に関して、私は、次の諸点に注意を喚起しておきたい。一つは大衆の中の真剣な、粘り強い革命的諸活動である。大衆の全生活と実践・闘いこそが、あらゆるものの源泉であり、我々もまたそこから学び、我々の力の源泉を汲み取らねばならないこと、我々の政治上の方針や戦術は、結局のところ大衆の中でこそ点検・検証されるのであり我々は大衆の中でこそ自己を点検しなければならぬこと、現代の全社会に政治制度の本質や諸側面について、我々が理解するだけではたりない、大衆が自らの政治経験と政治暴露や理論闘争によって理解するようにしなければならぬ、そのように導くことができこそ、我々の理解も真の理解になることができること、革命的情勢が現存しないときに、未だ決起していない大衆の中で、真に革命的諸活動を組織し、持続し、「大衆の中に眠っている革命的勢力を呼びさます」べく頑強に活動すること、「あらゆる活動分野に党細胞をつくり」、「ありとあらゆる状態の下で自分の党的方針を遂行」し、「あらゆる半合法組織と、できるだけ合法組織とを利用」し、

「大衆との緊密な結びつきをたも」ち、細胞を「大衆の中での煽動・宣伝活動及び実践に組織活動の拠点」とすること（レーニン『大道へ』）が、我々の組織・運動の全基礎を打ち鍛えることである。（六〇年代の小ブルジョアの主な観主義、ひとりよがり、あるいはその裏側の自然発生性への拝跪を克服すること。）二つは、農民の中でも、学生の中でも、その他全ての被抑圧・被搾取階層の中でも、この共産主義と労働運動・プロレタリア運動の結合の観点から活動し、闘いを組織することである。全共闘運動が、三里塚闘争が、社会主義革命の全労働人民の同盟を要求し、その一部隊へと自己を打ち鍛え確固たるプロレタリア隊列を要求しているが故に、是否ともそうでなければならぬ。また、共産主義と労働運動・プロレタリア運動の結合は、このような社会に政治的総体性をもって実現されるのである。何故なら、労働者の社会生活の全体・全舞台とは、現代の資本主義社会・社会関係の全体であり、まさにこの全体をプロレタリアートの階級闘争として組織し、指導することなしに、社会主義革命はないからである。（同盟・連合・中立・敵対の諸形態をとって、全社会勢力が、プロレタリア陣営とブルジョア陣営に分裂し、闘うのである以上、どの被抑圧階層の中でも、プロレタリア陣営を強化しなければならぬ。それは共産主義とプロレタリア運動の結合の観点のみからなされる。—綱領の問題）三つは、労働者の組織と革命家の組織、階級的諸組織と党組織につ

いてである。我々は今、共産主義運動・革命運動が新たな生成・生み直しにあると同時に、労働運動・プロレタリア運動もまた新たな生成・生み直しにあるという時期に際会している。それはまさしくプロレタリア社会主義革命の一時代としてのそれである。（私は後にこの問題に詳しくふれる予定である。）だから今日、労働者の組織・階級的諸組織は、諸闘争組織・諸サークルから、戦闘的左派組合に到るまで様々に形造られ、拡大し、種々の政治—経済闘争に増々多くの人々を引き入れつつある。またその中で訓練されたカードルを生み出しつつある。だがしかし、これらの組織の戦闘性や力によって、革命的組織・革命家の組織に対する意識を曖昧にし、曇らせることは、自然発生性への拝跪であるだろう。「このようなサークル、組合、組織は、到る所に、極めて多数に、また極めて多種多様の機能をもつものがなければならぬ。しかし、それらを革命家の組織と混同して、この両者の間の境界を抹消するのは、また大衆運動に『奉仕する』ためには専門的に社会民主主義的（共産主義的）活動に全身をささげた人々が必要で、そういう人々は、忍耐と頑張りとを發揮して職業革命家に自分を育てあげなければならぬのだという意識——そうでなくとも信じられないほどぼんやりしてしまっている意識——を大衆の間から消滅させるのは、ばかげた、有害なことである。」（『なにをなすべきか？』）「これらの組織が広汎であればあるほど、それに対する我々の影響も一

層広汎になり、またそれは「経済闘争を發展させ、強めるうえに大いに役立つことができるだけでなく、また政治的煽動と革命的組織とのためにも極めて重要な補助者となることができる」(前掲文)からこそ、敵格な、強固な革命的組織・革命家の組織の建設に力を注がねばならない。我々もまた「兩者(労働者の組織と共産主義的組織)の結合はできるだけ緊密であり、できるだけ複雑でないものでなければならぬ」と考へるが、我々の下でも一見したところ歴史的な諸潮流の關係が「共産主義的組織と労働者団体の間のあらゆる差異を消し去っているかのようである」(前同)そして、こゝから手工業性が生まれてくる。我々は、敵格な、強固な革命的組織を建設し、先進的共産主義的労働者を労働者革命家へと養成し、訓練し、「たゞ夜分のひまな時間だけでなく、自分の全生活を革命にさゝげる人々を養成し」(『緊要な諸任務』)「能力のすぐれたあらゆる労働者をたすけて、職業的な煽動家・組織者・宣伝家・配布者(更に軍事活動家・技術員)などにならせ」なければならぬ。「我々が、専門的訓練を受け、永年の修業を経た労働者革命家達(そのうえ、もちろん「あらゆる兵種の」革命家達)の部隊をもつ時には、世界のどんな政治警察も、この部隊には齒がたゝない。なぜなら、無条件に革命に身をさゝげた人々からなるこの部隊は、最も広汎な労働者大衆の同じように無条件な信頼をうけるだろうからである。」(『なにをなすべきか?』)かくして我

々は確固たる革命家の組織をしつかりと打ちたて、運動全体に確固さを保証し、堅忍不拔のカードルを育てあげ訓練し、労働者の組織をも打ち鍛え、共産主義的な労働運動の確立と發展をなしとげるだろう。そうして、プロレタリアートの革命的な組織を組織し、動員し、打ち鍛えていくだろう。三つはまさにこのようにして堅忍不拔の頑強な闘いによって「敵の要塞の正規の攻囲」を組織し常備軍を集め、組織し、動員していくのである。だからこそ、我々は何よりも大衆の攻撃を組織し、それを革命的攻撃へと高めていくべく全力を尽さねばならず、武装闘争と大衆路線を結合しなければならぬ。それによつてこそ、以上の組織系列は強化され、打ち鍛えられるだろうし、以上のような組織系列を保持している限り、一時の敗北を恐れる必要もなく、敗北の経験に教えられ、闘争経験によつて一層大規模な、一層強力な攻撃を準備していくことができるだろうからである。以上の組織系列をもつて大衆的攻撃を頑強に組織し、武装闘争と大衆路線を結合すること、それが「敵の要塞の正規の攻囲」を組織し、常備軍を集め、組織し、動員することである。我々は多少とも強力な爆発と、多少とも深い沈静をいくたびかくりかえしつゝ、大衆闘争のあらゆるくり返しと迂余曲折に悲嘆や面倒を感じることなく、主観的とびこえを求めることなく、うむことなく、いとうことなく、この方向を頑強におし進め、経験をくり返せばそれだけ一層広く、深く、強力な力を打ち鍛え、培い、全人民の

武装蜂起を準備し、指定し、実行し、その勝利を闘い取つていくであらう。

最後に、革命家の組織についてももう少しふれておかねばならない。何故なら、サークル性・手工業性・分散性・非系統性・非計画性を克服し、非合法党組織を強化し「我々の活動の種々の形態の間に敵密な分業を行なうことができるほどに強大な組織を育成」する中心環こそ、革命家の組織に他ならないからである。たゞそれだけが、「政治闘争に精力と確固さと継承性を保証」し、革命運動の確固たる継承性を確保し、「堅忍不拔な、頑強な闘争によつてプロレタリアートを教育」し、プロレタリアートの先進分子を結合し、革命運動の訓練されたカードルを育成し、訓練し、打ち鍛え、「確固たる共産主義的政治を行ない、いわばあらゆる革命的本能と志向とを満足させる中央集権化された戦闘組織」を建設し、「運動を軽率な攻撃から予防し、勝算ある攻撃を準備することが出来る。」我々の運動は長い間、この革命家の組織の建設を真に実践的に上せることができなかった。また真剣に意識することさえ殆んどなかった。まさにその点では、我々は戦前の革命運動より、更には戦後一時期のそれより大きく立ち遅れており、そういう伝統と断絶した位置にあった。そしてまさにそれが我々の運動の手工業性・分散的な細分化・非系統性をもたらし、革命家の威信を失墜させてきたのである。革命家が、学者や、運動活動家・部分活動家と融合し、変わらなくなつてき

たのである。これはまた、我々の「革命的活動全体の規模が狭いこと、このような狭い活動にもとづいてはすぐれた革命家の組織が形造られるはずがない。」ということにも規定されていた。だが六九年來(六八年末以來)、我々の運動は革命的活動の規模の広がりを要求し、事実運動の機能の細分は自然発生的に進んでいった。我々は一層専門化を進めねばならない。「原始的サークルの原始的民主主義」では、近代の軍隊に棒切でもつて立ち向うようなものである。「専門化がたりないことは、我々の技術の最大の欠陥の一つ」である。「共同事業の個々の『作業』が細かくなればなるほど、この作業を果す能力のある(そして大多数の場合、職業革命家となるには全く適していない)人物を増々多く発見できるし、警察がこれらの『部分活動家』全部を『とらえつくす』ことは増々困難になり、なにか些細なことでも人をつかまえては『事件』にでつちあげることが増々困難になるであらう。」しかし、他方から言えば、「これらの小さい細片を全部一つにまとめるためにも、また運動の機能を細分しながらも、この運動そのものは細分しないようにするために、更に細かい機能の執行にあたる人々に自分の仕事の必要性和意義とに対する信念——そういう信念がなければ彼らは決して仕事をしないだろう——をいだかせるためにも——全てこうしたことのために、他ならぬ訓練を経た革命家の強固な組織が必要なのである。こ

ど、党の力に対する信念は増々強まり、増々広汎に広まるであろう。「一言でいえば、専門化は必然的に集中化を前提し、また逆に専門化によって集中化が絶対の必要になるのである。」（『なにをなすべきか？』）我々にとっても事情は今や全く同じである。我々はレーニンとともに、「我々の運動がおかれている臨界状態・過渡的な状態」を次のように言うことができる。「人がいない、しかも人はたくさんいる、と。人はたくさんいるというのは、労働者階級も、また増々多種多様な社会層も、不満をもつ人々、抗議したいと望む人々、絶対主義（帝国主義）との闘争に応分の援助を与える用意のある人々を、年毎に増々数多く生み出してくるからである。まだ誰も彼もが絶対主義（帝国主義）をがまんできないものであると意識するまでにはなっていないが、しかし増々広汎な大衆は増々痛切にそう感じるようになっていく。また、それと同時に、人がいないというのは、指導者がいなく、政治的首領がいなく、また、どんなにわずかな勢力でもあらゆる勢力に働かざるを得ないような、広汎であると同時に統一された、整然たる活動を組織することのできる、才能ある組織者がいないからである。」まさに我々の運動は試練を経た革命家の組織・固く結束した強固な革命家の組織の建設を緊急の課題に上せている。すでにこの課題は六八年一〇・二一闘争後に意識され始め、六九年四・二八闘争と破防法を経験した後は緊切の課題となった。赤軍派フラクの形成は、この課題

にこたえようとするものであり、フラクは固く結束した強固な革命家の組織の建設、ブンドのボルシェヴィキ化を自己の任務として登場した。それは六七年一〇・八闘争から七回大会、六八年一〇・二一闘争を牽引したブンド左派の、その後の挫折、解体を党的に克服、止揚しようとするものであった。だが、党的克服・止揚をめざして強固な革命家の組織の建設に立ち向おうとしたこのフラクが、遂に一〇・二一闘争後の左派の挫折・解体と、その後の建党活動・組織活動・党内闘争を総括することができず、その全体性をもって統一し、固い結束を勝ち取ることができず、四・二八闘争の経験とその総括をもって出発した時、このフラクの限界性は決定づけられた。四・二八闘争の経験は強固な革命家の組織の建設を要求した。フラクはこの課題にこたえるべく形成された。だが、このフラクが強固な革命家の組織の建設のために基礎においたのは、四・二八闘争の総括であった。いかにして、何を基礎にして強固な革命家の組織を建設するかは遂に導き出されなかった。それには六八年一〇・二一と四・二八の建党活動・組織活動・党内闘争・綱領論争・闘争指導etcの全体的総括が必要だったのであり、このフラクはこの全体的総括を導くことに失敗したのであった。かくて形成されたフラクは、四・二八闘争の経験からして、厳格さと強固さを要求し、事実追求したが、それは本質的に六八年一〇・二一闘争の左派フラクと同じであった。（その政治の広さ、組織活動の規模と系統

性、結束の思想的・政治的深さ等）だからこのフラクの存立根拠は不可避的に秋の戦術へと取れんした。ところで、強固な革命家の組織、中央集権的な革命家の戦闘組織に照応する戦術は何か。それは革命的戦術II蜂起である。この革命的戦術II蜂起に、全ての闘い、全ての活動、全ての戦術を体系化するには、この革命家の組織が必要不可欠なのである。この組織によってのみなされる。だがこのフラクは、四・二八闘争の総括をこの組織の建設の唯一の基礎にすえたが故に、不可避的に転倒して問題を提出した。即ち、蜂起によって強固な革命家の組織は建設されると。あるいは秋の戦術がフラクの存立根拠、この強固な革命家の組織を建設していく唯一の方法・手段となり、従って強固な革命家の組織を建設するには秋の蜂起を掲げ、一切をそれへの技術的集中として提起せざるをえなくなったのである。そうすることによって四・二八秋の情勢の自然発生性に押随してしまっただの。「注1」それがどんなに「革命的」な戦闘性であったとしても。

これの挫折は必然である。また、そのゲリラ主義への転換も必然である。そしてこの自然発生的戦闘性の狭さと一面性・戦術の観念性・組織の自然成長性・直接性は究極のところテロリズムへ到るのである。（注2）人民の意志派、人民の自由派、左翼エス・エルである。（六九年前段階蜂起とは、一個の「トカチョーフの権力奪取の試み」であった。）ボルシェヴィズムはその止揚

の彼方に生まれ出る。我々は今、そこに全力を注がねばならない。それは六九年の赤軍派フラクの転倒を、再転倒することである。あの自然発生性を目的意識性の側から止揚することである。それがつくり出した、厳格な組織・規律、厳格な秘密活動、成員の厳格な選択、職業革命家の訓練、「組織、規律、秘密活動の技術を最高度に完成させる」こと、すぐれた秘密機構と徹底した分業etcを継承して。我々は強固な革命家の組織を「綱領―組織―戦術」の全体性をもって建設しなければならぬ。この全体において固く結束した中央集権的な革命家の組織を建設しなければならぬ。綱領的見地からする全面的政治暴露。包括的な政治的宣伝。煽動を組織し、都市の各地区・各工場街・各学校に対して真に信頼しうる指導者部隊を選抜し、組織し、任命し、概略の計画を作成し、厳格な秘密な軍事活動を組織し、かつそれを大衆闘争と有効に結びつけ、秘密業務の諸活動を組織し、すぐれた秘密機構と、この分野で利用しうる党の協力者の網の目をつくりあげ、これら全ての活動の糸を自己の手中に集中する、厳格な革命家の組織、必然的に秘密的で、（組織の範囲が）狭くなる以外にない、職業的に訓練された、職業革命家の組織、確固たる共産主義的政治を行ない、あらゆる革命の本能と志向を満足させる、権威ある革命家の組織を建設しなければならぬ。それこそが確固たる非合法党組織を組織し、強化し、頑強な非合法活動と合法―半合法活動を結合し、非合法組織と合法組

織との結合を可能にするであろう。あらゆる活動分野でのカールドルの育成・訓練・党細胞の建設を可能にするであろう。

私は第Ⅱ部以下で、綱領―戦略・戦術―組織について述べるつもりである。革命家の組織自身、この基礎にもとづいて打ち建てられねばならないのだ。情勢のあらゆる局面に対応しつゝ、決してその自然発生性に拝跪することなく、それらを目標に向けて体系化され、計画された戦術として実現する意識性をもたねばならないからである。自己の戦闘性・革命的熱意・英雄主義・戦闘力を即自的に発揮するのではなく、即ち、自分自身の自然発生性に拝跪するのではなく、それを目標・革命的戦術の実現に向けて頑強に組織し、訓練し、打ち鍛え、かつそれをプロレタリアートの革命的積極性・英雄主義・戦闘力を組織し、訓練し、打ち鍛える作業の中で遂行し、これと一体に融合しうる真に意識的組織的な革命的戦闘力へと高めねばならないからである。「爆発や市街戦だけを予定したり、あるいは『平凡な日常闘争の漸進的な歩み』だけを予定して党組織を建設する」のではなく、「最も強力な爆発の時期にも、最も完全な沈静の時期にも同様に」基本的活動を一貫して組織し、かつ各々の時期の特別な任務を決して忘れることなく、「あらゆる側面から今すぐ蜂起の準備を始めると同時に、自分の緊要な日常活動をたゞの一瞬間も忘れない」最も意識的な活動を計画し、組織しなければならぬからである。

我々は、この最も緊要な任務に着手し、革命家の組織の建設に着手する時、レーニンとともに次のように言うことができるであろう。「我々の前面には敵の要塞がその全威力を擁してたちふさがっており、そこからは我々の上に雨あられと砲弾や銃丸が浴びせかけられ、わが最良の闘士達を奪い去っている。我々はこの要塞を奪取しなければならぬ。そしてもし我々がめざめつゝあるプロレタリアートの全勢力とロシア（日本）の革命家の全勢力とを結合して、ロシア（日本）における生命あるもの、誠実なもの全てを引き寄せる単一の党とするなら、我々はこの要塞を奪取するであろう。そしてその時初めて……次の偉大な予言が実現されるであろう。『幾百万の働く人民の筋骨たくましい腕は振りあげられ、兵士の銃剣（軍隊と警察の銃剣）にまもられた専制（帝国主義）のくびきは、木っ葉みじんに打ち砕かれるであろう！』」（『我々の運動の緊要な諸任務』）

単一の党！ さよう、この革命家の組織の建設は、我々の革命運動に全く新しい画期をなし、遂に新たな共産党建設への具体的な一歩、歴史的な一歩を踏み出すことなのだ。我々は新たな共産党を闘い取りかねばならない。その二つの柱は、共産主義とプロレタリア運動の結合と、強固な革命家の組織の建設である。

〈ゲリラ主義―現代エス・エル主義批判〉

のために（補足として）

〔注1〕

とすれば、六九年秋の闘いはどのような闘いであったのかという疑問がおこる。今では我々は次のように言うことができるであろう。それは、政府打倒を掲げた武装デモンストレーションであった。四・二八闘争よりも一層大規模で、一層よく組織され、一層強力な、一層高度な闘争手段をもった武装デモンストレーションであった。四・二八が初歩的武装デモンストレーションであったとすれば、その一層の、政治的・組織的・技術的高度化であった。「学生運動が激化した時、我々は学生を援助するよう労働者に呼びかけ始めたが……デモンストレーションが強固になった時、我々はその組織化を、大衆の武装を、呼びかけ始め、人民蜂起を準備する任務をかゝげた。暴力とテロルを決して否定せずに、我々は大衆の直接の参加を予定し、またこの参加を保証するよるような暴力の諸形態を準備する活動を要求した。」レーニンは一九〇一―〇二年についてこう述べている。我々にとってもこれ以上のもではなかった。事実、我々（赤軍派）の闘争計画も、我々が主観的にどう思おうとも、それはマルクス主義によって厳密に規定され、諸条件と

技術的準則が明らかにされる蜂起ではありえず、この武装デモンストレーションの最も精緻の部分も、最も強力に組織し、最も中心的な戦闘を、最も攻撃的に担おうとしたのである。××攻撃、××占拠という公然たるスローガン・スケジュールとしての設定は、その事を示していた。蜂起でありえないというのは、政治（階級）情勢―政治（階級）危機の成熟の度合・階級闘争の広さと深さ・諸勢力の相互関係からしてそうであるとともに、更にその最大の主体的要素たる、我々の、結集し、組織し持ち合わせる勢力の大きさ、その訓練の度合、政治的質大衆の支持と大衆への影響の深さの度合 e t c からしてそうであった。だが、武装デモンストレーションは易々と闘い取られるものではない。六九年秋のそれには、強固な革命的組織とそれによって強固に組織された精鋭部隊による全体の牽引を主軸に、諸党派間の一定の戦術協定・反戦・全共闘の部隊の一層深い、政治的にも組織的にも強固な組織化 e t c が必要であった。その最大の中心問題こそ、強固な革命的組織に他ならない。何故なら「武装市街戦への移行というような措置は『峻烈なもの』であり」、人民蜂起の問題を日程に上せ、その確固たる一貫した諸準備を要求するからであり、全活動をこの体系の下に組織しているような強固な革命的組織のみが、闘争参加者の動揺や尻込みや、あるいは誇大な幻想やその結果としての意気沮喪 e t c に影響されることなく、確固として武装デモンストレーションを組織し、指導し

うるのである。「さよう、蜂起である。たとえ遠い地方都市におこった、この一見ストライキ運動とみえた運動の始まりがどれほど『本物』の蜂起に遠いものであったにしても、その継続、その終局は、いやおうなしに、他ならぬ蜂起の思想に導きつゝある。」一見先進的学生の政府に対する勇敢な攻議とみえた六七年十・八羽田闘争として始まった運動は、二年間の継続によって、その終曲へ、蜂起の思想へ導いていったのだ。「蜂起が、単に革命家の頭脳や綱領のなかの観念（例えば、共産主義者同盟関西地方委機関誌『烽火』三号—一九六七年末—佐伯武論文、ブンド七回大会で採択された報告をみよ）としてだけではなく、また運動そのものの不可避的な、実践的、自然的な、つぎの一步として」登場し始めたのである。もともと、実践的に蜂起の思想に到達したのはその二年間、真にその最尖端で闘い続けてきた若干の前衛分子にすぎなかったのだが。

しかり、四・二八闘争の経験によって実践的に蜂起の思想に到達し、蜂起の問題をいつか遠い将来のものとしてではなく、実践的任務の問題として取りあげた若干の前衛分子こそ赤軍派であったのだ。だが、まさにそこからこそ、真の闘い、真の革命運動・組織化が始まるのだ。そこから「大衆に方向を示す能力をもった真の戦闘組織をつくりだすという任務」「頑強な堅忍不拔の闘争で、プロレタリアートを教育し、訓練するという任務」「広汎な大衆に革命的危機の準備をさせ、もつと高度の、そ

主体へ高めあげよと告げ知らせる「蜂起」であった。（ところでこれは旧来の闘争戦術による組織の自然成長と過程としての戦術が究極的に行きついた転倒である。だから自然発生的戦闘性に拝跪してしまい、それを思想的、政治的組織的、更に技術的に頑強に打ち鍛えることができなかった。だがそれなしには武装デモンストレーションもできなかったのだ。そして一度目は悲劇に終り二度目の七〇年秋蜂起という茶番は否定された。）

六九年秋の挫折した武装デモンストレーションの遺言は、七一年秋、三里塚で別の形態で執行された。（私は七〇年初、府中刑務所から一友人への手紙の中で、三里塚はその闘争内容からしても、地形的条件を生かしたゲリラ戦・機動隊殲滅が不可避となるであろうし、六九年秋の挫折はその任務を三里塚に遺言したかのようなであると述べたことがあった。）だが、沖繩闘争にあってはそれを組織しようとする部分も未だ登場しえなかった。

我々は、三里塚を継承・発展させるこの大衆的な強固な武装デモンストレーションを、及びそれと結合する強固な武装、バリケードをもったプロレタリアートの堅忍不拔の政治ストライキを組織するという困難な活動に力を注がねばならない。綱領—組織—戦術の全体に基いて確立される強固な革命的組織が、それだけが、いくたの経験によって訓練され、この任務を実行するであろう。この武装デモンストレーションは、それが組織されてい

してもつと具体的な課題を考慮にいれて、もつと真剣に準備させる長期間の活動」「より強力な革命勢力の新しいカードルを教育し養成する活動を、堅忍不拔に、辛抱強く遂行する」任務が登場し、「多少とも強力な爆発と多少とも深い沈静のいくたびかの交替」を通して、蜂起に登りつめなければならぬのである。武装デモンストレーションの始まりは、その明瞭な第一歩である。だからこそ、それは綱領—組織—戦術の全体を問題に上せる。この全体でもつて、現実の運動の巨大な一步として闘うと同時に、未来に蜂起から規定された戦術として闘わねばならないのだ。（綱領はこの一時期全体にわたって一貫した確固たる共産主義的政治を行なう指針である。レニンは「学生と政府との新しい格闘は、専制に敵対するあらゆる社会的勢力を動員するこの事業を速める可能性を、我々全てに与えており、またそうする義務を我々に負わせている。政治生活においては、戦時の数カ月は歴史によって数年として数えられる。そして我々が今際会している時期は、まさに戦時である。」と述べたそのさなかで、綱領討議を煮詰め、大衆の武装を呼びかけ、人民蜂起を準備する任務をかゝげ、党の統合に力を注いだのであった。）だから六九年秋の「蜂起」とは、言葉の真の意味での主観的蜂起であった。思想・観念としての「蜂起」、あるいは自己を蜂起の主体へ高めようという「蜂起」であり、また運動の全参加者に、蜂起の問題、蜂起の準備を実践的任務として取りあげよ、蜂起の

を内部にはらむであろう。それは特別の精鋭部隊、戦闘グループが、組織され、準備され、出動しなければならぬ。そこに強固な組織的武装が独自の任務としてあるのだ。

私はこゝでついでに、革命戦争と蜂起について簡単に整理しておきたい。我々の革命戦争は、被抑圧民族の帝国主義列強に対する民族革命戦争でも、プロレタリア国家の防衛革命戦争でもなく、ブルジョアジーに対するプロレタリアートの内戦である。この内戦として世界革命戦争の主要な一環であり、前二者と結合するであろう。

（この結合は、何よりもまず、国際的諸情勢と、日本における諸階級の相互関係との連関・そこから生まれる我々の政治的任務としてであり、軍事的には発展の諸段階によって異なるであろうし、その形態を予測することは無意味である。）この内戦を最も広い意味で規定すれば、階級闘争が合法性の枠を突破し、直接的な力と力の対決に到る段階、大衆闘争が武装し始める段階である。より狭く、厳密な意味で規定すれば、直接の蜂起の情勢・蜂起の技術的準備の完了—蜂起・革命政府の樹立—革命政府に組織された革命勢力による反革命の反抗の粉碎という戦いである。蜂起の勝利—権力奪取は、ブルジョアジーとの軍事的闘争の終了を意味するものでは決してない。搾取者は打ち破られることによってその反抗を死物狂いで強めるだろう。国際ブルジョアジーと結びついて。革命はその権力を利用して一層強力な軍事的手段

を組織し、この反抗を打ち砕く。それは国際的革命戦争に発展するだろう。それはまた徹底した社会革命の過程でもある。だが我々にとって今それが問題なのではありえない。我々は綱領の諸分野で一般的にその任務を提示しはするが、我々の当面の政治的任務はそこにはない。共産主義社会の実現に向けての我々の当面の政治的任務は、権力を闘い取ることであり、プロレタリアートの政治権力を獲得の闘争を指導することである。従って我々の当面の戦術目標は、この政治的任務を実現する闘い、全人民武装蜂起にある。プロレタリアートの社会革命の全要求はまずもって政治的には権力問題、戦術的にはこの蜂起を核心に打ち鍛えられねばならない。ブルジョア社会におけるプロレタリアートの階級闘争は、その全てがこの一点、この当面の目的の実現に向けて、結集され、結合され、訓練され、打ち鍛えられ、系統化されていかねばならない。またその点から、諸階級・諸勢力の相互関係と政治的諸要求・政治戦術が分析され、提起されねばならない。(綱領の具体的政治的任務は、この点に集中されない。もともと、綱領では戦術の最も本質的・原則的問題以外、例えば闘争手段の問題は取り扱われないが。)だから蜂起が革命そのものではない。「社会主義革命は一つの行動ではなく、一つの戦線にわたる一つの戦闘ではなく、激烈な階級的諸衝突の一時代であり、全戦線にわたる、即ち、経済及び政治上のあらゆる問題に関する長く続くいくたの戦闘であって、この戦闘はブルジョ

アジーの収奪としてのみ終りうるものである。」(レーニン『社会主義革命と民族自決権』)しかし、蜂起はこの革命の決定的戦闘であり、国家権力を一つの階級から他の階級(プロレタリアート)へ移行させることによって、言葉の厳密な意味で、社会主義革命を開始するのである。広い意味での内戦・革命戦争という時、その結節環・要にある戦闘こそ、この全人民武装蜂起に他ならない。それはあらゆる意味での優劣の逆転である。マルクス主義によって厳密に規定される蜂起とは、この権力奪取としての蜂起である。蜂起は革命的危機の絶頂で幾百万大衆の革命運動の高潮に依拠し、革命的な階級全体、またはその大多数に支持されたプロレタリアートの前衛が、敵を徹底的に攻撃し、打ち破り、武装解除し、味方を権力へと組織する戦闘であり、敵・味方の相互関係、諸階級の政治的・軍事的相互関係を、その結び目たる権力を一階級から他の階級へ移行させることによって根本的に変える決戦である。巨大な勝利か巨大な敗北かの戦闘である。(諸階級勢力の特異な関係、特異な局面とプロレタリアートの意識性と組織性の不足が、特異な二重権力状態をもたらすこともありうるが。)だから蜂起の情勢・時期・条件とその技術的準備は、マルクス主義によって厳格に規定されている。(エンゲルスの諸論文、レーニンの『マルクス主義と蜂起』等、トロツキの『蜂起の技術』等、グエンザップの『人民の戦争、人民の軍隊』第二章) 何度でも蜂起とか、蜂起を軽々

しく戦術方針として掲げるのは、階級闘争や蜂起についての真面目な考えではない。勿論、蜂起それ自身は、とくに全国的蜂起としてみる時、一定期間(ex・月単位)の連続的戦闘である。(緒戦の勝利が決定的に重要。及び全国的な勢になる戦闘の勝利。)最近の蜂起の主張はまた、蜂起主義批判は、多く蜂起を大衆運動主義・反政府主義的に、あるいはその裏返しとして陰謀主義的・一揆主義的に扱っている。この誤りは、階級闘争が本来力と力との荒々しい対決であることへの無自覚、蜂起の意義への無自覚と一体である。この蜂起の情勢・蜂起へ登りつめていく過程もまた激烈な階級闘争であり、「多少とも強力な爆発と多少とも深い沈静をいくたびかくり返し」つゝ、革命的昂揚・革命的危機を發展・深化していく過程である。これは決して単調な上向線ではありえない。激しい動揺・流動・飛躍・爆発・反動・沈静を伴い、くり返しつゝ、深まり、昂まっていく過程である。まさに全階級がその深部から揺り動かされ、動揺・分解・流動し、衝突を深めていく、階級的諸衝突の一時代である。激しい武装衝突から整然たる平和的行動に到る多種多様な闘争形態(種々の形態の武装闘争を含めて)をつくり出していく過程である。そのようなものとして、広い意味での革命戦争であり、動揺・危機・諸勢力の動員が最初は緩やかでも一定の時期に加速度的に發展し、飛躍していく。即ち、階級関係の量的変化が質的变化へ転化していくのであり、そうして権力問題が焦眉の課題になっ

ていく。(この決定的な質的变化・飛躍こそ蜂起であり、権力の階級移行なのだ。) この全過程の中心軸こそ、長期の頑強な堅忍不拔の闘いによってプロレタリアートの革命的な中核を結集し、組織し、動員し、訓練し、打ち鍛え、より広く、深く、強固に築いていくことであり、(その一環としての武装)、その政治的表現としての綱領であり、組織的要こそ全国的革命家の組織である。「論じなければならぬのは、まさに単一の全国的な革命家の組織のことであり、またそれについて論じるのは、紙上の突撃でなく、真実の突撃が始まるその瞬間まで遅すぎるといふことはない。」(『なにをなすべきか?』)我々がこの過程を今から予測したり、予め一つの闘争形態・一つの發展の型におし込めるのは全く無意味である。我々は堅忍不拔の共産主義者の強固な戦闘組織を建設し組織的武装を強化していくことを独自の任務としておし進めるとともに、それを大衆闘争の前進・發展の指導的力としていくことである。階級関係の量的変化を最も意識的に追求すると同時に、質的变化・飛躍の意識的力を築き、打ち鍛えていくことである。このような組織が、敵権力のあらゆる圧迫・攻撃にもかかわらず確固として保持され、革命的階級と緊密に結合しているならば、運動の根や糸は一層成長し、「一つ一つの戦闘が戦場から幾百の戦士を奪い去りながらも、一層憤激に燃えた、一層勇敢な、一層訓練された幾千の新しい闘士を生み出すような上向線」(レーニン『改良の時代』)を必ず迎

えるであろう。そしてそういう闘士たちは、「一担解放の息吹きを感じた以上、我々は政治的・経済的奴隷制に反対する闘争のためには懲役にいく覚悟がある」と、更には「我々は死地におもむく覚悟がある」(『新しい事件と古い問題』)とその自覚と決意を強めていくであろう。我々はこれを既に三里塚にみる事ができる。(もつとも、この発展過程には、やはり現代的な特徴を取り出すことができるであろう。それは階級闘争の世界的歴史的發展と、現代の国際的・国内的な社会II政治的諸関係の分析によってある程度与えられるであろう。私は後にそれについてふれる予定である。

〔注2〕

私は武装闘争の形態としてのゲリラ戦とその意義を過少評価するものではない。それは大衆的創意によって一層発展させられるだろうし、また、より確固たる組織・革命的組織によって一層強固なものとして、様々な形態で組織化されるであろう。しかし、階級闘争の闘争形態をゲリラ戦のみに限定することはできないし、またゲリラ戦が無条件的に有効な形態なのでもない。また、階級闘争の内容・戦術を闘争形態の側面でのみ把握するのは明らかに一面的である。階級闘争の内容を、技術II軍事的側面だけ取り出して抽象化して取り扱うなら、それは即座に観念論に陥るであろう。階級闘争は社会II経済的・政治的・思想II理論的内容の有機的全体としてあるのであり、だから我々は生産諸関係の分析と、政治的、イデ

的事手段や準則の発展は、政治II軍事に内包された一モメントとして規定され、政治II軍事の発展としてのみあるのであって、自立的に発展していくのではない。(ブルジョア軍事論はこれを見ることができない。毛沢東の戦争の戦略論は、中国の社会II政治関係における根拠地の問題と切り離して考えることはできない。そして根拠地は単なる軍事的意味としてあるのではなく、階級闘争の有機的全体としてあり、根拠地の内包する全中国的階級闘争の有機的全体の、全中国的展開・発展への媒介として遊撃戦とその運動戦への発展が規定されており、その客観的根拠が中国の社会II政治的諸関係・矛盾の諸形態と諸特徴・その基本と副次・相互転化等々として明らかにされている。)

我々はこの闘争形態に固定化することはできないし技術II軍事的問題も固定的に取り扱うことはできない。ましてや、それを基礎に一定の情勢の下での我々の戦術を決定したりすることは全くの転倒であろう。これらにはまた、組織とその活動と不可分の関係にある。我々が国家権力と諸階級の相互関係を基礎にして、政治II軍事を基本にするという事は、我々の組織が社会II経済的、政治的、思想II理論的闘争を目的意識的にこの政治II軍事的闘争へと集中し、組織し、系統的に打ち鍛えていく革命的組織・共産主義者の強固な戦闘組織であらねばならないことを意味する。そのような組織として技術II軍事的側面をも日常的に組織せねばならない。我々は自己

オロギー的諸関係の分析を国家権力と諸階級の相互関係に総合して明らかにし、我々の綱領と、戦術の基本的・原則的内容を打ち樹てる。我々の全活動の基本的内容、いつの時でも基礎になるのは、大衆の階級の意識性と組織性を打ち鍛えることである。戦術は一定の情勢の下での我々の政治活動の重点・活動方法・その方向・闘争手段の力点を現わすものである。国家権力と諸階級の相互関係を基礎とする本質的的内容は変わらないが、重点・力点のおき方、性格、方向、方法は一定の政治情勢(諸階級の具体的な政治的狀態、政治的力関係等)によって異なる。我々にとって軍事は基本的にこの階級闘争の有機的全体を基礎とし、そこから成長してくる政治II軍事であり、階級闘争の政治的関係の力学的表現である。我々はこれに立脚して具体的な技術II軍事的側面を組織する。我々はこの側面を組織的任務として、日常的・恒常的に組織するが、それ自身独立して発展し、階級闘争を牽引していくのではない。政治II軍事をこそ基本にしそれを社会II経済的・政治的・思想II理論的闘争の全体をこゝに集約し、意識的に集中・系統化することによって発展させ、その一要素として時々の時点で最も有効な形態と方向で、技術II軍事的手段・力を駆使し、発揮する。また、総括・教訓もこの側面については技術として(部隊の編成・配備・攻撃の時・方法・対象、戦闘体制の組織・指揮、武器・輸送、調査等々の具体的戦闘に関する一切の問題)なされねばならない。だが、技術II軍

の組織と活動のうちに、階級闘争の全内容・その基本的諸要素、社会II経済的、政治的、思想II理論的、技術II軍事的要素を体系化し、政治II軍事へと集中していかねばならない。そうしうる組織のみが、真に階級の意識性と組織性を打ち鍛え、武装闘争を真にマルクス主義的に階級闘争の有機的全体の核心において闘い抜き、階級闘争と革命勢力の全体を牽引し、打ち鍛え、前進させるものとして闘うことができるであろう。もし技術II軍事的側面をのみ組織の基礎とし、活動の全内容とすれば、それは陰謀組織となる他はないであろう。これはまた階級闘争の発展を、技術II軍事的側面の自立的発展としてのみ考える思考を基礎とし、またそれを結果とする。これらのことから、小グループで敵に立ち向うたゞ一つの戦闘、必然的に恣意的・主観的に選択されざるをえないただ一つの戦闘それのみに全精力を投入し、それにのみ自己の存在根拠を見出す最も秘密な、最高度の規律をもつた、最も英雄的で、自己犠牲的で、情熱的な孤獨な組織となるであろう。この歴史的典型はバクニン主義↓「人民の意志」派(「人民の自由」派)である。

我々(赤軍派)の六九年秋敗北後の過程はこの側面を濃厚にもっている。「七〇年秋前段階蜂起」の方針は、六九年秋の敗北の総括を技術II軍事的側面からのみ行うことよって(それ自身極めて重要なことであったが)、その敗北を技術II軍事的熟達によってこえようとするものであった。階級闘争全体から出発し、それと技術II軍

事的教訓とを結合するということなく、技術II軍事的側面から階級闘争全体を規定し、自己の全活動を規定・限定するものであった。これは他ならぬバクーニノ主義であり、「即座の一揆」主義であった。それは現実のものによって打ちのめされた。そこから深刻な論争が始まり、実践的にはゲリラ路線を導いた。それは国際主義を、現に進撃しつつある革命戦争・世界革命との結合、その一環としての闘いへと具体化し、また、自然発生的な暴動主義や一揆主義（誤って蜂起主義といわれている）を清算し、その対極としての合法的反政府運動という旧来の思考を払拭し、荒々しい力と力の対決としての本来の階級闘争の見地を復活させ、それを指導的の中核として担うべき強固な革命的組織をいかに建設すべきか、それがもつべき内容は何かという問題を提起し、この革命的組織の建設と軍事武装の日常的組織化とを結合しようとする貴重な内容があった。ゲリラ戦は、この組織建設と武装との結合を持続的に組織し、発展させ、打ち鍛えていくものとして提起されたのであった。だが、同時にそれはまた、「蜂起かゲリラか」という論争と、「今すぐ戦闘に入らねばならない」という焦燥感が結合し、「敵―味方の技術II軍事的力関係」から「唯一の戦闘形態としてのゲリラ戦」へと移行していく内容をもつたのであった。実践的にはこの側面が前面化し、技術II軍事的側面をもつて階級闘争の基本内容におきかえていくという傾向をもつたのであった。問題の陥穽は、強固な革命的

組織を建設し、武装を日常的に組織するという独自の任務を、具体的闘争形態・戦闘形態と直結した点である。革命的組織―組織的武装は我々の独自の思想闘争II組織闘争と独自活動によって組織され、それはまた、現実の階級闘争によって大衆闘争の中で打ち鍛えられる。だがこの現実の階級闘争・大衆闘争の諸形態は、予め我々が思いつきで定めておくことはできないし、我々はたゞ大衆の創意性・積極性と結合しつつ、この創造過程に目的意識的に参加することである。（その具体的戦闘としてゲリラ戦は有力なものであろう。） こうして我々は組織の全内容・全側面を打ち鍛え、更にそこから多くのものを汲み取りながら発展しその一環として武装を強化していくのである。だがこの直結は、不可避的に大衆不在・現実の階級闘争の不在と、階級闘争を技術II軍事的側面のみから把握、敵―味方の技術II軍事的力関係のみから闘争形態としてゲリラ戦を導き、階級闘争の全内容を汲み取ることができなくなり、一方では代行主義・軍事的代行主義を、また召還主義を、他方では自己の活動内容・政治の狭さ、一面化・閉鎖性と観念化をもたらしことになる。組織も、その活動も、階級闘争全体への関わりも、技術II軍事的側面にのみ一面化し、この階級闘争から自立していく技術II軍事の一面において組織―活動―闘争（戦闘）が円環し、不可避的に小グループ化・小勢力化・尖鋭化・陰謀化していく。私にはボサツ↓H・J ↓PBM↓M作戦から更に「銃による殲滅戦」へと身を

削りつゝ尖鋭化し、高度化していく過程、組織が一つの戦闘にのみ直接的に照応しつつ、一つの戦闘とともに組織が壊滅し、そうして次々と新たな勇敢な攻撃が、新たなメンバーによって、一層尖鋭に、一層緻密な準備と一層厳格な陰謀として組織され、全体として一層小グループ・小勢力化していく過程、そして遂に「銃による殲滅戦」へ自己の一切を投入し、賭け、そこにのみ自己の存在根拠・存在意義・全活動・党派性（大衆的武装闘争・爆弾に対する党派性としての銃）を見出し、集中していくに到る過程（そしてこれは先に指摘した点からすれば不可避であり、銃と戦術の高度化のみが主体の前進・成長を表わすものとなるのだ。それだけが成長のテコなのだ。階級闘争から自立した技術II軍事の結晶）は、「土地と自由」派から分裂し、アレクサンドル二世の暗殺に到った「人民の意志」派（「人民の自由」派）を想起させるのだ。前段階級闘争からゲリラ路線への転換は、バクーニノ主義・トカチョーフから「人民の意志」派への進化をアナロジーさせる。即座の一揆・権力奪取の試みからゲリラ主義・その現実的尖鋭化・陰謀化としてのテロリズムへの進化。レーニンは「人民の意志」派の自己犠牲的闘争を非常に尊敬し、その専制との断固たる政治闘争への志向を高く評価し、そこから多くを学ぶべきことを繰り返し強調した。（『我々の当面の任務』緊要な問題）『なにをなすべきか？』をみよ。）しかしまた、レーニンは「彼らの中には、その革命的な思考を『人民

の自由」派として始めた人も多かった。その殆んど全部の者が、若年の頃にはテロルの英雄達を熱狂的に崇拜していた。この英雄的伝統の魅惑的な印象を捨て去るためには闘争が必要であり、どんなことがあっても『人民の自由』派に忠誠をまもろうとした人々―それは若い社会民主主義者達が高い尊敬を払っていた人々だった―との訣別を伴った。」というように訣別したのであった。その中心点は政治闘争を社会主義と結合すること、またプロレタリアートと結合することであり、一貫したマルクス主義の理論に基いて、プロレタリアートの階級闘争を組織し、指導し、プロレタリアートによる政治権力の獲得と社会主義社会の組織とを終局目標として、専制に対する革命的労働者党の不退転の闘争へとプロレタリアートを導くことであった。階級・階級闘争・社会主義、これこそがその核心であった。我々は初期レーニンの諸論文の中で、レーニンがどれほどマルクスの『宣言』・『資本論』・第一インターの『宣言』・『規約』・『ゴータ綱領批判』に学び、徹底的に立脚し、マルクスの階級・階級闘争・資本主義社会批判・社会主義の学説をもつてナロードニキと闘い、ロシアの全問題を分析し、自己の立場を築いていったかを知ることができる。（そしてこの初期レーニンの観点は、十月革命後の一八二〇〇年の時期にも一貫しており、継承されている。一九二〇〇年の階級の規定の仕方、プロレタリアートの農民に対する基本的態度は既に初期にはっきり確立されている。）

レーニンは「人民の意志」派を革命的マルクス主義によって、共産主義とプロレタリア運動の結合として止揚した。そしてその中で、組織の側面を止揚した。「『人民の自由』派の誤りは、彼らが不満をいだく全ての人々を自分の組織に引きよせようと努め、この組織を専制(帝國主義)との断固たる闘争(武装闘争)へ赴かせようと努めたことであつたのではない。反対に彼らの大きな歴史的功績はこのことにある。彼らの誤りは、彼らが本質上、全然革命的理論でなかつた理論に立脚したこと、そして自分らの運動を、発展しつつある資本主義社会(没落しつつある帝國主義)内部の階級闘争と切つても切れないように結びつけることを知らなかつたか、またはそうすることができなかつたこと」「『政治』を労働運動から切り離された活動と理解し、政治(武装)をもつばら陰謀的な闘争にだけ狭めていた」ことであつたのである。(『なにをなすべきか?』と『我々の運動の緊要な諸任務』)

このように書いている時、私は次のような想いからされる。それは第一インターでマルクスと対立したバクレーニン主義の問題である。バクレーニンのアナキズムと陰謀組織と農民社会主義は、資本主義の「辺境」地帯で継承された。一つはロシアのナロードニキエス・エルであり、もう一つはスペインのアナーキストであつた。レーニンはそれを革命的マルクス主義とプロレタリアートの結合によつて止揚し、組織の側面を取り入れた。スベ

組織し、農民をプロレタリアートとして組織し、訓練し、打ち鍛えるゲリラ戦争の展開へと発展させてきた。そして革命は今不可避的に資本主義の中枢部・心臓部へと掘り進んでいる。我々は今、レーニンの時以来再び、共産主義とプロレタリア運動の結合の問題に直面している。かつては資本主義が中心部から周辺へ発展していく時期、かつ帝國主義への移行として世界市場が、民族が、諸国家の体系が編成されていく時期であつた。今や資本主義が周辺部から中心部へと没落を進めていく時期である。だから再び「人民の意志」派、エス・エル主義は不可避的に生まれるのだ。そしてそれを革命的マルクス主義によつて止揚していくことによつてのみ、現代のボルシェヴィキは生まれ出る。共産主義とプロレタリア運動の結合は、政治Ⅱ軍事Ⅱ社会中核と、プロレタリアートの(またプロレタリアートへと移行しつつある労働人民の)社会革命の全要求を徹底的に打ち鍛え、それを政治Ⅱ軍事力として錬成していく闘いと結合であらう。いや、プロレタリア労働人民の汎ゆる闘いを、プロレタリアートの社会革命の要求として徹底的に打ち鍛え、政治Ⅱ軍事力として錬成していくこと、従つて武装闘争と大衆路線を結合することこそが共産主義とプロレタリア運動の結合であり、党はその政治Ⅱ軍事Ⅱ社会中核として組織されるであらう。とすれば、今日のマルクス主義の主要な思想的理論的問題は何か。それは階級・民族・国家である。世界社会主義革命と階級・民族・国家なのだ。

インでは革命的サンディカリズムと農民戦争(ゲリラ戦)と結合したが、ファシズムと更にはスターリニズムによつて解体された。それはラテンアメリカへ、一方ではゲリラ戦として(パリオ)、他方ではアナルコ・サンディカリズムとして伝えられた。そしてラテンアメリカで農民戦争・独立戦争の土壌と結合し、都市にはアナルコ・サンディカリズムが定着した。まさに前者の結合からカストロ主義は誕生し、「マルクス主義」の圏外でキューバ革命を勝利に導いたのであつた。ロシアのエス・エルと異なるのは、根拠地によつて農民と結合し、農民戦争を組織し、その中核となつたことなのだ。テロリズムと「農民の中へ」は軍事中核(ゲリラ)と根拠地と農民の結合として止揚された。それは今やアナルコ・サンディカリズムの敗北とともに都市ゲリラとして継承されているかの如くである。カストロ主義は社会主義革命過程でマルクス主義に合体し、それに新たな生命と息吹きを持ち込んだ。他方革命は先進国革命の敗北と後進国革命の勝利として、資本主義の「辺境」地帯で勝利し、前進してきた。ヨーロッパの敗北、ソ連の変質と中国革命の勝利がこの面期であつた。

そして今日、資本主義の「辺境」地帯での革命は、世界社会主義革命として前進し、発展しつつある。そのようなものとして人民戦争が発展しつつある。人民戦争もまた、レーニン主義から出発しつつ、それを政治Ⅱ軍事Ⅱ社会中核と根拠地と農民との結合として、農民戦争をまさにこの点が諸流派を分かつ思想的分岐点である。だから「人民の意志」派、エス・エル主義の超克はこの点から始めねばならない。そこから共産主義とプロレタリア運動の結合への道を見出さねばならない。

だから私は、赤軍派のゲリラ主義への転換の水路となつた日本共産党(革命左派) 神奈川県常任委員会を問題としなければならぬ。私は前に中核派をエス・エル主義として批判した。だが中核派はエス・エル右派である。彼らをエス・エル右派として規定しているのは彼らの反スタ主義であり、アジアの人民戦争の潮流への敵対、中国共産党―ベトナム労働党―朝鮮労働党への敵対であり一國主義・先進國主義・組合主義の社民的体質の残存である。もし彼らの革命的情熱・熱意が「自己批判」から更に進んでこれをとびこえる時、左翼エス・エルとなるであらう。そして左翼エス・エルを代表しているものこそ、日共(革命左派) 神奈川県委(以下革命左派と略)の諸君である。

革命左派が「疑いもなく革命的気分をもち、英雄的な自己犠牲心に満ち、衷心から自由のため、人民のために身を賭そうとのぞんでいる人々を自派に引きつけていること」この点では他のどの流派よりもひととき光を放っていること、このことには疑いの余地がない。その点ではあの七〇年代のナロードニキエスたちに決してひけをとるものではないであらう。その厳格な非合法組織、規律、秘密活動の技術、同志的結合の強さ、無私の精神と献身

性、また謙虚さ、これらは全て我々の革命運動にとって実に貴重なものである。「しかしながら、人々が衷心から、信念をもって、ある社会的・政治的立場をとっているという事情は、それだけではまだ、この立場が無条件に虚偽のものでなく、内的に矛盾していないかどうかの問題、またこの立場からなされた最良の活動の結果が不可避的に（それが行動する人々の意識に無関係であろうと、また彼らの意志に反してであろうと）「共産主義とプロレタリア運動の結合を「正しい道からせよ、それを袋小路へ引き入れることにならないかどうかという問題を、あらかじめ解決するものでは決してない。」（レーニン） 革命左派は「米日反動の侵略戦争を革命戦争で打ち破れ！」と基本路線を提起している。だが「米日反動派の侵略戦争」がどのような階級的諸矛盾を激成しどのような階級的諸勢力をどの方向につき動かし、被抑圧人民諸階級層のどのような要求が焦眉のものとなっているのかetc、革命戦争の諸条件は何一つ明らかにされていない。

「米日反動派」が「侵略戦争」に向っていることと、階級闘争が革命戦争へと発展していくこととは、一個二重の関係であり、同一の社会的・政治的条件から生まれてくるものであり、「侵略戦争」そのものうちに、階級闘争の内乱にまでの発展の条件を同時に明らかにし、戦術を、政治活動の方向・方法・性格を定めねばならない。レーニンの「帝国主義戦争を内乱へ」という戦術（帝国

性格は何一つ明らかにされず、階級の観点は民族の観点に解消されている。

資本主義—帝国主義の国際的・国内的な社会的・政治的矛盾もなく、従って階級矛盾もなく、所有—生産諸関係・政治的・軍事的・イデオロギー的諸関係の総合としての、国家権力と諸階級の相互関係という権力問題の観点、更に政府の観点もないのだ。権力問題はたゞ米軍・自衛隊という暴力装置それ自身・軍隊がとり出されているにすぎない。軍隊は国家権力であり、政府なのだ。だから、国家権力を米帝が握っている、人民は米帝と闘え！と、こゝには階級の一カケラもないのだ。（毛沢東には「中国社会階級の分析」があったのに。） 何と素朴な唯物論であることだ。（これは直接眼にみえるもののみ、眼にみえるものゝために闘うという経済主義と同根である。直接眼にみえない社会関係の総体・階級関係全体は視野の外にあり、「近代の賃金奴隷をつないでいる眼にみえない鉄鎖」とは闘えないのだ。また、警察・軍隊の問題は実際の戦闘においては中心問題、即ち階級闘争の軍事・技術的側面においては中心問題であるがしかし、階級闘争の内容からいえば、諸々の綱領的要求の中の、政治的民主主義的要求の部分の主要な一つにすぎない。そして軍事・技術的側面を内容、即ち政治・軍事から切り離すことは、ブルジョア軍事理論であり、権力論ではない。素朴唯物論は経済主義やブルジョア民主主義や改良主義やブルジョア軍事理論に帰結する。）

主義戦争を内戦・革命戦争で打ち破れ！）は、帝国主義戦争として爆発した社会的・政治的関係が同時に階級関係・階級闘争を内乱に直面するまでに激化し成長させているという分析に基き、内戦の客観的・主体的条件を明らかにしている。即ち階級闘争の見地に貫ぬかれているのだ。だが、革命左派の革命戦争は、階級関係の、階級闘争の不可避的發展として提起されているのではない。革命左派には「米日反動派対人民」の図式、もつとはつきりいえば、「米日反動派の暴力装置たる米軍・自衛隊・警察対人民、いや革命左派」の図式しかない。これは階級闘争なき革命戦争である。プロレタリアートの階級的意識性や組織性は、決して打ち鍛えられることがない。求められるのは個人の勇敢さ・英雄主義・献身・自己犠牲である。もう少し進めて検討すれば、革命左派は「米帝による日本の支配—経済的・政治的・軍事的支配」と、売国独占資本・売国政府・かいらい自衛隊・売国警察」の観点に立ち、民族矛盾を主要な矛盾と考え、「反米愛国」を主要スローガンとしている。これでは「米日反動派（米帝とのかいらい勢力）による日本に対する侵略戦争を民族革命戦争で打ち破れ！」という、中国抗日解放闘争のスローガンになってしまっているではないか？

そのとおりである。革命左派は外国帝国主義と売国反動かいらい勢力対人民・民族の図式に立脚し、民族革命戦争へ人民を牽いようというのだ。そこには今日の政治と経済の全体、現実の戦争の、また権力の社会的・階級的

かくして革命左派は階級闘争から独立して「米軍・自衛隊・警察対革命左派」の図式の下に、政府に対する英雄的闘争を開始する。帝国主義の侵略・略奪・搾取の激化、反動と暴力への熱望・荒れ狂う暴虐・反革命・傍若無人こそ、彼らの勇敢な英雄的・自己犠牲的闘争を呼びおこしているものである。まさにその政府に対して彼らは勇敢に突撃しているのだ。

だが彼らは帝国主義に対する自己の憤激の激しさに自然発生的に拜跪してしまい、帝国主義の矛盾の激化の中に、同時に自らが立脚すべき階級的諸矛盾と階級的力をみない。帝国主義を打倒することのできる社会勢力の成長をみることで、この社会勢力をいかに結集し、組織し、動員し、訓練し、打ち鍛えていくべきかに考えが及ばない。自分の憤激・革命的熱意・英雄主義・献身・自己犠牲を階級闘争と結合し、階級闘争として発展させていくことができない。まさしく（左翼）エス・エルである。（最近彼らの間に大衆闘争への、大衆的武装闘争への、大衆の創意や英雄主義への蔑視や不信や悲嘆の感情が高まっている。彼らはプロレタリアートの階級闘争が、何度もくり返しと敗北を経験しつつ、その経験そのものによって、頑強な堅忍不拔の闘いによって教育され、訓練されていくこと、そのことによって社会革命の全要求を打ち鍛え、組織された政治・軍事力を築いていくこと、そのようにして全人民を結集し、統率していくこと、そして一時的困難や後退があっても、必ず新たな

な革命的積極性・創意・英雄主義を培い、發揮していくのであり、たゞそれだけが敵階級を、敵権力を打ち倒す原動力であることを彼らは理解しない。我々の全活動はこの基礎の上にのみ、またこのためにのみ、そしてこの意識的組織的要素としてのみあるのである。

革命左派は決してプロレタリアートの階級闘争の先頭に立つことはできないであろう。しかし、プロレタリアートの階級闘争が未熟な間は、彼らは舞台の正面に立つてはならない。しかし、プロレタリアートの階級闘争が未熟である限り、彼らは壊滅と再建・勇敢と意気沮喪をくり返さざるをえないであろう。そして革命的昂揚が、危機が發展し、全階級の動揺と流動が、日米同盟の動揺・危機を含めて登場してくる時、革命的祖国防衛主義とプロレタリアートの内乱の立場との間を動揺するであろう。革命的昂揚・革命的危機を「民主独立政府」へ集約するの、プロレタリア権力へ転化するの、民族主義的な反米か、世界革命の勝利へ向けての米帝打倒の国際革命戦争か、これは現代の「革命的祖国防衛主義」とプロレタリア国際主義・プロレタリア世界革命との相違である。前者は矛盾を集中化され、それ故に政治的・経済的ナショナリズムを強める中小ブルジョアジエの立場であり、小ブルジョア民主主義・改良主義の幻想であり、中小ブルジョアジエ（更には金融資本の一部を含めて、少なくともその支持を受けて）からプロレタリアートの遅れた層の小ブルジョアの幻想までの一大連合の道に人民戦線

革命左派は今日の日本の諸階級の相互関係を規定している基本的生産―社会関係が、資本・金融資本であることまさにこの資本・金融資本の吸血鬼の如き搾取欲・膨張欲・蓄積欲とその矛盾が社会的生産と分配・社会生活の全分野を規定していること、一般的に規定しているばかりでなく、全分野を一層直接的に自己の再生産過程・支配にくみこみ、激しい再編をおし進め、矛盾を激成していること、従ってその一切の解決は社会主義革命以外にありえず、また事実この矛盾の激化から生まれているあらゆる闘いは社会主義革命を要求して永続し、ブルジョアの改良の無力さが増々暴露され、あらゆる闘いがブルジョアジエを収奪し、社会主義的生産・分配を組織化する力、プロレタリアートに指導される全勤労人民の同盟を、金融資本とその権力との苛借なき闘いによって打ち

鍛える方向に進んでいること、これら一切を無視して一切を米帝の民族的抑圧にその原因を求め、米帝の経済的圧迫と売国独占資本(?)を排除することによって解決されるという空想的改良主義を提起している。彼らが現実の階級闘争から「独立」せざるをえない根拠はこゝにある。彼らのプロレタリア軍隊が全てである。彼らはプロレタリアが所有関係の変革、即ちブルジョアジエの収奪と全生産手段のプロレタリア占有の実現、社会的生産と分配のプロレタリア統制・管理の実現をその社会経済的任務の最も基本的なものとし、またその実現によってこそプロレタリア独裁が強化されること、そして今

である。革命左派はこの「民族民主連合政府」の左翼の立場をとろうとしている。これはプロレタリア革命との間の動揺であり、その最良の方向も左翼エス・エルをこえることができないであろう。

この理論的根拠は、第一にプロレタリア世界革命の観点的欠除・民族主義である。「世界体系としての帝国主義とプロレタリア世界革命」の原則的観点的欠除であり民族の超歴史的絶対化であり、帝国主義列強間の今日的な特殊な諸関係・列強間の同盟・軍事機構をプロレタリア世界革命の見地からではなく、民族の見地から評価することである。第二に、民族自決権を含むブルジョア民主主義の超歴史的・超社会的・超階級の絶対化である。帝国主義列強相互の関係を、民族的利害関係として把握することである。第三は、権力―政府を社会的階級の性格において評価するのではなく、民族的利害―米帝に対して民族的利害を擁護しているか否か、から評価することである。(この立場からすれば、屈辱的条件でプレスト・リトウスタやジュネーブや板門店の講和条約や休戦協定を結んだ革命政府は、許すべからざる民族的裏切りであろう。それは左翼エス・エルの憤激であった。更に革命左派の民族民主革命―人民民主独裁の路線は、直面する社会革命がプロレタリアートによるブルジョアジエの収奪以外にありえないことを曖昧にし、ブルジョアジエとプロレタリアートの中間の道・両者の妥協の道を幻想し追求する点で典型的な小ブルジョア路線である。

日の日本の生産―社会諸関係は、ロシア社会主義革命より、この条件を一層成熟させ、一層緊切に要求し、一層急速におし進めることに全く眼を閉ざし、中小資本・中農及び上層農民を庇に温存し、更に中農を拡大し、広汎な資本主義的諸関係・小商品経済とありあいをつけ、調和合体しようとするものである。

だが、この空想的な小ブルジョア社会主義は、三重に誤まっている。第一に社会主義と広汎な資本主義的諸関係・小商品経済は調和合体していくことはできない。それは二者闘争的關係にあり、たとえどんなに迂余曲折と複雑さをもつとしても、闘争を避けて社会主義へ改造されていくか、資本主義へ成長していく以外にない。第二に、今日の日本において、主要生産手段のプロレタリア占有と主要部門の管理統制は、中小経営・農業へと急速に歩を進めていくであろうし、また中小経営・農業が資本主義的諸関係・小商品経済として併存し、調和して、存続していくことはできない。第三に、今日の中小経営や農業の諸矛盾は、社会主義革命としてのみ解決されるものであり、その方向にむけて全勤労人民がプロレタリアートの周囲に結集し、プロレタリアートの立場へ移行していく根拠があり、我々はまたそのように働きかけなければならぬのである。プロレタリアートかブルジョアジエか、社会主義か資本主義か、中間の道はない。革命左派はこの中間の道を求め、プロレタリアートも農民もインテリゲンチヤも小資本家も全て同列におき、人民

として一括し、融合させている。この小ブルジョアの無原則性・動搖・ぐらつき・幻想は、左翼エス・エル以上に没落・磨滅をはやめ、いや、ロシア十月革命での左翼エス・エルの役割も担うことはできないであろう。我々が直面している革命は、徹底したプロレタリア社会主義革命であるのだから。

以上、革命左派はあらゆる面でナロードニキ的革命主義↓左翼エス・エルの道を進んでいる。階級・民族・国家・プロレタリア独裁・共産主義に関する曖昧さ、無原則・非マルクス主義・小ブルジョアの空想的社会主義（戦後一時代を支配した旧い社会主義）、それがその根拠である。「彼らの誤りは、彼らが本質上、全然革命的でなかった理論をよりどころとし、自らの運動を没落しつつある資本主義社会の内部階級闘争と切っても切れないように結びつけることができず」「『武装』をプロレタリア運動から切り離された活動と理解し、武装闘争をもっぱら陰謀的な闘争だけに狭めている」ことにある。その歴史的功績は、帝国主義に対する断固たる革命的闘争、武装闘争に踏み出した点にあったのだが。

我々はこの二年間、強固な革命的組織、非合法組織を建設するか否か、武装を組織し、強固な組織的武装を打ち鍛えるか否か、武装闘争を組織するか否かを分岐点に革命的流派と非革命的流派との分化を経験してきた。これは帝国主義打倒のための闘争、政府打倒の革命闘争へ前進するのか、それとも合法的反政府運動、帝国主義の

個々の方策に反対する闘争に限定し、とゞまるのかの分化であった。前者の道を進んだ人々は武装派と呼ばれ、今その中から真に革命家とよぶべき一群の人々が生まれつつある。後者の道を進んだ人々は、ブルジョア自由主義・合法主義・経済主義・小ブルジョア民主主義の後尾へと統いていつている。革命的流派は、革命的な組織、規律、秘密活動の技術を最高度に完全なものにしなればならない。だが同時に、我々は今この革命的流派の発展の方向をめぐって新たな試練と分化に直面している。真に共産主義的プロレタリアの革命流派として、革命的マルクス・レーニン主義の旗の下に進むのか、小ブルジョアのナロードニキ的革命流派として、旧い社会主義の旗の下に進むのかという分化に直面している。思想的

理論的には、資本主義社会批判―現代帝国主義批判―現代修正主義批判と世界社会主義革命の観点、階級・民族・国家・プロレタリア独裁・共産主義社会に対する基本的原則的な真にマルクス主義的立場か、曖昧な、無原則的な、動搖的な、非あるいは擬似マルクス主義かである。政治的には、プロレタリア国際主義か民族主義か、即ち反米帝をプロレタリア世界革命の見地から、世界革命の権力問題として掲げるか、民族的―一国的見地から、民族的課題として掲げるか、帝国主義自国政府の打倒を戦術的環として集中するか、それとも曖昧にし、小ブルジョアに譲歩し、融合し、ブルジョアに對して動搖的態度をとるのか、内乱とプロレタリア権力

のために闘うのか、民族革命戦争（?!）と民主独立政権をめざすのか、民族をこえた労働者勤労人民の国際的同盟・融合のために闘い、それを世界プロレタリア独裁に向けて打ち鍛えるのか、それとも民族間の友好と諸民族の同権の承認にとゞまるのか、である。またプロレタリアート勤労人民の全要求を社会主義革命へ、ブルジョアジーの収奪へ打ち鍛えるのか、曖昧にし、調和させ、改良の幻想を持ち込むのか、階級矛盾に立脚し、プロレタリアートの階級闘争の立場に徹して立ち、他の被搾取・被抑圧人民にプロレタリアートの立場へ移行するように働きかけるのか、それとも「民族矛盾―民族利益」に立脚し、プロレタリアートとブルジョアジーの階級対立を曖昧にし、民族的闘争の立場に立ち、プロレタリアートと他の諸階層を単一の「人民」という観点に融合し、合体させるのである。実践的には、共産主義とプロレタリア運動の結合に力を注ぎ、プロレタリアート（及びその立場に移行していく諸階級層）の階級闘争をおし進め、その意識的組織的力となり、武装闘争と大衆路線を結合し、革命的組織・革命家の力をプロレタリアートの英雄主義・革命的積極性と一体に融合させ、「攻囲の正規軍」を結集し、組織し、動員し、訓練し、「刹那的な燃え上りをおこすだけでなく、敵に偶発的なばらばらの打撃を加えるだけでなく、全線にわたる、ひたむきの、頑強な、持久的な闘争によって敵を追撃することができ、帝国主義政府が抑圧をまき、憎悪を刈り取っている到る

ところでのこの政府を狩りたてることのできるような仕方です。それを組織する」（レーニン『労働者党と農民』）のか、それともインテリゲンチヤの憤激・革命的情熱・英雄主義に拝跪し、真に革命的な社会勢力を結集し、組織し、それと結合し、この結合を強めることに力を注がず、革命家の組織・力を大衆から切り離し、自己をしかかりとプロレタリアートの階級闘争の意識的組織的力として確立せず、階級闘争の中心からはずれて、狭い陰謀的政治と小グループによる突撃・テロルに力を注ぐのかである。我々はどんなに困難で、眼にみえた成果が直ちに約束されなくても、またどんな長期にわたろうとも将来性のあるもののために、前者の道を進んでいかねばならない。（旧い俗流社会主義は、既に五〇年分業から始まる数年間によって壊滅したのであったが、今再び復活されている。他方、もう一つの革共同俗流社会主義は今激しい分解と危機にある。この二つの俗流社会主義は一方に現代修正主義―ブルジョア自由主義―経済主義（日共と革マルと山口左派）を、他方にナロードニキ的・エス・エルの小ブルジョアの革命主義（革命左派と中核派）を生みだしている。）

第四章

戦後革命運動とプロレタリア革命党建設

私は前章で、強固な革命家の組織の建設を論じた時、プロレタリア革命党建設への具体的着手であるとの結論に到達した。そして注2の中で、それは復活されている、あるいは分解しつつある古い俗流社会主義の上にはなく、真に革命的なマルクス・レーニン主義の基礎の上に築かれねばならないという結論に到達した。そこで私は先に進む前に、このプロレタリア革命党建設の歴史的位置を明らかにしておこうと思う。それは、戦後革命の敗北、革命運動の解体の中心問題を明らかにし、従ってまた今日の革命運動がそれを克服すべき中心問題を明らかにし、その思想と力が世界―日本階級闘争の中でどのように育まれ、培われ、準備され、打ち鍛えられてきたかを明らかにすることである。私は問題の所在を第二次大戦に於ける日本帝國主義の敗戦から朝鮮戦争へ到る時期のうちに探りあて、明らかにするつもりである。だがその前に、日本社

会主義運動、プロレタリア運動の歴史について簡単にふれておきたい。というのは、今日の共産主義運動とプロレタリア運動は、第二の歴史的誕生の時期にあるからである。だから最初の歴史的誕生期を振り返っておくのも決して無益ではあるまい。

1. 日本革命運動はどのような歴史をたどってきたか？

日本社会主義運動は、自由民権運動敗北後の政治的沈滞期に明治専制政府の完成と拡張期を経て、世紀の変わり目に、日本の帝國主義的登場とともに、インテリゲンチヤの小グループの思想運動として始まった。それは、無政府あるいはキリスト教的あるいは社会政策的・改良的社会主義の混在であったが、それは最初から、専制政府に主導された跋扈的な日本帝國主義の特殊なナショナリズムに打ち当り、また政府の弾圧の下におかれ、確たる潮流として確立する前に分散させられ、冬の時代を迎えねばならなかった。そして長い間、若干のインテリゲンチヤの細々とした「奴隸の言葉」の思想運動の時期を経験した。他方、労働運動も最初にくつかの暴動（足尾や筑豊）を経験した。他は、長い間政府の弾圧の下に抑圧されたまゝであり、大正期に入って漸く、純然たるトレード・ユニオンズとして、持続的組織的運動とし

て成長し始めたのであった。（友愛会↓総同盟）

第一次大戦をテコとする日本独占資本主義の急激な発展とロシア十月革命は、社会主義運動にも労働運動にも大きな変化と発展をもたらし、両者の結合へ導いた。最初の大規模な民衆運動であった米騒動は、全国津々浦々に広がり、その終局には労働者の積極的参加が、宇部鉱山労働者の蜂起のようにはっきりと刻され、漸く昂まり始めていた労働運動（ex；砲兵工廠のストライキ等）を激しく揺り動かし、発展させ、大規模な大衆ストライキ運動の波をつくりだした。（八幡製鉄所や神戸の川崎・三菱造船所の大衆ストライキと軍隊との衝突）また反革命干渉のシベリア出兵に反対する政治闘争をつくりだした。更に朝鮮人民の三・一才独立運動の勃発は、在日朝鮮人労働者の労働運動・民族解放運動を進展させ、日本労働者の労働運動と相携えて発展し始めた。（ex；南葛労働組合の宣言・アピールをみよ。）また、小作争議の激化は、地主制を揺がすほどに昂まり始めた。更に部落解放運動も急激に発展した。他方、キリスト教的存在あるいは社会政策的社会主義を脱却し、科学的社会主義へ接近しつつあった社会主義運動は、この労働運動と急速に結合していった。しかし、それとともにロシア革命の影響を介して、アナキズムとボルシェヴィズムへ分化していった。アナキズムは大衆的ストライキ運動の、労働者の自然発生的闘争性と労働組合の闘争化と結合して、アナルコ・サンディカリズムとして、昂揚期

最初の支配的潮流となった。（なお、大杉栄の生の拡充の哲学、労働者相互扶助論・直接行動論等、また当時のアナキズムのストライキ万能論、知識人出身指導者排撃等々は、今日ヴァリエーションを変えて革労協によってくり返されている。）だが、労働運動の昂揚と社会主義との結合の始まりが、不可避的に天皇制政府と衝突し、政治闘争への成長に直面し始めるとともに、アナルコ・サンディカリズムの後退は不可避となり、ロシア革命の影響を介してボルシェヴィズム派が抬頭したのであった。（しかしこのボル派が真の意味でのボルシェヴィズムを意味するものではない。ボル派も政治闘争と前衛党とプロレタリア独裁に関して確たる態度・見解をもっていたわけではない。）他方、独占資本主義の発展は支配階級内部でのブルジョアジーの政治的進出をもたらした。それは一方で天皇制専制政府と地主のブルジョア化を促進し、他方でブルジョア自由主義と小ブルジョア的な急進民主主義を抬頭させた。（第一次↓第二次護憲運動と民本主義。国会突入闘争等）かくしてロシア革命と日本独占資本主義の発展によってもたらされた階級闘争の激化は、天皇制権力と民主主義の問題を環として、諸階級の相互関係を形成したのであった。（天皇制政府と地主のブルジョア化と、独占ブルジョアジーの君主主義的ブルジョアジーとしての登場、両者のブロックとその中の独占ブルジョアジーの政治的地歩の拡大。自由主義的ブルジョアジーと都市小ブル

ジョアジのブルジョア自由主義と急進民主主義。プロレタリアートと農民(小作農民)。プロレタリアートにとつて主要な問題は、ブルジョアジの天皇制との融着・ブロックと闘いつつ、また自由主義的ブルジョアジの動搖と闘いつつ、天皇制政府打倒と政治的自由の獲得—社会主義革命の道を独自の政治闘争をもって進み、この政治闘争に農民(小作農民)を結集していくことであつた。即ち、社会主義革命の旗の下に、政治的自由の獲得と地主制の打倒を特殊の環として、天皇制政府に突き進む政治闘争(労働同盟を、ブルジョアジの対極に組織することであつた。まさにそこに社会主義と労働運動の結合、強固な革命的労働者党を組織する任務があつた。以上の観点からみる時、初めてプロレタリアートの政治闘争を意識的に取り上げた山川主義も、政治闘争におけるプロレタリアートの独自性を明らかにしえず(無産階級の政治運動一般としてしか扱えられていない)、この政治闘争をブルジョア民主主義・ブルジョア自由主義への妥協の方向、それへのプロレタリアートの接近としてしか提起しえず、従つてまたプロレタリアートが独自に農民を率いて進んでいくという革命方向を提起しえなかつた。それは組織的には解党主義—協同戦線党として現れたのであつた。(今日革労協がどんなに山川主義をもち上げるとしても、山川主義—労働派の社民の本質は明瞭である。それは権力問題の輕視・ブルジョア民主主義への妥協、プロレタリアートの政治的独自性と全人民的

指導性の否定・革命党の否定であり、これは戦後組合主義と小ブルジョア民主主義として開花した。) 他方、福本主義は具体的な階級闘争・具体的な国家権力と諸階級の相互関係におけるプロレタリアートの任務・政治闘争とは無関係な、マルクス主義解釈と理論注入組織論であり(これはレーニンの『なにをなすべきか?』と何の関係もない)、これはそっくりそのまゝ革共同革マル派に継承されている。

総同盟のボル派への政治的尖鋭化と共産党結成へと進んでいった他方で、天皇制政府と支配階級は、外へは中国大陸への帝国主義的權益擴張へのりだし(二一カ条要求と山東出兵)、内へはプロレタリアートの進出と対抗し、またプロレタリアートと農民の結合を防止すべく、独占ブルジョアジと地主のブロックを強化し、天皇制権力をその基礎の上におきかえ、ブルジョア的小ブルジョアの反政府運動を一掃し、更に労働運動に対して専制政府に特徴的なアメとムチの政策をもつて分裂を策し、社会愛国主義的労働運動の育成に力を入れ始めたのであつた。これらを政党内閣制—関東大震災の大虐殺—小作争議調停法と自作農創設・維持事業—普通選挙制と治安維持法制定—山東出兵へと進む再編成として完成していった。とくに関東大震災の大虐殺は、アナキズム、アナルコ・サンディカリズムを壊滅し、日本労働運動と朝鮮人民の民族解放闘争及び在日朝鮮人労働運動との連帯を切断し、総同盟上層部の雪崩をうった右旋回をひき起

し、改良主義と合法主義、更には社会愛国主義の潮流を抬頭させ、労働運動を天皇制政府との妥協・純然たるブルジョア民主主義・自由主義への従属に向わせ、結成され、第一次検挙を蒙つたばかりの共産党の活動余地を一挙に狭め(まだ全く訓練されていないこの党の)、山川の解党主義と福本の分離結合論の小ブルインテリゲンチヤのセクト主義・孤立主義を生み出さしめたのであつた。関東大震災の一大ボグロムは、支配階級が自己の危機をのりきつていくために先制攻撃した内乱であり、この内乱の手段に訴えて、成長しつゝあつた社会主義運動・労働運動・民族解放運動の背骨を打ち砕き、それらの結合を断ち切つたのであつた。この上に立つて支配階級は普通選挙制を、ブルジョア自由主義と急進民主主義の無力化した運動の圧力のみを受けて制定し、またそのことによつてブルジョア的小ブルジョアの反政府運動を集約し消滅させ、プロレタリアートと農民には、革命的反政府運動には(というより反政府運動一般に)治安維持法を制定し、その牙を向けたのであつた。そしてその牙をもつて、再建された共産党・この若い党に襲いかゝつたのであつた。かくして日本社会主義運動—プロレタリア運動は、漸く本格的な成長にさしかゝつた途端に、まだ政治的経験も殆んど蓄積してはず、まだその内部的混乱も克服してはず、不可避の内部闘争によつて打ち鍛えもせず、まだ自分の個性を全くつくりあげていないうちに、支配階級の先制的内乱の手段によつて背骨をへし

折られ、それに続く支配階級の攻勢の前に、最も重要な政治的時局を、空白のままに、政治的経験を蓄積することなく過し、その後、非常に狭められた活動舞台で再建の途についたのであつた。(自らの政治的経験によつてよりも、コミンテルンの指示によつて。かくして日本共産主義運動は遂に自分の個性をつくりあげることができなかつたのである。従つてまた、プロレタリアートの中に確固たる基礎をもつことができなかったのである。)

コミンテルンの二七テーゼが、客観的革命的情勢の現存に対する主観的革命的著しい立ち遅れを指摘し、「プロレタリアートの政治的教育・その階級意識・その革命的組織化は、漸くその萌芽的段階を脱し始めたばかりである。」と言つたその時、また「日本プロレタリアートの最も先進的な部分は、サンディカリズムや純粹労働組合運動から脱却して、政治的階級闘争への道を進みつゝあり、この思想は前衛によつて採用されつゝあるにもかゝらず」「日本プロレタリアートと農民は何らの革命的伝統や大なる階級闘争の経験を有せず、その政治的覚醒と組織化はまだわずかな部分であり、いたつて数少なく、分散している」と言つたその時、従つて共産主義者の任務を「独自の思想的に鍛練された、規律ある、中央集権的な大衆の共産党」の建設へ、「共産党の量的・質的成長の達成」と「大衆に近づけ！」として提起したその時、支配階級は数度にわたつて党に襲いかゝり、

その指導的中核部分の大多数を奪い去ったのであった。党が漸く整備され、攻勢的な政治行動に移行しようとしていたその時にこの大打撃を蒙り、それから立ち直れないうちに大恐慌と危機の激化を迎えたのであった。労働争議と小作争議の激化は、ストライキ・土地占拠・天皇制警察との激しい衝突をよびおこした。(ストライキ闘争はとくに中小経営に集中したのであるが、当時の日本資本主義の産業構造からすれば、それは鋭い危機であった。)

日本帝国主義は危機からの脱出を中国侵略——「滿蒙」侵略に求め、軍事力拡張・愛国主義的熱狂・激しい白色テロルと警察的専制強化・挙国一致内閣をもってしたのであった。一方で軍部を主導力とする中国侵略と、その衝撃・国際関係の危機をテコとする愛国主義的結集——挙国一致体制を進め、他方で徹底して力・組織的警察力でもって、まだ若く、基礎の弱い党組織を徹底的に破壊し壊滅させ、反政府的労働者・農民運動を抑圧・封殺し、かくて、内向し、うっ積する矛盾・危機を、国際的危機の突破——対外侵略と挙国体制——愛国的熱狂のエネルギーとして統合するという方向をとったのである。(その時天皇制イデオロギーは前面に押し出された。)

革命運動の、この三〇年代初頭の敗北・瓦解は決定的であった。中期には革命運動にとつてかわつてファシスト運動が前面に登場した。そしてその吸収を通して天皇制ファシズムは完成した。そして総力戦へ突入し、それ

への全社会的動員を、戦時国家独占資本主義として編成した。この過程はまた革命運動の消滅過程であり、労働運動もあらゆる反政府的色合いの掃・協調的運動から愛国労働運動へ、更に産業報国会として、労働者階級が戦争機構に大規模に組織化動員されていく過程であった。十五年戦争の一時代は、共産主義運動とプロレタリア運動の死滅の一時代であった。かくて戦前の二〇年代初頭から三〇年代初頭に到るプロレタリア革命運動は、遂に革命的危機の昂揚と一大階級闘争の経験を経ることなく、真に大衆的な革命勢力となることなく、死滅させられたのであった。

だが、私はこの敗北、とくに三〇年代初頭の敗北を、二段階戦略や(それは一般にいわれるような機械的段階論でも、右翼路線でもない。それは天皇制転覆の第一義的意義と、それを労働兵ソヴェト権力の樹立として実現し、ソヴェト権力を通して、プロ独とブルジョアジーの収奪へ移行することを提起したのであった)、「前段階決戦論」の欠除や(これはウソである。三一、三二、三三、三四是迫りくる革命的決戦への諸任務・この革命における党の戦術・政策として提起されている)、内乱の現実性の見地から党の任務を提起している)、武装の欠除や(これもウソである。当時は今日と比べものにならないほど武装していた)、国際主義——世界革命の観点の欠除(これもウソ。帝国主義的反革命的戦争への反対闘争とそれ

の内乱への転化、日帝の軛からの殖民地(朝鮮・満州・台湾等)の解放、ソヴェト連邦と中国革命の擁護を掲げ、数々の国際的組織と国際的行動を組織している)に求めるのは誤まっており、無意味である。(むしろこの時期のコミンテルンがそうであった如く、セクト主義と極左主義の害毒の方が多かった。)

あえていうなら、中心問題はむしろ訓練の不足にあってたであろう。一つには革命運動の永続性を保証する確固たる継承性を保った指導者の組織を築きえなかつたこと従つて経験が蓄積されず、運動の断続性とブレを結果したこと、二つには、それと関連して、理論と現実の政治経験が組織の中に結合し、練り上げられることができず、三つには大衆の中での堅忍不拔の、かつ柔軟な革命的諸活動の訓練の不足であった。また、その結果としてプロレタリアートの革命的中核を組織し、頑強に打ち鍛え、革命的カールドルを充分に築きえなかつたことであつた。こゝにこそ、第一次換拳以来、関東大震災のプログラム、治安維持法の下での数度にわたる襲撃と党組織の破壊・白色テロル等々という、支配階級の一連の「戦争」の勝利が刻されたのであつたのだ。そして、十年以上にわたる革命運動の死滅と空白は、最も優れた革命家・革命闘士の大量の虐殺、多少とも訓練された先進的労働者の戦場や獄内での虐殺をもたらし、そして彼らに続く人々を指折り数えるほどにしな生み出しえなかつた。

そうして過去の革命運動の経験・伝統との断絶をもたらした。政治経験を十年間積み重ねることができなかつたばかりか、過去のそれをも無に帰したのであつた。これは日本革命運動にとつての最大の負い目である。(我々は戦前の日本共産党と戦後の日本共産党を決して同一に論じることはできない。それは別々の二つのものなのである。戦前から戦後に受けつがれたものは、革命運動が事実上壊滅し去つた後の、講座派——労働派の、非実践的で、革命運動の全理論問題のごく一部分を極大化してほじくりまわした学者的な解釈論争であり、その内容ばかりでなく、理論問題に対する学者的態度・本質でありまた、革命運動が死滅すればするほど、あるいは以上のような仕方で耐えることが多くなればなるほどふくらんだブルジョア民主主義の絶対化・美化であり、ブルジョア自由主義との融合であり、理論の学者的体質と裏腹の実践コンプレックスと革命的理論の軽視であり、獄中非転向が唯一の実践となつたことからする党物神化であつた。また国際階級闘争との生きた結合の切断であり、その結果としての国際権威主義であつた。戦後革命の敗北は、この時期に於ける社会主義の俗流化と、ブルジョア民主主義・ブルジョア自由主義との融合・民族社会主義として思想的に準備されていた。これはコミンテルンとは独自に進んだものでもあつた。(戦後共産党の思想や路線は、大戦時の官庁社会主義者の諸研究との融合をもつて形成されている。)

2. 戦後革命とその敗北の根本問題

戦後革命運動の中心問題は、結局のところ、プロレタリア独裁と社会主義（あるいは共産主義）の問題に帰着する。それはある側面からいえば、資本主義社会批判と階級・階級闘争の問題であり、また他の側面からいえばブルジョア民主主義批判・ブルジョア国家批判であり、また別の側面からいえば、国際主義の問題・民族の内在的超克・否定と世界革命の問題であり、更には組織・党組織の問題、あるいは党―階級の相互関係の問題である。あるいはこれらを集約して、米帝批判と共産主義的政治というように言うこともできるであろう。米帝批判として集約する時、人は奇異に思うかもしれない。というのは米帝批判は戦後一貫して「反米愛国」や「民族民主革命」等の民族主義・小ブルジョア民主主義の立場、また体制間矛盾論の観点から語られ、その旗印とされてきたからである。まさにその故にこそ、私は米帝批判として集約するのである。あるいはこれは戦後帝国主義全体の批判といった方が正確なのであるが、その中心・その集約点として米帝批判を問題とするのである。私はこの米帝批判の世界的・歴史的内容・即ち世界革命総体に関わる問題については後に別に述べる予定であるが、こゝで

は、日本革命運動の問題に引き寄せて問題にするつもりである。米帝批判とプロレタリア独裁と社会主義、まさにこれこそが戦後のブルジョアジーとプロレタリアートの闘争の中で一貫して問われてきた中心問題であり、体制間矛盾論―反米愛国―民族民主革命路線こそ、この点に於る最も惨めな、徹底した敗北を蒙り、ブルジョアのブルジョアの傾向と和し、入り混じり、融合し、俗流社会主義へと変質し、一切の生命を失って瓦解してしまつたのであつた。また、反スタトロツキズムも小ブルジョアの諸傾向と和し、入り混じり、敗北の道・俗流社会主義への転落・瓦解の道を進んでいる。問題の出発点は戦後革命とその敗北の中にあつた。戦後革命とその敗北の諸結果をもし一言でいうなら、それは次の点に帰結するだろう。アメリカ帝国主義は敗戦帝国主義たる日本帝国主義の危機を救い、それを一層近代的な帝国主義へと改造した。と同時に、その過程で日本共産党をも「改造」した。そして日本帝国主義はこの改造をテコとして、新たな急速な復興・成長をどげ、「改造」された日本共産党を自己の前に屈服させ、体内へ「吸収」していった。それはまた労働運動・プロレタリア運動を体内へ「吸収」していく過程と一体であつた。この日本帝国主義の改造と日本共産党の「改造」、そして両者の復興・成長とその融合、こゝに戦後革命運動の全内容があり、これと根本的に対立する新たな、真に革命的な社会主義の革命運動を創設すること、こゝに我々の全課題がある。そして、

我々の革命は、この改造と「改造」を革命し尽すことである。それは米帝打倒を主内容とする世界プロレタリア社会主義革命の直接的一環としてあるのだ。

- 戦後革命とその敗北、我々はそれを第二次大戦における日帝の敗戦から朝鮮戦争に到る十年近くに及ぶ一時代として把握することができるだろう。更に詳しくみれば、
- ① 日帝のポツダム宣言受諾前後から米占領軍政の開始に到る瞬間的な空白期、それ故にプロレタリアートにとって絶好の時期でありつゝ、無為に過した、その意味でそれに先行する一時期の敗北の深さを示した時期
 - ② 米占領軍政の民主化政策によって触発された革命的昂揚が、破局的な社会経済状態の下で発展し、二・一ストへ、革命的危機へとおし上げていく、プロレタリアートの攻勢の時期
 - ③ 二・一スト挫折からドッジプランに到る階級的均衡と、その下でブルジョアジーの力が復活し、プロレタリアートを一步一歩後退させ、その陣地を掘り崩していく時期
 - ④ 米帝の国際的な後盾をテコとして、ブルジョアジーが社会経済的・政治的・イデオロギー的・軍事的な全面攻勢・決戦を組織し、プロレタリアートの革命的中核を解体し、日本共産党の壊滅に到る時期
 - ⑤ 勝利したブルジョアジーが帝国主義復活・成長の基礎を打ち固め、労働運動を基本的に自己の体内に包摂し日本共産党の屈服・変質が、少なくともその基礎が確立

される時期
 というように区分することができるであろう。この過程全体を貫く問題は、一般に占領軍規定の問題として概括されている。

即ち、解放軍規定と占領下平和革命論の誤りとして。しかし、たゞそれを指摘するだけでは不十分である。そこからは反米民族解放と武力解放を掲げた五一年綱領を革命的として出発点にすえようとするか、あるいは戦後革命の敗北の本質的内容と日本共産党の瓦解・変質と、それらをこえるべき我々の地点を明らかにする教訓を何一つつかみえない、歴史的断絶と「認識の問題」に帰結させてしまふかしか導かれない。我々は、とおりいっぺんの概括から、更に革命の内容、従つて敗北の内容へと立ち入らねばならない。我々が少し立ち入って検討すれば、次の諸点が浮び上ってくるであろう。

一つはポツダム宣言として体现された国際政治に対する革命的立場の国際主義の問題・戦争と世界革命の問題であり、二つは民主主義の問題、即ち天皇制権力の解体をどのような型の民主主義として実現するかであり、三つは戦時統制経済の瓦解・財閥解体・経済的破局をどのような方向への統制に転化するのか、どういう統制を実施するかであり、四つは、地主制の打倒と土地改革・あるいは土地革命をどういう方向へ実施するかであり、五つは党の性格の問題である。我々はこゝにあのロシア二月十月革命とのある類似性をみることもできるであろう。

う。(もしこの類似でみるならば、日本共産党はこの時期紛れもなくメンシェヴィキとして登場したのであり、後の武装闘争も左翼エス・エルと類似しうるであろう。とすれば、国際派もまたメンシェヴィキ国際主義派を決してこえるものではなかったのだ。)

だが帝国主義は、第一次大戦後のヨーロッパ革命を圧殺し、ロシア革命を封殺し、ブルジョア民主主義的諸改革と改良の譲歩によってプロレタリアートの攻勢をくい止め、包摂しつつ、新たな発展と編成を世界的にも国内的にもつくり出していく世界的転回の中にあつたのであり、第二次大戦に於る米帝の勝利とヨーロッパ、日本への進駐及びIMF・ガット体制は、この過程を二〇年代以来主柱となつておし進めてきた米帝によって、この転回が完了されることを意味していたのであつた。メンシェヴィキやメンシェヴィキ国際主義派や左翼エス・エルは、ロシア革命にあつては、革命的プロレタリアートによつて、ボルシェヴィキによつて、社会主義革命によつて、打倒され、吸収され、磨滅されてしまつたが、西欧ではブルジョアジーによつて、ファシズムやニューディールによつて、戦時国家独占資本主義によつて解体され、吸収され、包摂されてきたのであつた。史上最後に帝国主義として登場した日本は、この点でも最後であつた。敗戦日本帝国主義の荒療治は日本共産党の五〇年分裂―七花八裂↓六全協を必然化し、そのことによつて完了したのであつた。古い社会主義は死命を制せられたの

の敗北が中国・アジア人民の抗日解放戦争と米帝への二重の敗北であつた時、それは日本プロレタリアートによつて、自国政府の敗北を内乱に転化し、抗日民族革命戦争と結合して世界革命へ進む絶好の時期であつた。(レーニンのいう「兩種の革命戦争の結合」の一層緊密な、一層発展したもの。) だがこの自国政府の敗北に自己の主体的要素・強制力を刻印することのできなかつたプロレタリアートは、自国政府の敗北・瓦解の下でもなお自らこの任につくことができず、破局と、米帝の占領と占領権力による諸改革からのみ全てが始まつたのであつた。(何という恥辱! この恥辱は苦痛なしに思うことはできない。我々はこのような自らの奴隸的過去を憎みその清算を望む。) 日本革命運動が一貫して追求してきた天皇制権力の打倒と政治的自由の実現・財閥支配の打倒・地主制の打倒等は、プロレタリアートによつてではなく、米占領権力によつて着手されたのである。米占領権力はポツダム宣言に基く反ファシズムの民主主義「革命」の守護神として登場し、共産党は解放軍としてこれを迎えたのであつた。「専制主義及び軍国主義からの

世界解放の軍隊としての連合国軍の日本進駐によつて、日本における民主主義的変革の端緒が開かれるに到つた」(日共第四回大会決定行動綱領・四五年十二月) こう宣言した時、共産党の第一歩の政治的解体は既に始まつたのだ。米帝はポツダム宣言の下に、天皇制権力の主柱の解体と広汎なブルジョア民主主義の実現・財閥解体と

だ。この古い俗流社会主義、あるいは社会主義の俗流化はどこにその淵源をもつのか、どこから発酵してきたのか。確かにこれはスターリン主義批判の問題に行き着く。だがしかし、決して三一・三二テーゼ等から直接発酵してきたものではない。(三〇年代初頭はコミンテルンはむしろ極左セクト主義の傾向にあつた。ドイツでも、中国でも、また日本でも。それもまた自然発生性の一変種であるが。) その敗北の後に、大戦の中で、戦時体制の中で発酵してきたものなのだ。国際的にはソ連の民族共産主義―「国家社会主義」・米ソ連合として。国内的には革命運動・プロレタリア運動の徹底的敗北・解体の下での、ブルジョア民主主義の絶対化・美化と、戦時統制経済の下で発酵しつつあつた自由主義的な官庁社会主義、及び「国家社会主義」の戦後民主主義転向との融合として。

革命運動の敗北の第一は、日本帝国主義の敗戦の瞬間そのものにあつた。即ち革命運動の成長、プロレタリア人民の階級闘争の成長によつて敗戦を闘い取つたものではないこと(第一次大戦のロシア・ドイツ、第二次大戦のイタリアは革命の成長が敗戦を闘い取つた。レーニンの革命的敗北主義の意義)、純粹に「外」からもたらされた敗戦であつたことのみならず、この自国政府の敗北を内乱へ、革命へ転化していく闘いを即座に開始しえなかつたことである。日帝にとつて第二次大戦が、中国・アジア侵略反革命戦争と日米帝国主義戦争であり、その戦時統制にかわる傾斜生産方式と資本家の生産サボや物資隠匿・インフレによる人民収奪を伴つた新たな資本家的官僚的統制・地主制解体と農地改革等、総じてブルジョア民主主義的改革であつた。だがこの改革が一担実施されるや、プロレタリアートの自然発生的革命的昂揚が急速に高まり、経済的破局と政治的危機の下で、ブルジョア民主主義的改革をこえて突き進むこと、即ち社会主義革命への転化を要求した。プロレタリアートの闘争が自然発生的にその方向に進み始めた時、米占領権力はその抑圧者・反革命としての本質を明らかにしたのであつたが(ex:二・一スト挫折)、日本共産党はそのことを自覚しえぬまゝ、無条件に、無準備に屈服した。これは共産党の第二の政治的解体であつた。

社会主義革命への前進はどのような課題としてあつたのであろうか。第一に天皇制権力機構の解体をブルジョア議会的共和制におしとどめるのではなく、それをこえて「より高度な型の民主主義」に武装した労働者動労人民の大衆組織による国家の創設・ソヴェト型民主主義へおし進めることであり、第二に経済的破局を「集中排除」としてではなく、財閥の収奪・主要生産―流通手段の社会的共有への転化と生産―分配の下からの革命的民主主義的統制の実施であり、(即刻の課題として、レーニン『さし迫る破局、それとどう闘うか』) 第三に農地改革を徹底した土地改革として、土地の国有化と、その上での土地の処分権の、地主を排除した農民委員会

への移讓・農民への分与以下からの土地收奪であり、以上の総体としての革命政府—プロレタリア権力を樹立することであった。それはブルジョアジーとの、あるいは占領権力との内乱を意味したのである。しかり、内乱へ向けて、武装蜂起に向けて、全ての活動を系統化し、全てを準備し、自己の組織を打ち鍛え、労働者人民を教育し、組織し、訓練していく党が要求されていたのである。(たとえばコミンテルン二回大会の諸報告・諸テーゼをみよ。統一戦線戦術や、議会や労働組合等あらゆるものを利用して最も公然たる大衆的な諸活動も、その一環としてこそ意味をもったのである。とくに生産管理戦術が広がっていた時には尚更のこと。)

このような内乱こそが、また内乱をめざした闘いこそが、中国の国共内戦—人民解放戦争と相携え、朝鮮戦争の發展と相携え、ポツダム体制をこえて国際革命へ前進したのである。アジアの革命を勝利させるものであったであろう。ポツダム宣言が体现する国際政治は、第二次大戦での米ソ蔣の反日連合の継続としての、米ソ蔣介石「国民政府」による極東体制の確立であったが、その本質は国際的なブルジョア民主主義体制として革命に反対し、革命の国際的発展に兩種の革命戦争の相携えての国際社会主義革命への前進を分断・抑圧することであった。中国人民解放戦争はこのポツダム体制と対立して、米帝の支援を受けた蔣介石国民党との内戦として戦われ(ソ連・スターリンの方針と対立して)、プロレタリア独裁

(その一形態としての人民民主独裁)を樹立していったのであり、朝鮮革命もまた米帝—李政権と対抗して南北で闘われていたのであった。日本社会主義革命はブルジョアジー—米帝と対抗し、ソ連・スターリンの方針と対立して、ポツダム体制を打ち破るものとしてのみ、即ち国際的ブルジョア民主主義体制を打ち破り、国際社会主義革命・国際的プロレタリア独裁へ発展するものとしてのみであったであろう。この内乱—国際社会主義革命か、国際ブルジョア民主主義体制の一環としての民主主義的祖国擁護か、そこに国際主義と民族主義との分岐点があった。これらに対して日本共産党はどのような態度をとったであろうか。

「日本共産党は現在進行しつつあるわが国のブルジョア民主主義革命を、平和的に、かつ民主主義的方法によって完成することを当面の基本目標とする。故に党は資本主義制度全体を直ちに廃止して、社会主義制度を実現することを主張するものではない。」(第五回大会宣言四六年二月) レーニンの『さし迫る破局』の結論は社会主義に向って進むことを恐れて前進できるか? であった。「社会主義に向って進まないでは、独占体から先へ進むことはできないというのが客観的な發展行程である。戦争が独占資本主義の国家独占資本主義への転化を非常にはやめ、それによって人類を非常に社会主義に近づけたということ、これが歴史の弁証法である。……国家独占資本主義が社会主義の最も完全な物質的準備で

あり、社会主義への入口であり、それと社会主義とよばれる一段との間にはどんな中間の段もないような歴史の階段の一段である。」共産党のこの立場はメンシェヴィキそのものである。「封建的専制的軍事警察政治制度としての天皇制の廃止」(前掲文)だが、このような政治制度としての天皇制は既に瓦解していたのであり、そこから更に前進することが要求されていたのだ。三二テーゼも「日本における労働者農民の革命は、軍事的・警察的・官僚的天皇制の転覆と同時に、かつそれと並んで、一切の搾取階級(ブルジョアジーを含めての)を中央並びに地方における政權から駆逐する場合にのみ勝利しうる。」と指摘していた。「天皇制に代えるに……一院制議會を主幹とする人民共和制政府を樹立する。」(前掲文)ブルジョア議会議会的共和制のスローガン! レーニンは既にロシア革命の最中に、ソヴェトがブルジョア議会議会的共和制をこえて、より高度な型の国家・より高度な型の民主主義をつくりだしたことを、「経済的崩壊と戦争の生みだす危機とがひどければひどいほど、戦争が人類に負わせた恐ろしい傷の治癒を容易にする最も完全な政治形態の必要性はそれだけ緊切となる」こと、そして「ブルジョア民主主義は寿命を終った」と、またプロレタリア的農民のソヴェト共和国が世界的任務として登場したと言ったのであった。三二テーゼもまた「労働者農民の革命は、それが労働者農民兵士ソヴェトの権力を樹立する場合にのみ勝利しうる」「ブルジョアII

地主的独裁の全国的機構を革命的にソヴェトによって代替すること」と提起し、それとソヴェトの中の共産党の指導的役割のみが日本のブルジョアジーがブルジョア的II地主的独裁の基礎、即ち人民の抑圧及び奴隷化のための警察II官僚機構を保持しながら、統治形態の領域で譲歩すること(ブルジョア共和制の布告)によって革命的変革を制限するのを防止しうるのだ。」と指摘していた。五回大会の宣言はまさしくこの「革命的変革を制限する」のに役立つのだ。

「農民の小作料の低減。地主の土地取上げと耕作権の確立。更に進んで皇室・社寺・貴族の土地・その他働かない地主の土地を民主国家が没収し、これを農民に分与する。」(前掲文) この力点は前者にあり、地主制が動搖・瓦解し、土地改革が焦眉の課題となっている時にあっては、改良主義である。直ちに小作農民を中心とし自作農民を加えた農民委員会を組織し、「直ちに自分の発意で土地改革を実現するように、また地元の農民代表の決定に基いて、直ちに地主の土地を没収するように農民によびかけること」(レーニン)こそが、そして地主の土地取上げに対する闘いを土地收奪へと發展させることこそが、上からのブルジョアの農地改革II労働分断・ブルジョアジーによる農民獲得に対して、下からの土地革命II革命的労働同盟を実現していく道であった。この改良主義は、ブルジョアジーによる農地改革に集約され農村を革命に対するブルジョアジーの防波堤へと帰結し

た。土地改革の革命的プロレタリア的方法の放棄と、改良的ブルジョア的方法への屈服。更にまたこの宣言は三二テーゼも指摘した農民と中小地主との対立の激しさに對して和解的であつた。

「大資本に對する人民政府の強力な統制、労働者が参加する経営協議会制度による産業の経営、金融機関を全面的に統一し、これを人民政府の管理に移す。中小商工業者を独占資本並びに官僚の不当干渉から解放し、彼らに營業の自由を確保させる。経営協議会制度を運用し、その全面的能率の昂揚を期すること。」(前掲文) これはレーニンが『さし迫る破局……』で提起した主要な統制方策を、その核心において換骨奪胎し、ブルジョアの改良主義と「古い資本主義の復活」「古い資本主義という広大な基層」「資本主義の幾多の最も原始的な基本的諸現象」とを結合したものに他ならない。これはワイマール下のドイツ資本主義の再建方策と基本的に異なるところが無い。レーニンは、銀行の国有化・シンジケートの国有化・營業の秘密の廃止、工業家・商人・一般に經營者を強制的にシンジケート化すること、住民を強制的に消費組合に結合するか、またはそういう結合を奨励し、それを統制すること等を主要な統制方策として提起したが、その核心は、「統制問題全体はせんじつめれば誰が誰を統制するか、即ちどの階級が統制する階級で、どの階級が統制される階級かという問題である。」(労働者が参加する経営協議会制度ではなく、労働者団体に

覆された後には、(ソヴェト権力を通じて)ブルジョア民主主義的革命を社会主義的革命に強行的に転化せしめるための闘争が党の根本的任務となる。たゞプロレタリアート独裁の樹立のみが、ブルジョア民主主義的任務の解決を保証し、これを最後まで遂行せしめるであらう。ソヴェト権力の樹立と強化、並びにそのソヴェト内における共産主義者の指導的役割の獲得は、プロレタリアートの独裁への移行に對する必要にして十分な前提……と提起したのであつたが、敗戦後事態はこれとは異なつたコースをとつて進んだのであつた。即ち天皇制は敗戦とともに、労働者農民革命によつてではなく、占領軍によつて解体され、国家権力は純粹にブルジョアジーの手中に移行し、弱体化したブルジョアジーは、天皇制という支柱を失なつて、矛盾をはらみつゝ占領軍政に從属していた。そしてこの下で、労働者農民の革命的昂揚が進み、革命的危機へ發展していた。今や、プロレタリア独裁―社会主義革命以外に道はなかつたのだ。ソヴェト権力もプロレタリア独裁として樹立される以外にはなかつた。三二テーゼが天皇制転覆の労働者農民革命によつて實現されるべきとした諸任務は、全てプロレタリア独裁の樹立・社会主義革命として實現される以外になつたのだ。それに突き進むか、ブルジョア民主主義の枠内に立ちどまるか、前者に向けて一切を集中していくか、後者の道にブルジョア体制に屈服し、從属するか、道は二つに一つであつた。前者の道こそ、三二テーゼが「日本

よる下からの統制の実施なのだ、これは階級融和と階級闘争の、プロ独の相違なのだ。」「資本の利益と革命的に手を切つて、本当に民主主義的な統制、即ち『下からの』統制、資本家に對する、金持に對する、労働者と貧農を組織することであり、『下層』の、民主主義派の、職員と労働者の支持と参加と関心と利益に立脚して、彼らに向つて統制の實行を呼びかける」こと、そのための「革命的プロレタリアートに指導される民主主義派の革命的独裁」「本当に革命的民主主義的な政府」であつた。そして「ブルジョアジーの支配は、真に革命的な、真の民主主義とは相入れない。二〇世紀の資本主義国では社会主義に向つて進むことを恐れて革命的民主主義であることはできない」のだ。宣言はまさにこの点に對して「ブルジョア民主主義革命が完成された後は、わが党はわが国社会の發展状況に應じ、人民大多數の賛成と支持とを得、かつ人民自身の努力によつて、平和かつ民主主義的方法により、……社会主義制度へ發展せしむることを期する。……これが實現にあつたは、党は暴力を用いず、独裁を排し、日本に於る社会の發展に適應せる民主主義的人民共和政府によつて、平和的教育的手段をもつてこれを遂行せんとするものである。」と宣言したので。何という非現実的段階論、何というブルジョアジーとの協調精神。これは「社会主義」伝導師の姿ではないか。

三二テーゼは「勝利せる人民革命によつて天皇制が転における革命は、國際的プロレタリア革命の勝利を、なかんずく日本に隣接する東洋の諸国(中国・朝鮮・インド等々)の反帝國主義的及び反封建的革命の勝利を著しく容易ならしめ、これを促進しうる。ソヴェト日本と勝利せるプロレタリアートの國々との同胞的な政治的及び經濟的同盟は、日本並びに全東洋の成功的な社会主義的発展を完全に保証するであらう。」と述べたこの道に完全に沿つたものであつた。まさにこのような國際主義・國際革命の視点を必要とし、それこそが占領権力との非和解的闘争へも赴かせたであらう。だが、五回大会の宣言は國際革命に何一つ言及していない。四回大会は「ポツダム宣言の厳正実施、民主主義諸國の平和政策支持。朝鮮の完全なる獨立。労働組合の國際的連携」とのみあげられ、朝鮮・中国・ベトナムの抗日民族革命戦争↓人民解放戦争には全く言及されていないのだ。これはまさしく、國際的ブルジョア民主主義体制の内部での民主主義的祖國擁護であり、民族主義であつた。國際的ブルジョア民主主義体制の下での、平和的民主主義的祖國擁護という「革命的祖國防衛主義」は、不可避的に米帝への依存へ導くものであつた。(後にこれは左翼エス・エルの的な民族主義・民族解放路線へ反転したのであつたが。)更に五回大会宣言は「わが党は『私有財産一般の否認』をかつて主張したことはない。『私有財産一般の否認』は、いかなる社会においても存在しうるものではない。原始共産制の崩壊以来、各時代に應じて、それぞれの私

有財産制は変遷してきた。将来、社会主義制度が実現することがあっても、私有財産はその社会に適應して存在するものである。」と宣言したのであった。これは「共産党宣言」の、科学的社會主義の根本の修正であり、ブルジョアイデオロギーへのあからさまな屈服・それとの融合ではないのか。これが共産党を名のる党の根本思想であったのだ。その他、戦術面においても、自然発生的に燃え広がっていた生産管理戦術を「人民による生産復興」の手段と捉え、産業復興闘争を提唱し、経済復興會議へ参加していく改良主義、権力問題の改良主義的議会の提議としての民主人民政權、そして自然発生的性への拜跪と、プロレタリアートの闘争の自然成長的・經濟主義的・組合主義的指導、農民闘争におけるセクト主義と改良主義等が開花し、組織もまた急激な水ぶくれ的増大・訓練されたカードルの欠除・党内教育と訓練の欠除によって、労働者の革命的熱意・献身と同時に、投機分子も流入し、(戦後民主主義転向)、自然発生的諸傾向も大量流入し、全体としてブルジョア・小ブルジョアイデオロギー、自然成長的・經濟主義的・組合主義政治の傾向、官僚的・家父長的指導と組織的自由主義の傾向が広がったのであった。更に合法政權へと姿を変えたのであった。(内乱を準備するという観点の全き欠除。)

これら全ては二・一ストの經濟主義的指導・日和見主義的樂觀主義の展望・弾圧に対する全くの無準備・非合法体制の欠除、そして散を乱しての闘争体制の解体等々と

地を明け渡し、遂にはドッジ・プランをポツダム宣言の實踐の一環として支持声明を出すまでに到ったのであった。まことに「社会民主主義的政治(共産主義的政治のこと)を組合主義的政治に引き下げるのが、とりもなおさず労働運動をブルジョア民主主義の道具にかえる地盤を準備することになる。」(『なにをなすべきか?』)のであり、共産党のこのような傾向は、共産党の基盤であった労働運動そのものをブルジョア民主主義の側に、それへの従属に導き、従ってまた力量を復活しつゝあったブルジョアジーへの従属に導き、労働運動の内的危機・従ってまた共産党自身の危機を促進したのであった。そしてこれは、ブルジョアジーの全面的攻勢の開始とともに全面化した。

戦後独占資本主義の再建過程の完了は、通貨―貿易―資本の面で、日本を、米帝を中軸とする世界資本主義体系に結びつけ、その一環に組み込み、集中生産方式によって独占体を再組織し、資本の系列化と財政均衡を進めるものであったが、それはまた大規模な企業合理化とともに、労働運動の革命的中核を解体し、プロレタリアートを決定的に資本主義の下に服従させ、再建・復興・成長に服従・協力させることを要求したのであった。またそれに照応するブルジョアジーの政治支配の復活・確立・打ち固めは、共産党の政治的地歩の解体を要求したのであった。共産党は利用すべき勢力から、除去すべき障害物となったのだ。ブルジョアジーの新たな經濟的政治

して集中的に現われたのであった。二・一スト挫折はプロレタリアートの攻勢が大きく頓座したこと、一旦終ったことを意味した。四五年末―四七年初頭に到る革命的危機の時期に、プロレタリアートの自然発生的攻勢は遂に自覚的な組織的な系統的な攻勢へと発展させられることがなかった。この時期、日本共産党は、メンシェヴィキ、あるいはエス・エルとして行動し、ブルジョアジーを救ったのである。逆に占領権力は、日帝のブルジョア民主主義的改革のために、この改造の荒療治のために共産党を利用したのであった。

二・一スト挫折後、一時的な階級的均衡状態が訪れ、この下でブルジョアジーは一步一步立ち直り、戦後国家独占資本主義再編の基盤確立と、政府機構の整備(新国会・中央市町村行政機構・警察・教育機構等々)をおし進めた。即ち、片山―芦田中道内閣の下で、傾斜生産方式による重点鉱工業への資金集中、企業合理化、インフレに対処する新賃金―物価体系と低賃金制確保、更に農地改革による小農制の確立と農民のブルジョア体制の支柱としての確保、及び膨大な財源調達と、食糧確保・低米価―低賃金体制の礎石としての確保であり、そこから更に、第二次吉田内閣によるドッジ・プランの実施・戦後独占資本主義の再建過程の完了・ブルジョアジーの攻勢への移行であった。この時共産党は、中道内閣への協力・生産復興運動・地域人民闘争あるいは職場権力論等と、改良主義と自然発生的性へ完全に転落し、歩一步と陣

的支配の確立は、共産党と労働運動の力を無力化し、おさえこむことよってのみありえたのである。これはまさにブルジョアジーの主導権の下で、ブルジョアジーが仕かけた決戦であった。しかしまた、初期の革命的危機における共産党の無為による攻勢の放棄によって、引き延ばされて不可避となった決戦であった。その間にブルジョアジーは力と自信を回復し、歩一步陣地を奪い返し共産党―プロレタリアートはなすところなく歩一步後退し、陣地を明け渡し、無準備の上、内部の動揺と戦列の乱れ・瓦解が始まっていた。ブルジョアジーの最初の攻撃は、大量首切り、フレームアップ、労働運動の革命的中核の解体、右翼編成として出現した。これに対し、共産党は、ドッジ・プラン支持から、今度は産業防衛闘争と民族ブルジョアジーとの同盟へ転換し(これはつまりるところ中小企業を救え! ということだ。)、地域権力闘争論に基いて社共合同闘争と統一委員会運動という、プロレタリアートの抵抗闘争・反撃の否定へ行き着き、一方での改良主義(統一委員会運動即権力闘争という又〇〇権力論)と、他方での極左主義(内閣打倒闘争の空語的強調と九月革命説―議會主義・改良主義の別の側面)を右往左往し、また、無理論・思想的無原則と自然成長性―敗北主義的指導を露呈したのであった。(これはまさにエス・エル主義であり、俗流社会主義の自然発生的性なのだ。)ブルジョアジーは、フレームアップの手段も含めて、プロレタリアートの自然発生的抵抗を排

除し、最初の一撃に勝利し、反共民同を育成し、共産党を労働運動の指導的地位から引きずり落し、更に共産党への壊滅攻撃へ、即ちレッド・パージと非合法化へ突進した。共産党は殆んどレッド・パージに抵抗できず、ブルジョアジーは反共民同の協力を得て、労働運動内から共産党を放逐した。無抵抗のレッド・パージは共産党内部に決定的動揺と瓦解をもたらした。(合法主義的・経済主義的・自然成長的・ブルジョア民主主義的弛緩が露呈したので。) そして非合法化のその時に、党の全面分裂(所感派と国際派諸分派への七花八裂)がおき、党は内部から解体状態に陥った。このレッド・パージへの無抵抗の敗北と五〇年分裂こそは、共産党のプロレタリア革命政党としての最終的解体であった。このコミンフォルム論評によって始まり、コミンフォルム論評によって終結した分派闘争は、その深刻さにもかゝらず、戦後革命の敗北一つ総括できなかったのである。メンシェヴィズム―エス・エル主義の破産が明らかになり(それ故に分裂がおきたのだが)、その克服の方向一つ把みとれないまま、国際派はメンシェヴィキ国際派として、所感派はエス・エル派として登場し、後者の左翼エス・エルへの転回によって終熄したのであった。これは共産党がマルクス・レーニン主義政党としての生命を最終的に失ったことの証しであった。ブルジョアジーは勝利し、この勝利を通して独立へ、単独講和と安保条約へ突き進んだ。

だが、ブルジョアジーの攻勢・決戦は国際的情勢に規定され、その一端でもあった。帝国主義はあらゆる独占への欲望であり、経済的独占には政治的独占が照応し、政治的には反動と暴力への熱望である。そしてブルジョア民主主義は、それが発達したものにねばるほど、その下での階級矛盾の激化―諸勢力の対立は一層公然としたものとなる。ブルジョアジーの支配は、革命勢力と長期にわたって共存することはできないし、敵対勢力とともに安定化することはない。ブルジョアジーの最も完成された支配形態としてのブルジョア民主主義は、現代ではたゞ革命勢力を抑圧し、変質させ、包摂し、その協力を受けることによってのみ完成するのであり、その民主主義一般としての形式性、みせかけの性格を完成する。現代の安定したブルジョア支配としてのブルジョア民主主義体制とは、大連合内での二つの勢力の競合であり、秩序派としての反対勢力の存在である。それはまさに革命的反対勢力に対する力での圧服、力での恫喝によって屈服させること、それと併行した懐柔し居心地のよい反対派としての地位を与え、保障することである。このようにして自らの帝国主義としての本質を貫くのである。これは国際的にも、国内的にも共通することである。戦後初期のブルジョア民主主義体制は、国際的にも、国内的にも二つの相対立する勢力の、反極軸Ⅱ反ファシズムとしての協調と均衡に於て成り立っていた。それをどのようにに民主主義や平和の甘ったるい言葉で讃美しても、

ブルジョアジーの支配への欲望、帝国主義的独占への欲望はこのような均衡と相入れず、反極軸Ⅱ反ファシズムの形をとった帝国主義的利害・欲望が達成されるや、直ちに連合した相手の、力による圧服・自己の安定した支配・資本主義的独占体制の確立に直進したのであった。資本主義の成立過程が、階級抑圧の、暴力と資本主義商品経済機構の確立との不可分一体によって特徴づけられるように、この時にも、階級抑圧の暴力の直接的行使・威嚇と資本主義世界経済機構の権力的手段による再建によって特徴づけられる。(商品関係の背後には暴力があり、暴力は商品関係への隷属を強制する。) 即ち米帝を中心に諸国ブルジョアジーを政治的・軍事的に結合し通貨・信用・貿易・資本の世界的循環をつくりだし、諸国プロレタリアートを力でもって屈服させ、資本主義再建・復興に包摂・協力させ、共産党を屈服させ、無力化無害化することであり、ソ連を力でもって恫喝・威嚇し屈服させ、帝国主義的世界的連鎖に一層深く引き入れ、協調させ、世界体制の一安定要素に転化させることであり、アジアの革命勢力を封じ込め、その革命の国際的波及をおしとどめることであった。ヨーロッパでギリシャの内乱↓チェコスロバキア危機へ、マインシャル・プランNATOとワルシャワ条約をめぐって、米帝―西欧ブルジョアジー―社民と、ソ連―東欧人民戦線政権―共産党の対立が頂点に達した時、極東でも同様の対立・拮抗が激化し、西欧で共産党がなす術なく敗北・屈服したのと

同様に、日本共産党も四九と五〇年の攻撃に殆んど抵抗を組織することができず、大打撃を受け、動揺と内部的瓦解を強めたのであった。これはまさしく、国際的ブルジョア民主主義体制の下での、平和的Ⅱ民主主義的祖国擁護という、人民戦線式民族主義の亜流の決定的敗北であった。だが、極東では別の革命勢力である人民解放戦争が、ヤルタ・ポツダム協定の別の形態への転化としてこの対立・拮抗の構造そのものを革命的に打ち破って前進していた。そして人民解放戦争の勝利・勝利的前進は、この拮抗・対立を国際的決戦に転化し、日本共産党を敗北からもう一度国際的決戦に引き入れた。二重性をもった国際反米統一戦線が形造られた。(反ファシズム抗日統一戦線の二重性の新たな発展としての、革命の不可避的深化としての二重性。)

朝鮮戦争下の闘いは、国際的―国内的な二重の決戦であった。しかし、国際的には人民解放戦争革命勢力は、勝利への国際的主導権を貫徹するには未だ未成熟であった。(国際的にはまだ限定された勢力であった。また革命の成熟度としても。) 国内的には日本共産党は決定的に敗北し、瓦解状態の下で、外からこの国際的決戦に引き入れられたのであった。だから戦争が勃発した時、所感派は、朝鮮戦争不介入を前面に押し出す小ブルジョア民族主義の声明をだし(中国地方委員会をそれを「口にプロレタリア国際主義を認めながら、実践的に国内の経済闘争を強調し、人民解放軍支持の立場を明らかにす

ることなく、この戦争に巻き込まれないことを主張する中立主義・ブルジョア民族主義・チトー主義への道」と批判した。）全面講和の署名運動に終始していた。だが四全協によって突如戦術転換し、コミンフォルム論評の支持によって国際派諸分派を解体し、五一年綱領と軍事方針を打ち出した。問題は国際権威主義にあるのではなく、あくまでその内容・その戦術・具体的実践の正否にある。五一年綱領路線（これは劉少奇・テゼ・ヤジュー・トルコ等、ほぼ共通の内容をもって構成されている。）の中心点は、以前の誤りを「敗戦後の日本が帝国主義国であるか、それとも植民地または従属国であるかを明確にしなかつたこと」にあるとし、「日本の革命の性格を、従属国の革命とし、民族解放民主革命と規定した」こと、そして民族解放闘争としての武力解放路線を打ちだし、「天皇・旧反動軍閥・特権官僚・寄生地主・独占資本家」を米帝に従属しつゝ支配的地位にある政治勢力として並べあげ、「現在の民族解放民主革命の主要な内容をなすのは、半封建的土地所有制度の解体―革命的土壌改革である」とし、また民族ブルジョアジーとの統一戦線・民族民主戦線、愛国主義を打ち出した点にある。戦術的には、地域権力闘争論に基いて、地域人民闘争プラス遊撃戦の戦術であり、更に主要な農村バルチザンの戦術であった。これは四全協から準備され、五二年五全協と夏までの半年間実行に移された。国際的決戦―国際的戦争の

あり、権力奪取の準備の系統的追求の欠除・従って党の再結束・団結強化・再武装の欠除であった。とくに党がプロレタリアートの隊列から放逐され、孤立し、非合法化にあつただけに、民族主義と民族ブルジョアジーとの統一戦線の小ブルジョアの幻想・階級観点の放棄は、自然発生的な小ブルジョアの危機感と融合したのであつた。

これはまさしく俗流社会主義であり、あらゆる面（左翼）エス・エルそのものである。エス・エルが二月革命後ブルジョアジーと協調し、十月革命の過程で左翼エス・エルが分離し、ボルシェヴィキと連合し、そして社会主義革命の進行そのものうちに磨滅し、あるいはボルシェヴィキに解体されていったのに対し、日本共産党は敗戦後のブルジョア民主主義的改革において米帝と連合し、資本主義再建過程の完了からブルジョアジーが決戦に向つた時、左翼エス・エルとして分離し、それと闘ったが、朝鮮戦争特需をテコとした資本主義の復興そのもののうちに磨滅し、あるいはブルジョアジーに解体されていったのであつた。ロシアのエス・エルは農民に立脚していたが、日本共産党はプロレタリアートに立脚していた。ロシアの農民はエス・エルからボルシェヴィキに引き寄せられ、クロンシュタット叛乱後、NEPの妥協によって新たな形態の同盟に移行したが、日本プロレタリアートは日本共産党から反共民同によってブルジョアジーに引き寄せられ、更に破防法闘争・反戦闘争によつてブルジョアジーとの妥協形態たる小ブルジョア民主

たゞ中にあり、日本がその直接の前線基地に転化され、事実上の戦時下であり、ブルジョアジーが党を非合法化し、直接の暴力をさし向け、決戦を強要している時、あらゆる真剣な闘いは内乱に転化するし、またしなければならぬ。その系統的組織化・発展を武装闘争として追求することも正しい。そして共産党は敗北し、後退した最後の地点で、この決戦に武装闘争でもって立ち向つた。だが、武装闘争は正しい革命路線、特定の具体的な階級情勢・諸階級の政治的状态と相互関係についての正しい評価と正しい戦術体系、プロレタリアートの教育・組織化・訓練、党の組織・活動体系の質的強化・固い団結の強化等と結合し、その基礎の上で進められねばならない。とくにこの時期は、党とプロレタリアートが敗北し、後退し、動揺と瓦解の中にあるが故に、それをどう克服し政治的組織的再武装をするかをぬきにしては、一步の前進もありえなかつたのである。五一年綱領路線の致命的弱点は、戦後革命の総括・諸改革と諸階級の社会的政治的相互関係の評価の全き欠除あるいは誤りであり（帝国主義国から従属国へと設問して従属国とする初步的な理論的誤りも含めて）、とくに階級・階級闘争の観点を放棄し、民族・民族闘争の観点に純化し、プロレタリア国際主義を小ブルジョア左翼民族主義におきかえ、プロレタリアートの階級的独自性をいかに打ち鍛えるかの観点を放棄し、武装闘争を具体的な階級闘争から出発させるのではなく、抽象的な遊撃戦論から出発させたことで

主義派に引き寄せられたのであつた。この完成過程こそ、五三―五五年の、六全協への、太田―岩井路線確立への過程に他ならない。即ち、党の壊滅状態から、五二年末の右翼日和見戦術への転換（右翼民族主義・国民統一戦線・議会主義戦術・平和経済プラン等）から五四年一―一方針の屈服主義（「敵は優勢・味方は劣勢」論と無原則な統一と団結論）―非政治主義・日常闘争主義・身の廻り主義・サークル主義、そして五五年一・一決定と六全協の政策転換・自己批判と党の小ブルジョアの親陸団体化と右翼的な小ブルジョア民主主義路線へと到る過程である。いうまでもなく、階級闘争には退却の時期もあり、整然たる退却は攻勢よりも一層困難なものであり、我々は勝利のためには退却の仕方を守らねばならない。まさに、プロレタリアートの革命的な中核を保持して、断固たを結束の下に整然と退却し、偉大な攻勢・戦闘の経験・教訓を学びつゝ、新たな準備を組織するのか、散を乱して敗走し、戦線を壊滅させ、際限なく後退し、旗を巻いて屈服するのか、これこそボルシェヴィキと解党派メンシェヴィキとの相違であつた。日本共産党は、左翼エス・エルの道が壊滅に終つたとき、ひたすら後者の道を進んだのであつた。小ブルジョア的な俗流社会主義の無思想性・無原則性には、それ以外になかつたのである。小ブルジョアの危機感と突撃は、その敗北後、敗北感に打ちひしがれて、闘争意欲を喪失し、全てにたゞひたすら妥協を求め、それは急速に復興し成長し始めた資本主

義とブルジョアジーによって整備されたブルジョア民主主義体制と融合し、プロレタリアートの自然発生的戦闘性に対してさえ、右から敵対する、右翼の小ブルジョア民主主義派として自己を完成したのであった。右翼メンシェヴィキ現代修正主義として。

他方、プロレタリアートの闘争は、最初の決戦での敗北、革命の核心の瓦解、戦線の潰滅と停滞から、新たな自然発生的抵抗闘争を開始し、左翼の小ブルジョア民主主義の潮流を生みだし、破防法闘争・反戦闘争・反合理化闘争を朝鮮戦争下でくり広げた。(しかしそれが小ブルジョア民主主義的・平和主義的・左翼結合主義的傾向によって彩られていたことは否定できない。そして、これを克服し、教育し、訓練し、打ち鍛えていく前衛はなかったのだ。)そして朝鮮戦争特需から、戦後資本主義が本格的成長を開始する過渡的な再編期のデフレ・合理化・資本の系列化・首切りに対して、尼鋼・日産・日鋼室蘭闘争等の戦闘的抵抗闘争を闘ったが、ブルジョアジーはこの抵抗を各個激破することによって、プロレタリアートを一層深く資本主義の成長に引き入れ、協力を取りつけ、プロレタリアートは敗北によって資本主義の成長に自己の運命を託す方向に転じていき、一層妥協的な、純然たる小ブルジョア民主主義派・組合主義・経済主義が指導的潮流となった。また、資本主義の成長は、ブルジョア民主主義・民族主義・平和主義を全面化し、生産力主義―ブラグマチズム―近代主義・合理主義を侵

本主義の急速な大規模な成長、純然たるブルジョア支配とブルジョア民主主義的外形をもった帝国主義国家権力、アメリカ体制への平準化・日米同盟、ブルジョア民主主義の道具としての労働運動、社会の安定層としての農民、小ブルジョア民主主義的「反政府党」、体制内の小ブルジョア的一翼としての共産党、これこそ、戦後革命とその敗北の結果であり、米帝とブルジョアジーの勝利の結果であった。それは旧い小ブルジョアのな俗流社会主義の壊滅でもあった。(これは遂に「国民社会主義」へと成就したのである。)

3. 敗北の徹底と革命的共産主義。

プロレタリア運動の新たな再生

五〇年代中葉から六〇年代中葉に到る十年間は、日本帝国主義の急激な復活・成長と、国際的権力要素としての抬頭として、また、それに対する民主主義的動員の時代―民主主義的抵抗闘争として特徴づけられる。しかしこの民主主義的動員の一時代は、決して新たな準備の時期、即ちプロレタリアートの革命の中核を再結集し、再組織し、教育・訓練し、来たるべき階級的諸衝突・革命的昂揚に備えていくものとなることができずに逆に戦後革命の敗北―ブルジョアジーの勝利が、無慈悲に徹底しておし進められ、完成された時期であった。プロレタリ

透させていった。資本主義の成長は重化学化―技術革新・合理化―生産力水準の平準化衝動をテコに、それに全社会関係をくみ込み、再編していくことを通して進んだのであった。そして、組合主義的政治は労働者のブルジョア政治として、労働運動を一步一步ブルジョア民主主義の道具に変えていったのである。即ち、ブルジョア国家機構の整備の過程で、基地闘争等の民主主義的抵抗闘争も、「平和と民主主義」一般、農民の小土地所有者意識・労働者の組合主義意識をこえることができず、ブルジョア議会制内の反政府党へ、政治的に収斂したのである。かくして米占領権力が当初実施した政策・ポツダム宣言の実施、平和共存・自由競争と平和的民主主義等々は、社・共・労働運動の共通のスローガンとなり、運動の「原理」となり、ブルジョアジーは自己の国家権力を整備し、日米同盟の下での資本主義の成長によって、それらを本質的に無力・無害な反政府派として迎え入れ、支配体制の一安定装置として体制内に包摂し、戦後体制IIアメリカ体制への平準化を忠実に実践したのであった。そして小土地所有者・小商品生産者となった農民は、その重税・低米価政策にもかかわらず、生産力を発展させそれとともにまた「経済的環境、商品経済の環境が、不可避的に農民を(いつでもというわけではないが、圧倒的多数の場合に)小商人に、投機者に変えるのである。」(『プロレタリア独裁の時期における経済と政治』)というように、小所有者の欲求と意識を強めたのであった。資

産運動を支配した小ブルジョア民主主義派が次々とブルジョアジーの前に屈服・後退し、プロレタリアートの戦闘力を堀り崩し、プロレタリア運動の内部からの解体が進行していき、また再建共産党が次々と戦闘分子を排除し、現代修正主義として自己を成長させ、完成し、日本帝国主義への身売りを進めていく過程であった。最初の五年間は、プロレタリアートの民主主義的抵抗が、社民と小ブルジョア化した共産党―小ブルジョア民主主義派の指導の下で打ち続いた。この自然発生的な戦闘的闘争は絶えず小ブルジョア民主主義派をのりこえつゝも、自己を意識的II組織的な革命勢力へと築いていくことができず、結局はブルジョアジーとの本当の対立に直面するや、小ブルジョア民主主義派に屈服した。ブルジョアジーは動搖的でありながらもたえず攻勢にあり、自己の勝利を確認しつゝ、自己の陣地を打ち固めた。この決算は六〇年安保―三池闘争であった。ブルジョアジーの勝利が最後の確認され、社民と共産党―小ブルジョア民主主義派の屈服が最終的に明らかになり、プロレタリアートの自然発生的戦闘的民主主義的抵抗が、それを最もラディカルに体现した共産主義者同盟と三池の労働者の敗北・崩壊によって、その一時期の終りを告げた。三池闘争は五二年以来連続していったブルジョアジーの力の増大・攻勢に対する、プロレタリアートの防衛闘争・抵抗闘争の頂点であり、決戦であった。

この十年近い攻防の中で、一方では資本主義の急速な

成長—重化学化・技術革新・都市化（資本主義商品経済の高度化・全社会的成熟過程）の下で、生産力主義—プラグマチズム—経済主義・組合主義が浸透し、成長し、純化していくとともに、他方では、激しい搾取・合理化・収奪—商品経済の浸透・成熟による旧来の社会的生活諸関係の解体とブルジョアジー・資本への隷属の深化に対する激しい反抗を生みだし、打ち鍛えつゝ、突出した地点で抑圧され、前者へ解体・吸収されるという過程を蓄積した。三池闘争はその頂点であるとともに、石炭産業のスクラップ化によって後者が前者に最も激しく衝突し、極限にまでつきつめられ、「去るも地獄、残るも地獄」という本質的な対立と闘争へと高めたのであった。

かくして三池闘争は炭住街・婦人・少年を含めた総体的抵抗闘争に発展し、小ブルジョアジーをも敵味方に分解し、生活諸関係全体を含む総力戦へ徹底化し、更に抵抗闘争をこえて、プロレタリアートの本源的な組織された暴力力ヘルメット・覆面・カン棒・ツルハンで武装した屈強な三池軍隊を創出し、全九州の機動隊・右翼暴力団を打ち破り、撃退したのであった。だがこの闘いが、全ブルジョアジーとブルジョア国家権力の結束に直面し、資本制私的所有そのものが問題になった時、組合主義、小ブルジョア民主主義派が舞台の正面に登場し、労働者軍隊を解体・集約し、一戦も交えることなく、ブルジョアジーに屈服していったのであった。ホッパー前の敗走から政策転換闘争への雪崩は、プロレタリアートの戦線

の瓦解・潰走・解体へ連なり、組合主義—小ブルジョア民主主義派はブルジョアジーの側へ公然と融着・移行していき、プロレタリア運動は解体と風化へ向ったのであった。（この三池闘争の登りつめた地点・その敗北からの前進は、十年後に全共闘運動から三里塚闘争へと漸くおし進められることになった。今、それは更にプロレタリアートの戦線へと深く掘り進みつゝある。）

他方、安保闘争もまた五二年来のブルジョアジーの政治的力の増大・攻勢による民主主義闘争・防衛的抵抗闘争の登りつめた頂点であり、決算であった。この十年近い攻防の中で、一方ではブルジョア国家体制の整備・強化・安定化—帝国主義上部構造の構築と、米ソ対立—平和共存—日米同盟の枠の中での、この枠に依拠した日本帝国主義の平準化衝動—世界市場への登場の下で、ブルジョア民主主義・議会主義・小市民的ナショナリズムと平和主義が深く浸透し、成長し、純化していくとともに、他方では激しい抑圧・反動・圧迫と旧来の政治的諸関係の解体とブルジョアジーへの一層の政治的隷属に対する激しい反抗を生みだし、打ち鍛えつゝ、突出した地点で抑圧され、前者へ解体・吸収されるという過程を蓄積したのであった。安保闘争はその頂点であるとともにその総体的性と国際性（西欧・トルコ・ベトナム・南朝鮮・キューバ・アルジェリアと連なる国際階級闘争の昂揚）によって、更に共産主義者同盟という萌芽的革命的潮流を意識的牽引者としてもったが故に、後者が前者に激しく

衝突し、極限にまで達し、国会構内突入にまで到達したのであった。だがまさにそこからブルジョア国家権力との真実の闘争・権力をめぐる真の意味での階級闘争が政治闘争が始まるうとした時、それへの前進に直面したとき共産主義者同盟は解体し、市民主義・小ブルジョア民主主義派が舞台の正面に登場し、運動全体を築約し、自らブルジョアジーに屈服していったのであった。国会解散・総選挙要求—国会前の敗走から構造改革路線と民族主義的カンパニアの抗争、両者のブルジョア議会主義への純化の雪崩は、プロレタリアートの政治戦線の瓦解・潰走・解体へ連なり、市民主義—小ブルジョア民主主義派はブルジョアジーの側へ、ブルジョア国家権力の側へ公然と融着・移行していき、プロレタリア運動・政治闘争は解体と風化に向ったのであった。（この安保闘争が登りつめた地点・その敗北からの前進は、七年後に「国際主義と組織された暴力」として漸くおし進められることとなった。今それはインドシナ革命戦争—台湾・南部朝鮮解放闘争—沖繩闘争として、権力をめぐる真の意味での階級闘争—政治闘争として、プロレタリア独裁のための闘争として深く掘り進んでいる。）

105 六〇年以降の五年間は、世界市場へ踏み出した日本資本主義が、資本主義世界経済と一層平準化・同質化し、産業構造の高度化—独占体制の強化—技術革新—労働力の構造的創出—商品輸出を進め、資本主義商品経済が高度化し、全社会的に成熟し、ブルジョア国家体制の綱の

目が一層中央集権的に、かつ社会の隅々にまで張りめぐらされ、ブルジョアジーが自らを謳歌し、その社会—経済的・政治的・イデオロギイの支配を全社会的に隅々にまで浸透させ、張りめぐらし、更に自己の国際的地位を急上昇させたのであった。労働者の若干の上層を賈収し労働運動の主要部分を自己の陣営にひきつけ、「帝国主義労働運動」を形作り始め、プロレタリアートのあらゆる運動の解体を進め、確固たるブルジョアインテリゲンチヤの層を形成し、強力な体制派インテリゲンチヤの集団を獲得し、生産力主義—プラグマチズム—経済主義・合理主義を、国益主義と最も安定したブルジョア民主主義を謳歌し、農民に対して一方で攻撃を強化しつゝ、他方で小商品生産者としての欲求・意識を強めさせてきた。そして小ブルジョア民主主義派は社民が社会帝国主義へ移行していき、共産党は現代修正主義として純化し、帝国主義の体内に、その一支柱として定着していった。かくして日本帝国主義はその政治的風土においても、米帝・西欧と平準化したのであった。この大連合と政治的無風こそ、「アメリカ体制」の完成であった。民主主義闘争を担っていた労働運動内の戦闘的分子は殆んど攻撃され、分解瓦解させられ、パージされ、戦闘的インテリゲンチヤの内部においても、動揺・失意・転向が打ち続いたのであった。これはまさしく現代の「冬の時代」であった。敵権力の直接の迫害によってであるよりも、この爛熟したブルジョア社会・ブルジョア国家と、どれだけ

ラディカルに思想的に政治的拮抗・対峙を持續しうるかとして。

ところでこの十年間、プロレタリアートの運動を特徴づけた小ブルジョア民主主義の社会政治的基礎はどの点にあったのだろうか。第一は国際階級闘争—世界革命からの分離隔絶の完成と、米ソ平和共存—帝國主義国際反革命の基礎の上での一国的階級闘争に限定され、その上での一国的な平和的民主主義の要求という、小市民的民族主義・平和主義。第二は急速な重化学化・技術革新・高成長・資本主義商品経済の全社会的成熟の下で、生産力主義—プラグマチズム—経済主義・組合主義の影響が、かつての共産党から民間社会党へと成熟し、全面化したこと。第三は、労働者と農民の分断、即ちプロレタリアートの政治の狭い枠への固定化、全生産社会関係—全階級関係（即ちプロレタリアートの全生活関係）に対する部分性への固定化、個々の資本—賃労働の狭い同職組合的枠への固定化。第四は都市と農村における小ブルジョアの圧力の増大—小農民の小所有者・小商品生産者の立場・意識が商品経済の環境に一層深く引き入れられることによって成長し、かつそこから労働者の新たな部分がたえず供給され、商品所有者の意識をもちこんだこと。また都市の小経営者・小商人の成長、とくに新中間層—インテリゲンチヤ・技術者・官吏・事務職員を膨大に生みだし（その多くは小経営者・小ブルジョアジエの中から供給された）、彼らの多くをプロレタリアート

リアートの中にもち込まれ、広げられたのであった。

この十年間は日本共産党が現代修正主義として成熟・純化する過程でもあったが、それが最終的に明らかになったのは、六六年日中両党会談の決裂であった。我々はこの決裂の真の内容を知ることができないが、それは中ソ対立と国際統一戦線の問題であるとともに、これが北爆の開始・インドネシア反革命クーデター・日「韓」条約直後であり、それに対する日共の公式立場が四・二九論文を帰結したことを考える時、決裂の中心に、敵の武力弾圧の奇襲に備えること、あるいは蜂起の準備を開始することの問題があったであろう。これは既に中共が「総路線についての提案」の中で提起していたことであり、国際情勢はそれを現実問題に登場させたのであり、中共が日共に要求する権利は、プロレタリア国際主義からして当然にもあったからである。革命党であれば、それは真剣な実践問題であった。だが日共は完全な日和見主義の立場からこれを一顧だにしなかった。いや既にそれを真剣に考えうる組織ではなくなっていたのだ。そしてこれはあの四・二九論文—国家論の修正へ帰結したのだ。（このように考えると、我々の立ち遅れもまた痛苦と恥かしさの念とともに明らかになるのだ。）

同時にこの十年間はまた、日本共産党と分離した共産主義思想の復活、あるいは新たな生成の時期でもあった。スターリン批判とハンガリー動乱に始まり、安保闘争を経て、キューバ危機から中ソ論争と相結びつゝ、革命的

へ接近させ、流入させ、融合させたことである。「資本主義は、国民労働の全ての分野で勤務者の数をとくに急速にたかめており、インテリゲンチヤに対する需要を増大させている。このインテリゲンチヤは、その他の諸階級に伍して独特の地位を占めており、一部はその縁故や見解その他の点でブルジョアジエと結び、一部は資本主義がインテリゲンチヤから増々自立的な地位を奪い彼らに従属的な雇人にかえ、彼らの生活水準を引き下げようと脅かすにつれて、賃金労働者と結ぶ。こゝに考察している社会層の過渡的な、不安定な、矛盾に満ちた地位は、半世紀前マルクスがその諷刺によってあれほど容赦なく鞭打った、あの中途半端な、折衷主義的な見解、対立した諸原理や諸見地のあの混合物、言葉の上でいと高い領域にまで高揚し、住民の歴史的諸群の衝突を空文句でぼかそうとするあの志向が、この層の間にとくに広汎に行きわたっていることに反映している。」（レーニン「カウツキー『ベルンシュタインと社会民主党の綱領』の書評」） 実に戦後資本主義の急成長、その産業構造の高度化—技術革新—管理機構の巨大化は、このインテリゲンチヤ（技術者・教員・事務職員や官吏の一定層・知的業務に従事している人々を含めて）を膨大につくりだし、それだけ彼らに従属的雇人にかえ、生活水準を引き下げ、また組織化された単純作業を増大し、かくしてプロレタリア化し、プロレタリア運動に加わってきた。しかしそれだけまた上に引用した見解・志向がプロレタ

マルクス主義・共産主義の復活が求められていった。確かに思想運動としてみる時、その中心的傾向を担ったのは革共同—反スタマルクス主義であった。ブンドは実践的には中心を担い、そして実践的にこの傾向をつき破りのりこえて進んでいたものであったが、思想的にこえることができず、解体過程で主要部分がこの傾向に吸収されたのであった。この傾向は、壊滅した旧い小ブルジョア的な俗流社会主義（後に「国民社会主義」となった）に対する批判をもって登場したのであったが、これもまた小ブルジョア的な、インテリゲンチヤ的な社会主義にとどまったのであった。（その疎外論・主体性論・階級意識論—プロレタリア的人間の論理、サークル主義的組織論、一國主義的なソ連論争、階級闘争なき過渡期社会「論」、観念的な世界主義—反帝反スタと実践上の一國主義、実践上の平和主義と組合主義・経済主義……これらについては私は前に述べたのでくり返さない。）このとくに初期マルクスとトロツキーをもってする革命的マルクス主義復活の試みは、国際階級闘争からの分断・隔絶と、資本主義商品経済の高度化・全社会的成熟と、プロレタリアートの敗北・後退、小ブルジョア民主主義の開花の下で、膨大に形成され、その社会的地位を低下し増々プロレタリア化していき、階級闘争に引き入れられていくインテリゲンチヤの不満・動揺・幻想・現状脱出の欲求等と混じりあいつゝ、インテリゲンチヤ的な観念的な左翼反対派運動—小ブルジョア社会主義を帰結し

たのであった。我々はこの傾向に「言葉の上でいと高い領域にまで高揚し、住民の歴史的諸群の衝突を空文句でぼかそうとするあの志向」を見出すことはたやすいことである。そして事実この衝突が始まった時、それは白日の下に曝され、分解し、この衝突が一層激しくなった時、それは危機と瓦解に陥ったのだ。(これについても私は前に述べたので、くり返すまでもないであろう。)

だが一つの完成は新たな始まりである。資本主義はその蓄積の進展とともに、不可避的により広くより深くより激しい階級対立をつくりだし、プロレタリアートの全社会的力を準備し、打ち鍛える。プロレタリアートの敗北の完成は同時により広く深く激しい階級闘争を準備しプロレタリアートを再び革命の煉獄・より進んだより深い革命の煉獄につれ戻す過程でもあった。かつそれは帝国主義と世界革命の時代、世界革命の過渡期にふさわしく世界的であった。アメリカ世界体制の動揺・それを打ち破る闘いの抬頭である。アメリカ世界体制——それは経済的にはアメリカの金・ドル・資本力・生産力水準を軸に、先進資本主義諸国間の通貨・信用・貿易・資本の循環を、権力的手段をテコにつくりだし、産業構造・独占形態・生産・技術水準を同質化し、平準化し、資本主義世界経済として一層緊密化した。だがしかし、それは一方では米帝による後進諸国の大規模な収奪、その経済の破壊・従属化・停滞・貧困化をテコ・基盤として、他方では米経済の国家財政への依存・インフレーション

と、産軍複合体を基盤とする一層高度化した産業部門と技術水準と、超巨大資本の世界進出をテコとして行なわれ、一方には生産・資本・信用の過剰を、インフレーションを、他方には停滞・貧困・飢餓を蓄積した。政治的・軍事的には米帝の「不敗」の、巨大な軍事力を全世界にはりめぐらし、それを軸に諸列強間の同盟を組織し、ソ連を屈服させ、協議させ、アジアの革命国家を封じこめ、帝国主義諸国内のプロレタリアートを政治的・軍事的重臣とブルジョア民主主義の外観と経済成長・福祉国家の幻想で抑えつけ、後進諸国には武力介入・クーデター・軍事カライ政権でもって抑圧し、「世界体系・世界権力としての帝国主義」として君臨した。だがまさにそのことによって「世界の住民の圧倒的な多数を占める」三大陸の人民を教育し、訓練し、「異常な速さでその解放のための闘争に引き入れ」世界的に結合する基盤をつくりだし、またそのことによって帝国主義諸国プロレタリアートを世界プロレタリアートとして、その世界的任務を教育する条件をつくりだし、また、帝国主義発展の不均衡性と利害対立によって、自らこの帝国主義世界体系を動揺させ、自らその矛盾に苦悶し、世界的危機を準備したのであった。

ベトナム革命戦争は、このアメリカ世界体制の環を打ち砕いた。人民解放戦争は再び雄々しく世界革命へ登場し、三大陸に燎原の火の如く広がった。そしてアメリカのたゞ中で、黒人解放闘争は、アメリカの社会・政治

体制を全世界に暴露し、腐朽せるアメリカの中に国際主義的な激しい階級闘争を登場させ、アメリカ社会・政治体制からの最初の脱出口、革命的爆発の突破口をこじあげた。更に中国プロ文革は、走資実権派を打倒し、革命的社会主義・共産主義を復権し、ソ連・現代修正主義を暴露し、その世界社会主義革命に対する軌・制動をふり払った。また欧米において、国際的反戦・反政府闘争・大学闘争は、世界革命の高潮が、帝国主義諸国内部にも最初の昂揚をつくりだしたことを明らかにした。これらとともに、これらを基盤として、日本革命運動とプロレタリア運動は復活し始めたのだ。他方、日本帝国主義は、このアメリカ世界体制が動揺し、矛盾を深め、危機を迎え始めたまさにその時に、その最大の焦点・反帝革命闘争の嵐の中にあるアジアへ、商品と資本の進出を激しく強め、動揺するアメリカ世界体制を土台として、それを一方で再編補強し、他方で一層動揺・矛盾を深めつつ、アジア侵略反革命に踏み出し、国際的権力要素として登場した。また国内では社会の全分野で金融寡頭制支配を強め、社会的諸関係をその下に再編し、腐朽化・寄生性・インフレーション・収奪・暴力への依存を強め、戦後ブルジョア民主主義体制からの全体的転換を、その社会・経済的基礎から開始し、反動と暴力への熱望を強め、官僚的・軍事的抑圧機構がその姿を頭わにし、強まった。それとともに階級間の対立・動揺・衝突が、金融寡頭制に対する全人民の激しい政治的・経済的対立・軌

が顕わになり始めた。社会帝国主義者と現代修正主義は自己の本質を暴露し、小ブルジョアジーの動揺は深まった。日本階級闘争は再び世界階級闘争と直接に、しっかりと結びつき、ベトナム・アジア反帝解放闘争、プロレタリア国家の社会主義永続革命・アメリカ階級闘争と結合し、世界社会主義革命の飛躍を切り拓くべき重要な環となった。しかし、まさしく社会主義革命が現実性として日程に上ったのである。階級闘争は、その継続・その発展が不可避的に社会主義革命に行き着く以外にない、またそれまでやむことのない新たな昂揚として始まった。この昂揚は強力な爆発と深い沈静をくり返しつつ、次々と戦線を広げ、深め、強化しながら、プロレタリアートを徹底的に教育し、訓練し、打ち鍛え、遂に革命の主体指導者として舞台の正面で雄々しく進軍させるに到る、そしてその時にこそ勝利を獲得しうる永続的な闘争として始まった。「社会主義革命は、一つの行動ではなく、一つの戦線にわたる一つの戦闘ではなく、激烈な階級的諸衝突の一時代であり、全戦線にわたる、即ち経済及び政治上のあらゆる問題に関する、長く続くいくたの戦闘であって、この戦闘はブルジョアジーの収奪としてのみ終りうるものである。」「社会主義革命は大ストライキまたは街頭デモンストレーション、または飢餓一揆、または軍事的蜂起、または植民地暴動によって点火されるばかりでなく、ドレフュス事件やあるいはツァーベルン事件のようなどんな政治的危機からでも、あるいは被抑

民族の分離問題に関する一般投票等に基づいてもまた点火されるのである。」(レーニン『社会主義革命と民族自決権』) 世界的観点からみると、世界社会主義革命の高潮へ最初に点火したのは南ベトナムNLF結成とキューバ革命であり、ベトナム革命戦争はそれを激しく燃え上がせ、全世界的な、全戦線にわたる激烈な階級的諸衝突へと波及させ、とくに六八年テト攻勢と七〇年インドシナ革命戦争への発展は、世界革命の発展の新たな段階を画したのであった。三大陸に拡大する人民解放戦争は、長年にわたって略奪・持取・暴虐・抑圧・庄迫・蹂躞をほしいまゝにし、人民の貧困・悲惨・無権利・奴隷化・苦痛を蓄積してきた帝国主義支配の打倒・解放へ、激しく帝国主義(アメリカ世界体制)を攻撃し、打撃を与えている。それは民族解放・社会主義革命を志向している。世界的略奪体制・抑圧体制として、全世界プロレタリア人民に君臨し、重圧を加え、腐朽化と寄生性を強めている帝国主義は打ち破られ、覆えられつゝあるのだ。この戦闘は「全戦線にわたる、即ち経済及び政治上のあらゆる問題に関する、長く続くいくたの戦闘」によって、必ずこの帝国主義を、ブルジョアジーを最後まで徹底的に打ち破り、覆えし、絶滅するまで発展していくものである。世界体系・世界的権力としての帝国主義が世界の多くの戦線でも打ち破られ、ばそれだけ、階級闘争はこの中枢の打倒へ、即ち帝国主義心臓部の権力問題・プロレタリア独裁へ発展し、凝縮していく。また

な革命の日々から最も困難な退却の時に到る数々の経験を積み、組織され、教育され、訓練されたプロレタリアートの部隊、いやプロレタリアートの革命的な核・前衛部隊・前衛党があった。敵階級―敵権力と非和解的に対抗しつゝ、あらゆる闘いと活動の経験によって訓練されあらゆるブルジョアの小ブルジョアの潮流と闘い、自らの内的動搖の試練をくりぬけ、プロレタリアートと固く結合し、その階級的独自性と全人民的指導性を打ち鍛えていた前衛の隊列・前衛党があった。だが我々には二〇年間に及ぶ長い敗北と解体が、その徹底化があった。その徹底化の末に、漸く新たな戦闘が始まったのである。プロレタリアートは二〇年間「全戦線にわたる、即ち経済及び政治上のあらゆる問題に関する、長く続くいくたの戦闘」において敗北を喫してきた。より正確に言えば旧い革命運動、旧い俗流社会主義、小ブルジョアの幻想階級的結合の旧来の關係的諸契機が敗北し、解体されてきたのであった。そしてこの敗北と解体によって、真にプロレタリア的・共産主義的の革命運動、革命的な社会主義徹底した社会革命への階級的結合の諸契機、これらの土壌が準備され、成熟してきたのである。そして今「全戦線にわたる、即ち経済及び政治上のあらゆる問題に関する、長く続くいくたの戦闘」を通して、この敗北を、より高い水準、より徹底した革命性において克服していき自らを教育し、訓練し、その階級的独自性と全人民的指導性を打ち鍛え、自己を社会の主人公へと高めあげ、勝

「賃労働の搾取こそが現代の略奪体制全体の土台であり、それこそが和解しえず対立した階級への社会の分裂をよびおこす。」(レーニン)という、この土台そのものの転覆へ、即ちブルジョアジーの収奪・全生産手段の社会的共有へ転化・賃労働の廃絶へ発展していく。これはまさしく、西欧・日本を直接の一環として含むアメリカ世界革命に他ならない。まさに世界社会主義革命の一つの凝縮点として、米―日―西欧を一体とする帝国主義心臓部の権力―所有の問題が赤々と照らしだされ、それ自身「全戦線にわたる、即ち経済及び政治上のあらゆる問題にわたる、長く続くいくたの戦闘」によって、プロレタリア独裁を樹立し、打ち固め、ブルジョアジーを収奪し、かつ、人民解放戦争を通して社会主義建設・社会のプロレタリアート化に向う三大陸人民と、より高度な闘いへ、より緊密に、直接に結合し、世界社会主義革命の一層発展した段階・世界プロレタリア独裁に向うであろう。この全世界的な、全戦線にわたる激烈な階級的諸衝突を、心臓部の一角・日本階級闘争に最初に点火したのは、六七年一〇・八の先進的学生の街頭デモンストレーションであった。一旦点火された闘争はうねりのように広がり、深まり、激化し、持続したし、また現にしている。そして戦線は一層多くの領域に広がり、深まっている。たゞ我々は、レーニンと異なって、次の事実を率直に認めねばならない。即ち、レーニンが先に引用した如く言った時、そこには二〇年間の激烈な階級闘争、偉大

利を獲得していかねばならないのである。もっとも「政治生活においては、戦時の数カ月は歴史によって数年として数えられる。」だからこそ、我々、プロレタリアートは、二〇年の敗北の深さも急速に脱却し、急速に成長していくであろう。事実階級闘争は一層広く、深く、根本的になりつゝある。あらゆる戦線でのあらゆる闘争は、その継続・その発展・その深化によって、不可避的に国際主義と権力・所有の問題へ、即ち世界革命・プロレタリア独裁・社会主義へ、その思想へ到達し、大衆をそこへ導いていく。国際帝国主義の打倒と労働者勤労人民の国際的的同盟融合、プロレタリア独裁―赤軍・ソヴェト・コミューン型国家・プロレタリア民主主義、ブルジョアジーの収奪と全生産手段―流通手段の社会的共有と社会的生産・分配のプロレタリア的統制・管理、そして帝国主義政府を打倒する闘争・資本に対する苛借なき闘争と勤労者の同盟・プロレタリアートに指導され、その周囲に結集する全勤労人民の同盟、内乱と全人民武装蜂起、これらの思想、これらの要求へ導き、その力を、その意識性と組織性を打ち鍛えていく。現代のプロレタリア革命は、それが国際的結合・革命の国際性をしっかりとわがものとし、全社会的な内容・革命的な高さを、深さ・徹底性をしっかりとわがものとし、政治的高さ・革命の政治的結集力・凝集力・鋭さをしっかりとわがものとし、全戦線を結合・統率し、全社会を階級的衝突のルツボに引き入れて進むことよってのみ、徹底した

勝利を獲得するであろう。「全戦線にわたる、即ち経済及び政治上のあらゆる問題に関する、長く続くいくたの戦闘」を通してプロレタリアートが教育され、訓練され自己の歴史的な社会的・政治的任務をしっかりと見定め、自覚し、それを実現する力、階級的意識性と組織性、全人民的指導性を打ち鍛えていかねばならない。また、このいくたの戦闘を通し、被搾取・被抑圧人民がプロレタリアートの周囲に結集し、とくにその先進的代表者が「プロレタリアートの立場へ移行し」、社会主義的プロレタリアートの一翼となっていかなばならない。そしてとくにこのいくたの戦闘、いくたの革命的大衆闘争を痛して、プロレタリアートの先進分子、前衛分子が結集され、組織され、訓練され、打ち鍛えられ、革命の意識的な前衛部隊・前衛党が築かれていかねばならない。

「ヨーロッパの社会主義革命は、抑圧され、不満をもつありとあらゆる人々の大衆闘争の爆発以外のものではない。小ブルジョアと遅れた労働者の一部は不可避的にこの革命に参加するであろうし（こういう参加がなければ大衆闘争は不可能であり、どんな革命も不可能である）、同じように不可避的に、彼らの偏見、彼らの反動的な空想、彼らの欠点と誤謬を運動に持ち込むであろう。しかしながら、客観的には彼らは資本を攻撃することになる。そして、革命の意識的な前衛、先進的プロレタリアートは、色とりどりの、不調和な、種々雑多の、そして表面は分散した大衆闘争の、この客観的

の数年の間に我々は学生反乱も、農民の爆発・決死的闘争も、沖縄住民大衆の爆発も、都市のデモも、在日被抑圧民族人民の民族的なデモも、未解放部落民衆のデモも個々のストライキも、更には軍隊内の反乱の端緒も経験してきた。それはむしろこれから広がり、深まり、激しくなるうとしている。それとともに、とりわけ小ブルジョアの偏見・幻想・空想・その欠点と誤謬もまた、運動の中に表現されている。我々にとってこれは、この二〇年間の敗北と、小ブルジョアの影響の深さ、その社会的・政治的基礎からして不可避であり、根強いものである。いやむしろ、小ブルジョア的自然発生性こそが最初の昂揚を切り拓き、担ってきたのであった。（それは今階級闘争の歴史的ヘゲモニーとしては分解・葛藤・再編・止揚のたゞ中にあるが、左右分解しつゝある革命運動の左翼の側にも、小ブルジョア的自然発生性は左翼的形態で色濃くまわりついでいる。）しかしこれらの闘いは疑いなくプロレタリア独裁と社会主義に向っている。だから闘争の頑強な継続・深化・徹底化そのものによって、教育され、訓練されて、この小ブルジョアの偏見・幻想・空想・欠点・誤謬を克服していく、社会主義的前衛分子が育まれ、成長しつゝある。我々はまさにこの闘いそのものの中で、これら全ての闘いによって援けられ、促進され、教育されて「帝国主義に反抗する本当の勢力」「あらゆる人民運動の眞の指導者」として「総攻撃の準備を整え」「権力を獲得し、銀行を奪取し、トラ

な眞実を表現することによって、この闘争を統一し、方向づけ、権力を獲得し、銀行を奪取し、全ての者に憎まれているトラストを収奪し、またその他の独裁的方策を実現することができるであろうが、こういう方策が総合されて、ブルジョアを転覆させ、社会主義の勝利（その勝利も、なかなか一朝一夕にして小ブルジョア的なかすから「純化」されるものではない）をもたらすのである。」「反帝国主義闘争における自主的な要因としては無力な被抑圧階級が、帝国主義に反抗する本当の勢力即ち社会主義的プロレタリアートの舞台への登場を援ける酵母の一つ、パチルスの一つとしての役割を演じるということ、これが歴史の弁証法である。」「資本主義は反乱のいろいろな源が、失敗も敗北もなしにおのずからたちまち一つに合流するといふほど調和的な仕組にはなっていない。反対に、反乱の時期が異なり、場所が異なるからこそ、全般的運動の広さと深さとが保証されるのである。時機をえない、部分的な、分散的な、従ってまた不成功な多くの革命運動を試みて初めて、大衆は経験を獲得し、物事を学びとり、力を集積し、自分の眞の指導者、社会主義的プロレタリアを見出し、そうすることによって、——個々のストライキ、都市のデモと民族的なデモ、軍隊内の暴発、農民の間の爆発、等々が一九〇五年の総攻撃を準備したように——総攻撃の準備を整えることであろう。」「（以上、レーニン『自決に関する討論の決算』）我々にとつても基本的と同様である。こ

ストを収奪し、ブルジョアを転覆させ、社会主義の勝利をもたらす」社会主義的プロレタリアートの隊列をしつかりと築いていかねばならない。今、日本プロレタリアートはあらゆる人民運動の発展、広汎な諸戦線の闘いの激化によってめざめつゝあり、プロレタリア独裁と社会主義のために闘う先進闘士を次々と生み出しつゝある。（「労働者階級の自己認識は、現代社会の全ての階級の相互関係についての、完全に明瞭な理解——単に理論的な理解だけでなく、むしろ政治生活の経験に基いてつくり出された理解——と切り離せないように結びついているからである。」資本主義が腐朽化し、寄生性を強め、世界的に没落しつゝある現代では、プロレタリアートのめざめは、世界的な、全社会的な矛盾の激化・激動・階級的諸衝突と固く結びついでいる。）また以前から引き続き運動に参加しており、今では既に日本のあらゆる隅々に散らばっているインテリゲンチヤの闘士、即ち「どのような確然たる社会的地位をもまだ占めたことのない、あるいは生活によって自己の正常の地位から既にたゞきだされ、プロレタリアートの側に移りつゝあるインテリゲンチヤ」の中から、様々な思想・理論的、政治的、社会・経済的闘争の経験と訓練を通して生まれつゝある、プロレタリアートの革命的パチルスとしての共産主義的プロレタリアのインテリゲンチヤの闘士の群をもっている。（彼らがおお多くの修練・訓練を積んで堅忍不拔の共産主義者・カイドル・革命家になつてい

かねばならないとしても。」またその他の被搾取・被抑圧階層の中から、「プロレタリアートの立場に移行し」、プロレタリア独裁と社会主義のために戦う闘士を生み出しつゝある。我々はこれらの闘士達を単一の軍隊へ組織しなければならぬ。「この機構(中央集権化されたブルジョア国家機構)を粉砕するためには、革命のプロレタリアートの行動の最大の計画性が必要であるが、それは意志の統一と組織勢力の統一とによって初めて達成できることである。」(日本共産党・一九二二年綱領草案) 我々はこの軍隊を、「全線にわたる、ひたむきの、頑強な、持久的な闘争によって敵を追撃することができ、帝國主義政府が抑圧をまき、憎悪を刈り取っている到る処でこの政府を狩りたてることのできるような仕方」で「組織しなければならぬ。またこの軍隊を「共産主義インターナショナルの支部として、日本共産党はプロレタリア独裁をめざすその革命的闘争のなかで、労働者の世界的同盟の旗の下に終局の勝利——国際プロレタリアートの世界独裁——をめざして前進しつゝある革命的プロレタリアートのあの大軍隊の一部隊としての自分の義務を果すであろう。」(前掲文) という、この確固たるプロレタリア国際主義の精神を実行する仕方方で組織しなければならない。即ち、革命的労働者党を赤色共産党を組織しなければならない。我々は今その緒についている。我々はなお長期にわたって「運動を正しい道からそらすおそれのある他の革命的思想傾向との対

決」を経験しつゝ、とくに社会主義の小ブルジョアの俗流化やブルジョアの自由主義化や経済主義的日和見主義の傾向と闘い、最左翼の内部にもある小ブルジョアの自然発生性の影響を頑強に克服し、革命的社會主義・共産主義の旗の下に、マルクス・レーニン主義の旗の下に進んでいかねばならない。(マルクス・レーニン主義は今、非マルクス・レーニン主義的な革命潮流——マルクス・レーニン主義の名によってそれを歪曲し、別の傾向を代表している場合もしばしばであり、それに幻惑されないような充分な厳格さが今ほど要求されている時はない——との闘いの試練にある。だがまたそれによってこそ打ち解えられ、発展し、豊富化されるのである。)

世界の革命運動の最良の伝統・最良の部隊・全世界で進軍しつゝある部隊としつかりと結合して進まねばならない。唯一の真に革命的な階級・プロレタリアートと一層緊密に結びつき、その英雄主義・革命的積極性・創意を培い、それと一体に融合して進まねばならない。我々は強固な中央集権的組織性・規律性と、生き生きとした戦闘的気風と、絶えざる自己教育の謙虚さを養いつゝ進まねばならない。かくして我々はプロレタリア革命党を堅忍不拔の共産主義者の強固な戦闘組織として建設し、武装闘争を担い、武装闘争、「社会主義のためのプロレタリアートの偉大な解放戦争」に、全戦線を、全勤労人民を、あらゆる人民運動を結集し、組織し、動員していくであろう。更に、ブルジョアジーの支配を打ち破り、復えし、彼ら

の反抗を弾圧するための断固たる暴力の行使にプロレタリアートのあらゆる剛毅・勇敢・献身性を發揮すると同時に、社会を改造し、階級をなくすための困難な事業にも、プロレタリアートの組織性と規律をもつて、あらゆる堅忍さ・献身性・英雄主義を發揮していくであろう。プロレタリア革命党を建設せよ!

日本の革命運動とプロレタリア運動は、かつて革命運動が敵に四方八方から集中砲火を受けつゝ、あらゆる勇敢さ・英雄主義・献身性・革命性を發揮して、険しい道を一步一步進んでいた時、プロレタリア運動はまだ未熟で、大規模な革命的昂揚、大規模な激しい階級的衝突を経験することなく、ともども敵権力に粉砕された。そして次にプロレタリア運動が激しく燃えあがり、大規模な革命的昂揚と階級的衝突が訪れた時、革命運動は日和見主義に冒されてしまい、ブルジョアジーとの妥協の道を進み、大規模な真の革命闘争・目的意識的な革命的諸衝突を経験することなく、ともどもブルジョア民主主義の枠内に包摂され、変質していった。そして今我々は、革命運動とプロレタリア運動がともども新たに生成し、成長していく時期に際会している。両者は最も激しい、最も徹底した政治闘争——社会革命へ、プロレタリア独裁と社会主義へ向けて、最も激しい葛藤・動搖・分解を通して、まさに二〇年間のあらゆる苦闘の最後の言葉、遂に生まれ出たヘラクレスとして、徐々に形造られ、姿を現わしつゝある。両者はしつかりと一体に結合して進まね

ばならない。そしてなお多くの階級的諸衝突の経験・試練を経て、教育され、訓練され、打ち鍛えられて成長しなければならない。革命運動はまだ多くの点で一九二〇年代の革命家達に立ち遅れている。またプロレタリア運動はその規模や広さの点で四〇年代と五〇年代の昂揚の度合に及びつかない。しかし両者とも、かつてより遙かに進んだ内容、遙かに高い質をもまた持っている。それに相携えて進んでいる。更に何よりも國際的に遙かに有利な情勢の下で、世界革命の高潮・進攻と結びついていく。だからこそ我々は次の事を主張しなければならない。第一は、革命運動を過去へ引き戻し、後退させようとする一切の傾向・試み、あるいは日和見主義とブルジョアジーとの妥協の道へ引き入れていこうとする一切の傾向・試みに断固反対することである。第二は、革命運動をプロレタリア運動・民衆運動から切り離し、孤立させ、狭いセクト集団へ導いていく一切の傾向・試みに断固反対することである。第三は、プロレタリア運動を共産主義・革命運動から切り離し、経済主義・組合主義へ導いていく一切の傾向・試みに断固反対することである。第四は全世界で進軍しつゝある革命勢力・プロレタリア人民の軍勢から切り離し、離間・反目させ、一國主義へ導いていく一切の傾向・試みに断固反対することである。マルクス・レーニン主義、強固な、厳格な、堅忍不拔の革命的組織、武装闘争、大衆路線、権力——所有をめぐる全人民的政治闘争と、プロレタリアートを指導者とする

全勤労人民の同盟、プロレタリア国際主義—労働者勤労人民の国際的同盟・融合、以上こそ、そのために我々が瞬間も忘れてはならない原則である。我々は未だ力弱く、困難な状態にあるが、これらの原則を踏みしめて進む時、我々は必らず、かつての革命運動—革命家達よりも、かつてのプロレタリア運動—プロレタリア戦士達よりも、遙かに先へ進み、勝利の光栄に浴すことができるであろう。我々は当面の革命の煉獄、その灼熱の炎の中で、勝利へのくろがねの剣、プロレタリア革命党を握りしめねばならない。

第Ⅱ部 世界革命の過渡期と戦略。 戦術の問題によせて

第一章

世界革命の過渡期としての現代 ①

—— 帝国主義・ロシア革命。

三〇年代

現代は世界革命の過渡期にある。この世界革命は、世界的な資本主義社会から共産主義社会への革命的転化の、世界プロレタリア社会主義革命である。二十世紀初頭に資本主義は帝国主義へ移行した。その経済的本質の特徴をなす独占は、「資本主義制度からより高度の社会経済制度への過渡」(『帝国主義論』)として、社会革命の物質的条件の完全な成熟を示した。「社会主義は国家資本主義的独占から次の一步を進めたものに他ならない」：「社会主義に向って進まないでは独占体から先へ進むことはできない。……国家独占資本主義が社会主義の最も

完全な物質的準備であり、社会主義への入口であり、それと社会主義とよばれる一段との間にはどんな中間の段もないような歴史の段階の一段である。」(『さしせまる破局、それをどうたゝかうか』)この資本主義の最高の段階としての帝国主義は、強大な独占的資本家団体、金融資本—金融寡頭制、資本輸出・国際トラスト、資本主義列強による世界の分割と再分割として特徴付けられる、世界的略奪体制、抑圧体制、隷属化の体制であり、自由の渴望にかわる支配の渴望・反動と暴力への熱望、ごく少数の富裕な、強大な民族による大多数の弱小民族の搾取・抑圧の衝動であった。かくして帝国主義は「資本主義からより高度の社会経済制度への過渡期の諸特徴」を成熟させることによって、資本主義の汎ゆる矛盾を一層大規模に、激しく、尖锐化し、一方で死の苦悶を——帝国主義戦争とそれが生みだした惨禍や災厄や零落等——、他方で腐朽化と寄生性の諸特徴を生み出した。帝国主義はもはやプロレタリアートの社会革命・社会主義にとつて代わられる以外には一步も前に進むことのできない資本主義であり、人類史上の社会発展の過程においてもはや進歩的役割を完了し、死の苦悶にあえぎながら、反動性—腐朽化と寄生性を強めつゝある資本主義である。かくしてプロレタリアートの根本的な階級的利益は、人類を帝国主義がつくり出す死の苦悶・袋小路・惨禍から脱出させ、より高度の型の社会経済へと移行させること、即ちプロレタリア共産主義革命を開始すること、これを

直接の課題として登場させた。即ち先進諸国プロレタリアートのブルジョアジーに対する内乱、民族共同体を爆破し、プロレタリアートの国際的な階級的共同体を建設する国際的内乱を直接の任務として登場させた。それは又帝国主義の腐朽化と寄生性の直接の現われである日和見主義と社会排外主義の潮流と仮借なく闘うこと、又世界の住民の革命的な民族的蜂起・民族戦争を支持し、先進諸国プロレタリアートの内乱と結合し、世界革命へ発展することを要求した。

ロシアの十月革命はこれら全てを現実に開始し、現実性に転化した。「ロシアの十月革命は、プロレタリアートの独裁を実現した。プロレタリアートは貧農即ち半プロレタリアートの支持を受けて、共産主義社会の基礎を創設し始めた。ドイツとオーストリア—ハンガリーにおける革命の発展の経過、全ての先進国でプロレタリアートの革命運動が成長していること、この運動のソヴェト形態、即ちプロレタリアートの独裁の実現をまっすぐにめざす形態が広まっていること——これら全ては世界プロレタリア共産主義革命の時代が始まったことを示した。」「今日資本主義が到達している発展段階にあっては、帝国主義戦争は我々の目の前で不可避的にプロレタリアートを先頭とする被搾取大衆の、ブルジョアジーに対する内乱に転化したし、又転化しつゝある。プロレタリアートの攻撃が増大し、とくに個々の国々でプロレタリアートが勝利したことは、搾取者の反抗を強めている。

その結果、搾取者の側でも、資本家の国際的統合の新しい諸形態（国際連盟、その他）をつくり出すに到っている。資本家は、地上の全ての国の人民の系統的な搾取を世界的な規模で組織すると共に、全ての国のプロレタリアートの革命運動を直接に鎮圧することにその当面の努力を注いでいる。全てこうしたこのため、個々の国家内の内乱と、自己の防衛するプロレタリア諸国及び被抑圧諸国民の帝国主義列強に対する革命戦争とが結びつくことは避けられない。」（ロシア共産党綱領）

事実勤労大衆の間のソヴェト運動（——警察・常備軍・特権的官僚を一扫し、全勤労人民の武装、公務員の人選挙・リコール制・労働者並賃金、議会主義的代議機關に代わる人民代表ソヴェトからなる最も民主主義的な共和制国家を創設し、全勤労大衆を国家活動に引き入れていく運動。革労協等による日和見主義的改良主義的歪曲が流布されているため念のために。又中国の革命委員会、その「闘争・批判・改革」も、最も意識的なソヴェト運動である。）は真に国際的運動となり、「プロレタリアートの独裁を、資本主義に対するプロレタリアートの勝利を、国際的規模で体现しているいくつかのソヴェト共和国」が生まれ、ソヴェト運動は労働者の赤軍を創造し、全世界の幾百万・幾千万という勤労者の多数を増々団結させた。革命は万国の労働者の国際的団盟を組織した。「ボルシェヴィズムは世界的な現象となり……ソヴェト制度は世界史的現象となった。」更にソヴェ

の過渡形態）を増々緊密な連邦的団盟へ発展させ」「世界の汎ゆる民族の労働者と農民が単一の世界ソヴェト共和国へ緊密に結合され、完全に融合することに努め」ることが世界革命の戦略的任務となったのであった。

一方には諸ソヴェト社会主義共和国の団盟を中心に集し、世界的蜂起と世界プロレタリア独裁・世界共産主義のために単一に団結した第三インタナショナルに指導された国際プロレタリアートの陣営——ソヴェト運動と社会革命を増々国際的規模に高め、増々緊密に団盟していく陣営——及びそれに一層引き寄せられ、プロレタリア的農民の力を強めていく民族革命運動、又ソヴェト共和国との団盟に引き寄せられる小国のブルジョアジー他方には反革命的連合を強め、国際革命の鎮圧と、地上の全ての国の人民の系統的搾取を世界的規模で組織することに力を注いでいる国際ブルジョアジー、それと反動的に同盟している地主、又それに引き寄せられた社会協調主義者及び植民地従属国に植えつけられつゝある改良主義的ブルジョアジーの陣営、これこそが世界プロレタリア共産主義革命の開始によって生まれ出た諸階級の相互關係であり、世界階級闘争であった。我々が「過渡期世界」という時、それは決して一つの論理体系ではなく、たゞこの世界革命がどのように前進し、深まったか、又後退したか、どのような経験を蓄積し、新たな問題と課題を提起したか、諸階級の相互關係はどのように変化したか等々ということ以外ではない。

ト共和国は「小国のブルジョアジーを味方に引き入れることに成功した。」だが同時に革命が「勝利すればする程、資本主義的搾取者共は増々団結することを学び、一層果敢な攻撃に移ってくる。」協商国は反革命的に連携し、「革命を圧殺するために手を尽して協調主義者共と妥協し」、ロシア・フィンランド・ハンガリー・ドイツ・イタリア等々で白色テロルを行使した。「今や二つの陣営は、少しの誇張もなく言って、十二分に意識しつゝ全世界的な規模で相対立している。」（ロシア共産党九回大会中央委報告）

「世界政治の汎ゆる事件は不可避免的に一つの中心点のまわりに集中している。その中心点とはソヴェトロシア共和国に対する世界ブルジョアジーの闘争である。そのロシア共和国は、一方では全ての国の先進的労働者のソヴェト運動を、又他方では世界帝国主義に対するソヴェト権力の勝利より他に自分達の救いはないということに苦い経験によって確信しつゝある植民地と被抑圧民族の全ての民族解放運動を、不可避免的に自分のまわりに集めているのである。」まさにその時から、「地主とブルジョアジーの打倒をめざす革命闘争を共同で行うための全ての民族・全ての国の労働者と勤労大衆の接近・融合」に努め、「ソヴェト権力のために闘い、地主と資本家の抑圧を絶滅するために闘い、全世界にわたる連邦ソヴェト共和国のために闘う」こと、「ソヴェト制度とソヴェト運動を地盤として生まれている連邦制（完全な統一へ

二〇年前後の一大戦闘は次の結果をもたらした。国際ブルジョアジーは革命の力、襲撃の力、精力、決意に對抗して、自からも団結することを学び、国際連盟等の手段をつくり出し、革命の圧殺のために一層果敢な攻撃に移ったが、資本主義的所有、商品生産の下での私的所有は彼らを分裂させ、「彼らの内部の結びつきは、実はかえって彼らを分裂させ、彼らを互いに対抗させたのである。資本主義的所有は、彼らを分解して、同盟者から野獣に変え」（ロシア共産党九回大会）逆に彼らの足下でソヴェトロシアと同盟する労働者の数と、反革命干渉に反対する闘いを発展させ、革命ロシアを圧殺せんとする彼らの野望を打ち砕いた。しかし他方では国際プロレタリアートの闘争もこの野望を打ち砕き、「たとえ全世界にわたる社会主義革命が長びく場合でも」「資本主義諸国の納の目の中でプロレタリア権力とソヴェト共和国の基本的な国際的存立をかち取った」（『わが国の内外情勢と党の任務』）程には成長していたが、ブルジョアジーとその手先となった社会協調主義者共を打倒する程には成長しなかった。ブルジョアジーは白色テロルと社会協調主義との妥協・譲歩・懐柔の政策をもって自分の陣地を持ちこたえ「全世界を二つの陣営に分裂させることに成功し」東洋全体の植民地的搾取と発達した資本主義敗戦国の債務奴隷化・搾取を結合し、米帝による補強をもって均衡を回復した。プロレタリアートも又ソヴェト同盟の内部では権力を掌握したプロレタリアートの小ブ

ジョアジーへの一定の譲歩・同盟の再編によって、小ブルジョアジーを改造していくという社会主義革命の一層根本的課題へ、より迂回した、緩かな、より地道で困難な道に踏み出し、ヨーロッパでは小ブルジョア民主主義の潮流との間に均衡が生まれ、革命的衝動は一層教育・訓練・経験・組織性を積み、小ブルジョア民主主義派との同盟と闘争を組織し、総じてプロレタリアートの、小ブルジョアの影響の克服・共産主義的成長を促進していくという課題に直面した。かくして一方ではソヴェト同盟とそれを包囲する諸列強の連合及び再分割への内部対立・そして中小諸国の離反・動揺等々の一定の均衡、他方では第三インタナショナルと小ブルジョア民主主義派の黄色インタールと国際ブルジョアジーとファシスト的地主的反動の階級的均衡という、国家と階級における二重の均衡が生まれたのであった。だが国際資本主義の再組織と相対的安定・発展は、一方では階級的均衡に規定された諸国家の均衡を一個の国際的な諸国家の体系へとブルジョアの的に安全・強化し（中小諸国の再分割と従属化——とくに東欧諸民族の政治的独立の帝国主義的相互關係の限界内への吸収、ソヴェト同盟への包圍の環の強化、ブルジョア国際政治への国際階級闘争の従属等々——）我々が国際政治や諸国家の關係に於て、国際階級闘争・国際プロレタリアートの闘争の観点を堅持しなければならぬのはこの点にこそある。他方ではブルジョアジーの階級的陣地、土台を強化し、プロレタリアートの既

得の陣地を多少とも掘り崩す。国際的・国内的にブルジョアジーの力は復活し、拡充し、均衡をかえる。（これは第二次大戦後先進諸国が二〇年近く経験したことだ。）しかし又この同じ資本主義の相対的發展そのものが、世界の住民の圧倒的多数をしめる中国・インド等の植民地従属国の住民を闘争するように訓練し、教育し、異常な速さでその解放のための闘争に引き入れ「反革命的帝國主義的西欧と、革命的民族主義的東洋」との衝突をつくり出し、純然たるブルジョア民族解放運動の内部から、急進的小ブルジョアジーの進出を、更にプロレタリア的・貧農的運動の進出を促進し、民族革命運動に發展させるこの發展によって世界プロレタリア革命の一環に転化し一部民族ブルジョアジーの質弁化・帝國主義への融着・地主的反動との同盟と、他方で小ブルジョアの自然発生性を克服し、プロレタリアートのヘゲモニーを強化する課題へ導いた。（ex: 中国革命）更にこれを、資本主義の相対的發展による資本主義固有の矛盾の、一層広く深く、大規模な成熟、ブルジョアジーの内部分裂・対立・新たな階級矛盾・階級対立の激化と結びつけた。だがこゝではまず、二〇年代の世界革命の過渡期は東洋を全世界革命運動全体の循環に最終的に引き入れ、全世界的社会主義革命を生み出す運動へ全世界を移行させたこと、そしてこの過渡期の階級的均衡が、ソヴェト同盟の中でも、西欧でも、東欧や東洋の植民地従属国でも、小ブルジョアジーの動揺・独自化・自己主張をひき起したことに

（ソヴェト同盟のNEPを余儀なくさせた小ブルジョアの動揺・小農民の自己主張→NEPマン・クラークの出現その圧力へのプロレタリアートの譲歩・後退、西欧の小ブルジョア民主主義派、中東欧の一部のファシスト的地主的反動、東欧・トルコ等の中小諸国・従属国・及び中国・インド等半植民地・植民地のブルジョアジー・民族ブルジョアジー——彼らは世界的な観点からみれば小ブルジョアジーに近いと言いうる——の動揺・独自化・二面性等々）、そしてプロレタリアートはこのブルジョアジーの影響・小ブルジョアの空語・幻想・欺瞞によるブルジョアジーへの追隨・それとプロレタリアートの職業組合的偏狭さとの結合、或いはその反対の小ブルジョアの自然発生性（無政府主義・サンデイカリズム等）、その一種として的小ブルジョア急進主義左翼小児病・焦燥感、一揆主義、又小ブルジョアの分散性・非組織性・自由主義とそのブルジョアの克服としての官僚主義等々と徹底的に闘い、克服し、プロレタリアートの革命の指導権を堅持し打ち鍛え、逆に、小ブルジョアジー（及びその下の労働者勤労者大衆）を改造していかねばならないという、新たな課題に直面したことを確認しておこう。世界プロレタリア社会主義革命の開始は国際ブルジョアジーの連携をつくり出したが、その階級的力の弱体化は、小ブルジョアジーの独自の登場を世界的によびおこした。資本主義の没落は小ブルジョアジーをプロレタリアートの側へ追いやる。だが小ブルジョアジーは自分自身では

決して根本的な歴史的・社会的勢力となることはできない。そこで小ブルジョアジーは自己を維持し、自己の利害を実現するためにプロレタリアートの運動に影響を与え、その指導権を握り、プロレタリアートを支配し、その力を利用・動員しようとする。腐朽化と寄生性を強めたブルジョアジーは自己の延命・支配の維持のために、この小ブルジョアジーを引き寄せ、譲歩し、懐柔し、利用しようとする。この連系は資本主義が相対的安定・発展にあり、階級的均衡と諸国家の均衡・体系が保持されていた間は維持されていた。たゞプロレタリアートの後退・未成長・追隨・譲歩を基礎とし、強要しつつ、しかしスターリン主義の発生・生長である。だからこそプロレタリアートにとって、この小ブルジョアジーの影響と闘い、革命の指導権を確保し逆に彼らをひきつけ、改造していくこと、その闘いによって自己のプロレタリア的・共産主義的性格・力、意識性・組織性（たとえばドイツ共産党とUSPD左派及びKAPDの關係・合体後の分派闘争を見よ。それは今も尚我々の課題である。この内容については後に述べるであろう。）だがこの均衡が破壊される時、プロレタリアートと小ブルジョアジーとブルジョアジーの相互關係は激烈な衝突に転化する。この衝突の指導権を小ブルジョアジーが握ったこと、こゝに三〇年代の革命の反動があった。

資本主義は帝國主義に移行し、帝國主義は「資本主義からより高度の社会経済制度への過渡」をつくり出し、

同時にそれと資本主義的私的所有の矛盾は腐朽化・寄生性を強め、この苦悶から社会主義革命の開始へと導いた。社会主義革命は「古い経済制度の破壊から新しい経済制度の創造へ」とりかかり、この不可抗力な歴史的前進は、最も激烈な国際階級闘争即ち国際プロレタリアートと国際ブルジョアジーの国際的内乱の炎と共に、そのたゞ中でのプロレタリアートの精力、剛毅、組織的な凝縮された力、英雄主義によって進められた。だが国際ブルジョアジーは持ちこたえ、その汎ゆる内部分裂・対立にもかかわらず、世界的規模での搾取を組織するために、汎ゆる術策・狡猾・かけ引きによって、矛盾に満ちた相互依存・国際協調即ち資本主義国際機構を再組織し、東欧、アジア（とくに中国）、アラブ、ラテンアメリカ、更にアフリカの再分割と、経済的収奪・従属化や植民地搾取を強め、それと敗戦国の債務奴隷化を結合し、崩壊をくいとめたのであった。これは東欧、アジア、アラブ、ラテン・アメリカ、アフリカからの収奪・搾取への一層の依存（この地域への投資・貿易量は飛躍的に増大した）とそれを最奥の基礎として、プロレタリアートの進出に對抗して小ブルジョアジーと労働者の上層部の買収・譲歩・懐柔、そして彼らによるプロレタリアートの運動の支配（先進諸国内の社会協調主義・小ブルジョア民主主義派、中小諸国ブルジョアジーや民族ブルジョアジーの買収・地主との結合等々、これをテコにして漸く維持される政治的安定・国際政治協調・国際機構という、腐朽

インを洗い、更にフランス、ソ同盟を洗った。とくに東欧、中国、スペインは、従属国・半植民地が世界階級闘争の中心部に登場したことを刻した。（六〇年代には更にベトナム、キューバ、アルジェリア、アラブという、もっと、後進的な植民地従属国が更に中心部に登場したのであるが。）帝国主義は半植民地従属国からの搾取・収奪への依存を強め、寄生性を増し、それだけこれら諸国を「全ヨーロッパ的資本主義的方向へ向わせ」：世界資本主義全体の危機にたちいらすにはおかないような発展に引き入れ」（『量は少なくても、質のよいものを』）
多数の住民を金融資本・国際資本の搾取即ち略奪の網の目に深く引き入れ、「人間としてのぎりぎりのところに押しつめ」、帝国主義的強国への隷属を深めたのであった。
 （一般に次のことがいえる。「以前には植民地が商品交換にまき込まれながら、まだ資本主義的生産にまき込まれていないところがあった。帝国主義はこれを変化させた。帝国主義はとりわけ資本の輸出である。資本主義的生産は増々急速に植民地に移植されている。ヨーロッパの金融資本に対する依存性から植民地を引き離すことはできない。」レーニン『自決に関する討論の決算』）
 「この特質は帝国主義的略奪を蒙っており、帝国主義的巨大大国のために分割され圧殺される脅威に面している国々で深刻な革命運動の発生をある程度まで容易にしており、これに反して多くの植民地や外国の帝国主義的に略奪しそれによって自国の住民の非常に多きな部分（比較的

化・寄生性の深化をもたらした。この腐朽化・寄生性の深化の下で、他ならぬ植民地従属国からの莫大な搾取・収奪と、先進諸国プロレタリアートの小ブルジョア民主主義派による支配階級協力即ち賃労働の搾取の飛躍的強化（ex・ドイツ、及びアメリカでの膨大な移民労働者・黒人の分益小作人化・農業プロレタリア化）を基礎にアメリカとドイツ、とくに前者を中心に、大規模な生産拡張・技術革新・重化学化、資本集中と巨大独占体をつくり出した。そして他ならぬこの大規模生産・技術革新・生産の社会化・社会的労働の組織化の発展が小ブルジョアジーを広汎につくり出し、プロレタリアートの上層部と融合させ、又資本主義的私的所有の矛盾を深め、それだけ社会の全領域での腐朽化を深め、更に寄生性・腐朽化を深めた資本主義国際体系と衝突し、それを崩り崩したのであった。この最後のものこそ米帝の発展とヨーロッパの不均衡、英仏帝の腐朽化・寄生性の激化、独帝の急速な復活成長と国際的基礎の脆弱さ、日帝の矛盾の深化と日米対立の激化等々として、大恐慌へと爆発し、それを契機にこの国際的關係・腐朽化と寄生性の全体を顕わにし、諸階級の相互關係を激烈な衝突へと転化したのであった。一方で諸国家の体系を動揺互解させ、他方で諸階級の均衡を動揺互解させ、二重の危機・二重の衝突へと転化した。この点で三〇年代の階級危機は第一次大戦より一層世界的であり、かつ深く複雑であった。危機と階級の衝突の激浪は、ドイツと、東欧、中国、スベ

（言うて）を帝国主義的獲物の分け前にあずからせている国々で、深刻な革命運動の発生をある程度まで困難にしている。」（『党綱領の改正によせて』米英仏と東欧中国スペインの対比）更に帝国主義の寄生性の強化とこれら諸国の隷属の強化は、それだけこれら諸国での地主的搾取を温存利用し、ブルジョアジーの発達をおしとどめ逆にブルジョアジーの買収（買収）と地主的反動の強化、両者の結合をつくり出した。それだけ、国際金融資本と地主の搾取・収奪・隷属におかれた大多数の勤労大衆の解放のための闘争は急速に、大規模に促進され、帝国主義的強国への隷属・従属からの解放・国際金融資本と地主の二重の搾取からの解放・地主的反動と（官僚・買収・大）ブルジョアジーの反動権力の打倒という三重の解放を要求し、それだけこの闘いの国際的性格・意義・比重を高め、社会的深さを強め、その指導をプロレタリアートに委ねたのであった。更にこれら諸国内部の社会的発展の不均等性と旧い民族的に地方的分立傾向、それと帝国主義強国の分割支配との結びつき等と闘い、民主的中央集権的国家をつくり出す任務がプロレタリアートに委ねられたのである。三〇年代の危機は国際資本主義の基礎・根ともいえるべきこれら諸国の矛盾・危機分解を激化し、それは一方で国際金融資本と結びついた従属的売国的ブルジョアジーと地主・貴族の鉄の権力、ファシスト的即ち地主的な軍事権力に、他方で勤労大衆・農民を率いたプロレタリアート武装闘争・革命戦争に導いたの

であった。この武装衝突・戦争と、ドイツ（及びイタリ
ア、日本）との又フランス、ソヴェト同盟との結びつき
その階級危機・階級闘争との結びつき、そこに三〇年代
の危機と闘争の世界的性格があり、そこから第二次世界
大戦への端緒が開かれたのであった。

—資本主義諸国の崩壊の時機、資本家階級の崩壊の時
機、彼らの絶望と危機の時機には、たゞこの政治的要因
——プロレタリアートの革命的決意・剛毅さ及び不屈さ
といった要因——だけが解決を与える。……決定的な
のは労働者階級の自覚と剛毅さである。彼らが自己犠牲
を覚悟しておれば、彼らが自分の全力を尽くしうることを
立証すれば、そのことによって任務が解決されるのであ
る。—（ロシア共産党九回大会報告）プロレタリアート
の大衆的英雄主義、英雄の大胆さ、自覚的規律・組織性
・中央集権（とくに前衛党の）、前衛党のプロレタリア
ートに対する、プロレタリアートの「半ば小市民的及び
全く小ブルジョア的な勤労大衆に対する指導的・教育者
的・組織的役割」の断固たるかつ頑強な発揮が道を拓く
のである。何よりもプロレタリアートが、その前衛が、
小ブルジョア的な動揺・気迷い、不確かさ・浮動性、プ
ルジョアジーへの小市民的追従、或いは小ブルジョアの
自然発生性、小ブルジョアの急進主義・冒険主義に打ち
かたねばならない。もしそれがなければ小ブルジョアジ
ーが危機と衝突の指導権を握り、プロレタリアートを支
配し、小ブルジョアの反動、革命の反動をもたらずであ

だから小ブルジョアの反動の完成は、結局のところ金融
資本の最もテロルの軍事的な独裁・国家独占資本主義へ
のプロレタリアートの動員・官僚的軍事制経済を
帰結し、土台の動揺・上部構造の分解・両者の不均衡を
後方へのよび戻しによって一時的に解決し、延命する
という、言葉の真の意味での反動、歴史の前方への前進と
しての革命に対する、より大きな反動——後方へのよび戻
し、従って徹底的な反革命を帰結したのであった。だが
我々が注意しなくてはならないのは次の点である。

資本主義と資本主義文化は大規模生産・工場・鉄道・
郵便・電話・国中の電化その他をつくり出し、科学と資
本主義的技術と管理機構を発達させ、又これらにもとづ
いて国家権力の機能の大多数は非常に単純化され、単純
な作業に帰着させた。従って又資本主義はこれらの知識
や技術や単純化された管理機能や国家権力の機能の担い
手、インテリゲンチヤ・技師・官吏・医師・法律家・事
務職員、更に牧師等を膨大に形成し、彼らを旧来の社会
的地位・生活状態を引き下げ、ブルジョアジーの雇人に
かえ、プロレタリアートへ接近させた。又小経営者（小
商工業者零細業者と小経営者となった中農民）を零落さ
せ、動揺と不安の状態に陥し入れた。他ならぬこれらの
層が小ブルジョアジーを構成している。彼ら是一部では
プロレタリアートの上層と融合し、更に相対的過剰人口
の一部をさえ構成する。（「小規模の商工業企業は、資本
主義社会では相対的過剰人口の一形態にすぎないことが

ろう。三〇年代を特徴づけたのはまさしくこのことであ
った。プロレタリアートの小ブルジョアジーへの追従・
屈服・従属であり、革命の小ブルジョア的反動の抬頭で
支配であった。それはファシズムを急先鋒として、人民
戦線とその互解、スターリン主義・国民党軍閥・シオニ
ズム等、様々な形態をとって現われたものの総体である。
我々は既に世界革命の過渡期における二〇年代の諸階級
の相互関係と、資本主義の腐朽化・寄生性の深化につい
てみた。世界革命の過渡期、その物質的基礎の一層の前
進・成熟、上部構造の不均衡・極格化・腐朽化の深化、
物質的基礎の成熟にみあうプロレタリアートの国際的な
大規模な団結・自覚・過渡期の変革の総体への意識性・
組織性・中央集権化された力・剛毅等の欠除と小ブルジ
ョアの動揺・追従、これらのことから、上部構造の危機
が尖鋭化し、分解し、互解し始めた時、小ブルジョアの
反動（及び地主的反動）が抬頭し、後方へよび戻したの
である。だが物質的土台が「より高度な型の社会経済制
度への過渡」を成熟させている以上、根本的な力はプロ
レタリアート以外にはない。だから小ブルジョアの反動
は、プロレタリアートに対する徹底した支配とその力の
利用への熱望である。まさしくファシズムは小ブルジョ
アの反動による一切のプロレタリア運動の徹底的破壊・
プロレタリアートに対する支配と再組織・その力の動員
利用として出現した。だが小ブルジョアジーは決して独
自のもの、独自の歴史的地歩を代表することはできない。

稀ではない。零落していく小生産者や仕事が見つからない
労働者は（しばしば臨時的に）小商人・行商人・間貸人
・仕切間貸人などに転化する。これらの職業が氾濫して
いることは、決して小規模経営の生命力を示すものでは
なく、むしろ資本主義社会における貧困の増大を示すも
のである。」（レーニン『カウッキ―ベルンシュタイ
ンと社会民主党の綱領』の書評）だから彼らはブルジ
ョアジーに不満を持ち、対抗し、闘争する。しかし、又
「この社会層の過渡的な不安定な矛盾に満ちた地位は、
半世紀前にマルクスがその諷刺によってあれ程容赦なく
鞭打った、あの中途半端な、折衷主義的な見解・対立し
た諸原理や諸見地のあの混合物・言葉の上でいくと高い
領域にまで高揚し、住民の歴史的諸群の衝突を空文句で
ほかそうとするあの志向がこの層の間にとくに広汎に行
きわたっている。」（前掲文）世界革命の開始が激烈な
階級的諸衝突をよびおこし、又それが階級的均衡・相対
的安定に導いた時、彼らはこの衝突を空文句でほかし、
更に労働運動の上層を支配した。しかし均衡が動揺し、
瓦解した時、この層は「住民の歴史的諸群の衝突」のた
だ中におかれ、階級協調の空文句は崩壊した。かつ世界
革命の過渡期という階級対立の深さと激しさは彼らの動
揺を一層激しく、又資本主義の腐朽化と寄生性は、彼ら
の経済的・社会的矛盾・危機を更に精神的・イデオロ
ギー的・道徳的矛盾・危機を一層深く激しくした。それ
だけ彼らは激しくブルジョアジーと対抗し、闘争する。

しかしそれは彼らが「自己の立場を捨て、プロレタリアートの立場へ移行する」か、プロレタリアートの指導を受け入れ、同盟していかない限り、決して革命的・歴史的に進歩的なものになることはできない。もしプロレタリアートがこの小ブルジョアの動搖・危機に打ちかち、自己の「指導的・教育的・組織的役割」を断固として頑強に發揮し、小ブルジョアを引き寄せ、改造していくことができないなら、この小ブルジョアへの動搖・危機・闘争はプロレタリアートを支配し、利用しようとする熱望に転化し、プロレタリアートを支配してしまふのである。彼らの社会的地位・生活状態が低下し、ブルジョアの社会から脱落し、プロレタリアートに接近しつゝあるが故に、又彼らが知的・技術的・行政的諸手段の担い手であるが故にそうなのである。事実彼らは科学と資本主義の技術の最新の成果を利用し、最も発達し、かつ腐朽した資本主義文化の上に立つ高度な技術を裝備した国家官僚機構と、住民の社会的文化的組織の網の目と、情報交通手段を利用することによってこの支配を完成したのであった。だがプロレタリアートの自由な、自覚した規律でなければ、それを徹底的に抑圧するならば、どのような規律によってこの大規模生産と科学と最新の資本主義の技術の成果に基く社会的労働組織は支えられるのか。それは資本主義的な飢えの規律と農奴制的な鞭の規律によってであり、更に国家官吏に特有な「指揮統率」への熱望によってであり、これらの合体によつ

てである。(ファシズムは必ずしも地主的反動を含み、それによって補完されていたことを想起せよ。又地主は世界的に一大勢力をなしていた)又「あの中途半端な、折衷主義的な見解、対立した諸原理や諸見地のある混合物」のデマゴギーへの転化・反動的ロマン主義によってである。(種や民族や国家のロマン化、熱望)国家資本主義的独占・大規模生産・科学と資本主義の技術の最新の成果、これらと飢えと鞭の規律、小ブルジョアのもつ、「指揮統率」への熱望・セクト主義やデマゴギー・反動的ロマン主義(歴史的原理を体現しえない小ブルジョアへの原理への熱望)との結合、その結合としての鉄の権力(軍事独裁(金融資本と地主の)最も反動的な官僚的軍事統制と中央集権制(ヴェト型民主主義・プロレタリア民主主義・中央集権と、勤労者・被搾取者のため、彼ら自身による統制と計畫管理の正反對物)、それへのプロレタリアートの動員とその力の利用。(これは第一次大戦時のドイツのエンカールの國家による最も組織化された戦時國家独占資本主義の一層の徹底化であった。)これがファシズムの真実の社会的・階級的内容と特質である。(こゝでファシズムに詳しくふれたのは、現代のブルジョア支配及び現代修正主義の社会的・階級的内容と特質について示唆し、かつプロレタリア社会主義革命の任務・プロレタリアートの任務について示唆するためである。)

他方コミンテルンの協調政策↓社会ファシズム論・政

勢主義の極左セクト主義・冒險主義↓人民戦線戦術のブルジョア民主主義との融着」という動搖は、紛れもなく小ブルジョアへの追隨・協調↓小ブルジョアへの自然発生性・焦燥感とセクト主義↓小ブルジョアへの屈服・解体という、プロレタリアートの隊列での小ブルジョアの動搖の増大・小ブルジョア民主主義派↓小ブルジョアの反動との闘争における敗北、プロレタリアートの小ブルジョアへの一步一步の敗北・解体・融合の過程であった。(これは大戦によって完成された。)東欧ではファシスト的地主的反動の抬頭とプロレタリアートの武装衝突に發展した。だがエストニア・ポーランド等の時期尚早の一揆主義的蜂起の敗北、ブルガリア・オーストリアでの受動的セクト主義↓ファシズムへの最後の抵抗としての蜂起の敗北、そしてソ連の国境防衛の見地からするブルジョア及び英・仏・独との取り引きに転化した。(東欧のこの敗北は革命運動の一大勢力であったユダヤ人プロレタリアートの中に、腐朽せる反動的な小ブルジョアへのイデオロギーたるシオニズムへの屈服をもたらした。即ち反ユダヤ主義への敗北。)

中国では買弁化し、官僚ブルジョア化し、地主と結んだ国民党軍閥の中華ソヴェト共和国への数度の軍事攻撃をひき起し、コミンテルン(李立三・王明の極左冒險主義セクト主義(軍事路線における冒險主義・小ブルジョア)に対する政策でのセクト主義、日帝の侵略に対する抗日民族解放の輕視、組織問題における「無慈悲な闘争

・容赦のない打撃」の分裂主義)に災いされて、ソヴェト政權は敗北し、長征に赴いたのであった。この極左冒險主義・セクト主義は敗北によって今度は逆に投降主義・党的獨立性と闘争なき民族統一戦線に転化し、更に大戦時にはソ連と蒋介石国民党との密月に行き着いた。(尚三〇年代前半期にはベトナムのゲティンソヴェトとその敗北、マラヤ共産党結成・都市闘争とその敗北、朝鮮共産党の諸分派への分裂等アジアの解放運動は大きな試練を経験した。)

又ファシズムの脅威に對抗して激しく燃え上ったフランス人民戦線は、プロレタリアートの闘争の昂揚が若干の改良的獲得物・経済的譲歩の獲得へと歪少化され、終熄され、指導権を小ブルジョアから奪い取らずに、逆に彼らに奉仕し、その補完物・物理力として利用されるという、穩健ではあるが、革命の小ブルジョアの反動を導いた。(昂揚していた労働者がクイニヨン協定による闘争の終熄によってバカンスに立ち去ったことをみよ。「組合主義的政治へと引き下げることは労働運動をブルジョア民主主義の道具に変える」のだ。ソ連はこの小ブルジョア政府との同盟を求め、フランスプロレタリアートをその圧力手段へと転じたが、他方小ブルジョア政府は結局ブルジョア政府の道具となり、ブルジョア政府にとつてかわられ、かつその政府もナチスドイツによって解体されたのであった。)

尚三十年代の敗北を前段階決戦の路線の欠除や軍事の欠除に求めるのは全く皮相な見解であり、又事実上反している。ヨーロッパでは攻勢主義が語られ、軍事が吹聴されて

いた時、ソ同盟では赤軍が「ドイツの背後に進攻し、革命をよび起す」機動電撃作戦を準備していたのだから。我々は二〇年代半ばのフハーリン・ストムスキー・スターリンの、ヨーロッパでの小ブルジョア民主主義的な、組合主義的な戦線統一路線と中国での国共合作路線↓三十年代初期の極左セクト主義・冒險主義↓後期のブルジョア民主主義への合体を、プロレタリアートの小ブルジョアジーへの屈服・解体・吸収として統一的に扱えねばならない。一時期だけを取り出すのではなく、それは又二〇年代初頭のヨーロッパ革命の敗北と戦術的後退後の基本問題が、プロレタリアートの階級的独自性と国際的團結と全人民的指導性を、国際的変革、社会的政治的変革の全体に対する階級的意識性と組織性を、「長期にわたる頑強な堅忍不拔の闘争」によって打ち鍛えていくこと、持久的な「闘争・批判・改革」、「学び・訓練し・改造すること」であったことを示しているのだ（レーニンの示唆を想起せよ！）即ち世界革命の過渡期が、革命勢力の側の、一層広く、深いプロレタリアート化↓共産主義化を要求したのである。その要に小ブルジョアジーの問題、「半ば小市民的及び全く小ブルジョア的な勤労大衆に対するプロレタリアートの指導的・教育者的・組織者的役割」（ロシア共産党十回大会）の問題があったのである。小ブルジョアジーと同盟し、かつ粘り強く闘い、彼らを改造していくこと、逆にそのことによってプロレタリアート自からが学び・訓練し、階級性を高め、深め

指導的・教育者的・組織者的役割を打ち鍛えていくことである。それは別の面から言えば、資本主義の汎ゆる面での腐朽化・寄生性、その影響の浸透と闘い、「より高度な型の社会経済制度への過渡」の一層の成熟にみあう大規模な團結・かつ国際的な團結を打ち鍛え、プロレタリアートの新しい社会的組織性・規律性を打ち鍛え、自覚した規律に支えられた中央集権化された力を組織していくこと、そしてこれを世界的な社会的政治的変革の総体に対する意識性と結合していくこと、この結合を基礎に革命的暴力を組織し、打ち鍛えていくということである。これは一朝一夕にはできない。これには持続的闘いと努力が必要であり、「大衆的な、日常生活に於る最も持続的な最も粘り強い、最も困難な英雄主義を必要とする」。又「多少とも強力な爆発と多少とも深い沈静をくり返し」、反復と復習をくり返しながら、たえず広がり、深まっていく大衆運動の発展と不可分である。スターリン↓コミンテルンの犯罪性は個々の敗北や戦術的失敗にあるのではない。階級闘争にあっては一時的な又部分的な敗北や失敗は不可避の随伴物であり、プロレタリアートはその経験に学び、打ち鍛えられて前進するのである。又スターリン↓コミンテルンと別の方針と戦術をもってすれば勝利したと保証することはできない。その犯罪性はプロレタリアートを小ブルジョアジーに追隨させ、従属させ、屈服させ、解体させ、融合吸収させていった点にある。又そのことによってスターリン主義は

成長していったのである。（トロツキーの弱点は、戦術と政策のレベルでのみスターリンを批判し、又「永続革命論」の抽象から一般的展望と力学主義的な戦術と政策を対置し、この戦術・政策の点からのみ革命の勝利と敗北を論じ、直結している点である。これは正しい戦術と政策さえあればという考えに導く。闘いをプロレタリア的↓共産主義的に深めるという見地がなく、従って共産主義社会へ到る革命過程の全体が力学主義的↓経済決定論的に取り扱われる。これこそレーニンがトロツキーを批判した点であり、ソ同盟内でトロツキーが敗北した根拠である。）これは単なる過去の問題・課題ではない。それは今我々が一層深く、広汎に直面している課題なのである。後方へのゆり戻しが完成され、更に四半世紀を経た後に、我々は一層根本的に、この世界プロレタリア共産主義革命の前進の課題に直面しているのだ。

我々はフランスズムについて総括したが、同時に革命の側も、スペイン、ソ同盟、中国において簡単に総括しておこう。スペインではプロレタリアート及び国際義勇軍の偉大な英雄主義・剛毅・不屈さ・自己犠牲・献身性にもかゝらず、それが最も強固な規律・中央集権・組織性に結合されず、国家の統治活動への勤労大衆の大衆的な全面的な参加と赤軍の創建・強化の事業に結合されず、小ブルジョアの自然発生性たる非組織的な無計畫的なやり方、放恣に放置され（これこそアナキズム・サンディカリズムの致命的弱点なのだ）、プロレタリアートの

組織性・全勤労人民に対する指導的・教育者的・組織者的役割が発揮されず、「勝利したプロレタリアートは所有（資本主義的所有と地主的所有）を廃止し、これを徹底的に破壊したが、こゝにこそ階級支配があるのである。なによりもまず所有の問題にあるのである。所有の問題が実際に解決された時、そのことによって階級支配が保証されたのである。」（ロシア共産党九回大会報告）へと徹底化されず、又生産の労働者統制・管理・専門家の利用に關する組織性、小箇業者の強制的なシンジケート化と住民の強制的な消費組合への結合と勤労者・被搾取者による統制が徹底されず、まさにこれらの活動に対するプロレタリアートの剛毅・英雄主義・不屈さ・組織者的役割が大胆に発揮されず、或いは「この革命的暴力の経済的基礎・その生命力と成功の保証であるのは、プロレタリアートが資本主義に比べて一層高度の型の社会的労働組織を代表し、実現しているということである。こゝにこそ核心がある。こゝにこそ力の源泉がある」（レーニン『偉大な創意』）という点に結合されず、遂にプロレタリアートの真に階級的な指導力、新しい社会的組織性・規律性、中央集権化された力、團結し組織された革命の力、襲撃の力、精力、剛毅、不屈さが全体の中心に登場することができず、小ブルジョアジーの指導権を許したままであった。（これは強固に組織され、訓練された、マルクスレーニン主義の前衛党の欠除、或いは未成長と深く関わっている。）そしてこの小ブルジョアジ

成長と深く関わっている。）そしてこの小ブルジョアジ

の指導権は、革命の後退・プロレタリアートの疲労と共に、小経営者・インテリゲンチヤ・職員・官吏等の組織された小ブルジョアの利己主義・秩序派として、背後からの反革命に導き（その政治的組織者・代表者こそスターリン主義・スペイン共産党であった）、それは更に根本的な反革命・ファシストの地主的反動にとってかわられたのであった。スペインの敗北はヨーロッパプロレタリアート・共産主義運動の挽歌、崩壊・潰滅となつたのであった。

第二章

世界革命の過渡期としての現代 ② — 第二次大戦・現代帝国主義・中国革命 —

三〇年代の階級危機はファシスト的に地主的反動を導火線にして、世界戦争に転化した。日帝のアジア侵略と独帝の東欧侵略と伊帝の北アフリカ侵略から、全ユーラシア大陸と太平洋地域とアフリカの北半部、又北米地域をも巻き込み、動員した世界戦争であった。（間接的にはラテンアメリカもアフリカの南半部も包括した。）この世界戦争の中心的内容・基軸をなしたのは帝国主義戦争であり、世界制覇をめざす強盗的・略奪的・反革命的戦争であった。戦時国家独占資本主義——重化学化・強力な軍事的官僚的統制・ブロック化・植民地略奪を共通の基礎として、一方にはファシズムの政治形態をもつ

た一層残酷な帝国主義のグループがあり、他方には「自由と民主主義」の欺瞞的スローガンによってその本質を隠蔽している帝国主義のグループがあった。前者が「プロレタリアートの革命運動を弱めるために労働者の前衛を国際的に皆殺しにし」、ウンとデマゴギーに塗り固められた最も反動的な民族主義で勤労大衆を欺き、国際プロレタリアートを徹底的に分裂させ、とどまるところのない略奪欲と徹底的な軍事的併合を進めたのに対し、後者はこのプロレタリアートの敗北、この国際分裂・この恐怖を利用して、階級協調・諸階級の協力、諸勢力の同盟・統合、その自己の目的への利用・動員という手段をとった。とくに後者には、ロシア革命後のヨーロッパを中心とする国際プロレタリアートと国際ブルジョアジーの拮抗・階級危機・小ブルジョアの反動と諸衝突の外にあって、真のブルジョアの支柱として強力に発展し続けてきた米帝国主義が、独り日伊枢軸の世界制覇の野望に対抗して、自身の世界制覇の野望を「自由と民主主義」の旗の下に包み込んで登場し、その強大な経済力・科学技術力・軍事力・動員力をもって、「反ファシズム反枢軸」の主導を握り、反ファシズム反枢軸の全勢力を戦略的に利用・統合して世界中心軸に進出したのであった。（尚英帝は本国と植民地を結ぶ勢力圏の防衛として受身的・退勢的立場に立ち、仏帝はアフリカとアジアの植民地勢力としてのみ持ちこたえ、それだけ米帝への依存を深めたのであった。）二つの帝国主義グループ

はこの帝国主義戦争を世界的規模に拡大し、この戦争に世界の汎ゆる勢力を引き込み、動員し、従属させようと追求した。しかしこの世界戦争は民族戦争をも含み、民族戦争によっても構成され、かつそれを拡大し、発展させた。だがこの民族戦争には、歴史的見地から見た場合二つの性格・二つの内容をもっていた。即ち世界史の後方に向つての大跳躍の結果として登場した民族戦争と、世界史の新しい発展として広がり、成長してきた民族戦争である。我々は前に、三〇年代の大反動が、世界革命の過渡期の大きな反動として、世界史の後方へ向つての大きな揺り戻し、大跳躍であったことを見た。帝国主義戦争はこの大反動、後方への大跳躍を推進力として、その帰結として、その完成として勃発し、世界戦争に転化したのであった。まさにこのことからヨーロッパにおける一大民族戦争が登場したのである。「もしヨーロッパのプロレタリアートが二〇年の間無力のままであるならば、又もし当面の戦争が、ナポレオン戦争のような勝利に終り、一連の生活力のある民族国家の隷屬化に終るならば、又もしヨーロッパ以外の帝国主義（第一に日本及びアメリカの帝国主義）が、例えば日米戦争の結果、社会主義へ移りゆくことなしに、同じく二〇年の間もこれたえるとするならば、その時にはヨーロッパにおける一大民族戦争が可能であるだろう。これはヨーロッパの発展の数十年間の後退であろう。これはありそうにないことである。しかし不可能ではない。なぜなら時々の後

方に向つての大跳躍なしに、たゞなめらかに、正確に前進してゆく世界史を想像することは、非弁証法的であり、非科学的であり、理論的に正しくないからである。」「エニウスの小冊子について」 第一次大戦のさ中に、レーニンはこのように書いた。四〇年前後、ドイツ帝国主義、ナチスドイツはナポレオン戦争のような勝利によってフランスを隷屬化し（軍事占領・併合・収奪）、第一次大戦後ロシア革命の波及の中で独立した東欧のいくつかの生活力のあるブルジョア民族国家・及びいくつかの半植民地従属国を隷屬化し、更にソ連に奥深く侵攻し、その広大な西方・南方地域を軍事占領し、又後にはイタリアをも隷屬化したのであった。又日・米帝国主義は、社会主義へ移り行くことなしに日米戦争に突入したのであった。「これはヨーロッパの発展の数十年間の後退であったが、まさにそのことによって一大民族戦争が民族解放戦争が登場したのであった。「もしヨーロッパのプロレタリアートが二〇年の間無力のままであるならば」、レーニンはこの仮定をこそ最も決定的なものとして第一にあげた。だからこそ「これはありそうにないことである」と言った。事実「一九一四—一六年のこの帝国主義戦争が民族戦争に転化するだろうということは、非常にありそうにない。というのは前進的な発展を代表する階級はプロレタリアートであつて、彼らは客観的には帝国主義戦争をブルジョアジーに対する国内戦に転化させる方向に向つているからである。」（前掲文）というレー

ニンの確信はロシア十月革命として現実のものになった。そして「全てこうしたことのため、個々の国家内の内乱と、自己を防衛するプロレタリア諸国及び被抑圧諸国民の帝国主義列強に対する革命戦争とが結びつくことは避けられない。」と、ロシア共産党はその綱領に刻した。事実一八二〇年のヨーロッパは現実の進行によってこれを確証していた。だからこそこの綱領は「革命の困難がどんなであろうと、革命が一時失敗することがあろうと、又反革命の波がどんなであろうと、プロレタリアートの最後の勝利は避けられない。」とその確信を表明した。だが我々が既にみたように、歴史はこのように進まなかった。そして「もしヨーロッパのプロレタリアートが二〇年の間無力のままであるならば」と同じ程の意味をもった、又同じような結果をもたらした大反動、後方への大跳躍を経験したのであった。そして「個々の国家内の内乱と、自己を防衛するプロレタリア諸国及び被抑圧諸国民の帝国主義列強に対する革命戦争とが結びつくこと」は民族戦争・民族解放戦争の結びつきになったのであった。フランス・イタリアのレジスタンス・パルチザン戦争・東欧諸国民の解放戦争・パルチザン戦争・ソ連の大祖国防衛戦争の結びつきである。この結びつきを担ったのはコミンテルンであったが、それよりも、圧倒的に多く連合国、米英ソの反ファシズム反枢軸連合であった。それが民族戦争であり、とりわけ後方への大跳躍・大反動によってもたらされた民族戦争・民族解放戦争

闘争の必然的な階級的深化、プロレタリア的Ⅱ共産主義的深化としてこの指導権を要求し、ブルジョアジーや小ブルジョアジーはそれを抑え、自己の階級的利害を擁護し、その実現のために、この闘争・プロレタリアートの力を従属させ、利用しようと、指導権を要求する。共同の敵に対する闘争、この闘争のための同盟と、この指導権をめぐる闘争とを結合し、自己の階級的独自性と指導力を打ち鍛え、闘いを一層プロレタリア的Ⅱ共産主義的に深化し、階級的意識性と組織性を高めていかなければ、プロレタリアートの闘争はブルジョアジーや小ブルジョアジーへ従属化され、ブルジョア民主主義の道具となってしまうであろう。たとえそれが武装闘争であっても。いや武装闘争であれば、その英雄主義や自己犠牲にもかゝらず、それはブルジョアジーの軍隊・戦争の補完物、彼らの戦略に従属し、単にそれを補強する闘争となってしまうであろう。まさにこゝに米(英)帝ブルジョアジーの影響力と闘い、階級的独自性を確保し、強化し、彼らの力を一つの客観的土台としてふまえ、利用しつつ、自分の基本的目標を決して見失わず、それに向けて闘いを深め、発展させ、階級的力を強化していくことが要求されていたのであり、ヨーロッパの一大民族戦争の弱点も又この点にあった。反ファシズム民族解放の闘いをプロレタリアートの歴史的前進運動に徹底的に結びつけていくこと、小ブルジョア性・小ブルジョアの諸要素・影響と粘り強く闘い、克服し、プロレタリアートの

であっただけに、ブルジョアジーと連携し、(とくにフランス)、米英帝国主義と反ファシズム反枢軸の連合を結ぶことは或る程度やむをえないことであり、避けられないことであった。プロレタリアートが小ブルジョアジーのところまで後退し、融合してしまっていることからこの連携は必然化されたのであり、それなしには当面の反ファシズム反枢軸の世界的闘争の勝利的発展がなかったのである。又強力で正面に登場し、全体の主導権を握った米帝の力・戦略に規制されざるをえず、それから自由でありえなかったのである。それはブルジョアジーと小ブルジョアジーの関係である。だが一担闘いが発展し始め、強まっていき、大衆を組織し、動員し、その英雄主義・不屈さ・献身さ・自己犠牲を、その組織性・規律を、昂揚させ、發揮させ、打ち鍛えていくと共に、即ち解放戦争として発展していくと共に、プロレタリアートの階級的成長は始まり、促進され、強まっていく。闘いの小ブルジョアの性格・枠を踏み越えて進んでいくことを要求し、又その最も深い自然発生的力としては踏みこえて進んでいく。何故なら、現代ではどのような闘争もそれが真に根本的な大衆闘争となるや、プロレタリアートによってしか担われないからである。いやプロレタリアートが主要な力を担うことによって、初めて、動搖的な、優柔不断の広汎な小ブルジョア大衆も決起していくのである。だがそれと共に同盟する陣営の中に階級間の指導権をめぐる闘争が登場する。プロレタリアートは

台を揺がし、社会的基礎を变革し、社会一政治生活の全体を闘いに引き入れ、変革していく方向、即ち人民戦争の方向である。それはまさに思想・政治・軍事・組織路線の全体にわたる問題であった。事実ヨーロッパの一大民族戦争はその内的発展によって、ヨーロッパの国際的内乱、社会主義革命戦争、「三種の革命戦争の結合」への発展・転化に自然発生的に直面していった。だがこの発展・転化こそ、最も目的意識的たることを要求し、プロレタリアートの階級性、共産主義的政治、政治の優位、を要求する。逆にこの発展・転化を実現していくことができないならば、逆にブルジョアジーへの従属・ブルジョアのⅡ小ブルジョアの政治へと転化・変質していかざるをえない。反ファシズム民族解放の闘いの発展が、プロレタリア社会主義革命への発展・転化とブルジョア民族主義Ⅱブルジョア民主主義への転化・変質の分岐に直面する、これが歴史の弁証法である。だがヨーロッパの民族戦争は遂にその小ブルジョアの性格・諸要素との融合、ファシストの支配が兇暴で残忍であっただけに尚更強かった小ブルジョアの自然発生的性(ex・小ブルジョア民族主義的Ⅱ小ブルジョア民主主義的熱望、実存的人間主義、連合軍への依存の傾向、政治の軽視・曖昧さと階級的区別の抹消、確乎たる世界観・闘いの目標・方向の欠除と曖昧さ、動搖性)との融合を克服し、脱却することができなかつたのであった。それにこそ戦争の最

終局面からの、米帝を軸とするブルジョアジー、小ブルジョアジーの結集・ブルジョア支配の確立・米帝への敗北・東欧革命の歪曲を結果したものであった。勿論全てがそうであったのではない。フランスでは共産党内の少数左派実践的指導グループが、レジスタンスを権力獲得に結びつけようとし、或いは国内軍の指導性を掌握し或いはパリ蜂起を大衆的武装闘争持久戦による自力解放（人民戦争の方向）に発展させる展望で闘おうとした。或いは全国的蜂起の中で愛国民兵を組織した。だがこれらは充分意識的な又、確固たる方向・路線をもったものとなることができず、モスクワ共産党多数派の圧力や、現実のブルジョアの「小ブルジョア」的自然発生的圧力に押し流され、呑み込まれた。とくにブルジョアジーに対する態度を植民地問題と結びつけることができなかつたこと（というのはブルジョアジーの主要な部分、実際の基礎は植民地勢力であったのだから）、全国抵抗評議会の戦後の諸方策に關するブルジョア民主主義的・改良主義的綱領を無条件に承認し、無批判的に追隨したこと、人民戦争路線——大衆的権力を創出するという方向に徹底化しえなかつたことに、その限界が現われていた。他方東欧の闘争、とくにバルカン諸国の闘争は、連合国と無關係に、独自に闘われ、かつ一般にこの地域の半植民地的な民族的従属の深さ——民族解放の一層の前進的意義（世界的にみて）、ブルジョアジーの弱さと地主制の存在——民族解放と地主制打倒との結合し、その指導力

としてプロレタリアートを強める傾向、英仏帝や地主・貴族と結びついた複雑な民族的・地域的分立の、反ファシズム反極端闘争による統一への発展等々をもって、革命的な民族解放戦争に発展していき、ソ連の革命化「プロレタリア化」と伊の社会主義革命への発展・それらの結合としてのヨーロッパ社会主義革命戦争への発展を要求していった。（ユーゴ、ギリシャ、アルバニアの闘争）それだけに又、仏・伊の挫折「米帝・ブルジョアジーへの敗北、ソ連の反動化の進行（とくに党内権力内部における官僚的ボナパルチズム化と民族主義への純化）」と東欧の革命的発展方向・その芽への圧力・圧殺・革命的諸成果の纂奪、その上に立つ統合によって、或いは敗北し、或いは歪曲・変質への道を、勝利の後に進むこととなつた。これらに対し、ソ連の「大祖国防衛戦争」はどのような性格をもち、何を進めたのか。ソ連の闘争が国際プロレタリアートの国際的な社会主義革命戦争（民族解放戦争を重要な一環として含む）の強固な砦としての「自己を防衛するプロレタリア国家の帝国主義列強に対する革命戦争」とならず、単なる「大祖国防衛戦争」としてあつたのは、ソ連内部をも含む、ヨーロッパプロレタリアートの敗北・後方への大跳躍・大反動の結果であつた。しかし、ソ連は尚、後方へ大跳躍した国際プロレタリアート・国際革命の最後の防塞（単なる物理的意味ではなく、ソ連を含む世界革命の見地からして）であつたし、ドイツファシズムはそれをも最終的に打ち砕

き尽すことを自己の帝国主義的任務としたのであつた。だからこそそれに対する防衛戦争は、反ファシズム解放戦争として成長しつゝあつた世界各地の革命戦争・民族解放戦争を促進し、鼓舞激励したのであつた。しかしこの戦争は民族戦争であつたし、更にファシストの帝国主義の侵略反革命戦争に対する防衛を契機としつゝ、それを社会主義革命戦争へ高めていくよりも逆に民族戦争・国防戦争へと一層純化され、その性格のままに国際的進攻へ転化していった。かつて一八二〇年の革命戦争には「プロレタリアートの武装とブルジョアジーの武装解除、搾取者の反抗の仮借ない弾圧、国内の内乱と国際的な革命戦争とにおいて全世界のブルジョアジーに勝利するまで戦えというスローガン」（ロシア共産党綱領草案）を掲げ、その綱領には「プロレタリア独裁の道具として赤軍は必然的に公然たる階級性をもたなければならぬ」として、そのために「もっぱらプロレタリアートのそれに近い半プロレタリア的農民層との出身だけで編成する」こと、「赤軍の軍事教練と陶冶の活動は、階級的団結と社会主義的教育に基いて行」うこと、「猷身的な共産主義者からなる政治コミッサール」と「内的な思想的紐帯と自覚的規律とをつくり出すために隊内に党細胞を設ける」こと、「純然たる兵営訓練の期間をできるだけ短く」し、「兵営を兵学校や軍事政治学校の型に近づけ」、「軍隊の各部隊を工場、労働組合、貧農団体にできるだけ密接に結びつけること」、「自覚した労働者、

農民の間から選ばれた將校、最も有能で精力的な社会主義の事業に献身的な兵士の將校への養成」を掲げ、他方で「全てのプロレタリアと半プロレタリアに最も広汎な軍事訓練を施し、学校に適當な課目を設け」又、「労働者と兵士の完全な同権とその利益の一致とに基いてその機關であるソヴェトのうちで両者を融合させる」こと、これらをもって、階級が廃止された結果として実現される「全人民的な社会主義的民兵への転化」を追求するとしたのであつた。（トロツキーも又、工場・農学・学校等を単位として強固に組織され、訓練され、強固な社会主義的団結と規律と中央集権的組織性を日常的にもつた全人民的な社会主義的民兵が最も強固な、最大の防衛力となり、戦闘力の基本となることを承認していた。だがそのこと、それに到る過渡期に、赤軍の中央集権的組織性と規律を否定し、自然発生的な、無政府的な非組織性・非計画性に追隨することは全く別の事柄である。この問題の一層発展した豊富な経験は、今日の中国・ベトナム・朝鮮の中にある）そしてロシア共産党は、その最良の共産主義者を戦線へ派遣するために動員し、黨員を中核とする赤軍は最大の困難の下で、最大の規律・英雄主義・不屈・献身・自己犠牲を發揮し、それは又「銃後の共産主義士曜労働・労働軍・全住民の労働義務・自覚的労働規律と結合し、「資本主義的所有と地主的所有を廃止し」、「資本—社会關係としての資本に対する仮借ない闘争と全勤労働者の同盟」を打ち鍛え、「新たな社会

経済制度の創造」の事業を進め、労働者階級の力を全国家活動に引き込み、把え、汲み上げ、諸民族間の労働者の兄弟的同盟・緊密な軍事的・経済的同盟を実現している。「社会主義の勝利の大業に、自覚して犠牲を捧げている勤労者大衆の英雄主義、これこそ赤軍の新しい、同志的規律の、又その復活・強化・成長の基礎である。」

「この（一）プロレタリアート独裁の、革命的暴力の経済的基礎、その生命力と成功の保証であるのは、プロレタリアートが資本主義に比べて一層高度の型の、社会的労働組織を代表し、実現しているということである。ここにこそ核心がある。ここにこそその源泉があり、共産主義の不可避的な、完全な勝利の保証があるのである。」

（偉大な創意）「大祖国防衛戦争」が純然たる、単なる民族戦争、国防戦争へと純化していったことはこれに照してみる時明白である。その基礎が既に三〇年代の工業化・農業集団化・赤軍機械化に於る官僚的方法・経済主義・技術主義・生産力主義と、その矛盾からの権力の小ブルジョアの反動としての官僚的ボナパルチズム化と、国際戦略の、ソ連国家防衛戦略への一元化等にあつたことは言うまでもない。しかし、戦争は、とくに現代の総力戦では最も広汎な人民を組織し、動員し、彼らの間に緊張を極度に高め、その精力、主観的力の発揮を要求する。明らかに人民の組織力・意識力を高めることによって、戦争は革命運動をはらみ、成長させ、より高度な型の社会経済制度への移行を促進し、かつ要求するのであ

る。そのためにはこの人民の組織力・意識力を歴史的に前進的な方向に向わせ（人類史、社会発展の見地からして）、その真の基礎となる社会的階級的内容に向わせること、即ち社会経済制度に対する意識・主観（共同主観）の立ち遅れ、ズレ、反動性を克服し、単に照応させるだけでなく、更にその前方へ向って、意識化し、自覚化し、そのことによってこの組織力・意識力を内的に再編し、打ち鍛え、前進運動をつくり出し、発展させ、それへの敵対物・桎梏を打ち砕いていかねばならない。とくにこの「大祖国防衛戦争」はそれ自身の内に、この立ち遅れ、ズレ、反動性と前進運動（とくに人民が自然発生的にせよ自己の解放を要求して決起していく点に）、少なくともその諸契機を広汎にはらみ、強め、合わせもっていたのである。この前進運動は後方へ大跳躍した地点から始まったのであるが、真の前進運動に発展転化するには一八二〇年を継承するところへ進み出、徹底した人民戦争と共産主義運動との結合へ進まねばならなかつた。もし歴史的前進運動が自己を貫かないならば、もし戦争が、軍事として組織される人民の組織力・意識力がその社会的基礎を含めてプロレタリアート化し共産主義化されていかなければ、それは不可避的に別の方向ブルジョアの方向、ブルジョアの軍事に転化し、進んでいく。社会主義革命の過渡期の小ブルジョアの反動として生まれた官僚的ボナパルチズム権力は、この前進運動の深化に敵対しつつ、その諸契機をつみとり、自己の機

構の中に吸収し、前進運動を開始した人民の意識力・組織力を、「大祖国防衛」という方向に社会的階級の基礎から上向きに吸収し、自己の機構の中へ包摂し、合体させ、かつブルジョアの軍事へ導いたのであつた。明らかにその頂点に、米帝との連合、協定、援助受け入れ、それへの力点・優位があつたのである。かくして官僚的ボナパルチズム権力は人民のエネルギー・意識・組織をソ連民族国家として上向きに集約し、（この時にソ連は民族国家的存在へと最後の転化し、内的に強化された）、ブルジョアの軍事と相まって、米ソ関係を（それが対立であれ、協調であれ）自己の存在の基礎・条件へと転化し、内には自己の官僚的機構内へのこの人民のエネルギー・意識・組織を吸収合体させることによって国家（死滅の契機を内包しない、従ってそれだけブルジョアの）として強化し、又社会経済制度への反作用に浸透をもって近代的ブルジョアの改造・転進していく基礎をえたのであつた。大戦後これは米ソ関係と国家利益第一主義・生産力主義と経済主義・工業近代化・軍隊近代化と技術主義、官僚的効率化と官僚体制拡充へと転進し、内部にテクノクラートの層を、行政機構・国営企業・コルホーズ・大学等の中に基幹層として形成していったのである。これは社会主義革命の過渡期における小ブルジョアの反動のブルジョアの進化に他ならない。それは国家（独占）資本主義に近づけていく。

他方東洋の民族戦争・民族革命戦争は遙かに、より直

接に歴史的前進運動を代表していたし、又その主体を急速に訓練し、成長させた。「とはいへ、この戦争が成功するには、被抑圧諸国の住民の莫大な人数（我々のあげたインドと中国の例では数億の人間）の努力の結合か、ないしは国際情勢の諸条件の、とくに有利な組合せ（例えば帝国主義強国の干渉がそれらの無力化、それらの戦争、それらの敵対などのために麻痺させられる場合）か、ないしは強大国のうちの一方国のプロレタリアートが、ブルジョアジーに対して同時に蜂起することか、いずれかを必要とすることは勿論である。」（『ニュースの小冊子』）

第一次大戦のさ中にレーニンはこのように述べた。そして第二次大戦において東洋の民族革命戦争は、第一の点を実現することによって勝利の道を切り開き、第二の点と結合することによって勝利を闘い取り、第三の点（レーニンがプロレタリアートの勝利にとって望ましいもの、有利なもの、見地からみれば第一のものであると述べたもの）の欠除によって決定的勝利と国際的發展をおしとどめられた。又コミンテルン二回大会は「搾取諸国のブルジョアジーと植民地諸国のブルジョアジーとの間に一定の接近が起つた。そのために、非常にしばしば——大多数の場合にそうだといつてもいいが——被抑圧諸国のブルジョアジーは民族運動を支持していながらも同時に又帝国主義ブルジョアジーと協調して、即ち彼らと相携えて、全ての革命運動と革命的諸階級を相手に闘争している。……共産主義者としての我々は、植民地諸

国のブルジョアの解放運動が現実には革命的である場合だけ、又我々が農民及び広汎な被搾取者大衆を革命的精神で教育し組織しようとするのを運動の代表者が妨害しない場合にだけ、ブルジョアの解放運動を支持しなければならぬ、又支持するであろう」と述べたのであったが、その後、共産党が生まれ、二〇年代後半は三〇年前半期の革命闘争の経験を通して成長することによってプロレタリアートが民族解放運動の指導権を握り、広汎な被搾取者大衆を教育し、組織し、ブルジョアと闘争し、かつ同盟し、民族統一戦線を民族革命戦争へと発展させていったのであった。又コミンテルンが「農民ソヴェト・被搾取者のソヴェトが、前資本主義的関係をもつ諸国にとつても有用な手段であること……条件の許す限りのところで勤労人民のソヴェトをつくり出す試みを今すぐ行わなければならない」と述べた、この農民ソヴェトを長期の土地革命戦争の経験によって打ち鍛え、民族革命戦争の解放区に根拠地として、その地方性・分散性・自然発生性を克服し、真の意義へと高めたのであった。そしてこの根拠地と、民族統一戦線と、プロレタリアートの指導権を、「人民の軍隊」によって統合したのであった。更にレーニンはその死の直前に、第一次帝国主義戦争の結果、「ヨーロッパの資本主義諸国は、ある国家が他の国家によって搾取され、又帝国主義戦争で敗北した国のうちの第一のものの搾取が東洋全体の搾取と結びつくことによって発展を完了」し、同時に「東洋はまさに

この第一次帝国主義戦争のために、最終的に革命運動に入りこみ、全世界の革命運動全体の循環に最終的に引き入れられた」こと、このことから「全世界が今ではもう全世界の社会主義革命を生み出すに違いないような運動に移っている」こと、そしてこの「闘争の結末は、全体としてみれば、地球上の住民の絶大な多数が、結局のところ資本主義によって闘争するように訓練され、教育されるといふ根拠にもとづいてのみ、予見することができる」と。闘争の結果は、結局のところ、ロシア、インド、中国などが、住民の圧倒的多数を占めていることにかゝっている。ところがまさにこの多数の住民が、近年、異常な早さで、解放闘争に引き入れられており、従つてこの意味では、世界的闘争の終局的な解決がどうなるかについては、いささかの疑問もありえない。この意味では社会主義の終局的な勝利は、完全に又無条件に保障されている。」と予見し、更にこの世界的闘争が「反革命的帝国主義的西欧（米・日を含めて）」と、革命的民族主義的東洋との、世界の最も文明化された国家と、東洋風に遅れた、だが多数を占めている国々との軍事的衝突が次に起る」ことをもって進んでいくことを予見したのであった。（量は少なくとも、質のよいものを）東洋の民族革命運動は二〇年代―三〇年代に、幾多の困難・苦い敗北・起伏を経験しつつ、全体としてみれば継続的に発展し、拡大し、深化し、労働者と貧農を中心とする広汎な被搾取者大衆を解放闘争に引き入れていった。

（とくに三〇年代前半期は、朝鮮・中国・インドシナ・マラヤ・インド・アラブ等で大きな昂揚と激烈な闘争と苦い敗北を経験した時期であった。そしてこの経験は党の再編や戦略の転換を導いた。朝鮮・中国・ベトナム・マラヤを貫く特徴は、コミンテルンからの独立・自主路線であり、ブルジョアジーの影響と完全に手を切つて農民を組織し、農村に根拠地を築き、持久的な遊撃戦争によって「人民の軍隊」を打ち鍛え、民族統一戦線を結成し、人民戦争に発展させ、農村から都市を包囲していく路線であった。）第二次大戦は一層世界的な、総力的な戦争となることによつて、それだけ一層東洋の被抑圧諸民族を揺り動かし、動員し、世界階級闘争の中に深く引き入れた。世界的な資本主義の腐朽化・寄生性があるところを押しつめられた数億の被搾取勤労住民」、前資本主義的の土地主制的な、鞭による搾取と、国際金融資本（及び高利貸的、買弁的ブルジョアジー）の吸血鬼の如き収奪の網の目。糸によつて、生ける屍の如くにまで吸い取られ、踏みにじられ、抑圧——人身的隷属を含めて——された、数億の貧農——半ば農奴的な——を解放闘争へ組織したこと、世界プロレタリア革命の中へ導き入

れたことである。（その時から彼らをプロレタリアートへ改造していく闘いが始まり、それは今も尚続いている。）そのことこそが東洋の半・植民地のプロレタリアート、二十世紀に漸く資本輸出と共に形成されたプロレタリアートの世界的任務であったのであり、それだけが買弁化していくブルジョアジーの影響と真に手切り、自然発生性への拝跪を克服し、世界的な、全社会的な革命主体へと打ち鍛えていく道であったのだ。もう一つは国際的な政治的・社会的隷属・従属・支配関係を打ち破ること、少数の一握りの富裕な帝国主義諸国家、腐朽し、寄生化した、強盗的・略奪的資本主義諸国家による政治的・経済的隷属・奴隸化・支配、この国際的鉄鎖——それは帝国主義にとつて本質的なものである——と自覚的に闘い、それを打ち砕いていったことである。民族解放とはこの国際的な政治的・経済的関係を転覆し、国際的鎖を打ち砕く要求と闘いであったのであり、それ故にこそ真に国際的闘争となり、世界プロレタリア社会主義革命の主要な一環となり、永続的な反帝闘争として今も更に拡大・発展し続けている。又それこそプロレタリアートの世界的任務であったのであり、それだけが買弁化していくブルジョアジーの影響と真に手を切り、自然発生性への拝跪を克服し、世界的な、全社会的な——政治的には民族・民族統一戦線・民族統一国家として表現される——革命主体へと打ち鍛えていく道であったのだ。東洋の民族革命戦争は想像を絶する困難な下

で、この二つを徹底的に担い、おし進め、そのことよって勝利への道を切り開いていった。世界的な反ファシズム・反軸軸連合は利用すべき国際的条件ではあったが闘争の性格・質・志向は、全く別のものであり、別の仕方でも別の方向に別の質をもって発展していったのである。(だから国際的な反ファシズム反軸軸の観点から、抗英や抗仏を放棄することは、民族解放闘争の主體的立場の転倒・喪失、国際的補完物への転化の傾向をもったのであった。それは又国際政治の動向を託し、揺れ動いていく民族ブルジョアジーの政治への追従へ傾斜していくものであった。それに対し、中国共産党は抗日戦争の中で蔣・国民党——米英帝に対する独自性・闘争を堅持し、ベトナムの闘いは一貫して民族解放革命の立場から抗仏→抗日を貫き、発展させ、最大の好機に一斉蜂起に移行し、革命政府を打ち樹て、更にその下で抗仏闘争に移行したのであった。)民族革命戦争は抗日闘争の勝利を契機に、人民解放戦争として更に発展し、その真の国際的性格を明確にしつゝ、米帝を中軸にソ連をも巻き込んで再形成されつゝあった世界体系の一角を打ち砕き、国際革命への転化へ突き進んだ。世界の最下層の広大な人民の巨大な解放運動が、世界政治の中心部へ、世界政治と世界経済の根本的革命力として抬頭したのであった。だがまさにそれと結合し、それを継承して、帝国主義心臓部の一角の爆砕へ、更に世界革命へ発展転化させていくべき、「強大国のうちの一方国のプロレタリアートのプ

ルジョアジーに対する(民族解放戦争との)同時の蜂起」の不在がそれをおしとどめ、一時的妥協を余儀なくさせたのである。

第二次大戦の真の歴史的・社会的性格が、世界史の後方に向つての大跳躍としてもたらされた帝国主義戦争であり、同時にその内部からの民族戦争——一つはこの後方への大跳躍の結果生まれ出た、もう一つは一貫した歴史的前進運動として登場した——の成長であった。新たな前進運動はたとえその始まりが民族戦争であったとしても、帝国主義と世界革命の時代、とくに世界革命の過渡期には不可避的にプロレタリア革命へと進んでいく。前進的な発展を代表する階級はプロレタリアートであり、帝国主義戦争の惨禍・袋小路から人類を前方へ脱出させるものは世界プロレタリア革命のみであり、前進的な発展は社会主義社会・世界社会主義革命をめざしてのみ実現可能だからである。戦時国家独占資本主義は人類を一層社会主義へ接近させ、戦争は一担始まった前進運動を急速に速め、プロレタリアートを、その革命運動を成長させ、又その成長を要求する。「ヨーロッパ戦争の惨禍の最後の結果はたゞ一つしかありえない。労働者階級が勝利するか、それとも、この勝利を可能または必要にする諸条件がつくり出されるか、どちらか」である。(エンゲルス)東洋の民族革命戦争の多くと、東欧のいくつかの民族革命戦争はこの方向に大きく、或いはたゆみなく前進した。しかしヨーロッパの民族戦争は全体として

歴史的な前進運動が社会発展の度合が要求する水準へ追いつく程には、プロレタリアートは未だ前進し、成長することができなかった。小ブルジョアの影響を決定的克服し、脱却することができず、それと半ば融合したままであった。(又独日及び米英帝国主義の内部からのプロレタリアートの階級闘争は自国の敗北を闘い取り、内乱へと転化していく闘いは未だ成長することができなかった。)そして一方の帝国主義戦争と他方の民族戦争は、その当面の共通の敵であり、後方への大跳躍の推進力であった特別に反動的な反革命的な軸軸帝国主義との闘争に於て同盟した(反ファシズム国際連合)。その戦術的提携は、それが後方への大跳躍からの新たな前進に役立つ限りで正当性をもつ。しかし戦術的提携は、プロレタリアートの独自性を保持し、その力を強化する仕方、帝国主義の内部矛盾を戦術的に利用するということ、独自性を弱め、譲り渡す、「共通の敵」に対して同盟する。即ち革命を・前進運動を弱めていくことによって全く別なものになる。前者は民族解放戦争をプロレタリア革命へ発展させていく道であり、後者はブルジョア民族主義ブルジョア民主主義の道具へと変えていく地盤を準備するものである。一般に階級闘争にあっては、互いに闘い、同盟しあう諸階級・諸勢力は、相互に影響しあい、他を自己の影響下に従属・統率し、自己の支配をめざして闘争する。資本主義の時代には基本的な勢力はブルジョアジーとプロレタリアートだけであり、もし

プロレタリアートが自己の階級的独自性・指導性を弱めるとすれば、それはとりもなおさず、ブルジョアジーにそれだけ従属し、ブルジョア民主主義の道具に変えることを意味する。小ブルジョアジーはプロレタリアートの力が強く、その階級的独自性と全人民的な指導性が発揮される時はプロレタリアートに引き寄せられ、その周囲に結集するが、さもなければ不可避的にブルジョアジーに引き寄せられ、従属していく。ブルジョアジーは、この教的にも大きな部分を占め、プロレタリアートと様々な階梯で結びついている小ブルジョアジーを道具とし、その力、影響力を利用してプロレタリアートを従属させることによって自己の支配を維持する。これは又戦争に於ても貫かれる。いや戦時には階級闘争は最も根本的であることを要求されるということを考える時、とくにそうである。戦争は矛盾を解決する——たとえ一時的にせよ——最も激烈な、暴力的な方法・形態である。第二次大戦の如く、この矛盾が広く、深く、根本的で、激しければそれだけ戦争も又激烈で、徹底的で、総力的になり、経済力・技術的諸手段・軍事力、政治的組織力・意識力を結集し、動員し、一つの勢力へと編成し、組織し、勢力間の同盟と徹底した殲滅戦に発展する。この諸勢力はそれ自身一つの政治的上部構造である。それは物質的土台を離れることはできないが、物質的土台の発展・矛盾の成熟が旧い上部構造を桎梏と化する時、この腐朽化・寄生性——暴力的再編として、或いは

で、この二つを徹底的に担い、おし進め、そのことによって勝利への道を切り開いていった。世界的な反ファシズム・反極軸連合は利用すべき国際的条件ではあったが闘争の性格・質・志向は、全く別のものであり、別の仕方での別方向に別の質をもって発展していったのである。(だから国際的な反ファシズム反極軸の観点から、抗英や抗仏を放棄することは、民族解放闘争の主體的立場の転倒・喪失、国際的補完物への転化の傾向をもったのであった。それは又国際政治の動向を託し、揺れ動いていく民族ブルジョアジーの政治への追隨へ傾斜していくものであった。それに対し、中国共産党は抗日戦争の中で蔣・国民党——米英帝に対する独自性・闘争を堅持し、ベトナムの闘いは一貫して民族解放革命の立場から抗仏↓抗日を貫き、発展させ、最大の好機に一斉蜂起に移行し、革命政府を打ち樹て、更にその下で抗仏闘争に移行したのであった。)民族革命戦争は抗日闘争の勝利を契機に、人民解放戦争として更に発展し、その真の国際的資格を明確にしつゝ、米帝を中軸にソ連をも巻き込んで再形成されつゝあつた世界体系の一角を打ち砕き、国際革命への転化へ突き進んだ。世界の最下層の広大な人民の巨大な解放運動が、世界政治の中心部へ、世界政治と世界経済の根本的革命力として抬頭したのであつた。だがまさにそれと結合し、それを継承して、帝国主義心臓部の一角の爆砕へ、更に世界革命へ発展転化させていくべき、「強大国のうちの一方国のプロレタリアートのプ

ルジョアジーに対する(民族解放戦争との)同時の蜂起の不在がそれをおしとどめ、一時的妥協を余儀なくさせたのである。

第二次大戦の眞の歴史的・社会的性格が、世界史の後方に向つての大跳躍としてもたらされた帝国主義戦争であり、同時にその内部からの民族戦争——一つはこの後方への大跳躍の結果生まれ出た、もう一つは一貫した歴史的前進運動として登場した——の成長であつた。新たな前進運動はたとえその始まりが民族戦争であつたとしても、帝国主義と世界革命の時代、とくに世界革命の過渡期には不可避的にプロレタリア革命へと進んでいく。前進的な発展を代表する階級はプロレタリアートであり、帝国主義戦争の惨禍・袋小路から人類を前方へ脱出させるものは世界プロレタリア革命のみであり、前進的な発展は社会主義社会・世界社会主義革命をめざしてのみ実現可能だからである。戦時國家独占資本主義は人類を一層社会主義へ接近させ、戦争は一担始まった前進運動を急速に速め、プロレタリアートを、その革命運動を成長させ、又その成長を要求する。「ヨーロッパ戦争の惨禍の最後の結果はたゞ一つしかありえない。労働者階級が勝利するか、それとも、この勝利を可能または必要にする諸条件がなくなり出されるか、どちらか」である。(エングルス)東洋の民族革命戦争の多くと、東欧のいくつかの民族革命戦争はこの方向に大きく、或いはたゆみなく前進した。しかしヨーロッパの民族戦争は全体として

歴史的前進運動が社会発展の度合が要求する水準へ追いつく程には、プロレタリアートは未だ前進し、成長することができなかった。小ブルジョアの影響を決定的克服し、脱却することができず、それと半ば融合したまゝであつた。(又独目及び米英帝国主義の内部からのプロレタリアートの階級闘争は自国の敗北を闘い取り、内乱へと転化していく闘いは未だ成長することができなかった。)そして一方の帝国主義戦争と他方の民族戦争は、その当面の共通の敵であり、後方への大跳躍の推進力であつた特別に反動的な反革命的な極軸帝国主義との闘争に於て同盟した(反ファシズム国際連合)。その戦術的提携は、それが後方への大跳躍からの新たな前進に役立つ限りで正当性をもつ。しかし戦術的提携は、プロレタリアートの独自性を保持し、その力を強化する仕方、帝国主義の内部矛盾を戦術的に利用するということ、独自性を弱め、譲り渡す「共通の敵」に対して同盟する。即ち革命を・前進運動を弱めていくことよつて全く別のものになる。前者は民族解放戦争をプロレタリア革命へ発展させていく道であり、後者はブルジョア民族主義ブルジョア民主主義の道具へと変えていく地盤を準備するものである。一般に階級闘争にあつては、互いに闘い、同盟しあう諸階級・諸勢力は、相互に影響しあい、

他を自己の影響下に従属・統率し、自己の支配をめざして闘争する。資本主義の時代には基本的な勢力はブルジョアジーとプロレタリアートだけであり、もし

プロレタリアートが自己の階級的独自性・指導性を弱めるとすれば、それはとりもなおさず、ブルジョアジーにそれだけ従属し、ブルジョア民主主義の道具に変えることを意味する。小ブルジョアジーはプロレタリアートの力が強く、その階級的独自性と全人民的な指導性が発揮される時はプロレタリアートに引き寄せられ、その周囲に結集するが、さもなければ不可避的にブルジョアジーに引き寄せられ、従属していく。ブルジョアジーは、この数的にも大きな部分を占め、プロレタリアートと様々な階梯で結びついている小ブルジョアジーを道具とし、その力、影響力を利用してプロレタリアートを従属させることよつて自己の支配を維持する。これは又戦争に於ても貫かれる。いや戦時には階級闘争は最も根本的であることを要求されるということを考える時、とくにそうである。戦争は矛盾を解決する——たとえ一時的にせよ——最も激烈な、暴力的な方法・形態である。第二次大戦の如く、この矛盾が広く、深く、根本的で、激しければそれだけ戦争も又激烈で、徹底的で、総力的になり、経済力・技術的諸手段・軍事力、政治的組織力・意識力を結集し、動員し、一つの勢力へと編成し、組織し、勢力間の同盟と徹底した殲滅戦に発展する。この諸勢力はそれ自身一つの政治的上部構造である。それは物質的土台を離れることはできないが、物質的土台の発展・矛盾の成熟が旧い上部構造を桎梏と化する時、この腐朽化・寄生性——暴力的再編として、或いは

時、この腐朽化・寄生性——暴力的再編として、或いは

台の発展・矛盾が、今やこの上部構造そのものを桎梏と化し、その腐朽化を激化させているのである。今それを爆砕する力が世界の様々なところから噴出し、徐々に組織された力として結集され、成長しつゝある。従って戦後帝国主義の特徴付けとは、それ自身世界革命の到達点・発展段階を示すものとならねばならない。

④ 戦後帝国主義の世界編成を階級の見地からみる時、その主要な特徴は、一方で国際プロレタリア革命・国際社会主義革命に根本的な歴史的前進運動の抑圧こそ、直接の第一義的任務とする体系であり、他方で一切のブルジョア的・小ブルジョア的勢力の積極的組織化・結集・統合、社会主義とプロレタリア運動の小ブルジョア化・小ブルジョアの潮流によるその支配、これらの体系であるという点に現われている。前者は国際的内乱と民族革命戦争に対する軍事的抑圧の体系・中国・朝鮮・ベトナムに対する軍事的包囲・圧迫の体系、ソ連・東欧に対する軍事的恫喝と取り引きの体系を中心としている。これはまぎれもなく、戦後帝国主義世界編成が、内乱と革命戦争に対抗し、その直接の鎮圧を通して生まれ、世界プロレタリア社会主義革命の前進運動の抑圧を根本的任務とし、この反革命を基礎として成り立っていることの証しである。これこそロシア革命以降に学んだ国際ブルジョアジーの根本的階級意志である。だがこれは後者によって補完され、完成されている。又そうすることによってのみ維持される体系である。即ち世界プロレタリア

社会主義革命の根本的前進運動以外の、一切の勢力を積極的に組織し、結集し、統合し、ブルジョア支配の支柱・道具へと転化する方策である。とくにその主要な力は小ブルジョア勢力を積極的に組織し、結集し、プロレタリア運動をそれによって支配し、ブルジョア民主主義の道具に変えること、社会主義とプロレタリア運動を小ブルジョア化し、それを世界秩序の一支柱に転化していくことに注がれている。そのためにブルジョアジーは三〇年代の革命の小ブルジョアの反動、それからの脱却前進の未熟を徹底的に利用し、力の政策と結合して、譲歩・懐柔・浸透、分裂と同盟の政策をもってした。この目的のために、或いはもはや政治的経済的の不用物・桎梏となつた地主勢力を解体もし(ex・日本)、或いはソ連に対してヤルタ協定・国連等においてその国際的地位・權益を保障し、もりたて、或いは先進国プロレタリアートに対してブルジョア民主主義的諸権利やその社会的政治的地位・発言権を広汎に支え、或いはブルジョアの・小ブルジョアの民族運動に対しては民族独立をも承認したのであった。それは又徹底した分裂策でもあった。革命的プロレタリア国家とソ連の分裂・国際共産主義運動の分裂、民族革命戦争とブルジョアの民族運動の分裂――前者の軍事的抑圧と後者の宥和(典型マラヤ)、民族革命戦争―民族それ自身の軍事的分断(朝鮮、ベトナム)民族運動の内部的分裂策による歪曲化(インド―パキスタン)、侵略的―反革命的の楔の打ち込み(イスラエル)、

買収と形式的独立―事実上の支配の方法、先進諸国での米の黒人を初めとする有色人民、日本の膨大な下層のプロレタリア・未解放部落・在日朝鮮人民・沖縄の無権利状態、鞭の政策・抑圧や搾取の集中・差別の構造化等々である。そしてこの分裂・分断策をテコとして、一度び力の抑圧に屈し、その懐柔策に引き寄せられる勢力は、全てとゞまるところなくブルジョア体制の同盟者へと転化し、ブルジョアジーの影響を浸透させ、変質させていく方策である。例えばユーゴ、又平和共存政策への転換後のソ連のとゞまるところをしらぬ対米協調、或いは先進諸国の社民・共産党・大労働組合(日共の六全協以降をみよ)、又民族ブルジョアジーの帝国主義との融着。まさにこれらは米帝の力と、イギリスブルジョアジーの長年の狡猾・術策との結合であった。かつてレーニンには「国際ブルジョアジーも及び反革命のために結束しつゝあるが、同時に資本主義的所有が彼らを分解させ、内部分裂させる」と述べたが、三〇年代―第二次大戦を経た後の一時代には、国際ブルジョアジーは米帝の力を基礎に一層階級的に結束したのであった。更にレーニンはコミンテルン三回大会への報告要綱の中で、「資本主義諸国の小ブルジョア民主主義派は、現在では資本主義の主要な支柱である。というのは工業及び商業の労働者や事務職員の大多数或いはかなり大きな部分がその影響下にあるからである。彼らは革命がおれば帝国主義の特権によってつくり出された自分の相対的な小市民的安楽を

失いはしないかと気がかかっているのである。」と述べたが、これは三〇年代の小ブルジョアの反動と第二次大戦の苦難によって、又国際プロレタリアートの前進運動の遅れと米帝の軍事―政治―経済的力への思想文化的・政治的屈服によって、共産主義運動の俗流化・小ブルジョア化によって、又ブルジョアジーの譲歩・懐柔・浸透・分裂と同盟の方策によって、「帝国主義の特権」の範囲をこえて拡大し、生産力思想―経済主義―プラグマチズムとして一層広汎になった。国際ブルジョアジーはソ連・各国共産党をも自己の世界編成の同盟者へと転化していった。言いかえればブルジョアジーの支配の要がプロレタリアートをいかに自己の陣営に引きつけ、組織するかにおかれ、そこに支柱を築くことに主要な力が注がれているのである。そしてこれはベトナム革命戦争―三大陸人民の武装闘争が国際ブルジョアジーの力の体系に反革命軍事抑圧体系を打ち破り、動揺させ、又ブルジョアジーの譲歩・懐柔の方策の経済的―政治的余地が崩壊していくにつれて、その階級の本質・反動的―抑圧的―反革命の本質を赤裸々にした帝国主義的労働運動と住民統合方策へと移行している。同時に、その対極に、小ブルジョア民主主義左派からプロレタリア的―共産主義的運動・潮流へと改造・前進・成長していく大衆闘争が、革命的暴力を組織し、打ち鍛えつゝ発展している。この分裂を一層広く、深く、全社会的にし、鋭くしていくこと、それと結合して革命的暴力を組織化し、強固にし、

打ち鍛えていくこと、即ち「正規の攻囲」への移行である。もう一つ指摘されるべき点は、中国—東欧（東独含めて）—日本等の地主勢力が、或いは最も革命的に、或いは半ば革命的に、或いは最もブルジョア的に解体されたことである。これは十九世紀半ば以来の世界階級闘争が、その一任務を終了し、より前進したブルジョアジーとプロレタリアートの闘争へ最後の移行したことを示している。そして地主制打倒の任務は全面的に三大大陸の闘いへと移行した。（それは又この地域での帝国主義—民族ブルジョアジーとの新たな闘争の始まりを決定づけた。）

◎ この戦後世界編成を政治的側面からみる時、その主要な特徴は、一方で国際反革命同盟—軍事体系を基軸として、国際的規模での帝国主義的—反革命的上部構造を構成しつつ、他方では民族国家的存在、その併存を押し出し、それを国連へと吸い上げていくという点に現われている。前者は国際ブルジョアジーが国際プロレタリア革命に対抗すべく、組織した国際的統合であり、米帝の力を基礎に、自己を国際的権力として組織し、NATO—安保、沖繩—南朝鮮、台湾—南ベトナム、東西ドイツ—ベルリン分割、その他軍事諸条約体系として、民族の軍事的分断をも国際権力体系の環として遂行したものであった。民族国家よりも国際ブルジョアジーと国際プロレタリアートの対決が優先され、民族国家はそれに従属され、又分断された。にもかゝらずこれは後者を強め

後者によって補充された。国際的対抗が強まることによって逆に、民族国家的形式・集約は支配にとって不可避となったのだ。ブルジョアジーは諸階級を集約し、統合していくには民族国家としての政治形態をとらざるをえない。小ブルジョアジーを国際的階級として組織することはできないし、又プロレタリアートはたゞ国際プロレタリア革命としてのみ自己を国際的階級へと組織する。ブルジョアジーは一方で国際プロレタリア革命を抑圧すべく自己を国際的に組織しつつ、他方で小ブルジョア勢力、プロレタリア運動の小ブルジョア化・国際プロレタリアートの分断を積極的に組織し、結集・統合して自己の支配を維持していくには、民族国家としての政治的表現を強調せざるをえない。（勿論、資本主義的所有そのものが帝国主義列強間を完全に統一し、融合させることを絶対的にありえないこととしているのだが。）そしてブルジョアジーは第二次大戦における民族戦争に発揮された、小ブルジョア民族主義に色濃くまじわられたプロレタリア人民の意識力・政治力を民族国家へと上昇させ、吸収し、政治的に組織化することに力を注いだのであった。

それは内には、政治的にはブルジョア民主主義、経済的には国家の経済単位化・経済における国家的契機の強調として現われる。この民族国家的強調は、ヤルタ協定—平和共存への移行によって、ソ連—東欧を含め、又後進諸国のブルジョア的—小ブルジョア的の民族独立の達成を含めて、諸民族国家的併存—国連への統一を不可避とす

る方向に移っていった。だが民族国家とは反動的—ブルジョア的な、抑圧的—略奪的な帝国主義国家の外観であるが、或いは後進諸国でも多くの場合新植民地主義の外観にすぎない。にもかゝらずこの外観を政治的に組織し、それによって動労大衆を欺き、統合すること、プロレタリアートの国際的団結をこの諸民族国家的協調にすりかえること、まさにこのことが国際ブルジョアジーと国際プロレタリアートの対立が激しくなったが故にこそ、支配の不可欠の形態となったのであった。国連も又、国際階級闘争の欺瞞のための必然的道具として生まれたのだ。それを支えたものこそ米帝の国際的力と、第二次大戦を通しての共産主義運動の小ブルジョア民族主義への変質（ソ連—東欧では国家的側面に押し出し、先進諸国では小ブルジョア民主主義への融合として）に他ならない。この国際反革命同盟—民族国家—国連という政治的形態は、かのヴェルサイユ同盟—ウィルソンの欺瞞的民族自決原則—国際連盟を、三十年代—第二次大戦の経験によって、米帝の力を基礎に、ソ連と旧コミンテルン共産党をまき込んで、一層大規模に、一層欺瞞的に、一層強固に組織したものに他ならない。だがこの体系は沖繩—南朝鮮—台湾—南ベトナムにその一切の矛盾を集中し、そこに本質を顕わにし、それをこそ基礎としたのである。だからこそベトナムで突破され、瓦解されるやその動搖は全世界に波及し、その新植民地主義も反革命の本質を顕わにし、欺瞞的民族独立はまさに単なるブル

ジョアの的外観に転化している。そして先進諸国の民族国家も列強間の矛盾・対立の激化と相まって、帝国主義的・反動的の外観、一層腐朽化した、一層反動的—ブルジョア的な政治的組織化の形態へと転化しており、そこから小ブルジョア民族主義の分解が進んでいる。その左派のプロレタリア国際主義への脱却・成長を促進し、ブルジョアジーの矛盾を攻撃し、中間派を引きつけていく、国際政治闘争と政府打倒とを結合していく闘いが日程に上っている。

◎ この戦後世界編成を経済的側面からみるならば、その特徴は一方でIMF—GATT体制を軸とする、国際管理通貨制—国際貿易機構による世界市場の組織化、一層緊密化され、機構化された国際経済、生産—技術水準・産業構造・資本の蓄積形態の平準化・同質化への衝動など、他方でこの国際経済・その諸機構が国家的契機を構造的要因としていること、又国家自身を経済単位化し、経済的・社会的過程の国家的統括—国家的契機を環大結び組として国民経済を統括・組織し、経済における国家的契機—国民性の強調を階級協力・国民的協調として組織していくという点に現われている。前者は世界経済の一層の緊密化と、単一の世界経済としての計画性・機構化の要求、その過渡として世界社会主義の土台の一層の成熟であるが、だがまさにそれが資本主義的所有を基礎に、資本の利潤要求に従い、諸国家の国民経済の国家的統括・相互間の闘争をこえることのできない基盤としている

こと、更に巨大資本間の国際的闘争によって動揺せしめられるというところの中に内部的解体が準備されていた。後者は諸階級層を国民経済建設→資本主義復興→高成長に、国家的政治的側面から結集し、階級協力を組織し高成長を基盤とする財政政策によって、諸階級層の個別的な特殊利害を集約するという方策となつて現われた。このことからプロレタリアートにとって、現存の国家権力を前提とし、基盤とする限り、その経済闘争はこの国民経済への階級協調の方向に絶えずおし流され、政治闘争自身、この国民経済の下で自己の個別的な特殊利害の実現（とくに財政政策に現われる）のための手段、そのためのブルジョア国家内での政治的地位の拡大という方向に従属させられ、ブルジョア民主主義の道具、ブルジョア支配秩序の道具へと転化していったのであった。今やそれは生産→資本の過剰による経済停滞への移行、持続的なインフレーションによる激しい収奪、財政の金融資本への全面的奉仕として根本から崩壊しつつある。だがこの国際的な国家独占資本主義こそブルジョアジーの長期にわたる支配、その安定の基盤であった。我々はとくにそれが、第一次大戦後のドイツの債務奴隷化、英→仏→米→日対立に対して、第二次大戦後には国際的援助（マーシャルプラン・ドッジプラン）とブルジョアジーの国際協調として遂行されたこと、及びそれがケインズ理論を理論的基礎とした点にブルジョアジーの「前進をみる」ことができる。かつてレーニンとはコミンテルン二回

大会の政治報告で、ケインズの素町人的な小ブルジョア平和主義を嘲笑しつつ、ケインズの分析と結論（一切の負債の棒引き）に特別の注目をもって論及した。そしてケインズはこのヴェルサイユ講和会議と三十年代の経験を土台として、それをブルジョア的に克服する方策を理論化したのであったが、ブルジョアジーはこの理論的基礎の上に戦後方策を打ち樹てたのであった。その基礎となったものこそ、かつてケインズが期待した米帝の圧倒的な独占的地位・力量・過剰資本と金の集中であった。かくして国際的な国家独占資本主義は通貨の国家管理→財政金融政策を国際経済の結節点としたのであるが、それは何よりもドル金体制とアメリカの過剰資本と財政政策を起点とするものとして、アメリカ経済の世界経済的側面と国民経済的側面の二重性をこそ基礎としたのであった。だからこそそれは当初からアメリカの過剰生産・過剰資本と財政投資への依存という二側面をもち、前者を一時的に解決した西欧・日本の高成長とアメリカの商品輸出→資本輸出は、たゞ世界的規模で生産と資本を過剰にしたゞけであり、後者の朝鮮戦争→ベトナム戦争の軍事支出は世界的なインフレーションを加速したゞけであり、そして両者はIMF体制そのものを動揺・内部解体し、かくして世界的なスタグフレーションと、国際協調を不断に内部解体・内部分裂へと導く国際的矛盾・対立の激化を帰結している。

㊦ 次に戦後帝国主義の国内編成をその政治的側面から

みる時、その特徴は一方では内乱抑圧の体系を軍隊・警察を軸に、強力の体系として組織しつつ、他方でブルジョア民主主義→ブルジョア議会議の政治的組織化を汎ゆる政治的・文化的手段と買収によって組織するという点に現われている。前者は戦後のブルジョア国家権力の再組織が激烈な階級闘争を通して、その内乱への転化を力づくいとめ、プロレタリアートの革命的中核を力によって圧殺することに主要な力点を注いでなされたというように示されている。これは同時に後者の方策によって補充され、完成された。後者は資本主義の大規模生産・最新の技術・資本主義文化の発達を基礎として、官僚機構の発達・社会生活とその種々の個別利害の政治的組織化、小ブルジョア政党・労働者の多くを引きつけている小ブルジョア民主主義政党・労働組合等への政治的譲歩・懐柔・買収の方策等々をもってブルジョア民主主義とブルジョア議会議を積極的に組織していること示されている。又諸階級の個別的な特殊利害と政治的要求は、ブルジョア議会議へ、政党組織と選挙の組織化をテコに導かれてきた。労働運動の組合主義的政治は不可避的に自己をこの道具へと転化してきた。これはかつて第二インター・第二半インターの小ブルジョア民主主義派をブルジョア議会議に引き入れることによって内乱をもちこたえたブルジョアジーが、第二次大戦を通しての小ブルジョア民主主義の一層の浸透によって、共産党をかつての第二半インターにまで引き下げ、変質させ

ることによって、一つの完成にまで到達した点である。だが今日ではブルジョア民主主義は一層形式的なものとしてブルジョア独裁を赤裸々にし、ブルジョア議会議は「ブルジョアジーのおむすべり小屋・いちぢくの葉」の性格を赤裸々にし、階級対立の非和解性の激化は、ブルジョア民主主義→ブルジョア議会議の外で、革命的大衆闘争・力と力との荒々しい闘争を生み出している。そしてこの荒々しい大衆的暴力闘争→大衆的武装闘争と、他方でブルジョア・小ブルジョア政党・官僚機構によって一層激しく、全力で組織化されているブルジョア議会議・選挙の政治的組織化との分裂・対抗が増々深まっている。こゝに武装闘争を敵権力・敵階級の暴力と闘うものであると同時に、ブルジョア議会議への政治的組織化を解体する政治的武器とすべき、武装闘争と大衆路線を結合すべき根拠がある。

㊦ 国内編成を経済的側面からみる時、その特徴は、一方で不断の合理化・技術革新・資本の有機的構成の高度化・資本の集中によってプロレタリアートの内部的分解・動揺・再編・労働現役軍と予備軍との構造的分化をつくり出し、全社会過程の、諸階級の分解と再編を資本の強蓄積・工業の高度化を軸につくり出し、その下での抵抗闘争の昂揚とその圧殺・解体をくり返しつゝ、全体としてブルジョア支配秩序を強化し、持続的な労働強化による搾取強化と、持続的なインフレーションによる収奪の強化を激化させつつ、他方で経済要求と、経済の国家

的契機・統括との結合によって、組合主義的政治を積極的に培養し、組織化し、労働組合機構にブルジョア階級が浸透していくという点に現われている。前者は労働者階級の傾向的増大・搾取と収奪の傾向的強化・その内部の傾向的構造的分化であり、後者は財政政策・調停制度・経済ナショナリズム・組合主義的政治・買収によって労働運動をブルジョア化・小ブルジョア化し、そこに自己の社会的支柱をつくり出すとする方策である。これは第二次大戦がもたらした世界的意識としての生産力思想・プラグマチズムや高度成長や巨大な独占的超過利潤等を基礎として、ブルジョア階級の政治支配の一環として組織化されてきたのであった。だがこの「福祉国家」は今日ではその経済的基礎から根本的に動揺し、とどまるどころを失うに物価騰貴・失業の増大・激しい搾取強化・零落・困窮・様々な面での生活破壊等、大衆の耐え難い経済状態に転化しつつある。だからこそプロレタリア・被搾取労働大衆の新たな反抗・社会主義を要求する抵抗の増大・昂揚への持続的過程が始まり、その戦闘化・革命化が他方での一層ブルジョアの帝国主義的、抑圧的となつて若干の労働貴族を基礎とする帝国主義的労働運動や革命的住民統合政策・一部の反動的小ブルジョアとの分裂・激しい拮抗・対立を通して進み始めている。

◎最後に戦後帝国主義の極めて重要なもう一つの問題にふれておかねばならない。それは一方での水平分業・

承認は、余儀なくされた譲歩・力の後退であると共に、プロレタリア的貧農的民族革命戦争に対する防波堤でもあった。しかし国際資本主義はもはや後進諸国の国家資本主義を一步も前へ進めることはできなかった。資本・成長に集中され、後進諸国はIFFI-GATTからはじき出され、国家資本主義は慢性的な経済的停滞へと転化した。他方ヨーロッパの旧宗主国にかわって登場した米帝は、「資本援助」を餌にこれら諸国を次々に政治的・経済的支配においた。「植民地は金融資本の環境の下では政治的屈従の諸条件を受け入れる以外に資本を入手する道はない。」からであり、この「資本援助」は不可避的に増々アメリカの金融資本に対する依存性を雪だるま式に強めたからである。米帝は「資本援助」をテコとして、一方では余剰農産物や工業製品の輸出によって、民族工業と農業の自然経済を破壊し、かつその利子利権として大規模に収奪し、他方では原料資源の独占的略奪へ次々と触手に伸ばしたのであった。こゝから一方では民族ブルジョア階級は買弁的な官僚ブルジョアに転化し地主的搾取の激化と地主の寄生性が進み、国家資本主義は全く寄生的なものになり、前資本主義的な農民経済・農民社会も破壊・解体され、慢性的な経済危機と共に膨大な労働者と農民を、人間としてのぎりぎりの極端にまでおしつめた貧困と隷属が蓄積され、他方では米帝の軍事侵攻・クーデター・謀略等々によって、かつての民族ブルジョア政権が次々と反革命的な軍事カライ政権に

水平貿易・自由化という先進諸国間の経済的緊密化と後進諸国との不均衡の増大であり、他方での後進諸国からの搾取・収奪への依存・寄生性の増大である。前者は後進諸国の資本主義的発展の道を閉ざし、経済的停滞に導いた。かつてレーニンは一植民地とヨーロッパ諸民族との間の経済的区別は、以前には植民地が商品交換にまき込まれながら、まだ資本主義的生産にまき込まれていないところであった。帝国主義はこれを変化させた。帝国主義はとりわけ資本の輸出である。資本主義的生産は増々急速に植民地に移植されつつある。ヨーロッパの金融資本に対する依存性から植民地から引き離すことはできない」(『自決に関する討論の決算』)と述べた。そして第一次大戦後これは急速に強まりそれが民族運動を急速に発展させ、その分化も鋭くなったのであった。そして第二次大戦後多くのブルジョアの・小ブルジョアの民族運動も民族独立を達成し、国家資本主義建設の道を歩んだ。これは一方のプロレタリア的貧農的・民族革命戦争が、プロレタリア権力とその下での国家資本主義的要素をもった社会主義建設へと進んだのに対して、民族ブルジョアの二小ブルジョアの道として対照をなしつつ、帝国主義と共に始まった植民地の資本主義的発展と民族解放運動の、一発展段階の完了・到達点を意味するものであった。(勿もこれは中国では既に二〇年代末に完了し、アフリカでは六〇年代半ばまで続くというように発展の不均等をもっている。)国際ブルジョア階級の民族独立の

おきかえられ、反革命軍事援助によって漸く支えられるという状態になった。国際資本主義の中軸をなす米帝がこのような三大陸全域からの大規模な略奪・搾取への依存を強めることによって国際資本主義全体の寄生性を強めたのであるが、今日ではこの寄生性は一層強まり、帝国主義諸国全体の根本的特徴になっている。と同時に又、三大陸全域でのプロレタリア的農民の民族解放戦争が全世界的な規模での社会主義への前進運動の巨大な環・力として、帝国主義の寄生性の基礎を打ち砕きつつありそれが又必然的に帝国主義諸国内のプロレタリア革命運動を促進している。

以上我々は戦後帝国主義の諸特質を様々な面から、相矛盾しつつ相互に補完しあう二側面の統一として肥えてきた。そして今日ではこの二側面が各々矛盾を弱わにし、瓦解しつつあり、その統一性が破綻しつつあること、そしてブルジョア階級は一層その階級の本性を赤裸々にし、新たな反動的な反革命統一への再編を追求しつつあり、従って我々も又この両側面に於て闘い、それを統一していかなねばならないこと、そこに今日の主体のプロレタリアート共産主義化と、戦術の主要な問題があることを示唆してきた。ところでブルジョア階級にとつてこの二側面の統一の基礎は米帝であった。その意味で戦後世界編成は米帝体制であったのであり、この米帝こそ第一次大戦とロシア革命以降の帝国主義が死の苦悶から見出した延命の形態であった。第一に米帝は兩大戦と大

戦間に大儲けし、戦争によるヨーロッパと東洋の崩壊の下で、全世界から富を奪い取り、集中したことである。第二は米帝は兩大戦間と大戦時に、大規模な資本集中と超巨大独占・資本主義的技術の発展と産業の高度化を実現し、他を圧倒的に凌駕する生産力水準・技術水準・資本規模を実現したことである。第三に米帝は国内の最も強力なブルジョアの統合をなしとげ、このブルジョアの統合を「世界の盟主」「自由世界の守護者」として完成したことである。即ちアメリカの中央集権国家への国民統合が三〇年代のニューディールによって、プロレタリアートの連動・力・組織性を「民主主義」へ吸い上げ集約することによってなしとげられ、この民族国家としての中央集権的統合を第二次大戦への全面的参戦「反ファシズム民主主義擁護の世界的支柱」という世界意識によって打ち固め、更に西欧・日本の米帝の下への統合と「反共自由十字軍」の意識へと転化したことである。その物質的基礎は全世界からの富の略奪による買収としての「豊かな社会」（勿論黒人等には無縁であった）であった。（民族国家としての統合と世界的統合との固く融合した二重性。民主主義の反独占→反ファシズム→反共への転化、それだけ国家への吸収）第四に米帝はその圧倒的な経済的・政治的地位、政治・軍事力によって国際反革命と国家利害を統一したことである。革命を庄殺し、封殺することが同時に米帝の直接的な利害（ex・市場確保）となり、又国際ブルジョアジーの全力量を米

帝が集中したことである。第五に米帝への富の集中・金集中と、生産と資本の過剰、それに基礎をおき、それを解決するものとしての、一方でのIMF体制とドル撤布・資本輸出、他方での財政支出への依存・軍事経済・インフレは、アメリカ経済を一方で国民経済でありつゝ、他方で同時に世界経済へと構造化したことである。第六に米帝は二〇年代から六〇年代にかけて継続的に、ラテンアメリカ→アジア→アラブ→アフリカと後進諸国の再分割・勢力圏拡大・新植民地支配をおし進め、膨大な搾取と略奪を組織し、それを先進諸国の資本主義復興・成長の基礎にすえたことである。まさに国際ブルジョアジーは、米帝を軸にして、「地上の全ての国の人民の系統的な搾取を世界的規模で組織」し、「全ての国のプロレタリアートの革命運動（及び民族解放運動）を直接に鎮圧する」体系を築いたのであった。今日ではこれは全てのその反対物に転化しつゝある。アメリカによるこのような世界の統合は汎ゆる面々で解体しつゝあり、アメリカの国内的統合も解体しつゝある。世界革命はこの解体を促進しつゝ前進し、又この解体によって促進され、国際ブルジョアジーも自から内部分解・内部対立を絶えず強めこの解体を促進し、同時に新たな再編・延命の道を死の苦悶のうちに追求している。そしてそれだ世界革命は心臓部・中心環に向けて進撃しつゝある。

他方戦後世界編成においてソ連・東欧はどのような方向に進んだのか。ソ連は民族国家への上昇・固定化によ

って、三〇年代の革命の小ブルジョアの反動の矛盾を小ブルジョア的方向で解決し、更に東欧革命を集約し・吸収しつゝ米帝と対峙した。そして中国・朝鮮・ベトナム革命を一面で支え、一面で利用しつゝ、その小ブルジョアの本質から米帝に屈服し、経済建設に伴うテクノラートの抬頭と共に、新たなブルジョア化への道を進んだのであった。それは外へは民族国家として、内へは生産力思想→経済主義→プラグマチズムして表現され、不可避的に米帝との対抗的協調から東欧の従属化へ、又反人民化した軍隊と経済合理主義→テクノクラートによって構成される官僚支配へと転化していった。即ちソ連は共産主義社会への前進運動の軌道から最後のにはずれ出、三〇年代の小ブルジョアの反動から、更にブルジョアの反動（革命の過渡期の前進運動に対する反動）へと転化したのである。東欧の人民民主主義革命はソ連赤軍を力の背景としつゝ、プロレタリアート・小ブルジョアジー・ブルジョアジーの一部の連合独裁から、社会主義建設へ前進していった。それは地主制を解体し、ブルジョアジーを収奪し、帝国主義のくびきから自己を解放していく段階では、明らかに革命的前進運動を体現した。しかし革命が社会のプロレタリアート化・社会主義的改造への発展、革命の真にプロレタリア的「共産主義的性格が要求される段階で、東欧革命は前進運動をやめたのである。それは革命主体→共産主義運動の限界と、ソ連への従属化、ソ連とヨーロッパ帝国主義の政治的経済的圧迫との

結合によってもたらされてあったが、このことは人民民主主義革命から社会主義革命への連続的発展の・小ブルジョアの歪曲、権力の小ブルジョアの官僚主義化をもたらししたのであった。即ち米帝→ヨーロッパ帝国主義とソ連との拮抗・ソ連の過渡期のブルジョアの反動の下で、東欧の連合独裁は社会主義革命への深化を、ソ連に從属していく小ブルジョアの官僚主義化の方向へ進んだのである。

最後に中国・北部朝鮮・北部ベトナムは、その民族革命戦争→人民民主主義革命から社会主義革命へ連続的に一層深く発展・前進した。それは国際革命への連続的発展を阻止されたが、米帝と非妥協的に対決し、プロレタリア独裁を大衆的に強化し、この対決へ全人民を組織し、動員し、同時にそれを社会主義建設、社会プロレタリアート化・社会主義的改造に結合したのであった。工業建設・農業集団化・教育・生産と分配・労働規律と人々を労働にひき入れる形態と方法を、この米帝との対決への全人民的動員と粘り強い大衆的共産主義運動に結合し、更にそれに科学と資本主義的技術の最新の成果を結合していったのである。これは東洋の「人間としてのぎりぎりのところにおしつめられた膨大な勤労大衆」、世界の最下層の人民として帝国主義によって規定づけられ二重三重の抑圧と搾取におかれた膨大な貧農の解放運動・プロレタリアート化が、その主体的発展と共に、同時にその質的基礎を社会主義建設として築いていく過程でもあっ

た。即ち資本主義的發展の段階をとびこえ、ソ連—東欧のブルジョア的・小ブルジョア的歪曲をこえて、かつ自力で（かつてコミンテルンは「先進諸国のプロレタリアートの援助によって」を必須の条件と考えたが）社会主義へ移行していき、社会主義的プロレタリアートへと自己を改造発展させていったのである。「社会主義を建設するために、一定の文化水準が必要ならば、なぜ、この一定の水準のための前提を、まず革命の方法で獲得することから始め、その後で労働権力とソヴェト制度をもとにして、他の国民に追いつくために前進してはいけないのであろうか。」その人口がはかりしれない程多く、社会的条件の多様な点でもはかりしれない程特色をもっている東洋諸国の将来の革命が、疑いもなくロシア革命よりも大きな独自性を示すであろう。」（『わが革命について』） かつてレーニンはこの述べたが、人民戦争によってこの「前提」を獲得した東洋の革命は、まさにこの人民戦争の發展として、社会主義への前進運動をたゆみなく続け、世界プロレタリア社会主義革命に新たな地平を実現したのである。この全社会のブルジョア化社会主義化はより發展した段階で今も尚続いている。

以上、戦後世界編成を一言で特徴づけるなら、米帝の抜きてた力を基礎とする国際ブルジョアジーの結束・統合と、小ブルジョア勢力—小ブルジョア民主主義と小ブルジョア俗流社会主義と中小民族ブルジョアジー・小ブルジョアジーの、世界的な全面開花、それによるプロレタリア運動及び革命の過渡期の支配、その帝国主義への従属・協調であり、中国—朝鮮—ベトナムの人民戦争の社会主義的プロレタリアートへの前進である。かくして新たな全世界的な社会主義革命への胎動は、この小ブルジョア勢力の弱体な地域での、それをこえたプロレタリア的の社会主

義的民族解放闘争と社会主義的プロレタリアートの結束した米帝—国際ブルジョアジーに対する闘争が、全世界的に小ブルジョア勢力を動揺分解させ、その中から真にプロレタリア的の共産主義的の革命運動を生みだし、大衆的に昂めていくという發展形態をとった。いやそれは、今、煉獄の中を旅しながら成長しつつあるのだ。この成長によって全世界の社会主義的プロレタリアートは結束して、国際ブルジョアジーをその心臓部において打倒し、小ブルジョア勢力を解体・改造し、世界社会主義革命の勝利へ突き進んでいくであろう。

〔補〕 共産主義革命の過渡期と

スターリン主義

革命の国際的敗北と軌を一にしたソヴェト同盟内の革命の反動化は、何故、どのように、どのような内容をもっておこったのか。これをどのように把握し、総括し、どのような教訓をくみとり、又どのように打ち破り、克服し、のりこえていくかは、国際共産主義運動にとって、長い間困難な課題として横たわってきた。それは国際プロレタリアートの敗北に規定され、促進されつゝ、又逆にその一環としてそれを規定し、促進してきたからである。（とくに第二次大戦後、国家として、戦後世界体系

の内に帝国主義との共同関係において登場して以降、国際プロレタリアートの意識・政治を多少とも支配してきた。）それだけに国際プロレタリアートの前進・世界革命の前進は、この反動を打ち破り、のりこえていく歴史的前進運動を自からの課題としてきた。それは今日では中国のプロ文革として大きく切り開かれ、巨大な前進と経験を獲得している。そして他方では革命の反動も、現代修正主義—「社会帝国主義」として歴史の見地と言葉の厳密な意味において、その反動的・反プロレタリア的・反共産主義的性格を成長させてきた。これとの闘争は世界プロレタリア共産主義革命の前進にとって、本質的な一構成部分である。だが同時に、この革命をおし進めていかんとする隊列の中にも、今後切々の相剋・葛藤・矛盾があることを否定することはできないし、我々がそれに対してかつてソ同盟が蒙った革命の反動から絶対的に免れているのでもない。この意味では、世界プロレタリア共産主義革命は、帝国主義・国際ブルジョアジーを打倒する闘いの中で、現代修正主義—「社会帝国主義」との闘争を、同時に、革命勢力・プロレタリア運動自身の不漸のプロレタリア化—共産主義化・小ブルジョア的諸傾向との闘争・克服・反動的諸傾向・諸要素の一扫と結合させ、頑強に、粘り強く進めていくことを要求している。そこに今尚スターリン主義批判の意義がある。即ち成熟した姿を批判し、闘うのみならず、その成長していく根拠を批判し、その根拠と絶えず対決し、止揚して

いくこと、これは今も尚共産主義運動の課題である。だから世界革命の過渡期に登場した新たな問題として、ソ同盟に於ける革命の反動を、これまで述べてきた国際的連関において把握しねばならない。そのためにはやはり二年の戦術転換と諸段階の相互関係から出発すべきであろう。一八二〇年の激烈な内戦・国際的階級闘争の結果、「極めて不確かで、極めて不安定なものであるがそれでも社会主義共和国が資本主義的包囲の中で—勿論短い期間であるが—生存してゆけるような均衡が生じた。」軍事的任務に全力を集中し、労働者階級の英雄的力を汲み尽し、ソヴェト権力を守るためのプロレタリアートと農民の軍事同盟をつくり出し、打ち固め「た闘いの結果、「ロシアでは大土地所有者と資本家は消えてしまったわけではないが、完全に収奪され、階級として政治的に全く粉砕されてしまい、その残存分子はソヴェト権力の国家職員の中に身を隠してしまっ」か、二百万人の「亡命者として国外に階級的組織を維持した。」ソヴェト・ロシアには「たゞ二つの階級、プロレタリアートと人口の圧倒的多数を占める小農民しか存在しな」くなくなった。（KI三回大会へのロシア共産党の戦術に関する報告要綱）しかし内戦は大工業を荒廃させ、農民経済を極度に衰弱させ、食糧・燃料・運輸等経済全体の危機・崩壊をもたらした。（まさにそのためにこそ国際ブルジョアジーは内戦を長びかせたのだ。）プロレタリアートは疲労し、弱体化し、分散し、軍隊の復員はギャン

グ行為を生み、かつぎ屋的、個人的な商品交換や投機を慢延させ、小ブルジョアの自然発生性・動揺は激しくなった。「敵は大工業の荒廃した小農民国における日常の経済である。敵は空気のように我々を取りまき、プロレタリアートの隊列の中に非常に強くしみとおりのある小ブルジョアの自然発生である。プロレタリアートは階級から脱落している。即ち自己の階級の軌道からはみ出ている。工場は休止している。——プロレタリアートは弱体化し、分散し、無力になっている。そして国内の小ブルジョアの自然発生性を、今尚世界的に強力な国際ブルジョア全体が支持している。」「労働者階級の実際の力は、今やこの階級の強力な前衛と、それに加えるに階級からの脱落によって極めて弱められ、メンシェヴィキ的及び無政府主義的動揺に極めて影響されやすい分子から成り立っている。」「労働者階級にとっては、新しい力が成長し、高まりうるために、又古くて使いきったものが『修繕』されうるためにがしの時が必要である。：：労働者階級の新しい力の増加が遅れる不可避性を考慮に入れることが必要である。」（『新しい時代・新しい形をとった古い誤り』）「退却が必要となった。「今やこの攻撃（多年の間の大成功・勝利・獲得した陣地）を打ち固めるために退却することが全く必要となった。」「眼目は整然と退却することであった。だからこそ厳格な規律が必要であった。」（ロシア共産党十一回大会）退却は小ブルジョアの動揺と対抗し、鋼鉄のように打ち

鍛えられたプロレタリア革命の前衛に支えられ、農民大衆と結合し、彼らと一語に、百倍もゆっくりりと、だろっかりと着実に前進する」方向に向った。工業と農業の新しい結びつきを、一挙に、「急襲攻撃」によって実現することができなかった今、「一連のゆっくりした、漸進的な、慎重な『包囲』作戦によって、それをものになければならない。」「戦時共産主義から工業と農業の間の正しい社会主義的な生産物交換への移行」としての食糧税、社会主義的大工業の未発展の下で、農業と工業との流通の発展と小工業の発展の援助、即ち商業の自由と資本主義の発展の自由（小ブルジョアと資本主義のある程度の復活）、権力と運輸と大工業（及び土地）をその手に固く握っているプロレタリアートがこれを統制し、規制し、国家資本主義の軌道に導くこと、投機と、略奪との、国家的な監督・記帳・統制からの回避との闘争を組織すること、即ちNEP政策である。それは農民の状態を改善し、この階級の生産力を高めること、「支配階級としてのプロレタリアートが、農民を指導するため、農民を指導するため、農民と強固な同盟を結ぶため、又いくたの漸進的段階を経て大規模な社会化された機械化農業に移行していくために必要な措置を正しく決定し、それを実現していくこと」であり、その意義は「単一の過程としての世界プロレタリア革命の発展の見地からすれば、自分の手中に国家権力を握ったプロレタリアートの小ブルジョア大衆に対する政策を、実地にた

めし、点検するということがある。」（前出報告要綱）だがこゝには次の諸点がすえられていたことこそ重要である。第一は「プロレタリアートの独裁とは、プロレタリアートが政治を指導することである。指導階級・支配階級としてのプロレタリアートはまず第一に最も緊急な最も『難しい』任務を解決するように政治を導くことができなければならない：これ（現在最も緊急な農民経済の生産力をすぐ高めることのできる諸方策）を通じて進むことは労働者の同業組合の利害を階級の利害よりも高くおくことを意味し、労働者階級全体の利害、労働者階級の独裁の利害、地主と資本家に対抗する労働者と農民の同盟の利害、資本のくびきから労働を解放するための闘争における労働者の指導的役割をば、労働者の直接的な、瞬時的な、部分的な利益の犠牲にすることを意味している。」（『食糧税について』）「社会主義社会へと改造し、建設していく、社会発展の利益」の見地から提起されていることである。従って第二にこれは小ブルジョアの自然発生性との闘い、「小ブルジョアの自然発生性に反対するプロレタリア国家と国家資本主義との同盟」として提起された。即ち真正正銘の資本主義へ、プロレタリア権力の転覆へと導いていく小ブルジョア民主主義の影響、プロレタリア権力を掘り崩す、（半）無政府主義的影響と闘うことである。「資本主義の残存物と小規模生産との上部構造である政治的影響が、他ならぬ労働組合の間に比較的根強いということである。これは小ブ

ルジョアのな影響である。即ち一方ではエス・エルIIメンシェヴィキ（国際的には第二・第二半インター）の影響であり、他方では無政府主義の影響である。：：小ブルジョアのな影響・潮流・偏向に対する思想闘争に遙かに多くの注意を払わねばならない。——NEPは資本主義をいくらか強めざるをえないから尚更そうである。」（『NEPの諸条件の下での労働組合の役割と任務』）「第三は私的資本との競争に打ちかち、資本主義の復活に制限を加え、その限界を定め、「農民大衆と結合して、我々がかつて夢みていたよりも遙かに限りなくゆっくりと、だがそのかわりに全大衆が我々と一語に本当に前進するようなやり方で前進を始めること」であった。即ち農民の、農民経済の改造へ実際の経験によって前進していくのであった。第四は官僚主義との闘争と党の粛清であった。「官僚主義は『包囲』の遺産として、小生産者のばらばらに分散された状態に対する上部構造として、その姿を完全に明るみに出してきた。」（『食糧税について』）「国家機関の下部にはツァーリとブルジョア社会から受けついだ数十万の古い官吏がおり、いくぶんは故意に、いくぶんは無意識的に我々に反対の活動をしている。」（『ロシア革命の五ヶ年と世界革命の見通し』）「これと闘争して、現地から、下部から創意とイニシアチブを發展させること、又勤労大衆による党の点検・指摘、それと結合した党の自己点検と粛清（整風）を組織し、「前衛が自分の指導下の大衆から離れないで、真に全大衆を率い

て進むこと」であった（大衆路線の強調）。更にレーニンは後にこのNEPからの前進・新たな攻勢への移行、その諸条件・任務を次のように提起している。第一に全国の電化と、大工業の発展のための基礎の確立、第二に住民（とくに農民）の協同組合化と、文化の变革、文化水準の向上、第三に都市と農村、労働者と農民の交流、労働者の農村への派遣と共産主義活動、第四に党機関とソヴェト機関、党的なものとのソヴェト的ものを結合し、教育活動と公務活動を結合すること、第五に党と国家の官僚主義との闘争、「人間を選び実行を点検すること」「学ぶこと、学ぶこと、学ぶこと」「秀れた労働者・農民を結集し、機関の監督と機構の改善に努めること」「置は少なくとも、質のよいものをとるという原則」。第六は世界革命、とくに東洋の民族革命の発展であった。（勿も病にたおれたレーニンは詳しく述べてはいない。）

経済学者がいうように確かに農民経済・小商品生産から直接資本主義が成立し、成長発展していくのではない。その意味でプロレタリアートが、全ての管制高地を握っている限り恐れるにたりない。しかし直接経済学的な意味で問題にならないとしても、階級闘争の見地からする時重大な問題となる。即ち小商品生産と商業の成長は思想的・政治的・社会的にブルジョアジーの力を復活させ再生産させ、成長させ、それはプロレタリアートの中にも影響を及ぼす。（組合主義・小ブルジョア民主主義）プロレタリアートが、管制高地を握っているのは、この

の継続と経済の一定の回復の下で、一方には「ネップマン」即ち新ブルジョアジーが成長し、農村には富農（クラーク）が生まれ、又労働組合の上層部に組合主義的・経済主義的傾向が成長し、他方には新たな世代、共産主義的青年学生の層が生まれ、又失業者も増大した。しかし大多数の労働者と農民は漸くもたらされた安定の下で現状の継続と発展を要求していた。これは党内にも反映され、青年学生に依拠して（ニューコース）、新たな攻勢への移行・NEPの転換・党の官僚主義打破を主張したトロツキー派は、ブハーリン・トムスキー派と結んだ中央派・トロイカに撃退された。（トロツキーの不幸は共産主義運動をたゆみなく組織していくこと、階級闘争の戦術の問題を混同し、党・階級・大衆の相互関係、諸階級の関係全体、政治の経済に対する優位を理解しえなかったこと、その行政的手段への過度の依存であった。）スターリン派はこの均衡の下でトロイカの支柱として、党（及びソヴェトの）機構の中心を掌握した。（共産主義運動の抑制者・否定者への機構の転化）しかし階級対立・階級闘争は一層激しくなった。労働組合の上層部は一層組合主義的となり、協同主義へ傾斜し、ネップマンも、クラークも、ソヴェト職員の中のブルジョア分子もブルジョア知識分子も成長し、これらの勢力は一大勢力となつて「もうけを上げる」と合唱し、一切の制限を拒否し、党内右派の下、右派路線をつき進んだ。他方大都市のプロレタリアートの中核部隊はそれと対抗し、プ

ブルジョア勢力の復活・増大と闘い、資本を制限し、小商品生産を統制し、社会主義へ改造していくためでありその闘争手段としてである。だからこの対立・闘争は不可避免的に政治闘争へ、従つて、管制高地の中軸・権力の問題へ発展していく。この政治の、権力の階級的性格・作用が逆に経済を、その方向を決定していくのだ。まさしく「革命の根本問題は国家権力の問題であり、政治は経済に対して優位を占めざるをえない。」だが権力の主要部を掌握し、指導し、決定的影響をもっているのはプロレタリアートの前衛としての党である。従つて階級闘争は党の内部に鋭く反映される。まさに最大の管制高地こそ党なのだ。（このことは又党の革命性の保持の条件として、この管制高地が広汎な大衆と革命的な仕方ですっかりと結びつくことを要求する。）従つて問題は党がどのような戦術と政策をどのように実行し、階級闘争と共産主義運動をどのように組織し、党・階級・大衆の相互関係をいかに打ち鍛えていくかである。（この戦術については、社会とそれをとりまく社会の全体・国家とそれをとりまく諸国家の諸階級の相互関係全体を考慮に入れねばならない。又この共産主義運動は「大衆の革命的積極性をどのように培養するか」という問題でもある。）二一年の困難の下でもレーニンはこの観点を貫いている。レーニンとロシア革命の不幸は、レーニンが余りにも早く死んだこと、まだ新しい力が育まれていないうちに死んだことである。レーニン死後、NEP

プロレタリア独裁を防衛し、ブルジョア勢力に打撃を加える闘いに結集した。折しも国際的協同政策の破綻・敗北がイギリス・中国で露呈し、それだけソ同盟に対する包囲の環は強まり、国家的対抗・国家機構の下層から分離は強まった。この大衆から切り離された官僚機構に立脚するスターリン派は右派と同盟し、党機構の操作を含めて（左派の勢力を実際より遙かに小さく代表させて）、左翼反対派・プロレタリアートの反撃を抑え込んだ。だがそれは農村でのクラークの勢い・実権、ブルジョアジーの勢いを増し、一大階級衝突の危機を接近させた。諸階級の均衡と安定・機構の安定と秩序・自己の支配的地位の維持を第一の利害・存在基盤とする官僚機構は、その特有の官僚的方法で、大規模な工業化と、反クラーク闘争、農業集団化へ移行し、ネップマンの絶滅と計画化へ移行した。国際的には極左セクト主義・小ブルジョア急進主義・冒險主義に戦術を転換した。ネップマンは一掃され、クラークも表向きは一掃され、残存分子は協同組合の中に姿を隠した。右からの危険は去った。しかしそれはプロレタリアートの力を強めず、プロレタリアートに対する官僚の力を強めた。それは階級矛盾の激化に対する上からの官僚的強圧の体系となつた。都市ではプロレタリアートの現状打破の志向が強まり、農村では潜在的な危機・国家権力と農民・富農と貧農の隠然たる対立が続き、国際的にはファシズムが抬頭・拡大し、国際的危機も激化した。それに対して、官僚機構は国家的

安定・秩序・一枚岩を求め、それをテロルの手段をもってする反対派の抹殺によって追求した。国家秩序の官僚的打ち固め、テロルと国家利益を軸とする国際戦略が階級闘争にとってかわった。国家権力は官僚的ボナパルチズムに転化した。

スターリン主義。——それは社会主義革命の過渡期に階級的均衡から生まれた、共産主義運動と階級闘争の否定の体系である。それはプロレタリアートの、小ブルジョアの自然発生性への敗北・従属を基盤にし、それを打ち固める（ブルジョア勢力の攻撃を官僚的方法で撃退することも含めて）ことによって成長した。その思想的本質は小ブルジョアの俗流社会主義であり、マルクス主義とエス・エル主義の折衷・模倣・その体系化である。その階級の本質はブルジョアジーの支配の復活に反対すると同時に、プロレタリアートへの改造をも拒否する小ブルジョアジーの自己保存の要求であり、その政治的・機構的表現こそ官僚主義であり、ボナパルチズムに仰ならない。資本主義の下でのボナパルチズムが、資本主義的所有・資本と結合して自己を国家へと組織するのに対し、このボナパルチズムはそれを打ち破ったプロレタリアートの力、その国家的所有を利用し、支配し、それと結合して自己を国家へと組織する。その階級の基礎は小ブルジョアの農民の分散性・不活発・現状への固執であり、その愛国主義である。その統治手段は官僚的軍事機構である。だがソ同盟ではブルジョアジーとは、又

れてはいない搾取者・ブルジョアジーには、国際的基盤が、金が、巨大な社会的つながりが残っており、国家行政や、軍事行政や、経済行政の「技術」は彼らに極めて大きい優越を与え」（「プロレタリアートの独裁の時期における政治と経済」）以上の全ての傾向と陰に陽に結合し、自己の階級的利益へ引き寄せる。これらは全て党内にも浸透し、直接順応やへつらいをもってブルジョア分子が潜り込むと同時に、思想的・政治的影響を与え、これらは決して「純経済的」には、又行政的手段によっても克服されない。それはたゞ大衆的な階級闘争と共産主義運動の結合によってのみ克服されていくのである。それこそがプロレタリアートの力を強め、小ブルジョアジーを改造し、彼らの意識性・新しい社会的組織性・規律、英雄主義を強め、労働生産性をも高めるのである。この大衆的な階級闘争と共産主義運動を、又その結合を弱める時、それだけブルジョアジーの力は復活し、強まっていく。このことは決して経済建設経済活動の重要性を否定しない。問題はそれをどのような政治、目的意識で導き、どのような方法で進めるかである。まさに「過渡期は、死滅しつゝある資本主義と生れいでようとする共産主義との闘争、言いかえれば打ち破られたが絶滅されていない資本主義と、生れはしたがまだ全く弱い共産主義との闘争の時期」（前掲文）なのだ。資本主義と闘い、更に死滅させ、共産主義を増々強く高く打ちたてていくこと、ブルジョア勢力の復活と闘い全社会のプ

プロレタリアートとブルジョアジーの相互関係とは何であったのか。それは経済学的なものとしてではなく、思想的・政治的・社会的なものとして把握せねばならない。そして階級闘争（とくに過渡期の）ではそれこそが重要なのだ。「政治は経済の集中的表現であり」、「政治は経済に対して優位を占めざるをえない。」たえず復活しようとする資本主義勢力と、共産主義社会へ前進しようとする勢力との闘争が政治に体现されるのである。小商品生産・商業はたえずブルジョアイデオロギー・ブルジョアの欲求・ブルジョアの習慣・無政府性を生み出し、所有者としての側面を強める。労働者階級も又「資本主義は必ず一方では社会主義への遺産として、労働者の間の古い、何世紀もかゝってでき上った職業や職種のうえの差異を残し」、「職業的な狭い見解・同職組合及び労働組合的偏向」を受けつき、「労働組合のいくらかの『反動性』はプロレタリアートの独裁の下では避けられない。」（「共産主義内の「左翼主義」小児病」）という欠陥・弱点を受けつく、これは「社会主義のために闘い、それと共に自分自身の欠陥とも闘う」ことによって解決されるのだが、自然成長的には組合主義・小ブルジョア民主主義の傾向を生み出す。即時廃止することのできない官僚機構も、官僚主義への傾向を自然発生的に強める。インテリゲンチヤ・専門家の層も又特殊な社会層として長期にわたって存在し、彼らも又ブルジョアの志向を旧社会から受けつく。そして「打ち倒されはしたが絶滅さ

プロレタリアートと、社会生活の汎ゆる領域・全ての活動舞台の共産主義化へたゆみなく前進していくこと、階級闘争と大衆的な共産主義運動の結合である。とくに党が先頭にたって粘り強く、持続的に組織していく大衆的な共産主義運動こそ、この階級闘争の牽引力であり、目的意識であり、最も意識的方法であり、意識力の源泉である。階級闘争の具体的な戦術・政策に、その実行方法にこれを結合させること、（NEPの初期にはそれは異常に困難なことであったが、それでもレーニンの提起にはそれが含まれている。）等々である。（尚この共産主義運動の任務については、一九年綱領が包括的に規定していた）NEP以降の共産主義運動の主要な任務は、レーニンが示唆しているように、農民大衆を国家活動に引き入れ、記帳・統制・管理を学ばせ、教育・訓練すること、農村の文化水準の向上・文化的変革を進めること、農民をプロレタリアートの側に引き寄せ、その小所者の、小商品生産者の性格、その習慣・細分状態・利己主義等を粘り強く克服させ、社会主義の側へ移行させていくこと、このことを地道に、大衆と結合し、大衆運動として、たゆみなく進めていくこと、そこに党とプロレタリアート・青年学生層の力・革命的熱意を注ぎ、党とプロレタリアートの指導的・教育者的・組織的役割を發揮すること、又その大衆運動の経験によって共産主義運動を高め、豊富化し、党とプロレタリアート自身を教育し、訓練していくことであつたらう。それと結合して、労働者大衆の全

国家活動への参加を一層大衆化し、活発化し、労働者が旧社会から受けつぐ労働者の間の階層的差異や職業的狭さを克服し、労働の新しい社会主義的規律をつくり出し労働生産性を高め、管理を学び、労働組合を生産団体へと改造していく、教育・啓蒙・訓練の系統的な大衆運動を組織し、発展させていくことであつたであろう。農村の改造・発展に都市が力を尽し、そのことに都市自身を改造し、発展させ、両者の交流・結合を緊密化していくことであつたであろう。（とくに都市が強く農村に依拠している以上）この共産主義運動は党が献身し、自己犠牲・英雄主義・堅忍さを發揮し、党が中心となつて大衆運動へ発展させられていかねばならない。（又新しい世代・青年学生の力・熱意が汲み尽されねばならない。）その経験によつて党が常に新しい力を汲み取り、自己を变革し、清新にし、官僚化を阻止していくのである。だからこれは大衆的な党の整風でもある。党が支配政党となつたが故に、このような大衆的整風、自己の共産主義的創意・共産主義運動を大衆運動として、実例・実験・試行をもつて展開すること、共産主義的な組織生活等が可能となり、又必要となるのである。このような共産主義運動と階級闘争の結合が、党一階級一大衆の相互關係を打ち鍛え、緊密化し、ソヴェトをこの結合形態・相互關係へと転化していく。（ソヴェトの指導中核としての党、指導の党への一元化・精兵簡政）ロシア共産党左派の敗北はこの共産主義運動を組織することができなかつたこと、戦術を綱領（一九年綱領）の見地から裏付け、階級全体・全労働大衆の状態・階級勢力の相互關係全体を考慮して提起すること、或いは戦術と綱領を党の綱領・活動・運動として結合していくことができなかったこと、この観点から党内闘争を把えることができなかったこと（戦術と綱領を結合する主体へと党を打ち鍛え、高めていく独自の思想闘争と組織闘争としての党内闘争）又農村の勤労大衆を教育し、訓練し、改造していくこと、このことに都市の労働者の力を注ぐことの階級的に共産主義的意義を把えることができなかったこと（プロレタリアートの歴史的任務は全社会を改造し、共産主義社会を建設していくことであり、この全社会の变革者・建設者・指導者として打ち鍛えていくことに、その本来の階級性があるのだ。）行政的手段への依存の大きさ、大衆運動の軽視等である。（最後の点については、レーニンは七回大会に「社会主義を導入することは幾千万人が自分でそうすることを学びとつた時に、彼らだけがなしようすることである。我々は：：彼らが自分で直ちにこの仕事に着手するのを援けることを目標にしている」と言い、又戦時共産主義の時期にも「新しい経済建設の道に、新しい連系・新しい労働規律・新しい労働組織：：をつくり出す道へ、勤労者被搾取者の全大衆・並びに小ブルジョア層全体を導いていくこと：：は、偶々に激発する英雄主義によつては決して解決されず、大衆的な、日常的活動における最も持続的な、最も粘り強い、最も困難な

たこと、戦術を綱領（一九年綱領）の見地から裏付け、階級全体・全労働大衆の状態・階級勢力の相互關係全体を考慮して提起すること、或いは戦術と綱領を党の綱領・活動・運動として結合していくことができなかったこと、この観点から党内闘争を把えることができなかったこと（戦術と綱領を結合する主体へと党を打ち鍛え、高めていく独自の思想闘争と組織闘争としての党内闘争）又農村の勤労大衆を教育し、訓練し、改造していくこと、このことに都市の労働者の力を注ぐことの階級的に共産主義的意義を把えることができなかったこと（プロレタリアートの歴史的任務は全社会を改造し、共産主義社会を建設していくことであり、この全社会の变革者・建設者・指導者として打ち鍛えていくことに、その本来の階級性があるのだ。）行政的手段への依存の大きさ、大衆運動の軽視等である。（最後の点については、レーニンは七回大会に「社会主義を導入することは幾千万人が自分でそうすることを学びとつた時に、彼らだけがなしようすることである。我々は：：彼らが自分で直ちにこの仕事に着手するのを援けることを目標にしている」と言い、又戦時共産主義の時期にも「新しい経済建設の道に、新しい連系・新しい労働規律・新しい労働組織：：をつくり出す道へ、勤労者被搾取者の全大衆・並びに小ブルジョア層全体を導いていくこと：：は、偶々に激発する英雄主義によつては決して解決されず、大衆的な、日常的活動における最も持続的な、最も粘り強い、最も困難な

英雄主義を必要とする」（偉大な創意）と述べ、N E Tの時期にも「共産主義者の手で共産主義社会を建設するということは子供っぽい考案である。共産主義者は大海中の一滴である。人民という大海中の一滴である。」と注意し、「我々の広汎な大衆の間には、非黨員を活動に引き入れることが必要なのだというこの意識がない」と批判し、「行政手段を政治から切り離さないよう、活動を正しく組織する能力をもつこと」と指摘している。（十回大会）左派の敗北は、プロレタリアートの自然発生性の、復活し、増大するブルジョア的小ブルジョア的影響力への敗北であつた。或いはプロレタリアートの、小ブルジョアの自然発生性への敗北・従属。（これはドイツ共産党内の分派闘争にも、フランス人民戦線にも、スペイン革命戦争にも共通している。それは必ずプロレタリアートの反動・無関心と官僚主義を帰結する。）スターリン主義は共産主義運動の否定の体系として生まれ、現に存在し激化する階級矛盾の官僚的強圧の体系へ成長し、国家官僚制「社会主義」に転化した。しかしこの上層建築物は未だ脆弱で動搖的な基礎の上に立っていた。そして第二次大戦を通して、人民の意識・エネルギーを吸い上げ、民族国家・国家機構に榨づけ、打ち固め、下部構造に反作用し、浸透することによって完成し、質的転化をとげたのである。我々は今日、この左派の敗北をこえる階級闘争と共産主義運動の結合の新しい経験・教訓・発展・豊富化を、中国・朝鮮・ベトナム・キューバ

の中にみることが出来る。（一般に我々の革命運動は共産主義とプロレタリア運動の結合として発展していく。組織のための独自の思想闘争と組織闘争・組織生活、綱領の見地からの独自の宣伝・組織活動、階級闘争の諸経験を共産主義の見地から意識化し、普遍化すること、こういうことの中に共産主義運動が体现される。しかしそれは又現実の階級闘争・大衆闘争と結合し、大衆的影響力・指導力とならない限り無力であり、又この闘争の中で打ち鍛え、その経験・大衆の政治経験によつて検証され、そこから学ぶことなしに発展することはできない。他方プロレタリアートは共産主義と結合することなしに、自己のその大規模に団結できる力、新しい社会的組織性・規律性を打ち鍛え、發揮することはできない。この共産主義とプロレタリア運動の結合の当面の環・目的は社会革命のためのプロレタリアートによる政治権力の獲得である。そして権力を獲得し、ブルジョアジーを収奪し、基本的生産手段を手中にすると共に、共産主義運動は大衆的に発展し、社会を改造する主体的推進力に転化する。だから党も又実例・実験・試行等をもつた大衆運動、社会生活の全領域を包括する組織生活、これらによる自己教育・自己訓練・自己改造、この社会改造の事業に率先して進むそのような献身さ、自己犠牲・英雄主義・創意・堅忍さこそが必要となるのだ。しかし過渡期にあつてはこの党の組織する大衆的共産主義運動は、基本的に階級闘争の目的意識・意識力であり、階級闘争の戦術・政

策を実行する意識的方法・手段にとどまらざるをえない。階級の死滅と共に、それは増々全人民的な運動として、目的を自身に転化していく。

最後に、三〇年代の苦難の中で唯一血路を切り開いた毛沢東―中国共産党は、この三〇年代の世界的な革命の反動をどのように克服し、世界階級闘争の中に何を切り開いていったのか。その世界的意義はどこにあったのか。一つは帝國主義の寄生性が世界の最下層の人民として世界的に規定づけ、地主的鞭の搾取・抑圧と国際金融資本による収奪によって「人間としてのぎりぎりのところに押しつめられた数億の被搾取勤労住民」を世界プロレタリア革命の中へ導き入れ、そこから帝國主義の寄生性の基礎を打ち砕き、国際的鉄錐を打ち砕く闘いを進めたことである。これを自己の任務とすることによってプロレタリアートは（民族・都市小）ブルジョアジーの影響から最終的に絶縁し、自己を世界的な、全中国的な、全社会的な革命主体へと打ち鍛え、成長することができるようになった。（陳独秀―李立三―王明路線はプロレタリアートの都市小ブルジョアジーへの従属であり、そのジグザグは都市小ブルジョアの動搖の表現である。一般に（半）植民地の都市は帝國主義によって移植された、広大な農村の中に浮かぶ小島であり、プロレタリアートは農民の組織者・指導者となることなしに、帝國主義やブルジョアジーに、又都市小ブルジョアの影響に打ち勝つことはできない。）二つはこの二重・三重に搾取され、

抑圧された数億の下層農民をプロレタリアートへと組織し、打ち鍛え、改造していく道を開いたことである。（これは今も尚継続している。）即ち資本主義的発展の段階を越えて（しかしN.E.P段階を経て）社会主義へと到る道を切り開き、広大な下層農民を社会主義社会の建設者へと打ち鍛え、改造し、高めていく闘いの主体的基礎としたことである。三つはこのプロレタリア化の主体的推進力・意識力として、共産主義運動・主体の共産主義化を、大衆的に、頑強に、粘り強く進め、何度もくり返すつゝ深め、高めていったことである。思想方法・工作方法・作風・党内の思想闘争・組織生活・規律、軍の三大任務・三大規律八項注意・隊内生活、大衆路線・根拠地、党と人民・上部構造と意識と物質、理論と実践の相互関係、この絶えざるプロレタリア化と共産主義化と直接の階級闘争・階級敵に対する闘争との結合としての革命的暴力・武装闘争・その組織系列等々。その根本思想は、人民が「世界史の発展の原動力としての人民」の前進・発展に意識的自覚的に奉仕すること、歴史の土台・根拠力としての「人民」その未来への発展を、現実の人民自身を意識化し、古い上部構造を打ち破り、その（――歴史の根源力・土台としての「人民」の未来への発展）意識的物質力・意識的歴史力・意識的土台に転化すること、その意識的構造の中核・組織者としての党である。この「人民」をプロレタリアートにおきかえ、歴史の土台とその未来への発展の物質的諸条件を資本主義社会の分析

のうちに明らかにし（又この発展を階級闘争と共産主義運動の主体的意識的实践と見出した）ものこそ資本論であったが、この資本論を共産主義社会建設の实践的武器として物質化し、経験によって検証し、豊富化していく闘いは五八年以来続けられている。我々は毛沢東思想に多くのものを学ばねばならない。

第三章

世界情勢と世界革命の新たな発展

――諸階級の相互関係

（六〇―七〇年）――

①世界情勢と世界革命は、五〇年代末から七十年への十年間に大きく発展した。五〇年代末の世界的な小ブルジョア民主主義的急進小ブルジョアの昂揚の頂点で、その限界をはるかにこえて、世界革命の新たな突破口として闘い取られたキューバ革命と南ベトナムN.E.F結成（及びアルジェリア解放戦争）から、世界プロレタリア社会主義革命は新たな前進を開始した。この六〇年のキューバ革命・南ベトナムN.E.F結成から七〇年のベトナムIIインドシナ革命戦争への発展過程は、世界的規模での、小ブルジョア民主主義―急進小ブルジョア民族運動―社会主義革命の小ブルジョアの俗流化・歪曲から、プロレタリア的II社会主義的・共産主義的な根本的前進運動、世界革命主体への、歴史的な転換・再編・成長過程であった。この世界的規模での転換・再編の基本的傾向は既に完了している。しかしそれは成長を完了したとい

うことではない。世界的規模での成長は今漸くその第一歩を踏み出した、或いは踏み終えたばかりであり、今その本格的成長への試練を、世界的な死闘への移行の中で迎えている。(とくに帝国主義諸国にあってそうである) この十年間の発展を諸事件によって概観づければ次の如くである。

① 六〇年前後、世界階級闘争はキューバ革命・ベトナムNLF結成(及びラオスの闘い)・アルジェリア解放戦争と、アラブ(イラク革命・スエズ事件)・トルコ・朝鮮南部・アフリカの急進小ブルジョア民族革命運動との二重に混ざりあった民族解放運動、中ソ論争と中国の三面紅旗の、社会主義革命の小ブルジョアの歪曲・俗流化を打ち破る社会主義革命の新たな前進・飛躍への闘い、そして日本の安保―三池闘争、ベルギーの炭鉱ゼネスト暴動、イタリアの反ファシズム闘争、フランスの反OAS闘争等の日本―西欧の急進小ブルジョア民主主義的抵抗の頂点に登りつめた闘争という世界的昂揚を経験した。これは戦後世界一階級闘争の構造的転換の決定的端緒となった。同時にこの同じ時期にEHC結成―最初のドル危機の顕在化があり、西欧・日本の高度成長が本格化・成熟し、ケネディラウンドと「柔軟反応戦略」が始まった。言うまでもなくこの世界階級闘争の昂揚と帝国主義―国際ブルジョアジーの矛盾・新たな方策は相互に規定しあい、影響しあう単一のものとして、世界情勢を新たな構造的な転換・発展へと導くものである。しかし闘い

が小ブルジョア的性格にとどまっていれば、それだけ自然発生的なものとして、情勢を持続的に主体的に規定する要因となることができず、帝国主義―国際ブルジョアジーの方策に規定された抵抗闘争にとどまり、新たな方策・情勢の展開の前に粉碎・解体されざるをえない。その点から世界情勢を自主的・主体的に規定する要因として発展し続けたのはキューバ革命―南ベトナムNLFと中国三面紅旗の闘いであった。他方小ブルジョアの自然発生的急進運動は、抑圧と共に解体されることによって新たなプロレタリア的II社会主義的闘争の生成を準備した。

② 六〇年代半ばには、この構造的転換は決定的、かつ劇的となった。米帝の北爆、地上軍の全面侵攻―ベトナム侵略反革命戦争の激化と、それに反対するベトナム人民の偉大な、英雄的闘いの発展II世界革命の進攻を切り開くベトナム革命戦争、インドネシア九・三〇クーデターを初め、アジア・アフリカに吹き荒れた、米帝の後押しによる反革命軍事クーデター、ドニミカ革命と米帝の兇暴な侵攻・弾圧、そしてOLAS結成及びアラブイスラエル六日戦争とアラブ諸国の敗北、パレスチナ人民の武装闘争の始まり、中ソ対立の激化と中国内での走資実権派の抬頭・勢力拡大、それに対する革命派の闘争の始まり、又先進諸国における小ブルジョア民主主義派のナダレの如き帝国主義への屈服の進行―社会帝国主義派と現代修正主義への分解、同時に小ブルジョア民主主義からの分離の端緒的始まり、アメリカ黒人の

都市ゲット―叛乱の始まりである。同時にこの時期にドル危機―IMFの動揺は深刻化し、列強間の対立・矛盾は激化し始め、インフレの世界化が始まり、生産・資本・信用の過剰が露呈し、帝国主義列強の相互関係II国際的の上部構造の動揺・亀裂と再編が始まる。そしてこれら全体の要、汎ゆる意味での環こそベトナム戦争であった。米帝―国際ブルジョアジーは、ベトナム戦争によって世界革命の新たな発展・高潮を抑圧せんとし、又この軍事支出によって生産・資本の過剰を解決せんとし、この共通利害を軸にしつゝ、帝国主義列強間の相互関係―ドルIMF体制と政治―軍事体系II国際的の上部構造の動揺・亀裂・危機を再編せんとした。かくしてベトナム戦争を環に、米帝―国際ブルジョアジーとベトナム人民―国際プロレタリアートの世界的対決・闘争が進展した。そして小ブルジョア勢力は不断に親帝国主義派とプロレタリア革命派への移行を生み出しつゝ、ソ連を中心とする現代修正主義として、内部分解・分裂をほらみつゝ一つの世界的傾向を形造り、純化し始めた。

な民族解放人民戦争の拡大・発展と諸民族ブルジョア政府の反革命軍事カライイ政権への転換―米日英帝国主義の絡まりあい、アラブのパレスチナ人民解放戦争の成長とヨルダン反動王政(米帝に支えられた)との内戦、帝国主義―イスラエルシオニズム―アラブ反動派の結びつき、急進小ブルジョア民族政府の革命からの後退とソ連との結合強化、新たなアフリカ解放革命運動―人民戦争の成長(ギニア(ビサウ)―アンゴラ・モザンビーク・ジンバブエ・南アフリカ・タンザニア)、ラテンアメリカ全域での武装闘争の発展とキューバ社会主義革命の深化・チリ人民政権・中国勢力の動揺左傾化等々。一言で言えばベトナムIIインドシナ革命戦争の勝利的前進を牽引的に、三大陸全域にプロレタリア的II貧農的解放闘争が異常な速さと激しさをもって広がり、発展し、急進小ブルジョア民族運動が分解・再編されつつあること、更にこの解放闘争の中で真にプロレタリア的II社会主義的な指導主体が結晶しつつあることである。又中国プロレタリアの勝利(九全大会)とそれに引き続く闘争・批判・改革、北部朝鮮の七ヶ年計画の闘いの勝利的遂行、北部ベトナムの三重革命。(これらは全て共通した内容をもっている)そしてインドシナ―中国―朝鮮の広大な反帝(反米反日)統一戦線の結成という国際社会主義革命の大きな発展・深化が実現された。搾取者を絶滅し、社会主義的工業化を闘いとり、農業の機械化を闘い取り、工業―農業、重工業―軽工業。大工業―中小工業を併行して発展

③ 六〇年代末、七〇年前後に、この世界的対決・闘争は爆発的に発展し、十年間の転換過程を一段階終了し、新たな闘争過程・闘争段階へ移行した。ベトナム人民の六八年テト攻勢の勝利―パリ会談から六九年臨時革命政府樹立へ、更に七〇年インドシナ革命戦争への発展を牽引力、中心柱として、タイ、マラヤ、北カリマンタン、フィリピン、更にインド亜大陸への、プロレタリア的II貧農的、社会主義的

させ、その差異をなくしていき、全社会をプロレタリアート化・革命化し、階級をなくす闘いは、たゆみない共産主義的大衆運動と思想革命・文化革命を導きの環にして進められ、又この闘いを帝国主義と更に強固に対決して闘うための全人民的な武装体制の強化と結合し、更に南部朝鮮・台湾・インドシナ解放及び世界革命の強固な自覚的なプロレタリア陣地として打ち固められた。更に帝国主義諸国でも革命的大衆闘争が、アメリカ黒人解放闘争・反戦闘争、フランス五月の革命の大衆ストライキ、イタリアのストライキ運動・暴動、日本の安保仲繩闘争・大学闘争、バリケード占拠闘争とデモンストレーションの発展・初歩的武装等々として、国際的に最初の昂揚を実現し、政府打倒へ踏み出した。この昂揚の基本的性格は、戦後小ブルジョア民主主義の急進化・左翼化からプロレタリア社会主義革命運動への自然発生的かつ大衆的な移行であった。或いは小ブルジョアの性格を汎汎にもった自然発生的な社会主義革命運動の拾頭であった。それは戦後小ブルジョア民主主義の無力化・その社会帝国主義派への、或いは現代修正主義への分解・移行の中で、帝国主義の矛盾・重圧の激化と世界革命の新たな発展・高潮に促進されて、小ブルジョア民主主義をこえる最初の大衆的な社会主義革命運動としてまきおこったのであった。だがその濃厚な小ブルジョアの自然発生的性格のため、政府打倒へ、プロレタリア権力のための闘争へ一歩進み出した時——それ自身自然発生的にであった

が——帝国主義権力・ブルジョアジーの力による逆襲・反革命攻撃によって敗北させられ、戦線を分解させられた。運動の、又その昂揚の広さと深さの度合からしても或いは運動の意識性・組織性や訓練の度合い、更に前衛の成長の度合からしてこの敗北は不可避であった。しかしそれは最初の偉大な経験であった。階級闘争はその闘いと敗北の経験を学ぶことによって成長する。だが、この成長は大きな困難・苦痛・葛藤・混乱に満ちたものであり、又それを通じることなしにはありえない。問題の中心は階級闘争の一時の敗北ではなく、小ブルジョアの自然発生的社会主義革命運動の分解・混乱・再編である。これを克服すること、これを真にプロレタリア的共産主義的な革命運動へ改造し、訓練し、打ち鍛えていくこと、そこに眼目がある。階級的諸矛盾は一層激化し、階級対立は一層非和解的となり、階級闘争は様々な領域・人民諸階級層の中へ、様々な領域・人民諸階級層の中へ、様々な形態をもって、様々な細流を含んで、確実に、持久的に、広がり、深まっている。そして突出した爆発を組織しつゝ前進し続けている。この階級闘争のたゞ中で、その最前線で、その革命的中核部隊を真にプロレタリア的共産主義的部隊として組織し、訓練し、教育し、打ち鍛えていくこと、そして階級闘争の全ての形態・全ての細流・全ての領域を、プロレタリア権力の樹立へと、その流れへと結合し、結集し、集中し、動員していくこと、その意識性・組織性、まさにこのこと

それが眼目である。帝国主義諸国の革命運動は今このような試練に満ちた過渡期を歩んでいる。この中から革命的な社会主義的プロレタリアートの隊列が成長するのだ。同時に、この同じ時期に、戦後帝国主義の経済的・政治的世界編成の内部解体・瓦解は決定的となり、帝国主義——国際ブルジョアジーは、反革命的に、又その世界経済の地盤そのものからして結合しつゝも、内部分解・内部対立は日増しに強まり、鋭くなり、その支配力・支配の地盤を増々動揺・弱体化・脆弱なものにし、それらの解体ならぬ解決のため苦痛に満ちた再編を進めつつ、矛盾を更に拡大・深化し、死の苦悶に踏み込んでいる。ペトナム侵略・反革命戦争・そのインドシナへの拡大は、米帝——国際ブルジョアジーの深刻な敗北と、国際反革命の全般的動揺・その力の弱体化・政治敗北・反革命政治・軍事同盟機構の動揺をのみ、彼らに与えた。又この戦争・軍事支出は一時的な高度成長を支えたが、それは又一層世界的な、大規模な生産・資本・信用の過剰をよび起した。経済危機・経済停滞は世界的になり、インフレーションも世界的になり、そのテンポは一段と速まった。その下で、米帝と日帝及び西欧諸列強の間の力関係の大きな変化・各国一様の生産・資本の過剰は、相互間の矛盾・競争・対立を一段と尖鋭化させた。そしてドル危機の激化は遂にドル・金体制としてのIMF体制を事実上の解体に追いやった。帝国主義——国際ブルジョアジーは泥沼から脱け出ようとして増々深く泥沼にはまり込み

つゝある。しかし彼らは現在のところまだ力をもっている。そしてこの力によってありと汎ゆる反動的な反革命的勢力を結集し、同盟させ、利用し、後進諸国に対する侵略・反革命・搾取・略奪を強め、国内で労働者階級と勤労人民に対する反動・暴力的抑圧、搾取・収奪を強め、他方で反動的な反革命的支柱を組織し、又革命的プロレタリア国家を汎ゆる力と術策をもって平和共存の道に引き入れようと試み、中ソ対立を利用して、そして列強相互間の闘争・妥協・かけひきをくり広げ等々として現在の泥沼をたとえ一時的にせよのりきろうとしている。だがまさにこのことが世界プロレタリア人民を一層教育し、その解放闘争に動員し、その団結を強めさせていくのである。又そうしていかなければならない。最後にこの時期に現代修正主義はソ連を社会帝国主義的な頭目にし、その覇権主義・抑圧的反革命的な性格を強め、それに従属する形態で東欧の小ブルジョア社会主義政権・小ブルジョア・ブルジョア民族政権を結集しつゝ、同時にプロレタリア人民との、又その内部の分解・分裂を一層深めた。帝国主義諸国では、彼らは自然発生的な社会主義的な革命的衆闘争に激しく敵対し、抗争しつゝ、一層ブルジョア体制の側に身を寄せた。だが同時に彼らは多くの大衆の、未だ小ブルジョアの幻想に彩られた帝国主義——ブルジョアジーに対する憤激を結集し、小ブルジョア民主主義——小ブルジョア社会主義へ組織し、プロレタリア運動の小ブルジョアの支配めざしてその力を注いでいる。プロレ

リア的の共産主義的の革命運動はこれと、この影響と粘り強く闘い、その影響下の大衆を帝国主義・ブルジョアジイとの闘いの中で引き寄せ、プロレタリアの社会主義的に改造していかねばならない。それが又自からも訓練し、教育し、自己の指導力を高めていくのである。

我々は六〇年前後七〇年前後の世界情勢・世界階級闘争とその内的相互関係の発展について基本的な概観を与えてきた。この概観を補足する意味で個別的な分析を与えておこう。

① 第二次大戦と戦後に、アジアを中心として、爆発的に発展した民族解放運動は、プロレタリア的の貧農的の民族革命戦争と社会主義革命と、ブルジョア的のブルジョアの民族独立運動と国家資本主義の二つの潮流に分化した。前者の国際革命への発展は米帝と国際ブルジョアジイの全力量の集中の前に迂回を余儀なくされ、五〇年代半ばから国内建設・国防建設・反帝平和外交に力を注いだ。他方後者は五〇年代半ばにその発展運動を終了すると共に、国際的第三勢力の中間勢力として登場した。この両者の影響・中間から、民族解放運動は急進小ブルジョア民族革命運動と小ブルジョア社会主義政府として、アラブからアフリカへ、六〇年代前半にかけて燃え広がった。(エジプト革命・イラク革命・スエズ戦争・アラブ統一運動・アルジェリアの勝利に続くガーナ、ギニア、コンゴ、ザンビア等のアフリカ独立革命運動。スカルノ体制もろかり。)他方プロレタリア的の貧農的の民族解放と社会主義革命戦争は、六〇年南ベト

ナム・L・E結成、キューバ革命勝利と社会主義革命への前進・米帝侵攻撃退と全ラテンアメリカの発酵の始まりとして新たに開始された。まさにこの時から米帝は予防革命と原料資源略奪のために、侵略・干渉・転覆・支配をくり返し、急進小ブルジョア民族革命運動を次々と押し潰した。この革命運動の歴史的限界を明らかにし、民族解放運動の指導的地位から最後のに後退せしめものこそ、六日戦争におけるアラブの敗北に他ならない。同時にこの過程で民族ブルジョア政府の反動化・反革命軍事政権への転化・慢性的経済危機の激化・略奪と買弁経済・大規模な貧困・隷属非人間化が進み、こゝからベトナム革命戦争と結合して、プロレタリア的の貧農的の民族革命戦争と結合して、プロレタリア的の貧農的の民族革命戦争と民族解放と社会主義の人民戦争が、三大陸全域に異常な速さと激しさをもって広がった。今この力を牽引力・主体として、更に国際的力関係・帝国主義の動揺に影響されて、中小国ブルジョア政府も動揺を開始し、独自の立場を主張し、国際政治の改良の立場へ踏み出しており、両者の中間に小ブルジョアジイの闘いも又復活しつつある。今や三大陸では、帝国主義・新旧の植民地主義・反動軍事カライ政権・人種主義政権・イスラエルシオニズムに反対するプロレタリア的の貧農的の民族革命戦争(民族解放・社会主義)と、小ブルジョアの急進的反帝運動と、ブルジョアの改良的反帝運動が錯綜し互いに同盟・闘争しつつ、帝国主義に対する力関係を有

利にし、前者の力を強め、中間派を結集・改造しながら絶えず前進運動を続けていく根本的な革命過程にある。

その前途に未だ多くの迂余曲折があることは避けられないが、この潮流を変えることはできない。この潮流は寄生性を増々強めつゝある帝国主義の、その寄生性の根を打ち砕き、帝国主義の国際的鉄鎖を打ち砕き、国際的な社会的の政治的関係を革命する方向へ、従って又帝国主義心臓部の階級闘争・プロレタリア社会主義を激化させ促進する方向、更にソ連の社会帝国主義的反動を打ち破る方向へ更に強まっていく。これは三大陸の広大な人民の世界社会主義の建設者プロレタリアートへの形成過程であり、このプロレタリアートとしての主体的組織化が、その物質的基礎の獲得を、国際的な政治的の経済的存在としての帝国主義・資本主義の打倒・絶滅の心臓部の革命と生産手段と富の再分配・世界的共有と生産・分配の世界的再組織化・計画・統制を要求しているのである。そして他ならぬこのことが、ソ連の社会帝国主義的反動・抑圧・収奪・及び現代修正主義の打倒を要求し、又それを日々動揺させているのである。

③ 三〇年代と第二次大戦と戦後の長期にわたる人民戦争によって勝利を闘い取り、社会主義革命へ前進したアジアの諸プロレタリア国家は、プロレタリア国家と国家資本主義との同盟社会主義的基礎の建設と農業集団化の協同組合化を経て、五〇年代末から本格的な社会主義革命建設へ前進した。我々は前に、アジアの人民戦争が

膨大な被搾取動労農民をプロレタリアートへと組織し、打ち鍛えていく闘いであったことを指摘した。即ち地主経済のまゝに商品経済に引き入れられ、地主的な、又国際金融資本と高利貸的な、二重の搾取・二重の隷属の下で、一人間としてぎりぎりの極限にまでおしつめられている」膨大な貧農と小作農民を、軍隊を軸に民族解放の主体として組織し、打ち鍛え、その土地革命を更に、戦争の中で、小土地所有者・小生産者・小農民としての性格を克服し、共同所有・共同生産者へと変革してプロレタリアート化していく闘いであった。そして民族革命戦争の勝利後、社会主義革命建設への前進は、この農民を社会建設の主体へと高めること、即ちプロレタリアートとしての主体的組織化がその物質的基礎を建設し、社会主義の主体へと高めることである。この農民を主体としてプロレタリアート化することとは、全社会をプロレタリアート化・革命化していくことに他ならない。だがそれは工業化・工業建設を社会経済の中心・導き手とすることを不可欠とする。だがこゝではそれはブルジョアジイの収奪ではまだその端初にすぎない。かつてのロシアのネップは工業再建のため、プロレタリアートが農民に譲歩し、商業の自由を地方的範囲で許容し、それによって農民経済の生産力を高め、それを基礎に工業化資金を確保し、工業化を推進し、更に農業の社会主義化を展望していくものであった。主体は「都市で数十年にわたって激しい闘争をおこなってきたプロレタリアートの最

良の先進的部分は、この闘争の中で、都市生活と首都の生活との文化全体を見ない、ある程度それをとりいれた」プロレタリアートであり、それと農民との相互関係であった。レーニンは一貫してプロレタリアート・都市と・農民・農村との相互関係・前者の後者に対する組織的・教育者的・指導的役割と任務を重視し、それを階級をなくすための主要な問題として提起したが、レーニン死後この見地は放棄されるか、経済決定論式に歪められた。だがアジアではロシアとも又異っている。こゝでは主体は農民であり、農民のプロレタリアート化が眼目であった。だがそのためには工業を建設しなければならず、その資金は農民経済の中から得られねばならない。だがそれは商業の自由によってではなく、農民をより高い革命主体に民族解放の主体から更に社会建設の主体へと高め、自覚させ、その自発的な団結による労働生産性の高度化・生産増強によってである。だから工業化はあくまで農業の発展を基礎とし、それとの均衡において、又あくまで農業の社会主義化に奉仕するものとして進められる。何故なら工業化・従って都市或いは労働者・技術者・知識人は、自然成長的には広大な農業・農村・農民の上にたつ、社会の一部分として特権的存在に容易に転化しうるからである。(農村を従属させる都市)それは又都市の内部に、労働者・技術者・知識人・職員の中に新たな階層分化・支配系列を容易につくり出すからである。(組合主義・自由主義・官僚主義)だから工業・

都市・労働者・技術者・知識人・職員は、意識的に農業・農村の社会主義化・農民のプロレタリアート化に奉仕し、その指導的・組織的・教育者的力になり、全社会のプロレタリアート化・革命化にその意識的力を注がねばならない。都市と農村・工業と農業を結合し、交流させ、接近・融合させていき、その中で同時に都市内部の階層分化の傾向を克服し、労働者・技術者・知識人・職員の差異をなくし、単一のプロレタリアート化していかなばならない。よくに農業の技術的改造・農村の文化革命に、工業・都市の文化・教育は力を注がねばならない。それは又農民自身が工業に、教育に、技術的改革に積極的に参加することでもある。農業を基礎とし、工業を導き手とする経済建設、重工業と軽工業、大規模中央工業と地方中小工業の併進的發展、農業と工業の結合と農業の大規模化・機械化、それらの間の労働の差異の縮小、経済管理体系における大衆路線・政治先行・兩参一改三結合・民主主義的中央集権と計画の一元化体系、職員・知識人の下放・プロレタリア教育における政治・思想と知識技術と生産労働の結合、医療の人民への解放、家事経済の大規模な社会主義経済への改造等々。そして決定的な重要さは政治思想戦線の革命・全勤労人民の規模でこの革命をたゆみなく前進させ共産主義的プロレタリアートとしての主体的組織化を高め、その力によって物質的基礎を革新し、建設し、(主体思想や毛沢東思想の意義)全ての建設・改革を、日常的な粘り強い、持続的な

大衆運動をもっておし進め、全国家活動に住民の増々多くの部分が参加し、統制・管理・記帳を学び、闘争・批判・改革を進めより自覚的な、より大規模な団結をつくり出し、新たな創意を発揮し、社会の全領域をプロレタリア化・革命化していく、その前進運動を自身である。何故なら新しい経済建設とは、「新しい連系・新しい労働規律・新しい労働組織をつくり出す」ことであり、「新しい、より高度な、社会的連系をつくり出し、社会的規律——彼ら自身の団結の力と、彼ら自身のより自覚した大胆な、結集した、革命的な、試練を経た前衛の力その他には、自分の上にたつどのようなびきも、どのような権力も知らない、自覚し、団結した労働者の規律——をつくり出していく(『偉大な創意』)だからである。この「新しい労働規律をうちたて、人々の間の社会的結合の新しい形態をうちたて、人々を労働に引き入れる新しい形態と方法をうちたてるといふことは、何年も、何十年もかかる仕事である。」(『古い経済制度の破壊から新しい経済制度の創造へ』)しかし「大衆的な、日常的活動における最も持続的な、最も粘り強い、最も困難な英雄主義」によって実現されていく、「新しい、より高度な社会的生産様式だけが、結局のところ、ブルジョアに勝利するための力の、最も深い源泉となり、又これらの勝利を強固にし、くつがえることのないものとする、たゞ一つの保証となりうる」(『偉大な創意』)のである。アジアの革命的プロレタリア諸国家は六〇年代前半以来、この

新しい革命段階へ前進した。(中国プロ文革ばかりではない。たとえば朝鮮労働党五回大会の中央委報告をみよ、それはレーニン死後のソヴェト・ロシアが直面し、革命の後退と小ブルジョアの歪曲へと帰結した壁・或いは東欧諸国が同じく革命の停滞と小ブルジョアの歪曲に到った壁の突破であった。ソヴェト・ロシアでも、東欧でも、革命はブルジョアと地主を打倒し、彼らを収奪するところで終り、そこから階級をなくす闘いへの、真に共産主義革命としての前進運動に停滞し、逆に農民の小ブルジョアの傾向(その生産・習慣・思想・生活において)労働者の一部の組合主義的傾向、知識人の自由主義・行政・管理体系の官僚主義等が結合し、社会の階層分化と支配系列をつくり出した。それはまぎれもなく共産主義の小ブルジョアの俗流化であり、それ自身国際共産主義運動と国際プロレタリアートの敗北と停滞であったがアジアではブルジョアジーの収奪は社会主義建設の観点からすれば、全くの端初でしかなかった。農業集団化もまだ少しの前進でしかなかった。大規模な社会主義的生産へ自力でつくりかえる事業は、そこから更に巨大な努力・闘いが必要とした。まさにこのことが、ロシアや東欧の壁を踏みこえて前進することを要求し、不可避とした。そして大胆に打ち破り、踏みこえ、共産主義革命の新たな前進運動を大規模につくり出した。このこと、世界プロレタリア共産主義革命の見地からみた場合、大規模な共産主義的プロレタリアートの隊列をしっかりと、

堅固につくり出したこと、こゝにその前進運動の世界的意義がある。共産主義運動の見地からみる時、それは一九年總領の見地・その諸内容の断固たる復活であり、継承・發展實際の経験による豊富化である。(とくに党の活動方法・組織生活・思想闘争・勤労大衆との結びつき方、不測の内部革新) 共産主義運動の小ブルジョアの俗流化の打破、小ブルジョア勢力の社会主義的改造、全社会的プロレタリアート化・革命化へのたゆみなき前進、このことが「世界史の後方に向つての大跳躍」を克服し突破し、一七年と二〇年代初頭を継承・發展させ、遙かに前方へおし進める、世界的前進運動の一方の牽引力としての意義を支えているのである。

③ 三〇年代の「後方に向つての大跳躍」の後、第二次大戦の中で、或いは戦後危機の中で、前進運動を開始した帝国主義諸国プロレタリアートの階級闘争は、しかしその前進運動が、社会發展の度合が要求する水準まで追いつくことができなかった。そのためブルジョアジーに先をこされ、ブルジョアジーをして戦後の建設者・支配者たらしめ、プロレタリアートは自からの未熟・中途半端・自覚・意識性の不足・小ブルジョアの幻想のために、或いは力の政策の前に屈服し、或いはブルジョアジーの戦後再建の方策に追隨し、或いは譲歩・懐柔・同盟の政策に統合されたのであった。そして一担資本主義の復興・成長が進み出すや、それはブルジョアジーの力・支配を培々強め、プロレタリアートはかちえた陣地からも次

次と後退させられ、戦線のたえざる分解・再編・ブルジョアジーの浸透が続き、ブルジョア体制にそれだけ強くひきつけられていった。共産主義運動も又小ブルジョア的に変質・俗流化していった。これは我々が既に特徴づけた戦後帝国主義の諸々の特質によって一層強められ、プロレタリア運動はまきれもなく種々の小ブルジョア勢力に従属し、その影響によって支配され、ブルジョア民主主義の左からの補完・道具となつていたのである。勿論これはなだらかな、安定した過程ではなく、プロレタリアートの絶えざる自然発生的に民主主義的抵抗闘争とその敗北の連続であった。この過程は小ブルジョア民主主義派のブルジョアジーへの屈服を深め、帝国主義の側へ公然と移行する部分を生み出しつゝ、他方では民主主義的抵抗闘争の戦闘化を強め、それはブルジョアジーの新たな支配と帝国主義的発展・矛盾への大きな転換点であった五〇年代末と六〇年に、西欧と日本で大規模な大衆闘争として爆發した。これは戦後小ブルジョア民主主義的大衆闘争の一頂点であり、又最後の大闘争であった。それだけにこの敗北は徹底的であった。この敗北は戦後危機における階級衝突での敗北の総括であり、その完成であった。ブルジョアジーはこの勝利によって自己の戦後支配を完成した。戦後小ブルジョア民主主義的階級闘争の一時代は基本的に終了した。階級闘争の新たな段階はまずもってプロレタリアートの敗北の徹底化として進んだ。それはとくにプロレタリア運動を支配してきた戦

後小ブルジョア民主主義派の分解・変質として進んだ。

第一に公然たる新帝国主義と社会帝国主義への移行・それによるプロレタリアートの支配は急速に進んだ。アメリカのAFILCIO的潮流・イギリス労働党的潮流は、西欧諸国・日本で明確な姿をもって登場し、それは既に五〇年代末から進んでいたが、国際的潮流となり、ブルジョアジーの公然たる手先として、プロレタリアートの基幹部分を支配した。第二に小ブルジョアの俗流的共産主義は一層帝国主義との融和に向かい、帝国主義の体内で、戦後ブルジョア民主主義の敗北を小ブルジョアの俗流的共産主義によって陰蔽・補完し、或いは両者を融合・体系化しつつ、小ブルジョア勢力によるプロレタリア運動の支配・利用の方向を強めた。これも又ソ連共産党と国家支配集団を中心に国際的潮流となった。(その内部分解をはらみつつ)。即ち現代修正主義潮流である。第三に戦後小ブルジョア民主主義の中心的担い手であった部分は、その無力性を深めつつ、一層弱々しい、弱体な勢力となり、たえず分解・動揺をくり返す、諸勢力間の相互關係を示す一個のパロメーター的位置に転落した。第四にこれらの対極に、戦後小ブルジョア民主主義からの急進化・分離・克服の運動が始まった。これは最初は全く弱々しく、微力で、驚くほど緩慢であったが、六〇年代の後半・末には、大きな大衆的前進運動に發展した。前進運動——即ち戦後小ブルジョア民主主義の分解・無力化から、それをこえて、社会主義革命運動への前進で

ある。これは歴史上では、ロシア革命に続く、第二インタナショナルからの左派の分離・前進運動に比すべきものである。ドイツ独立社会民主党左翼の分離・フランス・イタリア社会党の左翼の分離、これらの第三インター・共産党への結集に比すべきものである。勿も六〇年代後半のそれは、二〇年代初頭のそれに比べて、広さと深さの点で遙かに小さいし、その小ブルジョアの自然発生的性格は一層濃厚であり、ロシア共産党、或いは多くの限界をもつたとしてもスパルタクス・ブンド(↓ドイツ共産党)のような指導的潮流に率いられているのではない。その意味ではこれは未だ端緒であった。しかしその根本的な歴史的性格は深く、ラディカルであり、決定的である。その実際の規模・その濃厚な小ブルジョアの自然発生的性格・確固たる指導的潮流の欠除にもかゝらず、それが内包した革命課題・革命的要求は根本的であり、その国際性と暴力性も又ラディカルであり、根本的な、二〇年代より遙かに進んだ、プロレタリア共産主義革命の端緒・その前進運動の始まりであった。(それは既に我々が述べてきた二〇年代以降の世界階級闘争の諸経験、その直面した壁と再前進とその未熟さの敗北——新たな前進という世界史的位相からして、又資本主義の歴史的变化・發展・成熟からして必然的である。) それは世界プロレタリア共産主義革命の前進運動——六〇年前後から始まった新たな前進運動に最後的に入り込み、一全世界の革命運動全体の循環に最後的に引き入れ

られたのである。しかし、帝国主義諸国が「全世界の社会主義革命を生み出すにちがいないような運動」全体の循環に、最後に引き入れられたのである。それは同時に資本主義の腐朽化・寄生性の根本的激化である。この両者の絡み合い、相互作用・衝突こそが、ブルジョアジーの支配の基盤・支柱であり、戦後ブルジョア体制の不可欠の主要な要素であった。戦後小ブルジョア民主主義を爆砕したのであり、公然たる親帝国主義社会主義への移行と、現代修正主義の反動的なブルジョア俗流社会主義への純化と、無力で動揺的な小ブルジョア民主主義と、そしてプロレタリア的の共産主義的革命運動への前進という分解をつくり出した。ベトナム・キューバ・中国を中心とし、三大陸全域に燃え広がった世界的な革命運動が、アメリカ・日本・西欧をもその循環に最後的に引き入れたこと（国際反革命上部構造——ソ連をもまき込んだ——の動揺・亀裂・分解、従って又民族国家として諸階級を集約する政治形態の動揺・亀裂・分解）と、資本主義の世界的な腐朽化・寄生性の激化（世界的側面からも、又国内的側面からも、経済—社会過程の国家的統括形態の動揺・分解と再編、従って経済における国家的契機の強訴—国民協調の組織化と、個別的特殊利害のブルジョア諸会議への政治的組織化の矛盾・動揺・分解と再編等）とが、両者の相互作用・衝突が戦後小ブルジョア民主主義を解体したのである。この解体は激しい動揺・衝突・昂揚をもって実現された。まさにこゝに

こそ、六〇年代後半の最初の革命的な大衆闘争の意義と同時に、その限界もあつた。その濃厚な自然発生的性格の根拠はこのこと、即ち戦後小ブルジョア民主主義勢力。その基盤が、外から——世界的革命運動と資本主義—国際ブルジョアジー——解体され、その解体に促進されて巻き起つたこと、その闘いの方向・目標を実現していく組織及び戦術を意識化することも、組織化することもできないが、解体が解体を促進し、爆発が爆発をよぶ仕方で既存の勢力をのりこえていくところにあつた。こゝにこそその波及力・衝撃の大きさ・深さ、その歴史の意義・ラディカルさ・偉大さと共に、その自然成長性・意識性・組織性・計画性の欠除があつたのだ。又その濃厚な小ブルジョアの性格の根拠は、まさにこの闘いが戦後小ブルジョア民主主義の解体として生まれ、その内部から登場したこと、それだけにたゞざるをえなかった、蓄積された過去の歴史的影響であり、その影響を克服し、清算し、脱却する方法そのものにおける小ブルジョアの自然発生的性であり、この不可避的な一時期の格闘・葛藤・自己矛盾がやむをえない、必然的なものとした、成長のために避けて通ることのできないものであつた。一つの歴史的な前進運動は、たゞこのような経験・訓練・教育をもってのみ成長していくのである。必要なことはそれを知りて学ぶことである。又この小ブルジョアの自然発生的性格を根本的に克服していくには結局のところ、長期にわたる階級闘争の中で、更に多く

の経験をつみ、訓練し、教育し、学んでいくこと、その中で自覚を高め、意識性・組織性・計画性を強め、闘いの方向と目標・それを実現していく組織と戦術をしつかりと把握し、建設し、打ち樹て、いく以外にないのである。だがいずれにせよ前進運動は始まつた。その始まりがどんなに自然発生的であり、又どんなに小ブルジョアの性格でいると知られてきたにせよ、それが明らかにした根本的な、全社会的に政治的変革の広さと深さ（或いは高さ）その世界的・国際主義的性格、そしてその暴力性は、この前進運動の根本的性格、その頑強性・持続性・長期性及びその広さと深さと激しさを、又我々が迎えている革命過程の根本的なプロレタリア的の共産主義的性格その高度さと深さを示したのであつた。この前進運動は六〇年代末にその最初の段階を終了し、新たな段階へ移行した。七〇年来、それは様々な細流となつて、社会の一層深部へ、一層広汎に広がっていき、新たな個々の爆発をつくり出してきている。西欧とアメリカでたえまなく続いているストライキ運動、それと交差する黒人闘争や北アイルランド・スペイン・イタリアの爆発、日本の打ち続く街頭武装闘争—戦闘的デモンストレーション、三里塚闘争・沖繩闘争等はその明瞭な表徴である。階級闘争は明らかにより深い、より荒々しい、本格的な発展・対峙の段階へ移行している。将来の巨大な爆発に向かう地鳴り、個々の爆発、汎ゆる亀裂からの噴出……諸階級の相互関係は激しい軌轢・衝突・摩擦をもってジリジリ

と再編されつゝある。ブルジョアジーは「死の苦悶」に入りつつあり、腐朽化と苦痛・けいれんに満ちた再編の中で、一方で反動的に反革命的勢力の結集・再統合・打ち固めと、革命勢力の力づくでの抑圧・圧殺に全力を注ぎつゝ、他方で小ブルジョア勢力を欺瞞し、追隨・従属させ、取り引きと同盟を維持することによって当面の破壊を回避し、のりきろうとしている。小ブルジョア勢力——現代修正主義—体系化された反動的な小ブルジョア俗流社会主義と、無力化し、純化した小ブルジョア民主主義——は、諸矛盾の激化と広汎な大衆の動揺・憤激・現状の改革の要求、これらの始まり、徐々の昂まり、強まりとブルジョアジーによって公認された体制内でのその政治的の社会地位に立脚し、伝統的な影響力とそのブルジョア体制内での反政府的位置、ブルジョアジーに公認されていること等によって、大衆に対する影響力を確保し、再生産し、発揮しつゝ、反政府運動に進出している。それは六〇年代の一時期的再編を経験した以上、かつての「反体制」的ラディカルさを失つた小ブルジョアの改良主義的反政府運動である。それは一面では（というより本質的には）、ブルジョアジーのプロレタリア革命に対抗するためのもう一つの道具・安定装置であり、常にブルジョアジーと取引し追隨し、大衆を欺き、プロレタリア革命に対抗してブルジョアジーと同盟している。しかし他面ではそれは今尚広汎な大衆——小ブルジョアジーと労働者のかなり大きな部分——を引き寄せ、影響

下におき、その気分・幻想・動揺・憤激・反政府性と結びついている。(プロレタリア運動を支配し、利用することがこの潮流の基本なのだ。しかしこの潮流のたえざる動揺・内部分解・再編を規定しているのは、主に小ブルジョアジーの動揺・分解・再編である。)この広汎な大衆は尚当分の間この潮流・その影響と結びつつ、動揺・憤激・現状変革の要求に政府運動・労働者の分離を強めていくであろう。そしてその政治的経験・闘争経験によって、この潮流を点検し、自己の幻想・中途半端さを克服し、この潮流の無力さ・欺瞞性・ブルジョアジーへの従属と訣別し、この影響から脱却していくであろう。そのために必要なことは政治経験・闘争経験であり、それによって教育・訓練され、学び・点検していくことであり、それを促進し、組織し、系統化していく、革命勢力の、彼らに対する粘り強い、持続的な、系統的な働きかけ、宣伝・煽動・共同闘争、政治経験の共同化・小ブルジョア潮流のたゆみなき暴露等である。主要な問題は革命勢力の成長・真にプロレタリア的の共産主義的革命勢力・潮流への成長にある。我々は既にこの問題に多くふれてきたし、後に又詳しくふれるであろう。だからこゝでは最も基本的な事だけ指摘しておこう。第一に最低限必要で、最も基礎的なことは、経済及び政治上の様々な問題に關する尚多くの戦闘。いくたの戦闘によって更に学び、教育し、訓練すること、闘争・批判・点検・改革(自己改造)をたゆみなく実行すること、より多く

の社会活動の形態・側面をわがものとし、一層多くの活動舞台に進出し、労働者勤労大衆の中でのより頑強な粘り強い系統的な革命的諸活動を組織し、より多くの闘争手段と活動形態に習熟することである。もっと多くの経験を積み、それに確固たる継承性を与え、訓練すること、現在におけるこの必要・重要性・意義を理解しなければならぬ。なぜなら「社会主義革命は一つの行動ではなく、一つの戦線にわたる一つの戦闘ではなく、激烈な階級的諸衝突の一時代であり、全戦線にわたる、即ち経済及び政治上の汎ゆる問題に關する、長く続くいくたの戦闘である」からであり、今日我々が直面する社会主義革命は最も深く、根底的・全体的であるからであり、我々がそれらにみあう真にプロレタリア的の共産主義的革命主体、真に大衆的な階級勢力となるには、現実の階級闘争によってもっと訓練され修練を積み、そこから必死に学ばねばならないからである。召還主義や帝国主義的経済主義や大衆に対する冷笑的・蔑視的・恫喝的态度等は、我々の成長の源泉を自から断ち、狭い、孤立的なサークルへと転落することを意味するであろう。第二にブルジョアジーとの様々な闘いの中で、頑強に、たゆみなく、小ブルジョアの潮流——現代修正主義・小ブルジョア民主主義——、その影響と闘うこと、言いかえれば、かつてレーニンが「プロレタリア革命の軍事綱領」の中で、ブルジョアジタとの闘争の一切の問題を、同時に日和見主義を暴露し、それと闘う仕方て提起しなければならぬ

いと言った、それと同じことを実践的に適用することである。即ちブルジョアジー敵権力との一切の闘争を、このブルジョア勢力、その大衆的影響力と闘い、解体する仕方て闘うことである。これは又、革命運動内部へのその影響・残滓を徹底的に克服すること、或いは小ブルジョアの半無政府主義的革命的革命性、「左翼主義」小児病を徹底的に克服することもある。総じて小ブルジョア勢力・その影響と闘い、その影響下の大衆と自分自身を改造していくことである。共産主義とプロレタリア運動の見地・原則を一瞬間も見失うことなく、汎ゆる際にこの具体化を真剣に頑強に追求していくことである。(我々はこれを二〇年代以降の世界階級闘争の総括の上に提起しているのだ。)第三に一切の小ブルジョア共産主義(スターリン主義、反スタ・マルクス主義、トロツキズム、アナルコ・サンディカリズム、無政府主義、左翼組合主義、民族共産主義)と闘い、克服し、マルクス・レーニン主義の革命的原則と、大衆的な革命的な運動とを緊密に結合し、ひたむきな探求・根気・学習と、実践による訓練・点検によって正しい革命理論を練り上げることに、又活動態度・階級闘争全般に対する態度において忍耐・組織性・規律・確固さを培い、堅忍不拔の共産主義的作風を打ち鍛え、革命的組織生活を確立し、広汎な革命的諸活動を組織しうる、中央集権的な厳格な規律をもった、継承性をもった堅固な革命的組織を建設していくこと。もう少し具体的に言えば、政治警察と闘い抜き、

非合法組織・非合法活動を基礎としつつ、同時に広汎な合法活動と生き生きと結合・統一して、広汎な革命的諸活動を組織する強固な戦闘組織を建設すること、そうして分散した共産主義的勢力を結集し、統合し、単一の共産党を創立していくこと。又武装闘争を、蜂起・プロレタリア権力樹立への、全人民の政治的動員・全戦線の党への組織的結合と結合し、その牽引力として計画し、組織し、遂行していく、「正規の陣地」を組織していくこと、そのように党・階級・大衆の相互関係を打ち鍛えていくこと、それを革命的プロレタリア国家・三大大陸人民の民族解放・社会主義的人民戦争との結合として世界プロレタリア共産主義革命(「世界プロレタリア独裁」として遂行していくことである。明らかに西欧でも、日本でもアメリカでも革命的左翼は共通の課題・共通の成長の試験に直面している。(個々の条件や形態の特殊性・相違にもかゝらず)だが階級闘争の全般的傾向は、世界的革命運動の成長と、資本主義の腐朽化の激化。「死の苦悶」の現われによる、政治的・社会経済的・思想的・文化的矛盾の全般的深化・激化によって、たえず広がり、深まり、激化する方向へ促進されている。それにしっかりと依拠し、自らを訓練し、打ち鍛えつつ進んでいく時この前進運動はもはやなにも押しとどめることとはできないし、偉大な発展を実現していくであろう。我々は二〇年代程に未だ大勢力になっていないが、二〇年代よりも遙かに世界的に有利な条件下にあり、遙かに発展し

た位置にあり、連続的な発展の中で自己を訓練することができる。又その時間が与えられているという有利な条件をもっている。我々はそれを無にすることなく、最大限生かさねばならない。さて二〇年代に言及したからには、次に世界革命の過渡期における、とくに第二次大戦以降における体系的な小ブルジョア勢力たる現代修正主義についてふれねばならない。

⑤ 我々は既に、三〇年代―第二次大戦―戦後過程における、ソ連の革命の小ブルジョアの反動（共産主義運動と階級闘争の否定の体系―権力の小ブルジョアの官僚的・ボナパルチズム化）↓一大民族戦争の前進的諸契機（民族国家への吸収・上昇・打ち固め（外には米帝―国際ブルジョアジーとの取引き、依存、吸引―帝国主義を主体とする国際上部構造の一環への転化、内には国家官僚機構への人民の吸収・土台への浸透・反作用）↓矛盾のブルジョアの修正による革命の反動化の完成（内には生産力思想・経済主義・プラグマチズム、反人文化した軍隊とテクノクラートを基盤とする官僚支配、外には米帝への屈服・奉仕・東欧支配―勢力圏への転化）という一連の過程を覚えてきた。それはまぎれもなく西歐―日本―アメリカの国際プロレタリアートの敗北の一環であり、又その中心として促進したものであり、国際共産主義運動―国際プロレタリア革命の桎梏物への転化であった。だからこそ、五〇年代末からの世界情勢と世界革命の新たな発展は、これをも揺さぶり、世界的な諸階級の

当時我々は漸く独自の立場からスターリン主義―ソ連派批判を行ない、日共から共産主義者同盟として分離し、新たな一步を踏み出したばかりであった。それ故我々は主体的に中ソ論争に関わる事ができず、自己の任務を世界革命総体の中に、具体的―現実的に定めることができなかった。中ソ論争に―主体的―に関わったのは、革共同流の急進社会民主主義の立場であった。そして今漸く六〇年代末の闘いを経て、結合しうる地平に達している。しかしこのような経過は又、我々が尚中国共産党に対して独自のであり、我々の独自の立場の実践のもつ世界性―場所的には局部であるにもかかわらず―と、中国共産党の実践の世界性―現実の場所的な広がりとしても―とが緊張をはらみつつ交差し、より高い世界革命―国際共産主義運動の主体へと高めるべきことを意味している。その意味で―団結―批判―団結が重要なのだ。世界的な総路線全体に關する論争から、世界階級闘争全体における実践的分裂・闘争への発展・それが帝国主義諸国・東欧をも把え、この世界的分裂・闘争の循環に最後の引き入れたこと、まさにこのことから現代修正主義は一個の世界的勢力、独自の階級勢力、体系性をもった勢力として登場しており、世界プロレタリアート、世界プロレタリア共産主義革命にとって、それとの闘争は不可欠な、不可避な世界的闘争となっているのである。現代修正主義―それは一言でいえば、世界プロレタリア共産主義革命の過渡期の小ブルジョア勢力、全社会を

相互関係の中に、自己の階級の位置を明らかにしつつある。五〇年代末から始まった中ソ論争は大概、次の三点をその内容としていた。一つは民族解放闘争の路線であり、二つはプロレタリア国家の国際政策であり、三つは社会主義革命建設に關するものであった。（中国共産党の文書からいえば、『新植民地主義の弁護人』『対立する二つの平和共存政策』『フルンチョフのエセ共産主義とその世界的教訓』がこれに対応し、その総合として『国際共産主義運動の総路線に關する提案』がある。）これらは五〇年代末―六〇年代初期の民族解放運動の新たな昂まり、米ソ協調の全面開花とキューバ危機、三面紅旗―社会主義教育運動とソ連共産党―二回大会を具體的実践問題として部分的問題をこえた総路線全体の問題として尖鋭化し、六〇年代後半にはベトナム革命戦争・プロ文革―九全大会・チェコ事件から、七〇年のインドシナ―中国―朝鮮の民族解放・社会主義の反帝国際戦線へと発展したのである。（だが我々は中ソ論争において帝国主義諸国革命運動の問題がスッポリと抜け落ちていくのに気がかざるをえない。いやソ連派がEBC論争や権造改革論争によって、右から、日和見主義的に新たな仕方で提起しつつ、中国共産党がスターリン―ブハリ―ン―コミンテルンを踏襲した一般的な仕方ではしか提起しえなかったのである。『総路線に關する提案』をみよ。だがそれは帝国主義諸国における革命的左翼の不在の証左であって、中国共産党に責が問われるものではない。

プロレタリアート化・革命化していく社会主義革命の徹底に反対し、即ち共産主義運動に反対し、自己保存とプロレタリア運動の支配・利用をはかる小ブルジョアジー、マルクス・レーニン主義を口にしつつ体系的な小ブルジョア俗流社会主義によってマルクス・レーニン主義・共産主義に反対する小ブルジョアジーである。資本主義社会から共産主義社会への世界的な革命的転化の過程で、プロレタリアートとブルジョアジーの階級的均衡に基盤をもち、プロレタリアートの前進運動に敵対し、それをおしとどめ逆に自己の支配を打ちたてようとしている小ブルジョアジーである。従って又彼らは自己の保存のために、自己の支配のために、又階級的均衡を維持すべく、ブルジョアジーにも反対し、この反対のためにプロレタリアートの力を利用し、かつ自己に従属させようとする。だからプロレタリアートの世界的前進運動は、ブルジョアジーとの闘争の中で、同時に小ブルジョアジーとの世界的なヘゲモニーの争奪戦を断固闘わねばならず、それに勝利し、この体系化された小ブルジョアの反動を解体し、小ブルジョア大衆を結集し、改造していかねばならない。ブルジョアジーとの闘争をそのような仕方方で闘わねばならない。（その意味ではこれはレーニンのカウツキー主義との闘争に類似している。例えばレーニンは『帝国主義論』フランス語版への序文の中で、カウツキー主義の階級的基礎が小ブルジョアジーであること、プロレタリアートは自分の階級性を保持し、歴史的

任務を実現するためにこの小ブルジョアイデオロギーと必死で闘わねばならないこと、そして又そのことによつて小ブルジョア大衆を帝国主義を打倒する闘いに結集し、引き寄せなければならぬことを述べ、一切の実践問題をカウツキー主義を暴露し、解体する仕方提起し、それを内包することによって初めて帝国主義に反対する立場は首尾一貫した、革命的なものになりうると、一切ならず強調している。しかし今日の現代修正主義は、世界的には依然帝国主義の力に依存し、それに対するプロレタリアートの闘争を欺瞞しているとはいへ、中国共産党が『レーニン主義なのか、それとも社会帝国主義なのか？』で指摘している如く、自分自身の基礎・自分自身の支配体系をもっている。それは人々が帝国主義をこえてその前方へ進み出した時に発生したものだからである。従つてそれは社会主義革命過程における小ブルジョアイデオロギーの過渡期世界における小ブルジョアイデオロギーであり、小ブルジョア勢力であり、そのようなものとして自分自身の基礎・支配体系をもっているのである。だからこれとの闘争は、レーニンのカウツキー主義との闘争よりも、一層世界的で、一層深く、一層激しい、一層複雑な、一層長期のものとならざるをえない。即ち大衆的な、組織された諸衝突・対・利用・分解等の形態をとるのである。だからこそブルジョアジーとの闘争を軸に、それと結合して首尾一貫して、原則的かつ柔軟に闘争を堅持することが要求される。この体系化された

ンドシナ革命戦争（より直接にはパレスチナアラブ解放闘争）ヨーロッパプロレタリアートの闘争とが結合されていくことを必要としているのである。七〇年来東欧ではプロレタリアートの自然発生的な反乱と、小ブルジョアの自主独立の二つの傾向が、世界階級闘争の全体を反映して進んでいる。それは相互に促進しあっている。それは目的意識的プロレタリア的なヨーロッパ社会主義革命への準備過程である。第二に帝国主義諸国では、それは体制内反政府勢力であり、プロレタリア社会主義革命への反動的に敵対的勢力である。こゝではその主要な活動は小ブルジョアジーを結集し、それによってプロレタリア運動を支配し、その力を利用し、そうしてブルジョア国家の中に浸透し、自己の支配的地位を築く点におかれている。帝国主義諸国において小ブルジョア勢力が現代修正主義として純化して登場してきたのは六〇年代の一時期を通じてである。それに先立つ一時期には、プロレタリアートと小ブルジョアジーは戦後小ブルジョア民主主義として融合していた。そしてその限りで革新（革命ではない）勢力として単一のブロックを形作り、より急進的かより穏健かの区別をもたにすぎない。まさしくそれはプロレタリアートと小ブルジョアジーの融合形態であり、戦後革命の敗北前進行運動の挫折と勝利した革命の二重の反革命による封じ込めの均衡革命の中間期の上に立つ、小ブルジョア民主主義と小ブルジョア社会主義であった。だがそれは六〇年代の一時期を通

小ブルジョア勢力は革命の発展段階に応じて、その現われ方、性格・位置が異なっている。（それでも六〇年代末以来増々平準化し、密集化しつつあるのであるが。）第一にソ連—東欧の社会主義革命の前進に対しては、既に反動的に敵対的勢力となり、一個の体系化された支配勢力として、プロレタリアートを直接に支配している。その中でもソ連の支配層はよりブルジョア的であり、東欧の支配層はより小ブルジョア的であり、両者の間には明らかに支配関係が存在し、それだけソ連は社会帝国主義的であり、東欧は従属国的である。この東欧の支配層がより小ブルジョア的で弱体であること、東欧がより従属的であること、こゝに東欧のたえざる動揺・矛盾・その多様性の根拠がある。即ちそれだけプロレタリアートの反抗が爆発しやすく、又帝国主義の影響も受けやすく、更に小ブルジョアの民族的要求も強いことである。チエコの自由化と反官僚闘争、ポーランドのプロレタリアートの反抗、ルーマニアの自主独立、ユーゴのブルジョア化と動揺、ハンガリーの対ソ協調下の自主路線等々。東欧は現代世界の矛盾の一点であり、世界階級闘争の一点発火点であり、世界プロレタリアートにとって試練の場である。（とくにヨーロッパプロレタリアート）こゝでは革命の小ブルジョアの固定化を打ち破り、新たな前進運動へ移っていくには、よりブルジョア的なソ連の社会帝国主義の支配と、ヨーロッパ帝国主義—国際ブルジョアジーの影響力と闘わねばならず、中国プロ文革・イ

して、世界革命の新たな発展（とくに民族解放—社会主義戦争を中心とする）と、資本主義の腐朽化と寄生性の激化によって解体された。一方では社会主義革命への荒々しい前進運動が始まり（それは不可避免的にプロレタリアートの革命運動として発展する）、他方では公然たる帝国主義への移行（公然たるブルジョアジーの手先、反革命としての帝国主義労働運動）が進み、その中間の小ブルジョア勢力が自己保存・延命・自己の独自利害のために、現代修正主義へと体系化したのである。小ブルジョア俗流社会主義への一切の小ブルジョアの傾向（小ブルジョア民主主義・民族主義・平和主義・議会主義・改良主義・組合主義・官僚主義等）の結合・体系化—小ブルジョア民主主義によって陰蔽された共産主義反対—それは政府問題を実践的環としてしている—それがこの潮流の政治的特徴である。小ブルジョアジーの結果によってプロレタリアートを支配し、従属させ、その力を利用して、小ブルジョアジーの利害・階級の地位を実現・強化すること、それがこの潮流の階級的内容である。世界革命の過渡期の、現代世界の腐朽化の小ブルジョアの表現。プロレタリアートがこの潮流に影響され、屈服し、従属・追従すること、それは最大の危険であり、プロレタリアートの危機である。だから我々はそれと容赦なく、そのプロレタリアートに対する影響力を解体し、逆に小ブルジョア大衆を結集・改造していく仕方、ブルジョアジーと闘わねばならない。その内容については後に述

べる。第三に植民地従属国の民族解放運動では、小ブルジョアジー（及び民族ブルジョアジー左派）は五〇年代、六〇年代に進歩的の反帝国主義的役割を果たしてきたし、更にその指導権を保持して、民族革命を一定の段階まで進めさせた。しかしその指導的役割は六〇年代半ばをもって歴史的に終了した。スカルノ体制の崩壊・アルジェリアのクーデター、アフリカ独立革命の挫折、六日戦争のアラブの敗北等である。そして今日では民族解放運動は社会主義革命へ一層発展しつつあり、その指導権は貧農と固く結合したプロレタリアートの手に移っている。他方民族ブルジョアジーの大多数は反動派として帝国主義と融着するか、プロレタリア的の貧農的解放運動とは全く別の勢力として、弱々しいブルジョアの改良的反帝要求を提出するにすぎない。（勿論その中には先進諸国のプロレタリアートが絶対支持すべきものも含まれている。）他方小ブルジョアジー（及び若干の民族ブルジョアジー左派）は指導的地位を退き、従属的地位にあり、動搖的ではあるが、尚プロレタリアートの指導権に結合されるか、プロレタリアートと協同歩調をとる限りにおいて、進歩的の反帝国主義的役割を果しうる。だが問題はこの階級が権力を掌握している諸国である。かつてこの階級が民族革命運動の指導権をもって来た時期、彼らは社会主義政治変革を一定段階までおし進めた。（エジプト・イラク・インドネシア等）又今日でも大衆的昂揚によって権力の位置についた当初、変革を一定段階までお

る。それを抑圧し、敵対し、ソ連の軍事力と国家利益に与ってかえること、こゝに今日のソ連の社会帝国主義的性格がある。以上の現代世界の小ブルジョア勢力の世界的支柱こそソ連共産党と国家の支配集団である。それは一方で帝国主義と結託と争奪をくり返し、他方でプロレタリアートの階級闘争の諸成果を篡奪し、その闘争・力を背後から支配し、利用しようとする。そうして小ブルジョア勢力を自己の周圀に結集し、その後見人となり、自己に従属させようとしているのであり、そのことによつて不可避的に社会帝国主義へ転化していくのである。最後に現代修正主義・小ブルジョアジーの世界的性格、世界プロレタリア共産主義革命の過渡期と小ブルジョア勢力についてまとめておこう。①それは帝国主義・ブルジョアジーに対する反対勢力である。何故なら帝国主義・ブルジョアジーは彼らを支配し、従属させ、零落させるからである。しかし自分自身では帝国主義・ブルジョアジーを打倒することができない。それ故その改良を、或いはその内部での自己の利益・地位の確保、増大をめざしている。②それはプロレタリアートの階級闘争の諸成果・革命の篡奪者であり、社会主義革命・プロレタリアートの歴史的前進運動に対する敵対勢力である。しかし他方ではプロレタリアートに対する支配・影響力・指導権への熱望である。即ちプロレタリアートの闘争・力を支配し、それを利用して、その成果をかすめとって自己の利益・地位・支配を維持強化しようとする傾向で

し進める。（セイロン、インド会議分裂、チリ等）しかし変革がそれ以上の前進を要求する時、それはプロレタリアートが革命の中心にとつてかわることを意味するが故に、この階級はそれを進めることができず、又変革がこの階級をこえる程にプロレタリアート貧農の昂揚をひき起す可能性をもつ時もそれ進めることができず、逆にプロレタリアート・貧農の前進運動に抑圧的の敵対的即ち桎梏となるのである。それは又必然的に民族解放闘争においても不徹底さをもたらし、強力な敵に勝利することができない。（この評価・分析についてはPFLP綱領七章、アラブ世界の革命勢力をみよ。）かくしてこの階級は国際的にも、国内的にも不徹底なまゝ、二つの勢力の中間にたち、帝国主義と国内反動派に反対しつつ、同時に増々強まる歴史的な前進運動にも反対し、増々動搖し、矛盾を深めつつも、自己の支配的地位・権力を保持しようとする。その主要な階級の基礎はインテリゲンチヤ・官吏・技師・小商人・軍隊の将校団等である。だが何によって？まさしく彼らの後盾となり、彼らを救い、その支配を維持し、同時に彼らに従属させているものこそ、ソ連に他ならない。経済援助・軍事援助はこの階級をもちたて、その支配を維持し、かつこれら諸国を自己の勢力圏へと組み込み、従属させるべく進められている。他方プロレタリアート・貧農の民族解放・社会主義の前進運動における指導権の要求は、権力の獲得・社会変革の徹底化・人民戦争体制の組織化・動員を要求す

あり、そのようにして社会主義革命に敵対する。③それは世界的には世界プロレタリア共産主義革命の過渡期のブルジョアジーとプロレタリアートの勢力均衡・対峙に基礎をおいている。（特殊的には地主勢力が既に世界的な主要な勢力を形造っていないということもその一つに数えらる。）このことから次のことが言える。彼らの帝国主義・ブルジョアジーとの融着は強まり、社会主義革命への敵対性は強まり、彼らの相対的比重は強まっていく。何故ならプロレタリアートの前進運動が発展するにつれ、ブルジョアジーがプロレタリアートと対抗するため、増々彼らを引き寄せ、彼らに依存していくからである。この直接の階級の基礎は、官吏・職員・小ブルジョアインテリゲンチヤ・技術者・自由業者・テクノクラートの存在形態である。（小ブルジョアの組織性・プロレタリアートを支配する機構）④その最大の勢力・支柱はソ連支配層である。それは最もブルジョア化した小ブルジョアの官僚制ボナパルチズム権力であり、プロレタリアートを最も強固に支配している。世界のこの勢力の支柱であり、かつそれらを自己に従属させている。というのは小ブルジョアジーは決して世界的な団結をつくり出すことができず、常に内部分解・動搖・分裂・分散にさらされるのであり、彼らが世界的に結合するのは、彼らの諸国家間の相互関係としてのみであるからである。そしてこの諸国家間の相互関係は、普遍的な世界的団結

に向わない以上、不可避的に支配・従属関係をつくり出す。即ち一つの強大な国家に従属し、結集するのである。この主任たるソ連は他方で又帝国主義の世界的連鎖の一環へ一層深くくみ込まれて登場しつゝ、同時に帝国主義と対抗し、この対抗にプロレタリアートを利用して、自己の勢力圏を拡大しようとしている。⑥ これはいかなる社会経済制度を代表するのか、第三の範疇はありうるか。根本的なものはブルジョアジーかプロレタリアートか、資本主義か共産主義か、それ以外にはありえない。しかし我々は過渡期の動態の見地にたゞねばならない。一方にブルジョアジーの国家独占資本主義があり、他方にプロレタリア権力の下での国家資本主義がありうるならば、その様々な歪曲・変容形態も、一時的にはありうるであろう。即ち国家官僚制資本主義或いは国家官僚制社会主義とでもよぶるものが。この過渡期の歪曲は、それが経た歴史の革命の深さ、徹底性・性格に規定されるし、又プロレタリアートとブルジョアジーの力関係に規定されるが、その基本的傾向は、プロレタリアートの前進運動によって止揚されていかなない限り、不可避的に資本主義に向わざるをえないし、又現に向っている。権力の一層のブルジョア化や、国際帝国主義への依存・その結びつきの増大や、社会帝国主義とその従属国・或いは資本主義的従属国への転化等である。その思想的核心理・社会発展に対する態度の核心は、一国におけるブルジョアジー（厳密な意味で資本家階級）の取奪と国家的所

有への移行（それに加えてたかだか農業集団化）＝共産主義とする立場（後は生産力発展）である。即ち資本主義の否定に基本的な第一歩を踏み出すが、しかし又同時に共産主義社会への発展をも否定することである。言い換えればプロレタリアートの根本的な歴史的任務・階級的独自性を、又共産主義運動を否定することである。だからそれは帝国主義諸国にあっては、「近代資本主義社会でプロレタリアートが演じている役割、この社会の発展についての事実、プロレタリアートとブルジョアジーとの対立する利害の非和解性」についての事実（国家と革命）の否定に行き着くのである。何故なら現代は全世界的なプロレタリア共産主義革命を生み出すにちがいないような運動に移っているからであり、世界革命の過渡期にあるからである。

⑦ 最後に帝国主義＝国際ブルジョアジーはどうか、我々は既に第二次大戦後過程におけるこの勢力の基本性格・支配形態について詳しく述べた。その新たな変化は五〇年代末に始まっている。以来この変化を規定し、おし進めてきたものは、一方で世界革命の新たな前進・昂まりに対する気狂いじみた反革命・弾圧・侵攻と、他方で帝国主義の不均等発展・その戦後帝国主義の存立基盤そのものとの衝突・列強間の競争・矛盾・対立の激化、及び世界的な規模での生産・資本・信用の過剰・その解決不能な成熟である。前者は米帝が「世界の憲兵」として恥しらずに、傍若無人に行なってきた。それ

は又米帝による後世諸国の再分割・（とくに原料資源の）略奪と結合されて、五十年代末以来、たえまなく、アジア・アラブ・ラテンアメリカ・アフリカ全域に広げられた。だがこの干渉・弾圧・転覆・支配・略奪によっても革命運動は決して消え去りはしなかったし、逆にそれによって教育され、かきたてられ、訓練されて、一層広汎に、激しく広がっていったのだ。まさにそのことによつて米帝は堪々泥沼に引きずり込まれ、随所で打ち破られ、敗北し、遂に「最悪の状態」に悲鳴をあげ、あがきを始めねばならならなかったのである。五〇年代後半のグアテマラのクーデター・中東出兵（英仏にかわつてアラブの独占的支配）に始まり、六〇年代にはキューバ侵攻・ラオス介入・コンゴ侵攻（アフリカ再分割の開始）・ベトナム「局地」戦争・ドミニカ侵攻・インドネシアクーデター・ガナ等のアフリカでの一連のクーデター・ヴェネズエラ・ボリビア・ニカラグア等ラテンアメリカでの「特殊」戦争等と荒れ狂ったのであった。だがまさにその頂点でベトナムテト攻勢／カンボジアクーデター・侵攻において決定的に打ち破られ、敗北への道をころがり始めたのである。この敗北・動揺は帝国主義＝国際ブルジョアジーの全政治機構をガタつかせ、動揺の淵に叩き込んだ。他方後者は五八年のE.E.C.結成、日本の神武＝岩戸景気等の西欧・日本資本主義の強蓄積・高度成長・巨大独占体の形成と、米資本主義の腐朽化・生産＝資本の過剰（勿もこれは大戦来慢性的であるが）・金準備の

減少・ドル危機として始まった。ケネディラウンドによる貿易・資本の自由化とドル防衛政策は、米資本のヨーロッパへの進出を強め、それはそれで一方でドル危機を激化させ、他方で巨大独占体＝国際トラスト間の分割戦を激化し、列強間の対立を強め、又西欧・日本の対米輸出を強めることによつてドル危機を激化させ、かくしてIMF体制を動揺に追いやり、IMF再編と米帝のドル防衛をめぐって列強間の利害対立・それと国際協力との矛盾が深まっていく一時代へと突入した。それは又NATOの動揺再編・日米安保の不断の再編をもたらしたのである。そればかりではなく、このケネディラウンドの一時期を通して、西欧・日本に於ても、五〇年代半ば以来の設備投資・産業構造高度化・資本循環は一段階完了し、生産・資本の過剰は世界的規模で成熟した。そして財政投資主導・資本集中・新産業開発へ転換し、かくして米・西欧・日の経済・社会構造は一層平準化・同質化を強めたのであった。（勿もアメリカの資本規模・産軍複合体をバックとする技術水準・原子力・宇宙航空・電子産業は頭抜けたものである。）まさにそのことこそがブルジョアジーの国際的結合の経済的基礎であると同時に、その内部分裂・内部対立・列強間の対立激化の根拠となったのである。その要こそIMFの動揺と国際協力＝国際対立の矛盾に他ならない。（そしてIMFの調整とは信用膨張に他ならず、六〇年代半ばではこの信用膨張によつて矛盾を陰したのであった。）IMFの一時期

的調整に信用膨張の促進を基礎とする六〇年代半ばからの膨大なベトナム軍事支出は、アメリカのみならず、この世界的な生産資本の過剰を一時的に解決しつつ、高度成長（とくに日本・西独）を持統する基盤となった。この高度成長は資本の大規模な集中と、巨大独占体間の再分割の激化と、大規模な投資を伴うものであった。だがこの膨大な軍事支出はドル危機を破局にまで進めずにはおかなかった。第一にそれは野放図の信用膨張（米国内的にも世界的にも）として、ドルの価値を徹底的に下落させ、アメリカのみならず世界的なインフレーションを激化させ、IMFを根底から動揺させ、かつIMFと各国の国家財政主導との間の矛盾を激化させた。（とくに英仏）第二により直接的には西欧・日本の対米輸出激化・或いはアジア反共諸国へのドル撤布（軍事援助）の日本への吸収等として、ドル外貨を日本・西欧（とくに西独）に集積したことである。同時にこの過程で英仏の衰退と、ヨーロッパでの西独帝・アジアでの日帝の抬頭が顕著となり、西独の欧州の盟主への進出―東方外交―イスラエル接近、日帝の南朝鮮―台湾―インドネシアを軸とするアジア侵略反革命―日米同盟の基礎の上に立ち、同時にこの基礎の矛盾・動揺を深めつ―が急速度に進んだ。それは米帝を支柱とする国際反革命の枠内ではあるが、又米帝の政治的後退をおし進めたのである。そしてベトナム―インドシナでの米帝の敗勢が全面化した時、これらの蓄積された矛盾は爆発した。国際ブルジ

ョアジーはこの爆発をなし崩し化すること、なし崩し化したつゝ時間を稼ぎ、再編をおし進め、延命の方途を見出すことに力を注いできた。しかし蓄積された矛盾は頑強に自己を貫いたのだ。戦後の国際的上面構造の要・環であった、南ベトナム―台湾―南朝鮮―沖縄が、増々国際革命のルツボと化し、インドシナ―中国―朝鮮の革命的前進と、東南アジア諸国民の解放戦争（タイ―マラヤ―北カリマンタン―フィリピン）と、日・米プロレタリア人民の革命運動を結合し、国際的上面構造全体の革命的爆発への力を打ち鍛え、蓄積しつつある。同時に国際ブルジョアジーも現状ではやっていけず、日米同盟の再編成を中心にとり、汎ゆる反革命勢力・反動勢力を結集し、結合し、ありと汎ゆる術策・欺瞞・狡猾によって再編し、新たな体制を築くべく力を注いでいる。（ニクソンドクトリン）しかしそれは革命運動によって動揺させられ、危機に陥し込められるばかりでなく、「彼らの内部の結びつきは、じつはかえって彼らを分裂させ、彼らを互いに対抗させること」によって、たえず動揺と分解にさらされるのである。それは又諸国内部の支配形態を動揺させ、不安定にし、そのことによって又革命運動を促進する。まさにこれはソ連社会帝国主義も含めて展開されているのであるが、従って又ソ連をも含めてそうなのである。他方ベトナム軍事支出―野放図な信用膨張による高度成長の持統は、更に深く、大規模な、世界的な生産・資本・信用の過剰を結果し、米・日・西欧で深ま

りゆく経済停滞と増々昂進するインフレーション、いわゆるスタグフレーションを進行させている。そしてドル価値の徹底的下落と日・西独へのドル外貨の集積は、遂にIMF体制（ドル金体制）を解体に導いた。しかし国際ブルジョアジーは内部分裂・対立を深めつつもプロック化に向かうこともできず（今日では各国資本主義は余りにも緊密に結合している国際経済の一環としてしか成り立ちえないのだ）、同時に又新たな国際経済の管理体制をつくることもできない。そしてブルジョアジーは当面の破綻の爆発を回避することに力を注ぎ、脆い妥協をもって通貨調整をはかり、それを基盤に相互間の商品―資本の市場競争を拡大すること、同時に他方で国家財政を主導とする各国経済の景気調整や安定化計画によって、更に後進諸国からの略奪・収奪の激化によって、この矛盾を解決しようとしている。だがこれは列強間の競争・利害・対立を一段と激化させ通貨戦争をたえず激化し、或いは保護主義をもたらし、或いは市場再分割―支配への欲望・征服欲を激化し、弱い部分へ矛盾を集中し、又景気政策や安定化計画をたえず動揺させ、更に後進諸国の困難と共に反抗を強めるのである。何よりもこの腐朽化・寄生性の激化は第一に後進諸国のプロレタリア的貧農的解放運動を一段と発展させ、更に民族ブルジョアジーの動揺と改良的立場からの反帝要求を促進する。第二に先進諸国でのプロレタリア大衆に対する搾取・収奪・物価騰貴・失業・労働苦・貧困を飛躍的に

強め、又資本集中の強化・一握りの巨大金融資本の支配そのあくなき搾取・略奪欲の再生産構造への農業・小漁業・軽工業・中小資本のたえざる分解・再編をもたらし増々多くの大衆の零落・隷属を強め、更に公害・住宅・高年層問題等、社会―生活破壊を進めるのである。従って又労働者・勤労大衆の深い動揺・憤激・反抗をよびおこし、激化させ、戦後一時代の、各国経済発展の国家的契機への階級協力―「国民経済への国民協調」と、その上での高度成長に立脚した、諸階層の特殊の個別利害の財政政策による集約という支配の形態―組合主義的政治・ブルジョア民主主義の主要な地盤を動揺させ、解体しつつある。かくして世界プロレタリア共産主義革命の経済的地盤は一層成熟しつつある。発展の客観的要求は資本主義的所有の廃絶・貨幣の廃絶と世界経済の統制・管理・計画であり、生産と分配の世界的再組織（資本主義的所有による商品生産・商品交換にとつてかわる）であり、とくに生産諸手段の後進諸国への分配・先進諸国プロレタリアートの無私的援助・社会的労働の世界的配分である。この方向に向ってのプロレタリアートのたゆみなき前進こそが要求されている。米帝を主軸にした連プロックをも包括した反動的な国際的上面構造を爆発し、世界プロレタリアートの新たな結合を組織し、資本主義的所有を廃絶し、世界的な共同所有を実現し、世界経済を再組織し、つくりかえ、共産主義社会へ向って進むこと、それが発展の客観的要求であり、その諸条件を

戦後四半世紀の発展が準備してきたのだ。(国際管理通貨制しかり、国際的独占体―国際的生産活動しかり、世界貿易の拡大しかり、又これに照応する国際的の上部構造しかり)そしてまさにそれが資本主義的所有―商品生産を基礎とするものであるが故に、発展と共に汎ゆる面で矛盾を激化させ、世界資本主義の没落―死の苦悶が始まったのである。(IMF I G A T T体制の解体しかり、列強間の経済対立の激化しかり、世界経済の停滞とインフレの激化―生産・資本・信用の過剰しかり、農業・軽工業の零落しかり、後進諸国への寄生性の激化と恐るべき困窮の累積しかり、国際的の上部構造の動揺・亀裂・分解・相剋しかり)そしてこの没落は現実の崩壊・転覆へと転化しつゝあるのだ。(インドシナ革命戦争の勝利的前進しかり、インドシナ―中国―朝鮮の国際戦線しかり、三大陸人民戦争の前進しかり、国連での米帝の敗北しかり、中小諸国の反抗の昂まりしかり、そして帝国主義諸国・米―日―ヨーロッパでの革命運動の発展しかり、更にこれら相互の全体的な結合の緊密化しかり)世界階級闘争は個々の地域的民族的特殊性・特殊の形態・各々の異った任務と形態・更に発展の不均等性をはらみつゝ、にもかかわらず単一の世界プロレタリア共産主義革命へ増々緊密に結合しつゝある。我々はこの世界的地盤の上で、しっかりとそれに依拠し、その有機的一環として内乱を闘い取らねばならない。だがこの没落の始まり―死の苦悶は、腐朽化・寄生性を激化し、とくにそれはも

や桎梏と化した上部構造に集中し、反動と暴力、イデオロギーの腐朽化・反革命勢力の結集・再編・再組織化を急速に強化する。プロレタリアートの前進運動は、この腐朽化・寄生性と全力で闘い、それに打ち勝たねばならない。この腐朽化・寄生性はプロレタリアートの内部にも様々な影響を及ぼすのであり、その意味でプロレタリアートにとっても試練であり、この影響に屈服することこそ、プロレタリアートの危濫であり、敗北である。ブルジョアジーの延命の方策とは、この腐朽化・寄生性の影響にプロレタリアートを屈服せしめ、反動的に組織し動員することに他ならない。又その先兵として小ブルジョアジーを組織し、動員することに他ならない。ブルジョアジーはありと汎ゆるものを利用し、ありと汎ゆる術策・イデオロギーによってプロレタリアートの中に差別・分断を持ち込み、基幹的部分を徹底的なブルジョア専制と買収による帝国主義労働運動として組織することに力を注いでいる。又中小ブルジョアジーを後進諸国の略奪・搾取へ組織し、動員することに力を注ぎ、或いは上層農民の中に反革命的支柱をつくるべく力を注いでいる。そうして他方では革命勢力の力づくでの抑圧・圧殺に全力を注ぎ、それと併行して住民の行政的手段による反動的の反革命的統治に力を注いでいる。これらを総体として侵略反革命に動員し、現代修正主義を主軸とする小ブルジョア勢力を安全弁として、とくにプロレタリアートに対する欺瞞・この階級の無力化のために利用すること

である。ブルジョアジーはアメリカでも、日本でも、西欧でも軍事力の増強に力を注いでおり、官僚的の警察的な独裁へ移行している。だがこれは階級闘争を一層全社会的の政治的の文化的の領域へと拡大し、深め、激化させ、全大衆を引き入れ、一層組織的な、一層全力をあげた、一層意識的なものにするに他ならない。だからこれはかなり長期にわたる、持続的な対峙をもって発展していくであろう。しかし世界的規模でみる時、ブルジョアジーの力は明らかに後退している。たとえそれをソ連社会帝国主義を利用し、その力でもって補充しようとも、それはそれで一層矛盾を激しくするものである。今やブルジョアジーは外の戦場にはかりではなく、自国内の戦場にその注意と力を注がねばならなくなっている。それが今日のブルジョアジーの真実である。プロレタリアートに要求されているのは、精力、又精力であり、剛平として前進運動を進めていく自覚・革命的決意・剛毅さ及び不屈さである。我々は全力をあげて、かつ堅忍不拔にそれを培い、組織し、又組織し、強固な中央集権的組織性と規律によって確保される力を打ち鍛えていかねばならない。

第四章 現情勢の特徴。世界革命と我々の 任務

我々はこれまで七〇年前後の情勢について次のように言ってきた。民族解放―社会主義戦争が、第二次大戦―戦後過程に形成された国際的の上部構造―米帝を支柱とし、ソ連によるプロレタリア運動及びいくぶんかは民族解放運動の反動的支配を補完物とする―を打ち破り、新たな前進運動を開始した。米―日―西欧は、まさにこのベトナム―インドシナ革命戦争によって、最終的に革命運動に入りこみ、全世界の革命運動の全循環―六〇年前後以来の―に最終的に引き入れられた。そして全世界は今や既に、全世界的社会主義革命をうみ出すに違いないような運動に移っている。他方帝国主義者は全世界を二つの陣営に分裂させることに力を注ぎ―ニクソン・ドクトリンの全反革命反動勢力の同盟の政策、「アジア人をアジア人と戦わせる」政策等―しかもかつて最初の社会主義革命を開始し、世界革命の砦であったソ

連が今や社会帝国主義として立ち現われ、帝国主義者もそれを最大限利用し、中ソ対立を利用していろいろ事情によって、この分裂が複雑なものになっていくという困難さがある。世界階級闘争はたゆみなく広がり、深まり、前進しつゝあり、国際ブルジョアジーとの対峙を深め、激化しつゝあるが、前衛・革命潮流の成長・質的飛躍が足踏みしており、困難な分解・再編・改造過程にあり、そのためソ連社会帝国主義―現代修正主義潮流から一切の主導権を奪い取ることができず、国際ブルジョアジーに対する闘争における一定の分散・前進運動に対する立ち遅れを余儀なくされている。その意味で世界階級闘争は現在一つの、だが根底的な過渡にある。この過渡は又同時に、国際ブルジョアジーとの闘争の環が帝国主義心臓部へと移行していく過渡、心臓部の権力問題が世界階級闘争の中心的位置に登場していく過渡でもあり、従って心臓部における社会主義とプロレタリア運動の結合が焦眉の課題となり、それが世界階級闘争の中心問題となり、かつ始まりつゝあるという過渡である。実際、社会主義と民族解放運動の結合は、一九三〇年前後以来ジグザグを経つゝも持続的に発展してきた。そしてとくに六〇年代後半には一層普遍的となり、もっと高度な、全く新しい地点に踏み出し、世界社会主義革命の牽引力、ヘゲモニーへと打ち鍛え、発展させた。即ち中国を先頭に北部朝鮮・北ベトナム・キューバの社会主義革命建設は、かつてのソヴェトロシアのネップの固定化やスター

リン的枠（又それを踏襲した東欧）、更にトロツキイ等の左翼反対派の限界を大きく打ち破り、踏みこえ、又民族解放闘争は三大陸全域に拡大しつゝ、プロレタリア的・社会主義的に成長し、両者の結合は国際的な民族解放―社会主義闘争・人民戦争として地球上の絶大な多数を組織し、動員しつゝあり、かつ帝国主義によって世界の最下層の人民として、その世界的な搾取体系の広大な基礎としてくみ込まれてきたこれらの住民を、世界社会主義の建設者としてプロレタリアートへと組織し、打ち鍛え、改造しつゝある。まさにこのことから一方で帝国主義を包囲し、帝国主義心臓部の中に世界社会主義建設の眞の物質的基礎を獲得することとしてプロレタリア革命を要求しているのであり、他方でソ連社会帝国主義―現代修正主義とは独自の道を進み、更にそれと闘争するに到っているのである。今日民族解放―社会主義闘争は、戦後の米帝による国際ブルジョアジーの統治・後進諸国支配・国際反革命を主体とし、ソ連によるプロレタリア運動・民族解放運動の反動的支配を支柱・補完とする国際的上部構造を動揺させ、分解させ、解体しつゝある。そして包囲され、圧迫され、抑えつけられていた段階から、他ならぬこの包囲・圧迫・抑圧との闘いによって逆に帝国主義を包囲し、追いつめている。アジアにおけるインドシナ―中国―朝鮮の巨大な国際統一戦線、更にその周囲に発展しつゝあるタイ―マラヤ―北カリマンタン―フィリピンの人民戦争、そして南朝鮮・台湾の分断軍事支配の

動揺は、米―日帝国主義に対する二重・三重の包囲の環を形造っている。又発展しつゝあるラテンアメリカ革命と頑強に人民解放戦争を闘い、それを全アラブへと浸透させつつあるパレスチナアラブ解放闘争は米帝イスラエル（アラブ反動派を含めて）と頑強に対峙し続け、それを深めている。そして今やインド亜大陸で新たな発酵が始まっている。更にもう一つ重要な方向は、アジアのマラヤ・セイロンの闘い、アラブのアラビア半島―紅海周辺地域の闘い、アフリカのアヤニア・ジンバブエ・ナミビア等南部アフリカでの植民地主義と人種主義政権に対する闘い、或いはギニア（ビサウ）―モザンビーク―アンゴラの植民地主義打倒の闘い、そして北アイルランドの闘いが、イギリス帝国主義を（又反動的に）反革命西欧諸国全体を）追いつめつゝあることである。アラブ・アフリカの闘いは米帝と同時に西欧帝国主義を包囲しつゝあり、それは北アイルランドによって直接英帝のどの元につきつけられており、アラブ―北アフリカ人労働者によって西欧のたゞ中に持ち込まれている。丁度アメリカの黒人・プエルトリコ人・メキシコ人労働者によって、米階級闘争がラテンアメリカ・アフリカの解放闘争と直接に結合している如く。インド亜大陸―アラブ―アフリカ・アイルランドの現在発酵しつゝある闘いは、アメリカの広域にわたる力の支配―貧窮の強制・同盟政策を反面教師として、増々多くの地域の住民を、結合された統一解放運動へ団結させつつあり、そのことによ

って英帝が（どれほどかは仏帝も）その汎ゆるブルジョア的狡猾・術策によってまき散らし、植えつけていったそして今尚くり返し利用している分裂・分断支配の政策・その禍根を、苦い経緯を経て今克服しつつあり、丁度インドシナ三国人民の固い団結や、ラテンアメリカ革命の団結と同じように団結し始め、かくして一層強固な力として成長しつゝある。それは依然困難な闘いではあるが、まさにこそ帝国主義の没落が決定的に刻されているのだ。この社会主義と民族解放運動の結合の発展。その現代世界。世界階級闘争の中心部への登場（封じ込められた世界の一部分からの、或いは抑えつけられた世界の底辺からの）こそが、今社会主義とプロレタリア運動の新たな結合を米―日―ヨーロッパで開始させ、促進させつゝある。社会主義とプロレタリア運動の結合―これは三〇年代の後方に向っての大跳躍以来、長い間解体されてきた。そしてプロレタリア運動は社会主義と帝国主義の融合―社会民主主義と、社会主義と小ブルジョアの反動的融合―スターリン主義によって支配されてきた。戦後のソ連をも内的一環・補完物としてまき込んだ国際的上部構造は、各国の内部では社会民主主義とスターリン主義の協調・融合によるプロレタリア運動の支配、プロレタリアートの小ブルジョアジーへの融合によるブルジョア体制内革新ブロックという、戦後小ブルジョア民主主義―小ブルジョア俗流社会主義をもたらししてきた。だが民族解放―社会主義闘争が帝国主義を打ち破り、ス

ターリン主義の反動的制動・小ブルジョア俗流社会主義を打ち破り、国際的上部構造を動揺・分解させることによつて、この社会民主主義とスターリン主義の融合・協調たる戦後小ブルジョア民主主義と小ブルジョア社会主義を分解させ、この分解の中から、社会主義とプロレタリア運動の新たな結合の基盤・萌芽の結晶をつくり出した。今日プロレタリア運動は、公然たる帝国主義ブルジョアジーによる支配と帝国主義労働運動（社会帝国主義）と、小ブルジョアジーによる支配・体系化された反動的な小ブルジョア社会主義による支配と現代修正主義（人民戦線）と、革命的な社会主義とプロレタリア運動の結合へと三分解しつゝある。前二者の間は、丁度ソ連社帝と西欧・日帝国主義の接近・協調と相映するかの如く後者に対抗して接近・協調しつゝ、その内部で相剋をくり返し、その中間で無力化し、弱体化した純然たる小ブルジョア民主主義の動揺・分解・再編が続いている。他方これらと、革命的な社会主義とプロレタリア運動との結合の間には、未だ多様な過去の諸要素、小ブルジョア的な、自然発生的な諸要素が多様な傾向をつくり出し、たえず動揺・分解・再編をくり返しつゝ、徐々にこの結合がつくり出され、打ち鍛えられ、成長しようとしている。この結合が未だ始まったばかりであり、「この結合をつくりあげる過程は非常に困難な過程であつて、この過程は尚様々な動揺や疑惑を伴う」であろうが、しかし今日この結合は根底的であることを要求される。

レタリアートとブルジョアジーとの矛盾を成長させた。かつ帝国主義段階への移行は資本主義の進歩的役割・社会発展の原動力としての役割を終え、腐朽化と寄生性を強め、旧権力・旧社会の汎ゆる要素と融着し、二重の帝国主義を形作り、ツァーリズム・地主・ブルジョアジー・クラーク・黒百人組・労働運動内の社会排外主義を集集し、上層のありと汎ゆる腐敗・腐朽・内部分解をつくり出していった。それだけに又ロシアの革命運動を、最も深刻な人民運動たらしめ、最も激しい・熾烈な暴力的闘争たらしめ（その非合法性を含め）、最も徹底して国際的資格たらしめたのであつた。農業と農民問題・更にクスターリ工業の問題がプロレタリア革命の二中心問題となり、民族問題が一九世紀的な封建的専制と二〇世紀の帝国主義との二重性において、又東欧・ウクライナの民族問題と東洋の植民地問題との二重性において現われ、政治的自由の獲得が全人民の全被圧民族のさし迫つた課題となり、日露戦争―第一次大戦の帝国主義戦争と内乱が根本問題となり、ヨーロッパのプロレタリア社会主義革命と東洋の民族革命・農民戦争の要素の両方を内に含むことによつて両者の発展の要として世界革命の環となり、これら全体が二重の帝国主義と国際主義と権力問題として総括されたのであつた。そして他ならぬロシア革命運動のこのような性格こそが、社会主義とプロレタリア運動の結合に複雑で多様な任務を要求し、歴史的な社会発展の利益をこそ担い、まさにそのことによつてブルジョ

ている。又その種々の諸要素が噴出してゐる。即ちアメリカ・ヨーロッパでのストライキ運動の持続と一対をなしている、アメリカの黒人を初めとする有色人民の解放運動、ヨーロッパでの北アイルランド解放闘争やアラブ人・北アフリカ人・ポルトガル人等の移民労働者の二重の搾取・抑圧との闘争、又日本における沖縄人民・在日朝中人民・未解放部落民衆・下層プロレタリアの解放闘争等、帝国主義の腐朽化・寄生性がプロレタリアート内部につくり出している民族的・人種的・身分的抑圧・差別・分断支配の諸系列に対する闘争という基底からの噴出である。この積年の資本主義と帝国主義支配を最も基底から打ち砕くという社会的根源性が、同時に闘争の徹底した国際的内容・結合・国際性を要求し、又不斷につくり出していること、更に組織され、打ち鍛えられた革命的暴力を要求し、又不斷につくり出していることである。まさにこの徹底した国際性による運動の国際的地盤と国際的性格、最も根源的な社会的深さ、真に深刻な人民運動・人民革命への胎動、頑強な、底深くかつ高度な暴力性、最も強固に組織され、かつ真に大衆的な革命的暴力への要求、こゝにこそ今日の社会主義とプロレタリア運動の結合の深い基礎がある。これは我々に一九世紀末―二〇年に到るロシアの革命運動を想起させる。資本主義の世界的拡大・発展・成長の最後の循環に引き入れられたロシアでは、発展しつゝある資本主義が一方で旧権力・旧社会の汎ゆる要素との矛盾を激化させ、他方でプロ

アジーと非和解的に対立し、資本主義社会を共産主義社会へと革命的に転化・発展させ、その建設者となるプロレタリアートに、政治的自由の要求、農業問題の要求、民族問題の要求を掲げ、かつこれらを戦争と権力問題を要にして、世界革命のための闘争と社会主義への過渡方策と結合させることを要求したのであつた。又このような錯綜・多様性こそが、社会主義とプロレタリア運動の結合の発展に、ナロードニキエス・エル―左翼エス・エルとの闘争、合法マルクス主義―経済主義―メンシェヴィズム―解党主義―社会排外主義との闘争、召還主義―帝国主義的経済主義―「左翼」共産主義との闘争という多種多様な傾向との激しい闘争を強いたのであつた。現代の社会主義とプロレタリア運動の結合はこれに比してどのような特徴をもつのだろうか。第一に階級闘争はより歴史的に進んだ地点にあり、人類は資本主義・帝国主義からその前方へ既に五〇年以上も前から踏み出している。これは政治的民主主義にせよ、農業問題にせよ、民族問題にせよ、又その他非独占部門や教育問題等全て社会主義的内容・社会主義的変革こそ要求していること、そして真に深刻な人民革命は全社会のプロレタリアート化、即ち被搾取被抑圧人民の増々多くの部分が、自分自身の立場を捨て、商品経済と手を切りプロレタリアートの立場へと移行していく、そしてその結合の要として権力の獲得とブルジョアジーの収奪を要求していく革命であり、社会の汎ゆる領域でプロレタリ

アートとブルジョアジーの闘争が激化していく革命であることを意味している。この物質的条件は戦後資本主義の発展そのものによって成熟させられてきた。第二に今日の革命は一層世界的であり、全世界的に緊密に結合された革命として出現しつつある。これは第二次大戦―戦後帝国主義と民族解放―社会主義闘争の発展によって準備されてきたのである。第一と第二の点からして人類はそれだけ世界社会主義に近い位置にいる。それはとくに戦後資本主義の発展と、民族解放―社会主義闘争の発展という二つの側面から準備されてきたのであり、だからこそ資本主義によって新たに分解・再編・再結合されてきたプロレタリアートが、今世界資本主義の腐朽化・寄生性の激化―「死の苦悶」を踏みこえ、民族解放―社会主義闘争と結合して、世界社会主義へ前進していかねばならないのだ。だがこれは権力問題を抜きにしては真に革命の実践・革命闘争となることはできない。今日世界的規模で権力問題を考える時、我々は次のような観点に行き着く。即ち帝国主義諸勢力―国際ブルジョアジーは米帝を支柱に結合し、一つの国際的支配体系を形作り、それは他方でソ連社会帝国主義と結びつき、かつ矛盾を深めている。その意味で米帝（とその周囲に結合している帝国主義諸勢力）とソ連社帝の二重の帝国主義として構成されている。即ち一九世紀末以来一貫して発展し続け、第一次大戦後世界の中心に登場し、第二次大戦後には世界制覇（ソ連ブロックとアジアのプロレタリア国家

変革していく闘争を、この個々の国家内の内乱に内面化すること、世界階級闘争と日本の国家権力と諸階級の相互関係を明らかにすることである。即ち世界的相互関係と、日本の諸階級の相互関係を権力問題に結合することである。）

今日帝国主義とソ連社帝の腐朽化・寄生性は増々激しくなっている。その歴史的位置・性格はロシア革命とヴェルサイユ講和から始まった新しい時代が、三〇年代―第二次大戦の大動揺・大分解・大激突（後方への大跳躍）を経て、新たなブルジョアの帝国主義的発展へ転化した後（戦後世界）、今やその発展は完全に終了し、没落―死の苦悶に立ち到っていることである。世界革命の過渡期に、第二次大戦の結果として生じた、ソ連をもその一環にまき込んだブルジョアの帝国主義的發展―それは先進諸国の一層緊密な政治的・経済的結合を組織したが、もはや後進諸国には収奪の他にはいかなる発展ももたらさなかった。その意味で最初から腐朽化・寄生性はこの中心たる米帝につきまとい続けたのだ。

汎ゆる手段によって引き延ばされてきたその発展が、今や発展の土台と完全に矛盾・衝突し、内部解体を促進するという「死の苦悶」に立ち到っており、全世界的に社会主義に移り進んでいく以外に、前進の道がないという点にある。我々は既に今日の帝国主義の腐朽化・寄生性の激化の基本的な点については述べてきた。こゝではそれを補完して、より現実的な現われについて述べてお

を除いて）を打ち樹てた最もブルジョア的な、そしてブルジョアジーの最後の砦としての米帝と、社会主義革命の過渡期の小ブルジョアの反動から始まって第二次大戦後には一層ブルジョア的に進化し、遂には社会主義への一切の前進運動に敵対し、その抑圧にのり出し、今や世界の革命運動と対抗しつつ勢力圏の拡大にのり出しているソ連社会帝国主義との結合と矛盾・結託と争奪の、二重の帝国主義である。そして今日その腐朽化・寄生性が激しくなり、死の苦悶―没落が始まっているのである。まさにそれを突き破って、その前方へ前進していくこと、そこに今日の世界社会主義の歴史的任務があり、その打ち樹てるべき権力が単一の世界プロレタリアート独裁―世界ソヴェト社会主義共和国として確定され、そこに民族問題・農業問題・非独占部門・政治的民主主義等と、主要生産手段の世界プロレタリア機関への集中と世界的な社会的労働の配分・生産と分配の世界的な統制・管理・計画等が集中されている現実的根拠がある。（勿論これは現時期の世界階級闘争を平板な世界性として、又平板な世界革命として規定することを全く意味しない。今日においても、プロレタリア革命は個々の国家内の内乱としてのみ始まるのである。世界プロ独はこの内乱―プロレタリア社会主義革命が共産主義社会に到達するため

の戦略目標であり、又この内乱の世界的性格・任務を規定するものである。我々にとって当面必要なことは、今日の世界的諸関係―諸階級の相互関係を世界プロ独へとこころ。それは一言でいえばニクソン・ドクトリンそのものであり、それと諸列強の相互関係である。国際ブルジョアジー―帝国主義諸勢力は、今日政治的には世界の到る処で反動勢力・反革命勢力を見出し、又、力と買収の手段によって積極的に組織し、全世界で革命と反革命の分裂をつくり出し、全ての反動勢力・反革命勢力の同盟・結合を組織せざるをえず、又組織しようとしている。又経済的には貿易と資本の自由化を促進し、増々大規模な競争・市場争奪を激化し、この過程に全世界を引き入れようとしている。前者はインドシナのカイライ軍、アラブのイスラエルと反動勢力、アフリカでの人種主義勢力とポルトガル植民主義勢力、又日帝の肩代りとい「韓」台反革命体制、NATOにおける西独の負担の増大、これらが全て米帝を中心に、米―日―西欧帝国主義諸勢力と結合していること、或いはソ連の社会帝国主義的欲望と行動・中ソ対立を徹底的に利用し、結託と争奪を強めている点に、更には中国を平和共存と妥協の道に引き入れようと力を尽している点に、民族解放戦争を政治的に孤立させようと力を注いでいる点に現われている。後者は重工業製品の輸出と資本進出・提携をめぐる米―日―EC相互間の大規模な競争・市場争奪。或いは後進諸国に対して増々強まっている資本進出―略奪（原料資源の農産物の、又低賃金労働の）、或いはソ連への資本投下―共同開発（西部地域とシベリアでの石油・天然ガス等）更に中国への商品輸出の促進といった点に現われている。

だがブルジョアジー・帝国主義諸勢力は増々内部分解・内部対立を深めており、八国家Vとして総括される列強間の軍事的・政治的・経済的角逐を強め、勢力圏I支配圏の再編に向けており、その闘争が国際ブルジョアジーの政治的・経済的結合の基礎そのものにおいて激化し、この結合を脆弱化させている。この矛盾は全て八国家Vに集約され、その腐朽化として現われている。今日生産・資本・信用の膨大な過剰はスタグフレーションを激化させ、各国経済の国家財政への依存、国家的な規模での収奪I略奪体系・再編、国家独占と私的独占との結合は増々強まっている。同時にこの同じ過剰から必然化しての貿易I資本自由化の促進・増々大規模な市場争奪戦の激化は、その対極に保護貿易主義を生み出し、より大きく通貨戦争を激化し、列強間の経済I政治対立を激化する。又この国際的競争そのものが内部の経済I社会構成の動揺・再編を促進し、この再編を暴力的な国家的規模、国家独占I私的独占の搾取I収奪I略奪体系に転化している。そして後進諸国への資本輸出I略奪の激化は共同投資の形態をとったり、国際反革命としての共同利害から提携I協定を結びつゝも、不断に潜在的な勢力圏・支配圏への傾向を増大させる。政治的には反革命のために相互に結合しつゝ、諸列強の独自利害からその結びつきはたえず動揺し、再編され、術策・駆引・葛藤へと転化している。とくにこれはソ連の社会帝国主義的欲求・行動と、中国の国際政治の中心部への登場によって一

層動揺的I矛盾的になっている。以上のこれら全てが八国家Vへと集約され、組織され、その腐朽化として現われている。今日諸列強の軍事力増強は外に向つては核I海軍力I特殊部隊の系列で強化され、侵略反革命の「自国」の力を強化すべく精力を注いでいる。他方警察と地上部隊は増々内乱鎮圧軍隊として、頻繁に「治安」出動している。そして社会経済的再編・矛盾I国家的規模での搾取I収奪I略奪体系による階級矛盾の激化に対する一層暴力的抑圧・暴力的再編I危機と動揺の暴力的除蔽と、「抑圧・民族国家」としての政治的組織化の強化I侵略反革命への政治的動員の組織化をこれに結びつけている。即ち今や国際反革命・勢力圏への欲望・国際市場争奪戦I通貨戦争、国内社会経済再編I搾取収奪体系の全てが八国家Vに集約され、国家に依存しつゝあり、国家がその中心・主体となっている。今日金融資本はまさにその国家によって、自己の増殖・略奪のみ欲し、支配のみ欲し、勢力圏のみ欲し、競争相手に対する優位を欲し、反革命のみ欲している。国際ブルジョアジー・帝国主義諸勢力の同盟と角逐の矛盾・又ソ連社帝やインドシナI中国I朝鮮との角逐は、経済I政治I軍事の全体を国家的に組織すること、この国家として組織される力の強さに一切を依存しようとしている。これは内に対しては汎ゆる腐朽化の激化I社会の基底からの全領域での腐朽化I分解・対立・衝突の非和解的激化・この腐朽化の国家への統合I反動と暴力への熱望であり

外に対しては寄生性の激化——国益・国防の名による侵略・略奪・抑圧・反革命的組織化・金融資本の資本輸出・商品輸出等の略奪・搾取、国際市場争奪等の国家的結合・組織化、侵略反革命の角逐であり、この両者を侵略反革命への諸階級層の国家的組織化、或いは侵略反革命国家体制への組織化として結合しようとするのである。この結合は結局のところ革命勢力を徹底的に力で圧殺し、プロレタリア人民の反抗を力で抑圧し、この革命運動・反抗と民族解放I社会主義闘争との結合を分断し、逆に人民諸階級層の中に力・買収・民族差別・反動イデオロギー、その他汎ゆる術策を弄して分断・分断・差別を持ち込み、分裂I分断支配秩序・系列を国家的に組織しつゝ、汎ゆる階級層の中に寄生的な反動的I反革命の上層をつくり出し、それを一個の国家的勢力として金融資本の周囲に、侵略反革命へ組織し、結集し、統合するといふこと以外ではない。この数年、米・日・西欧帝国主義諸國は、この新たな反革命的支柱、寄生的な反動的I反革命の上層の創出・組織化・或いは再編・再結集に、その力を注いでいる。それは同時に激しい動揺・分裂・衝突を通して進められている。(日本では労働運動の中にも、大学I学生層の中にも、インテリゲンチヤの中にも、中小ブルジョアジー・商人層の中にも形成されつゝあり、今農民の中にもその棄民政策の対極に形成すべく注がれている。それがどれだけ動揺・分裂・衝突と不可分であるかは、我々が現に経験していることである。)以上の

点にこそ今日の金融寡頭制国家I帝国主義国家の腐朽化の特質がある。これら諸國で現代修正主義が果している役割は、プロレタリア人民を欺瞞し、武装解除し、無力化し、従つて出口なき絶望へ追いやっていくこと、即ちプロレタリアートの危機をつくり出していくことであり、まさにその意味でブルジョアジーの安全弁・補完物となることである。他方ソ連社会帝国主義の腐朽化・寄生性はどの点に現われているのか。それは工業生産成長率の低下・重要技術の立ち遅れ、農業生産の恒常的危機の中に、或いは国内統制の一層の嚴重化と腐敗の拡大・東欧に対する統制の強化と他方での指導ブロックの分裂と不安定ということの中に、或いはヨーロッパ帝国主義諸國(最近では日帝とも)の資本導入を進めているということの中に、或いはソ連艦隊の大規模な拡充・対外工作用特殊部隊(ブラックベレー)の創設・ソ印条約等の軍事同盟とインドの侵略的I反革命的ベンガル侵攻の支援等の一連の対外膨張政策とより多くの地域への軍事介入の中に、或いは反中国の政治的機構を發展させ、反動ブルジョアジーとの反中国提携の努力の中に、そして米帝との結託と争奪の強化の中に(パレスチナ問題等)現われている。世界的な社会主義への前進運動が強まり、前進すればそれだけ、ソ連がそれとの鵜対を強め、社会帝国主義としての性格を強めるといふこと、その点にこそ腐朽化・寄生性の根本性格、その反動性の根本性格が

ある。だからこそそれは又ブロックの内部的分解をひきおこさざるをえないのである。(東欧・アラブ親ソ諸国の動搖・分解傾向)

以上から帰結されることは何か。それは世界階級闘争がその力の全体を増々帝国主義心臓部の権力問題へと集中しつつあり、この権力問題を世界階級闘争の中心部へ浮き彫りにし、その環として登場させつつあることである。民族解放―社会主義闘争と、社会主義とプロレタリア運動の結合とが、この心臓部の権力問題の中に結合を開始しつつあり、この結合こそがソ連社会国主義―現代修正主義をも打ち破り、世界プロレタリア共産主義革命の怒濤の前進を実現していくことである。このような段階への移行が始まり、帝国主義―社会帝国主義の腐朽化と寄生性の激化。世界階級闘争によって日々促進されているのだ。侵略反革命を打ち破き、帝国主義国家機構を打ち破き、金融寡頭制の打倒―ブルジョアジーを取奪すること、まさにこれらが心臓部の権力問題として民族解放―社会主義闘争と、社会主義とプロレタリア運動の結合の、国際的共同課題、両者の同盟―融合として日程に上りつつあるのだ。まさにそこに、プロレタリア―トに指導され、プロレタリア―トへと主体的に組織され、訓練され、打ち鍛えられていく貧農を主体とする民族解放闘争、そしてより高い発展段階でその物質的基礎をつくり出しつつ、全社会のプロレタリア―ト化・革命化を進めている社会主義革命建設と、心臓部の基幹プロ

基いてのみ予見することができる。闘争の結果は、結局のところ、ロシア・インド・中国などが住民の圧倒的な多数をしめていくことにかゝっている。ところがまさにこの多数の住民が、近年来異常な速さで、その解放のための闘争にひき入れられており、従ってこの意味では、世界的闘争の終局の解決がどうなるかについてはいさゝかの疑問もありえない。この意味では社会主義の終局の勝利は、完全に又無条件的に保証されている。」と予見した。レーニンは革命ロシア、世界革命の砦としてのロシアにその基盤をおきつつ、世界革命に対するこの予見を提出したのであった。それはロシアの変質にもかゝわらず、中国革命によって継承されたし、今三大陸人民の解放闘争によって完全に実証されている。レーニンのこの予見は現在の時期をこそよく言いあてている。「だが我々にとっての関心は社会主義の終局の勝利が不可避だということではない。」我々にとっての関心は、世界階級闘争がそれに向けて次の一步をどのように踏み出しつつあるのか、又踏み出さねばならないかということである。何故なら、このレーニンの予見は、今日ではインドシナ―中国―三大陸に於て、遙かに広大な規模で、遙かに高い水準で実現されているからであり、今やそれから社会主義の終局の勝利へと移行進んでいくための次の一步こそが要求され、焦眉の課題となっているからである。まぎれもなく、その点についてこそ、我々は今や次のように言わねばならない。社会主義の終局の勝利は米・日

レタリア―ト、膨大な下層プロレタリア、農業―農民問題、分解・再編・隷屬せしめられる非独占部門、或いは民族差別・身分差別等汎ゆる蓄積された伝統的差別抑圧構造におかれた人民とが、国際プロレタリア―トへと結合され、組織され、統合されていくのである。我々は今真に国際的―社会主義的な、深刻な人民革命を前にしているのだ。(だからこそ革命運動の中に、種々様々な傾向が各々の基盤をもって次から次へと発生する。)歴史の客観的發展―社会発展と階級闘争の發展は、我々をかつてのロシアよりも、より客観的に前進した、前方の位置にある社会主義への発展段階からみて高度な、従って又一層高く、緊密に国際的に結合された国際的―社会主義的な、最も深刻な人民革命へ際会させているのである。まさにその指導階級・その領導者として、敵に対する戦闘において全人民・国際勢力を結合させ、率いると同時に、それに続く建設においても全社会の主体・組織者となる階級として、プロレタリア―トを打ち鍛えねばならない。プロレタリア―トをこのような単一の革命的階級として打ち鍛えること、そこにこそ社会主義とプロレタリア運動の結合の任務がある。かつてレーニンはその最後の論文の中で、「全世界が今や既に全世界的社会主義革命をうみ出すに違いないような運動に移っている」と述べた後、「闘争の結末は、全体としてみれば、地球上の住民の絶大な多数が結局のところ、当の資本主義によって闘争するように訓練され、教育されるといふ根拠に

・ヨーロッパの革命運動の成長の度合に依存しつつあると。世界階級闘争は今やその中心部に、その環として、心臓部の権力問題、蜂起―プロレタリア権力が浮かび上りつつあり、それを闘い取る革命運動の成長にその發展を大きく依存し始めている。(このことは決して三大陸の闘いの意義を低めたり、後景に追いやることではなくそれが広大な規模と高い水準に達しているが故にこそ、又それを地盤としてこそあり、それは逆に三大陸の闘いの真の世界的意義を増々高め、世界社会主義の闘いへ増々近づけるものである。)

我々はこれを、世界階級闘争が心臓部での死闘へと凝縮していく移行期―死闘としての移行期ということができる。我々はこの過渡に、今少しベトナム労働党と中国共産党の提起から迫ろうと思う。言う迄もなくベトナム労働党と中国共産党は固く団結し、民族解放―社会主義闘争の最大の戦線・牽引力・世界的ヘゲモニーだからである。世界進取革命戦略の下にベトナム革命戦争を戦い、世界階級闘争の見地からテト攻勢を勝利させたベトナム労働党(南の人民革命党―NLFを含めて)は、更に七〇―七一年のカンボジア―ラオス侵攻作戦を撃退すると共に、米階級闘争に力強い呼びかけを開始した。「反戦米兵を撃つな!」「米軍内叛乱を拡大せよ!」「ベトナム解放武装勢力と反戦米兵との団結」の呼びかけは、BPP書簡や、ベトナム―太平洋地域―米本土内の隊内叛乱によって迎えられ、「ラオスの次は何か?」それはア

メリカ人民と世界の平和愛好人民にかゝっている。」という呼びかけは、ベトナム帰還兵を先頭とする大規模な反戦デモと秘密文書暴露によって迎えられ、そして七項目提案の追討へと発展した。それに対してニクソンはベトナム化政策の急展開と訪中声明「チューカイライ政権の保持でもって対応したのであったが、昨年七月のニクソン紙はニクソン・ドクトリンについて、① 反動Ⅱ 反革命勢力の世界的同盟・再編によって米帝の破綻をひき、侵略を続ける政策であり、② カイライ勢力を組織して、ベトナム人をベトナム人と闘わせるベトナム化政策・アジア人をしてアジア人と闘わせる（とくに日本軍国主義のテコ入れによって）分裂化政策であり、③ 一部の社会主義国のいわゆる平和的転化の政策を進め、民族解放運動への支援から手を引かせ、社会主義諸国間の分裂を進める政策であり、（これは明らかにソ連批判であろう）④ しかしもはや大団が小国の運命を自由に左右する時代は終り、ニクソン・ドクトリンは世界の革命運動によって、失敗し、新たな破産を蒙るだろうと結論した。以来ニクソン紙は、① 自主独立と抗米闘争の断固たる堅持・米帝の侵略的本質の批判 ② 大団による解決反対ノベトナムインドシナ人民の自決、七項目提案の米帝による即自承認・実施 ③ 社会主義諸国の団結、分裂によって米帝に乗ずる、利用される隙を与えるなど主張している。ベトナム労働党の主張と異い、自力更生による抗米徹底抗戦ノインドシナ中国ノ朝鮮

の国際的団結を強化し、ニクソン・ドクトリン（日帝を含めて）と闘うことノソ連と戦術的に提携し、反米攻勢に結合させ、総体として米帝との力関係を変えることである。中国共産党はベトナムインドシナの闘いを断固支持・支援し、団結を強め、ベトナム労働党（及びインドシナの諸党）が自分自身の戦術を採用することを支持している。そして中国共産党もこの団結の枠内で独自の国際戦術を採用している。それを大胆に言いきれば、中国共産党はソ連と戦術的に妥協・提携して当面の反米攻勢を推進するよりも、インドシナ中国ノ朝鮮の国際反帝戦線を断固堅持しつゝ、より長期の、より大きな将来に向って準備し、歩を進めること、即ちアメリカ革命運動との戦術的提携により力を注ぎ、比重を移し、この結合の成長によって米帝とソ連社帝を打ち破るといふことである。中国共産党は六九年九大大会と「レーニン主義なのか、それとも社会帝国主義なのか」によってソ連に対する一切の幻想を断ち切り、社会主義に対する敵と規定し、七〇年カンボジア侵攻の撃退を通してインドシナ中国ノ朝鮮の国際戦線を結成し、ニクソン・ドクトリンと日本軍国主義に対する批判を強め、それに対する全アジア的規模の闘いを呼びかけ、タイ・マラヤ・フィリピンの毛派共産党の人民戦争の開始・発展に支持・支援を与え、「当面の世界のおもな傾向は革命である」と全世界に呼びかけ、そしてアメリカと日本の人民の運動、革命運動に大きな注目を示してきた。では七十一年の党内

闘争と「全世界人民は団結せよ」或いは「ソ連がダメなら、我々はアメリカ人民に期待をかける」「アメリカ人民は偉大な人民である」という呼びかけや見解は何を意味しているのだろうか。現在報じられているところによれば、党内闘争は米中会談とソ連に対する態度であったと言われている。反対派は米中会談に反対し、むしろソ連との戦術的妥協・提携を求めたとすれば党多数派は現存のソ連と戦術的妥協・提携によって反米攻勢を進めるよりも、自己をあくまで独自の世界革命ヘゲモニーとして堅持し、むしろアメリカ人民の闘争、アメリカ革命運動の成長と戦術的に結合していく、新たな長期戦略に進み出したのだと言いうる。七十一年に反戦闘争の先頭に帰還兵・現役ノ退役軍人が先頭に立っていることを高く評価し、ブラック・パンサーのヒューイ・ニュートンの訪中によって意見統一をはかり、最近のストライキ運動を高く評価し、アメリカ人民の階級闘争の発展に大きな注目を示していることこそその証左である。最近の「北京周報」は毎号米帝の危機とアメリカの運動について報じている。米帝の対外的・対内的危機、政治的・経済的危機の深まりを指摘し、国際反帝闘争の昂まりと、資本主義の矛盾の激化によって危機に迫りつめられている米帝はアメリカ人民の闘争によって打倒されるであろうという宣言と、アメリカ人民は米帝がその矛盾を増々激しく米プロレタリア人民に転嫁しつつあることによつて、逆に教育され、闘争に動員され、訓練され、運動を發展

させつゝあるとの指摘はその証左である。中国共産党の戦略は今や次のように極成されているかのようである、第一にインドシナ中国ノ朝鮮の国際戦線と抗米反日闘争・民族解放ノ社会主義闘争を断固堅持すること。第二に世界の解放闘争、とくに民族解放闘争を断固支持・支援すること。（とくにアジア・パレスチナ・アフリカに力が注がれている。）第三に中小諸国の反抗・要求・闘争（反覇権争といわれている）を支持激励すること、国連をその舞台として最大限活用すること、（とくにラテン・アメリカ、セイロン、アラブ、アフリカに力が注がれている。）第四に平和五原則に基く政府の外交政策を揺さぶり、中小諸国を引き寄せ、帝国主義諸国内人民との友好・結合を進めることである。この多面的な闘争と、帝国主義諸勢力間の同盟ノ角逐の矛盾、或いは新経済政策ノスタグフレーションの諸矛盾が結合してアメリカ革命運動の発酵を促進しており、それとの結合に、大きな将来への長期的・戦術的基軸をすえているかの如くである。米中会談はそのような観点から、そのさゝやかな一の闘争として組織された。そして一つの勝利を獲得した。他方ソ連社帝との闘争は、以上の全ての領域で、更に中国国内問題と、東欧を含めて展開されている。それは世界的であり、かつ非妥協的である。それはどのように戦略的に展望されているのか。民族解放闘争と中国（ベトナム・北部朝鮮）との結合、更にアメリカ人民との

結合である。こゝにこそ「ソ連がダメならアメリカ人民に期待をかける」の深い意味がある。民族解放闘争―中国―米革命運動の結合、これが米帝を打倒するばかりでなく、ソ連社帝をも打ち破る世界革命の力として展望されているのだ。中国共産党は今や新しい一步を「当面の世界の傾向」である革命の勝利に向けて踏み出している。

(注) 以上から導き出されることは何か。それは世界階級闘争がアメリカ階級闘争・革命運動をその焦点・中心部へと徐々に押し上げつゝあること、言いかえれば世界階級闘争が遂に決定的な環・中心を持ち始めていることである。こゝにこそ現在の特徴がある。世界階級闘争の全体が最大の心臓部に徐々に凝縮しつゝあるのだ。このような過渡の中で、世界革命の中心を担ってきた最も革命的諸党の中に、その固い団結の枠内で、若干の意見の相違がある。我々はこのような過渡が始まったばかりであるが故にこそ、このような意見の相違・国際戦術の相違を是認しなければならぬ。このような相違はたゞこの過渡の前進・成熟、即ち心臓部の革命運動の成長によつてのみ止揚されるであらう。そして心臓部の革命運動は現代修正主義と完全に手を切り、それと闘い、これらの革命的諸党と、又相互に、固く団結して進まねばならない。(日・米両修正主義共産党の接近は象徴的である。我々は日―米の革命的左翼と中国共産党・ベトナム―朝鮮労働党の団結を促進しなければならぬ。)とくに革命的左翼の内部に進行した分解・混沌・混乱を全力

で克服しなければならぬ。(経済主義的「メンシエヴイズム」的傾向、「人民の意志」派的「左翼エス・エルの傾向、アナルコサンディカリズム的傾向、その他半無政府主義的「左翼共産主義」的傾向を全力で克服しなければならぬ。)

(注) 我々は中国共産党について多大の信頼を抱いているし、我々は余りにも多くのものを負っている。しかし次の点への批判は、他ならぬ我々にとって必要だと思われる。それは中国共産党にあっては階級・階級闘争があくまで一国内的・民族的観点で扱えられていること、国際階級闘争における階級闘争の希薄さである。即ち国際関係においては民族や国家が主体におかれ、この国際関係における階級・階級闘争が曖昧であること、国際ブルジョアジーと国際プロレタリアートの観点の曖昧さである。これは決して民族解放闘争にとつて支障にはならないし、逆に民族解放の反帝闘争、中小諸国の擁護にとつては、帝国主義と闘う有効な観点であり、又民族解放闘争相互の団結を決して阻害するものではない。しかし帝国主義諸国間の相互関係に対するプロレタリアートの態度・或いは民族解放―社会主義戦争に対する先進諸国プロレタリアートの態度・或いはソ連社帝―現代修正主義の階級の性格・アラブ諸国や東欧の階級闘争に対する評価・態度においては様々な誤りをはらんでいる。(たとえば反米愛国―民族民主革命論や沖繩問題や「北方領土」問題等)我々はレジュアンが「ベトナム革命四〇年」

において指摘している「資本主義はその腐朽化・寄生性の深まりのために、各国の主権を米帝の国際機構に譲り渡している。こゝから民族解放は、後進諸国ばかりでなく、発達した資本主義諸国でもプロレタリアートの課題となつていく。」に於いて、これを転倒すべきこと、即ちブルジョアジーは増々国際的に結合し、先進諸国では民族は増々腐朽化した反動的なものになつていくが故にプロレタリアートは増々国際的に結合し、国際プロレタリアート・世界革命の観点に立たねばならないと言わねばならないと考える。しかしそれは「世界武装プロレタリアート」なる抽象的実体、抽象的理念の実体化、ヘーゲル流の主体―実体概念を意味するものでは決してないし、更にその一層の主観化としての、世界党と世界ブルジョアジーとの闘争という考えを排除する。このような主観的転倒・観念論とは反対に、プロレタリアートはたゞ具体的な階級関係の中でのみ存在するのであり、歴史的・具体的社会的政治的諸関係(その物質的土台こそ所有―生産諸関係である)によつてのみ明らかにされるのであり、我々にとつてはプロレタリアートの歴史的任務を明らかにし、その実現のために闘い、党―階級―大衆の相互関係を打ち鍛えることが必要なのである。(それは権力問題、即ち国家権力と諸階級の相互関係及び国家権力と国際的諸関係、それをどう革命するかに集約される。)我々は以上の点については尚マルクスがゴータ綱領批判の中で、「『今日の民族国家の枠』例えばドイツ

ツ帝国の枠は、それ自身又、経済的には世界市場の『枠内』にあり、政治的には諸国家の体系の『枠内』にある」があるが故にこそ、「支配階級とその諸政府とに対する共同の闘争における労働者階級の国際的親睦」を強調した観点を継承し、更に、レーニンの「社会主義と戦争」や「社会主義革命と民族自決権」、とくに一九年綱領とコミンテルン二回大会の原則的見地(たとえば民族植民地問題に關するテーゼやインタナショナルの基本的任務や、後のドイツの「民族共産主義」批判等)を継承し、発展させなければならぬ。これは我々にとって、民族解放―社会主義闘争との結合に關する小ブルジョア民主主義との闘争、又日米同盟とその矛盾に対する態度と小ブルジョアの「民族主義的反米要求に対する態度、ブルジョア民族主義・排外主義との闘争、更には独自の国際主義的任務の問題等として実践的問題となつている。我々の最も基本的観点・主眼点は、国際ブルジョアジーと全ての反動的「反革命的勢力を打倒するための共同の革命的闘争のために、汎ゆる民族・汎ゆる国のプロレタリアートと勤労大衆を互いに接近させ、融合させていくことである。そして我々は完全な統一に向つて進んでいく。我々の直面する権力問題、蜂起―プロレタリア権力はこのような接近・同盟をもつてこそ闘い取ることが出来る。かくして我々は次のような世界的戦略構造を得る。即ち民族解放―社会主義闘争とアメリカ階級闘争・革命運動の結合的發展こそが、世界的な規模での二重の帝国主

善を打倒し、世界プロレタリア共産主義革命を勝利させる。これは非常に長期にわたる闘いとなるであろうが、しかしその第一歩は確実に始まっているのだ。世界階級闘争の新しい構造が生まれているのだ。この結合的発展の結節点・副軸として、日帝及び西独—E.C.帝国主義との闘争が、従って又日本革命とヨーロッパ革命が位置している。民族解放—社会主義闘争の最大の、又最も高度な戦線はインドシナ—中国—朝鮮を軸とするアジアであり、アジアは反帝革命闘争の基本舞台になっており、ここに世界的な対決と力関係が集中的に現われている。従って民族解放—社会主義闘争とアメリカ革命運動の結合的發展とは、何よりもアジアでの米帝の敗北を全力で促進し、インドシナ—中国—朝鮮の国際戦線とアメリカ革命運動との結合を進めることである。このアジアでの反帝闘争に於て、日米同盟を再編しつつ、或いはソ連社帝との反動的結託をも追いつめつつ、アジア侵略反革命に全重量をかけて踏み出している日帝は、危険な敵として前面に登場している。だが同時に、それだけ日帝の矛盾・危機は尖鋭化して發展しつつあり、民族解放—社会主義闘争との矛盾に加え、日米間の激化する矛盾・国内の金融寡頭制と諸階級との政治的・経済的矛盾の激化によって、階級闘争はは広く、深く、激しく發展している。日本階級闘争は今や国際階級闘争のたゞ中であって、權力問題へ凝縮しつつあり、プロレタリアートは民族解放—社会主義闘争と米階級闘争と固く結合し、この結合の

基礎の上で、又全被抑圧被搾取人民と社会主義的同盟を打ち鍛え、革命を闘い取らねばならない。この革命は民族解放—社会主義闘争を世界プロレタリア共産主義革命へ飛躍させ、アメリカ革命を、又両者の結合を急速に發展させ、世界的攻勢への移行を切り開くであろう。民族解放—社会主義闘争をもう一つの大きな戦線・環はパレスチナ—アラブ解放闘争である。何故ならこの闘いが、とくにロシア革命後のヨーロッパ資本主義—ヨーロッパ階級闘争の反動的産物であり、今や米帝によって支えられ、その道具ともなっている侵略的・反革命的な国家組織体—イスラエルと闘争し、かつパレスチナ解放がアラブ社会主義革命と不可分であること、又この地域が世界最大の石油産出地域であり、国際トラストの争奪の焦点であり、更にアジアの革命とアフリカの革命の結合点であるからである。しかもパレスチナ—アラブ解放闘争は、今日プロレタリア的・社会主義的民族的革命運動と、後退しつつある急進小ブルジョアの民族解放運動と、買弁的寄生性・封建的反動派との歴史的闘争の場となっている。又この解放闘争はヨーロッパ革命運動と一層緊密な関係に立ちつつある。西独帝の東方外交からイスラエルへの接近・仏帝の北アフリカ—アラブ諸国に対するフランス勢力圏への従属化の野望、英帝とアラビア半島—紅海周辺地域人民の闘争、そしてヨーロッパにおけるアラブ人労働者の、下層被差別プロレタリアとしての増大である。

ヨーロッパでは大規模な再編と流動が進んでいる。西独帝は仏帝を庄倒してE.C.の盟主として登場し、他方で対ソ協定・東方接近によってヨーロッパの中心勢力へ自己の歩を進め、ヨーロッパでの米帝の最大の同盟者として君臨している。仏帝はそれと対抗すべく遂に英帝と手を結び、英帝は「大英帝国」の地位から完全に没落して遂に欧州の一員として、その老体をもってE.C.に加入した。そしてヨーロッパの弱少帝国主義たるイタリアは最初に矛盾を集中されて、政府危機がたえず深まり、持続し続けている。E.C.は今やスカンジナビアからイベリア半島まで包抱している。他方ソ連は一貫して対仏—対西独協調を進め、欧州集団安全保障へ接近しようとし、東欧諸国は一斉に西独との協調に向きを変えた。それと共に東欧ではソ連の厳しい統制にもかかわらず、自主路線への傾向が強まり、ユーゴの危機に象徴される内部的分解を強めている。これらの深部で、フランスの五月とブラハの春以後の、ヨーロッパの階級危機と爆発への力が蓄積されつつある。六九年イタリア、七〇年ポーランド、七一年スペインと続いた闘いは、更に七二年にはイギリスへと広がった。六九年来持続的に發展した北アイルランドの闘争は遂に七二年初頭に英軍との全面衝突に転化し、時を同じく炭鉱労働者のゼネストが非常事態に追い込んだ。そしてイタリアの政府危機とネオファシストM.S.I.の伸張と南部の危機の激化。小規模なストライキ運動・衝突は各国でたえまなく続いている。ヨーロッパ

の再編・統合は内部に新たな流動・分解をつくり出しその深部でプロレタリア革命の発酵が煉獄の中を旅しつつあるのだ。六〇年代末以来、それは困難ではあるが激烈な過渡に踏み出している。ヨーロッパ革命はアラブ、アフリカ革命運動と結合しつつ、西独—E.C.帝国主義を打倒し、二重の帝国主義を打ち砕く東西ヨーロッパの統合として闘い取られるであろう。今我々は更にインド亜大陸—インド洋地域で米ソの新たな角逐と、新たな革命運動の発酵が始まっているのを眼の前にしている。ラテンアメリカではゲバラ以降、全ラテンアメリカ規模での深い革命過程と結合が進み、キューバを先頭に米帝との対決・対峙を一層進め、動揺・衝突・爆発が進んでいる。それは様々な迂余曲折と失敗を経験しつつ、一層深い人民戦争へ模索している。そしてラテンアメリカの闘いはアメリカ階級闘争の中に深い影響を及ぼしている。アジア・アラブ・アフリカ・ラテンアメリカでは、「国家は独立を求め、民族は解放を求め、人民は革命を求め」潮流は、なにもものもおしとどめることのできない、歴史的な、世界革命の戦略的潮流となっている。(この「国家は独立を求め、民族は解放を求め、人民は革命を求め」ものは、三大大陸の反帝闘争の諸側面・諸々の現われを言ったものである。従属諸国は独立を求め、民族は政治的・経済的解放を要求し、人民はそれらを徹底的な革命として実現することを求めている。これらは種々の潮流的・階級の分岐・対立・闘争を内包しつつ、総体としての反

帝闘争を促進している。勿論これは、諸国家間・諸民族間・諸人民間の反帝闘争における團結・国境をこえた團結・又帝國主義諸国プロレタリアートの闘争との團結と矛盾するものではない。たゞ指導階級・指導改党的問題・プロレタリア的社會主義的革命的勢力の成長は、決定的問題になっているが。この戦略的潮流とインドシナ・中国・朝鮮の國際戦線が結合し、アメリカ階級闘争を最大の環とする心臓部の階級闘争を促進し、それと結合し始めたこと、こゝに世界階級闘争の新しい一歩があり、この結合の発展こそが世界的な二重の帝國主義——ブルジョア帝國主義と社會帝國主義——を打ち砕き、世界プロレタリア共産主義革命を勝利させる。今この新しい一歩は開始されたばかりであり、過渡は始まったばかりである。しかし世界階級闘争と資本主義の腐朽化・内部危機の激化はこれを一層深く、強く促進している。この前進のために克服さるべき中心問題は、米・日・西歐の革命的左翼の分解・混沌・分散である。米・日・西歐では六〇年代末の昂揚と敗北後・革命的グループはおしなべて分解・混絡・混沌・分散化の状態を迎え、それは階級闘争の持続的拡大・深化の中で尚続いている。いうまでもなくこれは歴史的に不可避であったし、むしろ成長の病である。真にプロレタリア的社會主義的革命的な革命カールドルを養成し、教育し、訓練し、結集し、組織すること、これを持続的に拡大深化する階級闘争のたゞ中で、その具体的実践と結合し、その経験に学び、打ち鍛えられつ

つ、頑強に遂行すること、これが当面の一時期の要である。(実際こういふことは簡単には、短時日にはできないことである。しかしこれなくしてどのような確固たる持続的な、成算ある革命運動もありえない。)この点に世界革命の成長の度合が依存しつゝあるのだ。レーニンのユニウス批判が今尚有効であれば、又KAPD批判、「共産主義内の「左翼主義」小児病」の基本観念(議會に参加するか否かといった個々の現象的問題ではなく組織・活動態度・戦術等に関する観念)も今尚有効であり、更に初期の經濟主義批判とエス・エル批判も今尚有効なのだ。

世界プロレタリア階級闘争は、米帝を主柱とする國際ブルジョアジーとの闘争において一層固く結合しなければならぬ。だがそのことは各々の戦術的任務、プロレタリア国家におけるプロレタリア独裁強化・社會主義革命建設の前進・ブルジョアの残存物・母班との闘争(世界革命はプロレタリア国家にとって、民族国家的存在・民族国家的所有・國際貿易という母班を強制し、圧迫する、ブルジョア諸国家の体系・世界市場を転覆する闘争である)の任務、植民地従属諸国における民族解放・帝國主義による政治的・經濟的支配・隸属・収奪の打破・自立、寄生階級・カイライ勢力の打倒の任務、帝國主義諸国における帝國主義自國政府の打倒・プロレタリア権力樹立の任務を否定するものではないし、その各々の独自性を否定するものでもなく、逆にそれを不可欠とし、

それによって強められるのである。この独自の戦術的環をもたない純粹な平板な世界階級闘争は一個の抽象にすぎない。他方プロレタリアートは階級闘争の汎ゆる主導権を、汎ゆるところで、小ブルジョアジー、現代修正主義から奪い取らねばならない。國際政治においても、プロレタリア運動においても、民族解放運動においても、社會主義革命建設の闘争においても、その汎ゆる領域・汎ゆる形態において、奪い取らねばならない。(その頂点としてソ連社會帝國主義集團の打倒がある。)とくに今日その主要な領域は帝國主義諸国のプロレタリア運動と、國際政治である。この領域で小ブルジョア勢力・現代修正主義・ソ連社帝から主導権を奪い取ることが要になってきている。かくして米帝を主柱とする世界的な二重の帝國主義を打倒し、世界プロレタリア共産主義革命・世界プロレタリア独裁を闘い取るプロレタリアートの世界的闘争は、この戦略的任務を各々の戦術的任務・環と結合し(この結合の仕方は各々独自であり、独自の性格と形態をもつ)、その中に具体化し、又各々の戦術的任務・環を、この戦略的任務によって相互に結合し、打ち鍛えること、そして階級闘争の汎ゆる主導権をソ連社帝・現代修正主義・小ブルジョアジーから奪い取ること、これらを結合し、國際的同盟・融合をたゆみなく打ち鍛えていくことによって、偉大な勝利へ前進していくであろう。その環がアメリカを初めとする心臓部へと向いつゝあるのだ。我々はそれを促進しなければならぬ。

では我々の当面の任務は何か。第一に我々は何よりもアジアにおける國際革命の発展のために闘い、アジアの反帝革命闘争をアジア・アメリカ國際革命へ発展させるべく、アジア・日・米の階級闘争の緊密な結合と発展のために闘うことである。言いかえれば、アジアにおける帝國主義の國際的支配体系・米帝を主柱とし、日帝をその目下の同盟者として二重化された支配体系——米・日・帝國主義のアジア侵略反革命と闘い、それを打ち破り、破綻させることに力を注ぐことである。この二重化された國際的権力要素・支配体系は既にアジアの民族解放・社會主義闘争によって打ち破られ、大きく揺らいでおり、又日米間の矛盾の激化によって動揺している。米・日ブルジョアジーは自己の後退をくいどめ、民族解放・社會主義闘争をおさえ込み、(半)植民地・従属國・權益を防御し、分け前を分割し、相互の矛盾を相互の力関係の度合に応じてなし崩しに解決せんと、この支配体系の再編を急いでいる。だがそれは一層矛盾にみちた、危機的なものであり、それだけ腐朽性・軌棘、反動的・反革命的な性格を顕わにしている。我々はこの再編をつき崩し、危機を深め、破綻を徹底的に拡大・おし進めるために全力を尽さねばならない。この闘いの中で、民族解放・社會主義闘争との國際的同盟・團結を打ち鍛え、発展させ、日・米ブルジョアートの革命的同盟・融合を打ち鍛え、日本プロレタリアートを國際革命(アジア・アメリカ革命)の一部隊、主体(アジアの民族解放・社會主義闘争

を、アジアIIアメリカプロレタリア社会主義革命へと発展・転化する主体)へと打ち鍛え、高め上げ、かつ日米同盟の矛盾を利用しなければならぬ。インドシナー中国朝鮮の国際戦線と団結し、アジアの被圧迫民族の民族的要求・民族解放闘争を無条件に支持し、その勝利のため、米帝をたゞき出し、日帝の干渉・支配・抑圧・略奪・反革命に反対し、それを打ち砕くべく闘わねばならぬ。とくに沖繩(及び本土)・台湾・南朝鮮からの米軍の撤退のために闘い、台湾・南朝鮮・在日朝中人民の解放・統一(大陸本土との南北の)・政治的自由の闘いを無条件に支持し、そのために闘い、日帝の干渉・支配・抑圧・侵略的II反革命的諸条約・策動に反対し、打ち砕くべく闘わねばならない。又米軍(及び自衛隊)の軍事行動に反対し、基地・軍事施設兵器の撤去・破壊、軍需物資の生産・輸送のサボタージュ・隊内叛絡の組織化等を進めなければならない。これらの中心環こそ沖繩闘争であり、その軍事支配・前線基地体制を打ち砕き、その日帝による再編強化を打ち砕く闘いである。沖繩のその国際的位置・歴史的に蓄積された矛盾・汎ゆる要素の集中の故にこそ、沖繩をアジアIIアメリカ革命の結合の拠点・砦、日本革命の発射台へと転化していかねばならない。我々はブルジョアジーが民族解放闘争に対する民族的抑圧・敵対を、抑圧民族国家II帝国主義民族国家として組織し、打ち固める(IIブルジョアジーは民族解放

闘争に対する自己の階級的立場からの抑圧・敵対が、民族的抑圧・敵対、即ち民族的關係として現われることをテコとして、自己の抑圧・敵対を民族的行為(抑圧的II反動的)民族国家として思想的II政治的II社会的に組織する)のに対し、逆にこの契機を反動的II抑圧的民族国家の破碎IIプロレタリアート人民の国際的結合・融合へと転化すべく闘わねばならない。即ちブルジョアジーの民族的抑圧・敵対を打ち破るべく闘い、かつこの闘いを民族解放闘争との同盟・結合を組織し、国際反帝闘争として打ち鍛える仕方である。その力によって反動的な民族国家の外観をひきさき、赤裸々な階級対立・非和解的な階級闘争II政治闘争・自国政府打倒に転化するこゝである。だから我々はアジアの諸民族・諸国民の民族的見地を断固支持し、擁護しつつ、同時に日本の民族的見地(独立・自主・愛国・自主外交・中立・沖繩奪還等)には断固反対し、階級的見地(内乱の見地)を対置し、これを前者と結合しなければならない。この結合を組織し、打ち鍛えることこそ、この闘いの眼目である。(それに対し、民族的綱領を対置することは、それがどんなに革命的意図から提起され、革命的戦術に味方しても、やはりそれは全く誤りであり、小ブルジョアジーへの妥協・追従である。丁度レーニンがユニウスを批判したように。)だから我々は米I日帝国主義の国際的支配体系IIアジア侵略反革命を破綻させ、打ち破る闘いを、帝国主義政府打倒に結合し、それに凝縮させ、転化していか

ねばならない。この政府打倒と結合され、凝縮され、打ち鍛えられないならば、この環を曖昧にするならば、国際主義・国際反帝闘争は平板な死んだ抽象か、実践上の小ブルジョア民族主義II小ブルジョア民主主義への追従をもたらすであらう。国際反帝闘争は必ずこの戦術環II政府問題へと、一国の階級闘争の中に具体化II集約され、内乱への発展を打ち鍛えるのである。他方我々は米I日帝国主義の侵略反革命との闘争I民族解放・社会主義闘争との同盟を基礎に、日I米プロレタリアートの国際的同盟・融合を、日米同盟の対極に打ち鍛えねばならない。我々はこれに際しては民族や民族国家を無視し、その見地に反対し、それをこえて結合しなければならぬ。だから我々は日米の帝国主義的矛盾・市場競争から生まれてくる、ブルジョアのII小ブルジョアの、民主主義的な反米要求・反米運動(例えば織維問題等)を支持しない。同盟と対立は帝国主義列強間の相互關係のメダルの両面であるが、この矛盾(帝国主義の世界編成・世界的依存關係としての世界性とその内部対立・分裂・一國性ととの矛盾)から生まれ、主に矛盾を受け、没落する中小ブルジョアジーを把え、彼らによって支持される民族主義・民族国家主義は、たとえ反米を掲げていてもその社会的内容は帝国主義的利害と結びついたもの金融資本によって欺瞞されたもの以外ではありえない。ブルジョアジーは米帝との同盟の保持・妥協のため、それを直接満足させることはできないが、しかしそれを帝国主

義的膨張・反動のために利用している。我々はそれと闘い、日米プロレタリアートの社会主義的同盟・融合を対置しなければならない。そしてこの矛盾のプロレタリア人民への転嫁とそれに対する人民の抵抗を、政府打倒I金融寡頭制打倒の闘いへ転化・発展させるべく闘わねばならない。小ブルジョアのII民族主義的反米運動に対しては、その反政府的側面を、プロレタリアートの政府打倒の闘い、又この闘いでのプロレタリアートの進出を促進するために利用し、彼らを一層反政府的方向にかりたて金融資本の支配に反対させる即ち内部に眼を向けさせることである。それが日米同盟の矛盾を促進・激化させ、それを利用し、この同盟を弱体化させる今一つの方法である。以上、米帝の敗北を徹底的におし進め、日帝の侵略反革命の困窮を促進し、破綻させ、国際的危機を激化させること、これは国際階級闘争の要求する任務、その発展への貢献であると同時に、日本革命を闘い取るための決定的な客観的条件であり、環である。又アジアの民族解放I社会主義闘争と団結し、アメリカプロレタリアート人民との社会主義的結合・団結を組織し、この団結によって日本のプロレタリア人民を組織し、打ち鍛え、両者の支援を得ると同時に、両者の結合の主体的組織者となっていくことは、アジアIIアメリカ国際革命の要求する任務・その発展への貢献であると同時に、日本革命を闘い取るための決定的な主体的条件・環である。我々はこの両者を帝国主義政府打倒へ結合し、凝縮し、集中

していき、この現存の政府を打倒する闘いによって内乱への道を切り開き、打ち鍛えていかねばならない。第二に我々は国内的な階級間の政治的・経済的諸矛盾・金融寡頭制・帝国主義の搾取と収奪・抑圧と蹂躪・反動と暴力に反対する被搾取被圧迫階級層の政治的・経済的要求・闘争を組織し、それをこの国際反帝闘争・政府打倒へ結合し、統合していかねばならない。諸階級層の個々の要求と衝突、社会・経済的闘争、民主主義運動を、国際反帝闘争の主導力・戦略的牽引力の下に発展・結合させ、政府打倒へ、更にプロレタリア権力とブルジョアジーの収奪へ、そのための全勤労人民の同盟へ高め、打ち鍛えていかねばならない。今日の社会・経済的再編と搾取・収奪体制・政治的再編と反動的・暴力的抑圧体制は国家独占・国家財政と官僚的・警察的統治機構を軸に、一つのものとして進められている。それは一方で暴力、蹂躪・破壊・差別・分断攻撃をもって、他方で力と買収・イデオロギー攻勢と行政的組織化によって、反動的・反革命的層を組織し、結集し、動員する仕方、侵略反革命国家体制を組織するものとして、国家的構造の下に国家を中心に、全社会的に進められている。そして反動と暴力を内向化させている。だからこゝから生まれる一切の軌轢・分解・分裂・衝突・闘争は、結局のところ金融寡頭制国家・帝国主義国家・侵略反革命国家体制に対する政治的態度・政治的分裂に帰結し、それをこそ軸・核心とするものである。まさにそれ故にこそ、組合主義

や議会主義やブルジョア民主主義・民族主義が、この国家の補完物、もう一つの側面として、沈ゆる手段をもって積極的に政治的に組織され、政治的安全弁へと転化されている。だから我々はこれらに対する一切の反抗、個々の社会・経済的闘争、民主主義運動を、金融寡頭制国家・帝国主義国家・侵略反革命国家体制に対する政治闘争（国家権力をめぐる階級間の政治的分裂・闘争）として組織し、打ち鍛え、発展させていかねばならない。この核心を見失って、個々の要求闘争に固定化する時、即ち国家権力、国家体制に対する明確な政治的態度を曖昧にし、階級間の政治的分裂・闘争へと深めていかないなら必らずアナルコサンディカリズム、組合主義・経済主義・改良主義に陥るであろう。ところでこの政治闘争としての組織化・発展は、国際反帝闘争の主導力、戦略的牽引力を前提とし、それと結合し、その一環へと組織されることによってのみ獲得される。これを曖昧にし、否定する時、必らず一國主義・反政府主義・アナルコサンディカリズムに陥るであろう。他方国際反帝闘争は、この個々の社会・経済的闘争、民主主義運動と結合し、それを自己の一環へと組織し、政治闘争に転化することによってこそ、階級の基礎を獲得し、真に階級闘争・権力・所有をめぐる全人民的政治闘争となることができ、自己を反帝社会主義として打ち鍛え、内乱に転化していくことができる。この結合を拒否する時、必らず帝国主義的・経済主義・召還主義に陥り、決して真に階級的な闘争と

なることができないう。我々はこの結合をたえず深め、強化し、アジア侵略反革命に対決し、その国家体制・反動と暴力と分断支配に対決し、金融寡頭制の全社会的な搾取・収奪体制に対決し、それを戦術的環・政府打倒へ集中し、結集し、内乱への転化を追求していかねばならない。そしてプロレタリア権力・プロレタリア民主主義——金融寡頭制の打倒・ブルジョアジーの収奪と全勤労人民の共同所有——民族解放・社会主義闘争との国際的同盟をめざす、全勤労人民の社会主義的同盟を組織し打ち鍛えていかねばならない。（その意味で我々は全勤労人民を小ブルジョア性と闘い、それを克服してプロレタリアートへと組織し、打ち鍛えていかねばならない。たとえば三里塚をみよ）このような結合は現に沖繩の闘い、在日朝中人民・入管闘争、三里塚闘争において経験され、打ち鍛えられている。我々はこの結合を蜂起・プロレタリア権力に向けた党・階級・大衆の相互関係として組織し、打ち鍛えていかねばならない。

整理しよう。帝国主義諸国では諸階級・階級関係は帝国主義国家権力として総括され、国家と諸階級の相互関係として存在している。同時に帝国主義は、国際的権力要素として、帝国主義世界体系の連鎖の一環・国際的支配権力として登場している。（まさにこゝに帝国主義の特別の反動性・抑圧性・反革命的の根柢があり、国際革命によってのみそれを打倒しうる根柢がある。）この権力の社会的・経済的基礎は金融資本・金融寡頭制であり、

国際的・国内的な搾取・略奪体制である。それ自身今日では国家権力を要・軸にして、国家的手段によって組織されている。だから現実的・具体的な階級関係は、この国家権力をめぐる国家的・国内的諸関係としてあり、その頭部・戦術的環こそ政府問題である。だから我々は国際反帝闘争・国際革命のための闘争——これこそが帝国主義派と小ブルジョアの改良的反対派とプロレタリア的・革命的反対派とを明瞭に区別するものである——の下に、国内の個々の社会・経済的闘争・民主主義運動を結合・統合し、具体的な日本革命の闘い・権力・所有をめぐる全人民的政治闘争に転化し、政府打倒を戦術的環としながら、蜂起・プロレタリア権力へ前進していかねばならない。（沖繩問題・在日朝中人民・米軍——更に自衛隊も——の問題は、国際反帝闘争・国際革命の直接の課題であって、同時に国内の重要な民主主義運動の課題であり、国家権力の戦術的環心がかゝっているが故に、この結合の環であり、直接に権力問題を内包しているものとして、日本革命の権力問題の特殊に重要な部分をなしている。）今、日本帝国主義は、自己の国際的基礎であった米帝が、アジア諸国人民の集中砲火によって打ち破られ、敗退しつつあるその時に、自己の延命をかけて侵略反革命にのり出している。その前途はアジア諸国人民の燃えさかる闘い、帝国主義との革命的対峙を堅持しているプロレタリア国家・米帝の力の弱体化・日米矛盾の激化と暗澹たるものである。我々は日本帝国主義のこの

国際的困難。危機を一層おし進めるべく闘い、それを利用してこれを打ち倒さねばならない。この侵略反革命への進出と国際的困難・危機の激化は、「死の苦悶」を表面化させ、国内に対して腐朽化・反動と暴力、差別と抑圧を強め、又それだけ、それに対するプロレタリア人民の憤激と反抗を強め、激化させている。他方世界資本主義の腐朽化・没落の始まりである、世界的な生産・資本・信用の過剰IIスタグフレーションと国際市場争奪・通貨戦争の激化は、日本帝国主義の社会II経済的地盤の矛盾を激化し、その動揺・腐朽・分解・危機を促進している。一握の金融資本・独占ブルジョアジーは国家権力を完全に独占し、自己に従属させ、経済的にも政治的にも増々それに依存して、一層激しい、苛酷な搾取II収奪体制へ、暴力的再編を進め、増々多くの大衆を零落させ、貧窮化させ、破壊・蹂躪をほし、社会の汎ゆる分野で、増々多くの大衆をより直接に隷属させ、一層苛酷な支配を進めている。(単に労働者階級への直接的なそれだけではなく、農漁業・小工業・教育・行政・財政・都市生活全般等で進めている。)それは又プロレタリア人民の憤激・反抗を広げ、深め、激化させている。日本帝国主義はこれら全体を一つのものとし、その権力によって一個の国家体制として組織しつゝある。そして力と買収と欺瞞と反動イデオロギーと行政手段によって階級層の中に反動的II反革命的な層・この国家体制の支持勢力を組織し、結集し、統合することに力を注ぎ、

又それをブルジョアのII小ブルジョアの民主主義・民族主義・議会主義・組合主義を積極的に組織化し、政治勢力化することによって補完し、政治的安全弁とすべく力を注いでいる。だがそのことこそ日本帝国主義の腐朽・危機・死の苦悶に他ならない。何故ならこのような再編は、増々広がり、深まり、激化する動揺・分解・分裂・対立・衝突なしにはありえず、この分裂・対立・衝突はプロレタリア人民を打ち鍛え、プロレタリア的II革命的反対派・革命勢力を拡大・成長させるのだ。我々はこの分裂・対立・衝突を徹底的に広げ、深め、激化させ、それを真に全社会的II全国民的規模での、国家権力をめぐる政治的II階級分裂へと打ち鍛え、発展させ、組織していかなばならない。それが国際反帝闘争を戦略的軸に一切の社会II経済闘争・民主主義運動を結合し、現存の帝国主義国家体制を打ち砕くべき政治闘争として組織し、現存の政府打倒を戦術的環に、権力I所有をめぐる内乱へ転化していくことである。プロレタリア権力・プロレタリア民主主義——ブルジョアジーの収奪・全生産手段の全勤労人民の共同所有と生産と分配の人民統制に向けて、プロレタリアートの指導の下、全勤労人民の同盟と、アジアの民族解放I社会主義闘争・アメリカプロレタリアートとの国際的同盟を打ち鍛えていくことである。蜂起Iプロレタリア権力樹立へ、党I階級I大衆の相互関係を組織し、打ち鍛えていくことである。いままでもなく、この過程は「多少とも強力な爆発と多少とも深い沈

静」を伴なう、「全戦線にわたる長く続く幾多の戦闘」階級的諸衝突の一時代であり、その中で小ブルジョアの諸要素・諸傾向・諸性格を徹底的に克服し(とくに前衛の隊列において)大衆の階級の意識性と組織性をたえず深め、高め、社会主義的プロレタリアートの隊列をしつかりと築いていく過程である。又革命的暴力を創出し、組織し、打ち鍛え、発展させていく過程である。我々は現存の時期にはとくに次のことをしつかりと心にとどめねばならない。「人民の戦闘的な団結の力」こそ一切の源泉であり、「人民大衆が革命的政治目標に対して目覚める時、又彼らが組織され、断固として闘いに立ち上る時、いかなる兇暴な敵にも打ち勝つ力をもつのであり、いかなる形態でも暴力は目覚めた、そして同時に組織された大衆の力を発揮させたものでなければならぬ」ず、その「革命性・大衆性・階級性」は絶対的要求であることである。(引用部分は、グエン・ザップ、「軍事路線の基本的論点」)我々は武装闘争を、大衆の革命運動・政治闘争の発展に基礎をおき、大衆の革命的な政治的組織化・動員と結合し、それを促進する仕方で、又党と階級の組織化・強化と結合し、それを促進する仕方で、更にブルジョアII小ブルジョアの民主主義・民族主義・議会主義・組合主義・改良主義の組織化・政治的統合と闘い、それを打ち破る仕方で、そして増々広く、深い、大衆的な革命と反革命の激突を促進していく仕方で闘い、発展させねばならない。(ついでにいえば、現在の時期

での武装組織は、ベトナムの人民軍の前史・母胎となつたような、武装I半武装組織、即ち、大衆の強いしつかりした政治組織の発展と堅持を基礎とした、戦闘自衛組織・戦闘民兵の形態で、党の強固な指導の下に、党組織を中核として、建設されねばならない。そして大衆の革命運動の発展・成長の中でより高度な形態を創出し、発展させていくことが必要である。)今必要なことは、階級闘争の汎ゆる細流・様々な革命的ひらめき、発展の萌芽をもちつつ、だがしかし分断され、分散し、計画性のない、細流の数々を、革命の本来に向けて統合し、統一された集中的な闘争に打ち固めていく計画性・系統性・堅固さの要素を確立し、打ち鍛えていくことである。全領域・全戦線での闘争を堅持し、発展させ、その中で大衆を教育し、訓練すると同時に、党の要素も又訓練・教育・検証・結合し、古い限界を不断に突破し、実践構造をつくりかえ、高度化し、革命主体を生み直し、一層自覚した、堅忍不拔のプロレタリア的II共産主義的革命カイドルを養成し、結集し、その一層頑強で、緊密な結束を組織することである。そしてマルクス・レーニン主義の堅固な理論的基礎の上に立ち、強固な組織性と規律をもち、首尾一貫した共産主義的政治を実行し、公然I非公然、合法I非合法の広汎な革命的諸活動を整然と組織する強固な革命的組織、しつかりとたゆみなく大衆を組織し、決起させ、教育し、確固たる継承性をもった指導性を発揮しうる強固な戦闘組織を建設していくことであ

る。我々は今や新しい一步、力強い一步を全精力を傾注して踏み出さねばならない。即ち自衛隊沖繩派兵阻止闘争に、この数年間に形成された我々の運動の全勢力を結集し、拡大し、組織し、打ち鉦え、動員しなければならぬ。この闘いを真に本土一沖繩を貫く国際反帝闘争、それへの全民主主義運動の統合、国民的規模での反動的な革命的権力派とブルジョアの二小ブルジョアの民主主義派とプロレタリア独裁の国際革命派への分裂・闘争を切り開き、その激烈な、大衆のかつ組織的な政治的・思想的二軍事的衝突・闘争を実現し、権力問題一権力闘争へ接近しなければならぬ。この数年間の思想的・政治的・軍事的・組織的諸経験をこゝに集中し、更にその闘争経験によって大胆に発展させなければならぬ。この闘いの試練を通して二年間の過渡期の混乱・成長の病を克服し、革命党の基礎を確立しなければならない。或いはこの間の実践的混乱による自然成長的分解を再編し、実践的に検証された、真に目的意識的分岐を獲得しなければならぬ。この自衛隊派兵阻止闘争の全政治的・軍事的一組織的計画を、党と階級・統一戦線の総体から打ち樹て、その遂行に全精力を投入しなければならない。そしてこの闘争によって、正規の攻囲への基礎・態勢を獲得し、確立しなければならない。即ち全国的革命家の組織の建設の基礎を築き上げることである。

△あとがき▽

私がこの第一部を執筆したのは七一年十二月〜七二年一月にかけてであった。(とくに主要部分は十二・一八一周年から、保釈許可原決定破棄の高裁通告を受け取った年末にかけてであった。)その直接の動機は九月の三里塚闘争の偉大な、輝かしい前進と、十一月の挫折の総括であり、又頭わになった革命的左翼の混乱との闘争であった。私はこの私の見解を公表すべきか否かについて激しい葛藤を経験した。しかし私はレーニンの次の言葉に出会わした時、公表を決意した。

「我々は同志ブハーリンが非常におとなしい性質であ

ることを知っている。これは彼の特性の一つであって、そのために彼はあのように愛されており、又愛されざるをえないのである。我々は、彼が、たびたび冗談に『柔らかないろ。』と呼ばれたことを知っている。『柔らかないろ。』のうえには、どんな『無原則的な』人間でも、どんな『デマゴグ』でも、思いのままのことを書くことができる。」「今や残されていることは、ラッサールの表現を借りて言えば、誤りを認め、それをあらため、ロシア共産党(——日本革命的左翼、引用者)の歴史のこのページをめぐるために、『知力』(と性格の強さ)を自分のうちに見出すか、それとも、：：：それとも、どんな原則にも『気づかずに』、どんなものであるかと、あとに残った同盟者にしがみつつか、そのどちらかである。」「(全集三二巻、『党の危機』)

私は六九年夏以来の二年半、激しい動揺・葛藤・苦しみを経験してきた。そして時としては、過去の一切を清算し、原則的・思想的二政治的苦悶を放棄し、それを「とびこえて」気分うえですっきりと「純粹戦闘的、革命的」になるべく試みたり、或いは獄中の若い同志達——多くは革命的情熱・熱意に満ちているが、理論的・政治的経験・訓練の少ない、その意味で未熟な——の「戦闘的・革命的」熱情・気分(それは「現実」から切り離されている時には一層純化して現われるのだが)におし流され、拝跪し、原則をあえて無視し、譲り渡したりもした。そして妥協と折衷を試みてきた。(その思想的根柢

は、六十年代の革命的左翼・又とくに私がもっていた「反スタマルクス主義」の主体的唯物論の小ブルジョア性であり、もう一つは「性格の強さ」の欠除であった。）この過程での「序章」を初めとする雑誌へのいくつかの寄稿文は、或る諸君が「御用学者的弁護論」と評した如く、常に一種の折衷・曖昧化、更にはレーニンによって「労働者階級のデマゴグ」と難詰されかねない部分をはらんでいた。（とくに「情況」、七十一年十一月号への寄稿文は、以来ずっと自責の念にとらわれてきた。しかしそれでも、これらの諸君が武装闘争を日和見主義的に歪曲・評論し、実践的・政治的に敵対するのに対して、断固として支持し、擁護するという点では、これらの諸君より意味があったのだ。）

しかし三里塚闘争（七〇九月）があのような輝かしい偉大な地平を実現した以上は、にもかゝらずまさにその時に我が革命運動の混乱・成長の病が頂点に達した以上は、この混乱・成長の病を克服し、この闘いの地平を継承し、発展させるためには、真に原則的立場・原則的観点を打ち樹て、それを現実の実践の中に貫くことがどうしても必要だと思われた。私自身、もはや曖昧・折衷を清算し、克服することなしには、一步も前へ進むことができないばかりか、危険にさえなったのだ。即ちもはや「柔らかいろろ」であることができなくなり、それ以上、一つの危険になったのだ。我々はブハーリンがロシア共産党内の最も博識な輝かしい理論家であり、ホー

プでありつゝも、ある時には最も熱烈な「左翼共産主義者」であり、ある時には党内の最右翼であり、遂にはあの蘭清裁判に、悲惨な思想的屈服をもって終ったことを知っている。そこにはレーニンが評したいくつかの思想上の理論上の欠陥と同時に、この「柔らかいろろ」であること、「性格の強さ」の欠除があったことは疑いない。そして今、日本革命運動は「誤りを認め、それをあらため、歴史のこのページをめくるために、知力と性格の強さを見出すこと」が是非とも必要であり、とりわけ私にとってそれは必要である。

今や全力で原則を見出し、それを貫かねばならない。そのために闘わねばならない。我々は今レーニンの次の言葉をかみしめねばならない。「ロシアは、たゞ一つの正しい革命理論であるマルクス主義を、未曾有の苦しみと犠牲・比類ない革命的英雄精神、信じられない程の根気とひたむきな探求心、学習・実践による試練・失望・点検、ヨーロッパとの経験との比較的半世紀（一八四〇〜九〇年）の歴史によって、真に苦しんで闘い取ったのである。」「我々はロシアで余りにも長い、苦しい、血みどろの経験によって、革命的気分だけに基いて革命的气氛だけに基いて革命的戦術を打ちたてることはできない」という真理を確信するようになった。」（『共産主義内の「左翼主義」小児病』——尚、よど号「の九人の同志の、金日成同志に宛た手紙は、まぎれもなく、レーニンのこの著作の精神によって貫かれていた。」）しかし、

我々は今、「未曾有の苦しみと犠牲・比類ない革命的英雄精神、信じられない程の根気とひたむきな探求心、学習・実践による試練・失望・点検」によって「たゞ一つの正しい革命理論であるマルクス主義」マルクス・レーニン主義を、真に苦しんで闘い取らねばならず、又闘い取りつゝあるのだ。（今わが国には「マルクス・レーニン主義」は氾濫している。しかし「たゞ一つの正しい革命理論であるマルクス・レーニン主義」は生まれ始めたばかりであり、萌芽の形でしか存在していない。）我々はレーニンがその革命活動の初期から、そして死に到るまで、どれだけマルクス主義の原則・観点に忠実でありたえずそれに立ち帰り、それをロシアの（後には世界の）革命運動・その実践の中に貫くべく苦闘し、又それからの少しの逸脱をおおむめにみず、容赦なく闘ったことを知らねばならない。経済主義、メンシェヴィズム、解党派、社会排外主義、小ブルジョア民主主義とのみならず「人民の意志」派、エス・エル、左翼エス・エルと、更には左翼ボルシェヴィキ、左翼共産主義との闘争をも。とくに次の指摘に耳を傾けることは、今の時期にこそ、最も革命的情熱・熱意に燃えている、最も勇敢な人々にとって必要である。

「エス・エル派が一つの流派として『党』として生まれることができたのは（或いは『人民の意志』派の時代以来存続することができたのは）、又最近それが成長し、幾分強固となることができたのは、ひとえに、同派が疑

いもなく革命的な気分をもち、英雄的な自己犠牲性にさえ満ちている人々、心から自由のため、人民のために身命を賭そうと望んでいる人々を自派に引きつけたという事情のおかげであることを私は疑わない。しかしながら、人々が、心から、信念をもって、ある社会的・政治的立場をとっているという事情は、それだけではまだ、この立場が無条件に虚偽のものでなく、内的に矛盾していないかどうかという問題、又この立場からなされた最良の活動の結果が不可避免的に（それが行動する人々の意識に無関係であろうと、又彼らの意志に反してであろうと）労働運動（——プロレタリア革命運動）をエスカモチーロヴァチする（手品で消えてなくならせること）ことと、正しい道から労働運動（——プロレタリア革命運動）をそらせ、それを袋小路へ引き入れることにならないかどうかという問題をあらかじめ解決するものではない。」（全集六巻『エス・エルに反対する基本命題』）

私はこの指摘に出会ってがく然とした。このことを認めることは苦しいことではあったが、しかしこれは私に見る眼をもち、聞く耳をもつことを教え、「心情主義」「ロマン主義」を一掃してくれた。厳密な理論的・原則的思考と、「革命的・闘争的」気分・熱意への拝跪・追隨との矛盾に解決を与えてくれた。（レーニンの初期のエス・エル批判は、私にとって、マルクス主義の原則をしっかりと把むための大きな導きの糸となった。）そし

てレーニンがこのように言う時、その歴史の奥底には、「彼らの中には、その革命的思考を『人民の意志』派として始めた人も多かった。その殆んど全部のものが、若年の頃にはテロルの英雄達を熱狂的に崇拜していた。この英雄的伝統の魅惑的な印象を捨てざるためには闘争が必要であり、どんなことがあっても、『人民の意志』派に忠誠をまもろうとした人々——それは若い社会民主主義者達が高い尊敬を払っていた人々だった——との訣別を伴った。」（『なにをなすべきか？』）のような事実があったことも知ったのだ。「知力と性格の強さ」それはこのような苦難の血みどろの闘いの歴史によって培われたのだ。我々も又そのような真剣な闘い、血みどろの苦難の闘いが要求されている。一つの原則に革命の生死が関わる、そのような苦しい、死物狂いの、真剣な闘いが要求されているのだ。その点こそ我々は責任を負わねばならない。このことの自覚が私に、私が二年半の苦しみを経て到達した見地を公表すべきことを決意させた。どのような批判・批難をもあえて受ける覚悟で。

私はこの第一部を、軽井沢の銃撃戦に対する私の態度をもって、補充しておきたいと思う。私は何よりもまず階級敵に対する最も勇敢な、最も断固たる、生死を賭した戦いであったあの銃撃戦を断固として支持し、連帯を明らかにする。我々の十数年にわたる階級闘争・革命運動において初めて銃をもった戦いが勇敢に戦われたことに熱烈な歓声をあげる。そして初めて銃をもって戦い、

汎ゆる装備をもって訓練された幾千の敵・犬供と、汎ゆる卑烈なデマゴギー、分断・屈服・欺瞞・反動キャンペーンと工作にもかゝらず、十日間にもわたって、最後まで英雄的に、勇敢に、不屈に、かつ沈着に戦い抜いた五人の戦士に最大の敬意を表する。かつてロシアの「人民の意志」派の革命家達が、アレクサンドル二世を暗殺した時、ヨーロッパの革命家達が歓呼の声をあげた如くわが日本の革命家達もこの最初の銃撃戦に歓呼の声をあげる権利をもっている。そして妙義——軽井沢の犬供の兇暴な、気狂いの如き襲撃——丁度六八年秋ブラックパ

ンサー事務所を襲撃しボビー・ハットン虐殺したFBIと同様の——に対し、階級の憎しみを胸に焼きつけねばならない。全ての革命家・戦士達は、五人の戦士達の英雄性・勇敢・不屈・献身に最大の敬意を表し、その精神をわがものとしなければならぬ。全ての革命家・戦士達は五人の戦士の無念・苦痛・屈辱・階級敵への憎しみを自からの胸に刻まねばならない。帝国主義打倒のために最初に武装闘争に踏み出し、今又最初に銃撃戦を戦った英雄的戦士達に光栄あれ！同時に、我々は「蜂起——戦争」派、もしくは「蜂起——プロ独」派を自称し、武装闘争派を自称している人々の一部が、この決定的戦闘の瞬間に、この最大の瞬間に、いかなる支持と連帯をも表明せず、支持と連帯の行動をも行なわなかったことを強く弾劾しなければならぬ。それは丁度かつてのロシアで、テロルを自分達のサロンの中でのみ話題にし、決

定的な瞬間に支持を拒んだ自由主義者に等しいものである。政府・警察・ブルジョア御用マスコミのありと汎ゆる手段をもつての攻撃・卑劣なデマゴギー・分断・屈服・反動キャンペーン・工作（これは単に五人の戦士に向けられたものでなく、人民に向けられたのだ。）に対して、どのような抗議もあげずに、たと難を避けるために黙って見過した「革命家」達を弾劾しなければならぬ。

だが我々は今第二・第三の軽井沢を、第二・第三の銃撃戦を、第二・第三の連合赤軍を、と呼びかけるべきであろうか？ 否！ 断じて否である。我々は今そのような安易な呼びかけを断じて拒否すべきである。我々にはあの銃撃戦と戦士達を断固として支持し、擁護し、敬意を表すると同時に、連合赤軍の敗北こそ徹底的に学ばねばならない。その誤り、欠陥・弱点・破産を徹底的に暴き出し、真剣に総括し、克服しなければならぬ。そして武装闘争における徹底した思想闘争・路線闘争を行なわねばならない。今度の軽井沢の戦いは、それが敵によって強いられたものであるとはいえず、六九年秋以来最左翼が踏み出した闘いの最高の到達点、輝きであると同時に、というよりそのことによって又その諸々の欠陥・誤り・破産をも鮮明にしたのだ。その意味でこれは一連の過程の最後の輝きであり、終りの印でもある。この二年半、最左翼が担ってきた歴史的意義——その全き歴史的正当性・尖端的な突進力、口火と、その諸々の欠陥

誤りをも含めて——は、最も英雄的な勇敢な、しかし悲劇的な敗北でもって終ったのだ。我々はそのことを認め真剣に総括しなければならぬ。同じ敗北をくり返してはならない。戦闘が根本的であつただけに、敗北も又根本的であつた。だから戦闘の背後にある全体、その思想・政治・組織・軍事の基本的・原則的立場・路線をこそ問題にしなければならぬ。今こゝで簡潔に指摘すれば、その最も根本的なことは、共産主義とプロレタリア運動の結合という最も基本的なことをしっかりと把むことができず、曖昧にし、その実践の全側面に貫くことができなかつたことである。従つて又武装闘争をプロレタリア階級闘争と結合し、大衆の深部から組織され、打ち鍛えられる階級的力の上に基礎づけることができなかつたことであり、自己の英雄性・勇敢・献身・不屈を、大衆的英雄主義・大衆の革命的積極性を培い、それと一体に融合していくができなかつたことであり、真に革命的理論であるマルクス・レーニン主義の堅固な理論的基礎の上に立つことができず、「正しい戦術」の観点に立つことができず、真に革命的組織——革命的階級としっかりと結合し、又しようとし、広汎な革命的諸活動を頑強に系統的に遂行し大衆を導く能力をもつた組織——を建設することができなかつたことである。あのような英雄的な勇敢な、不屈の銃撃戦にもかゝらず、それはわが日本の生活から滴り落ちてくる抑圧・圧迫・暴虐・蹂躪・欺瞞・略奪・搾取・労働苦・屈辱・破壊等々に対する大衆

の怒り・憤激・憎しみ・熱望をかきたて、強め、それを自覚させ、この憤激の革命的現われへの移行を促進し、燃え上らせ、階級闘争へかりたてるということ、数々の水滴と細流を奔流へと発展させていくということができなかったのだ。安田岩の死守戦や、三里塚の戦い（岩死守——大衆的ゲリラ戦）やコザの戦いや六・一七明治公園の戦い）が多くの民衆を感動させ、深く揺り動かす、ブルジョアジーのどのような分断作動、卑劣なキャンペーン、デマゴギー、そして執拗な圧殺攻撃にもかゝわらず、増々広く、深く、人々を目覚めさせ、階級闘争へ動員し、団結させていったことを考える時、その相違は明瞭である。「大衆の気分から生まれ出る事件だけが、真に真剣な『煽動的な』効果、いな単に興奮させるだけでなく、教育的な効果を及ぼすことができる。」「我々の責務は闘争の方法・手段をつくり上げるこの過程に積極的に参加することである。……暴力とテロルを決して否定せず、我々は大衆の直接の参加を予定し、又この参加を保証するような暴力の諸形態を準備する活動を要求した。」（レーニン、全集六巻）これはとくに今の時期には重要な真理である。）

私は今回の銃撃戦と、連合赤軍について、ロジツアの「人民の意志」派の革命家達と、アレクサンドル二世の暗殺を頂点とする闘いを想起せざるをえないのだ。（或る面では、「構造」七十年四・五月号に掲載された戦前の無政府共産党事件さえ）その英雄性・勇敢・自己犠牲

革命勢力がまだ小さく、弱い現在の時期にはとくにそうである。さもないと敵の暴力に屈服されると同時に、ブルジョアの「小ブルジョアの民主主義・民族主義・組合主義・議会主義・改良主義の積極的組織化・政治的統合に、政治的に敗北しかねないのだ。（我々は敵の暴力を打ち破るといふこと、必ず、後者の組織化・政治的統合を打ち破り、解体すること、一体のものとしなければならぬ。盲目的武闘は後者を打ち破ることができないばかりか、その正反対の補完物・罰として、強めさせるのだ。）

「人民の戦闘的な団結の力」こそ一切の原動力であり、「人民大衆が革命の政治目標に対して目覚める時、又彼らが組織され、断固として、闘いに立ち上る時、いかなる狂暴な敵にも打ち勝つ力をもつのである」だからこそ「いかなる形態でも暴力は目覚めた、そして同時に組織された大衆の力を発揮させたものでなければならぬ。」（グエン・ザップ、『軍事路線の基本的論点』）実際ベトナム人民軍の成長の前史には、「わが人民の長期的で困難に満ちた革命闘争の全過程をみると、わが党が創立され、大衆を目覚めさせ、組織し、労働同盟の基礎をつくり上げ、民族統一戦線を樹立し、党の指導の役割を高めた激烈な十数年は後の革命武装闘争の準備する十数年ともなった」（同上）過程があり、この過程で「ゲ・ティン・ソヴェト期での労働の自衛組織、総蜂起時期での小さな半武装と武装組織……各地方の数千の自衛組織と

・献身、その組織性・規律・厳格な秘密組織、その地下革命活動の技術、更にその陰謀主義・政治及び活動の一面的狭さ、革命的階級との結合の欠除・その志向の希薄さ、或いは思想上のロマン主義等汎ゆる面。従って又それに対するレーニンの評価・賞讃と批判、継承と克服・止揚はそっくり我々の課題でもある。我々は武装闘争をプロレタリア階級闘争と結合することに全力を注がねばならない。（たとえその現在の現われが、この銃撃戦に比してさうやかなものであったにしても）大衆的攻撃を組織することに力を注がねばならない。全般の火事を準備しなければならぬ。真に革命的な組織——革命的階級としっかりと結合し、大衆と自己をたえず教育し、訓練し、公然・非公然、合法・非合法の、又種々の領域と任務をもった、汎汎な革命的諸活動を整然と組織し、一貫して共産主義的政治を実行し大衆をしっかりと組織し、確固たる継承性をもった汎ゆる指導性を発揮することのできる、マルクス・レーニン主義の堅固な理論的基礎の上に立った戦闘組織、堅忍不拔の共産主義者の、強固な組織性と規律をもった戦闘組織——の建設に力を注ぐべきである。武装闘争と大衆路線の結合に力を注ぐべきである。武装闘争を、党と階級を組織し、強化し、大衆の革命的な政治的組織化・動員を進めると結合し、それを促進させるような仕方ではない、正しい政治目的、政治（情勢）判断・正しい戦術観点と結合して闘うことに力を注ぐべきである。とくに革命運動が未だ未熟で、

戦闘自衛組織は次第に強くなり政治組織の堅持と発展を基礎として建設された。（同上）のであり、これこそ人民軍の母胎となったのである。真に革命的な勝利しうる軍事力は、革命的階級闘争がはらみ、創出し発展させる革命的暴力、根源的暴力性にこそ立脚し、それを軍事実践的技術的側面と結合し組織して、実体的な軍事力、戦闘力として組織されるものであるのだ。だから軍事の発展は、階級闘争が一層広く、深くなり、社会の基層・社会的生活の基層（社会全体としても、又個々の集団としても）を揺がし、闘いに転化し、変革の力を汲み取り、同時に階級の意識性・組織性・規律を強め、自覚・決意・団結を強め、階級敵との全体的非和解を強めていくこと、大衆の英雄主義・剛毅・革命的積極性・創意が、階級の憎しみが、打ち鍛えられ、発揮されていくことをこそ基礎としている。そしてこれらをしかりと培い、結合し、階級闘争の汎ゆる現われを統合し、汎ゆる側面での活動によって、又その組織性・意識性・計画性によって、これらを最も意識的組織的な戦闘力として自己の内に集中し、訓練し、打ち鍛えていく前衛組織をこそ、その指導中核とするのである。即ち強固に組織化され、意識化された革命的暴力は政治・軍事をこそ基礎とするのだ。まさにこの党——階級——大衆の相互関係をしっかりと打ち鍛え、強化する中で、それを基礎として、党組織と階級的諸組織の強固な結びつきの中に技術——軍事を独自に組織し、かつ組織的に結合させて、

武装組織を建設し、武装闘争を真に大衆的プロレタリア的進取の進取力として闘い抜いていかねばならない。

言うまでもなくこれは困難なことであり、時間のかかることである。だが我々は今、この我々の前にある困難な任務にこそ全力を注がねばならない。その困難さから逃亡したり、眼をつぶり、とびこえ、アレコレの処方箋を求めること、「一点突破」を求めること、或いは自己の革命的熱情・気分を拝跪し、ロマン主義・主観主義へ昇華していくこと、これらがたとえ一時的に華々しく、戦闘的であっても我々はそれに反対する。それは決して成算ある将来をもたらさしはしないから。我々は絶望に陥ることなく、焦燥にかられることなく、意気消沈することなく、悲観主義や弱気にとらわれることなく、真に将来性のあるもののために、この困難な任務を頑強に、堅忍不拔に遂行しなければならぬ。そしてこの闘いの中にこそ、連合赤軍の戦士達の、あの英雄性・勇敢・献身・自己犠牲・頑張り・不屈・あの強固な組織性・規律・革命活動の技術を継承し、生かさねばならない。それをももってすればこの困難なものは数ではないだろう。又戦士達の無念・苦痛・屈辱・階級敵への憎しみを、敵に対する真の勝利に向かう、大衆の階級の怒り、憤激・憎しみ、熱望として日々打ち鍛えていかねばならない。そして我々と、プロレタリアート人民の闘いが二層強固になった時、我々は連合赤軍の戦いを、人民の戦いとして

集し、組織し、訓練し、真にプロレタリア的共産主義的な堅忍不拔の革命カイドルへ養成しなければならぬ。我々は今この新しい一歩、新たな飛躍の道・力闘いを、自衛隊沖繩派兵阻止闘争の中に実現し抜くこと、烙印し抜くことに全力を注がねばならない。ここに全戦線を結合し、沖繩「本土」を貫く単一の闘争として実現し、日帝の侵略反革命の最初の破産（重大な破産）それは又米帝に対する強力な打撃となるであろう）を闘い取り、そして反動的に反革命的権力派と、小ブルジョアの改良主義的派と、プロレタリア独裁国際革命派（アジアの民族解放社会主義革命闘争と、米日のプロレタリア社会主義革命闘争の同盟・融合、このアジアアメリカ革命の結合環として自己の革命を闘い取ること）との、全国的規模での、深く、鋭い政治的分裂・対立・激突へと転化していかねばならない。この大衆の攻撃を、強固に組織された大衆の街頭武装闘争、堅固な政治的武装大衆ストライキ、大衆的な基地突入占拠、軍隊との対峙隊内叛乱、そしてこれらとしっかりと結合し、その一環として、それを強化するような種々のパルチザン闘争として闘い取らねばならない。そして最も勇敢な、最も訓練された戦士達による精鋭部隊、大衆の攻撃・戦闘の汎ゆる側面を指導しうる、真に組織的戦闘部隊が、確固たる党的要素と固く結合して組織されねばならない。このようにして、この闘いの中で、真の

更に大規模に、更に徹底的に実現するであろう。その時我々は連合赤軍を開始した事業を、しっかりと我々とプロレタリアート人民の手に握りしめ、帝国主義を木っ葉みじんに打ち砕くであろう。丁度レーニンが一九〇〇年以降、「人民の意志」派の踏み出した道と、その組織・活動の諸側面を継承したように。以上の方向に反する一切の傾向と我々は容赦なく闘わねばならない。我々は今の二年半の最左翼の闘いの歴史的意義を確認すると共に、最も深い苦痛をもって認めねばならない。（それは既に九月の三里塚の闘いと、十一月の挫折によって明らかになっていたのだが）だから我々はそれをくり返そうとする一切の試みに反対しなければならぬ。今や日本革命運動の歴史のこのページをめくり、新しい前進を開始すること、知力と勇気と精力をもって新しい一歩を踏み出すことこそが必要な全てである。九月の三里塚を継承し、十一月の挫折をこえる道・力・闘いがくっきりと自己を示さねばならない。我々は今現代の「人民の意志」派と社会民主主義派・ボルシェヴィズムの激しい思想闘争を遂行し、決着つけ、自から打ち鍛えねばならない。（これは小ブルジョアの半無政府主義的革命主義と、プロレタリア的共産主義的の決戦である。この闘いによって後者は決定的に成長しなければならぬ。これはアメリカ、西欧等でも多かれ少かれ経験している革命運動の試練である。）その中で最も革命的な、最も情熱に燃えた、最も英雄的で勇敢な闘士を結

プロレタリア革命党の基礎・「正規の攻囲」を組織する基礎を獲得し、打ち鍛え、確立しなければならぬ。今やしっかりと組織し、隊列を固め、準備すること、精力・精神力・又精力、それが必要なのだ。最後に、敵権力政治警察の兇暴な白色テロル、組織破壊攻撃、フレームアップ、革命的左翼の打撃攻撃に、鏢鉄の如き、精神・気風・組織性でもって闘おう。敵権力政治警察の荒れ狂うこの攻撃は帝国主義の「死の苦悶」が始まり、決戦に向かう革命的激突の時代が始まったことを示しているのだ。このような時期には革命的自覚・剛毅・不屈さ・自己犠牲・規律ということが決定的な政治的要因となる。我々はプロレタリア独裁の主要な本質はプロレタリアートの組織性と規律とにあると述べたレーニンの言葉を深くかみしめねばならない。又共産主義社会の建設には、自覚し、団結した労働者の規律・大衆的な、日常的活動における最も持続的な、最も粘り強い、最も困難な英雄主義を必要とすると述べたレーニンの言葉を深くかみしめねばならない。今我々が直面している政治警察との闘争、この闘争の勝利は、たゞ日々の汎ゆる活動における、又獄中をも貫き、とくに物理的にバラバラにされた上でかけられる政治警察の集中砲火の前での、剛毅・不屈さ、忍耐・頑強・自己犠牲・英雄主義、鏢鉄の如き組織性・規律性・自覚的規律、これらの一見目立たない、「平凡な」、しかし最も持続性・粘り強さ・堅忍さを要求するこれらによってのみもたらされるのである。そしてこれこそが革命的暴力の真実の基礎であり、プロレタリア

ア独裁の主要な本質であり、共産主義社会を建設する真の力、源泉である。(この点からしても軍事一点張りの観点は誤っている。)我々は政治警察との闘いの中で、団結の力、組織性・規律に対するインテリゲンチヤ的懷疑主義・嘲笑・曖昧化を徹底的に一掃し尽し、「破私立公」を、プロレタリアートの鋼のような団結の力、組織性を打ち鍛え、党・組織・闘争・人民の団結をこそ、自己自身として、自分の全てとして獲得し、打ちたて、いかねばならない、政治警察とどう闘うか、それはプロレタリア独裁・共産主義の根本問題なのだ。(これは又人民内部の矛盾、とくに党派闘争・対立の処理の形態・手段の問題とメダルの裏表である。)

(尚第一部では国際階級闘争―国際共産主義運動の観点からの総括は殆んど述べなかつた。それについては第一部で詳しく述べておいた。又軍事の問題も全く不十分にしかふれていない。これは後にもっと立ち入って、詳しく述べる予定である。)

(これを書き終えた時に、ラジオのニュースは「同志間のリンチ―殺害事件」について報道している。この忌むしい事件は一体事実なのか。或いは警察もしくは公安調査庁更には黒百人組的組織等の「黒い影の組織」によるフレイムアップ、陰謀なのか。それとも潜入したアゼフやマリノフスキーのような挑発者が外部の「闇の組織」(反革命テロ組織・謀略機関)と共同して組織した虐殺なのか。私には判断する特別の材料がない。しかし、あ

らゆる点から考えて私は二番目と三番目、あるいはその複合(すなわち、反革命白色テロル・謀略)であると確信している。六九年六月以来、われわれの周辺で動き始めていた「闇の組織」が、今や牙をむいて、最も残酷な手段で、猛然と襲いかかっているのだ。(いや、完了したのだ。)これが権力と結びついていることは確実であり、警察と最も深いところで二人三脚であることも疑いない。これこそ真の下手人・虐殺者にちがいない。虐殺者を弾劾し、粉砕せよ! 残忍で卑劣な闇の組織・闇の攻撃、フレイムアップを粉砕せよ! しかしもし、事実であるなら:それは殆んどありえないことだが:私は右に述べた評価・賞讃の多くを取り下げねばならない。そしてその醜さをこそ暴き出し、批判し尽さねばならない。)

(一九七二年三月一〇日)

「追 ①」

私はこれを書き終えた後に、「リンチ―殺害」事件のラジオのニュースを聞いた。そして死者―遺体は日に日にふえている。私には全く信じる事ができないが、痛ましい死者の存在は事実である。(その中には、私の旧知の同志も含まれている。)私はこれをどのように考えるべきなのか。この陰謀で、残酷で、忌むしい虐殺事件をどのように考えるべきなのか。一体これは事実「同志間のリンチ・殺害」事件なのか。それとも権力や黒百人組的反革命テロ団の謀略なのか。或いは中樞に潜入した挑発者と、外部の闇の組織(反革命白色テロ団や謀略機関)が共同して組織したものなのか。私には今判断すべき何の材料もない。けれども私はやはり、ここで、この残酷で忌むしい虐殺事件について、現在私が取りうる原則的な態度を明らかにしておかねばならないと考える。

第一は虐殺者が誰であれ、我々は虐殺者と徹底的に闘

わねばならないことである。即ちこのような虐殺事件はそれがどのような理由からなされたものであれ、一般に、革命運動・プロレタリア運動と全く対立するものであり、どんな意味でも革命的暴力ではありえず、反動的テロルという性格以外もつことができない。従って今回の虐殺事件は一片の擁護の余地もないのは勿論、それが革命運動、階級戦線に与えているはかりしれない打撃・権力の利用を考える時、反革命的挑発のテロルとして徹底的に糾弾されねばならない。虐殺者は誰であれ、どのような経歴をもつ者であれ、糾弾されねばならない。この立場こそ、この事件に対する一切の出発点であり、この事件から、革命運動・階級戦線を擁護する前提だと考える。

第二に、この虐殺事件が、誰によって、どのように組織されたかは今尚疑問であり、私はそれを知ることができない。とくに十三人の被逮捕者が警察の手中にあって完全に管理されており、弁護士接見も全員不当にも禁止されており、情報が一切警察に管理されているが故である。我々は真相を糾明すべく全力を尽し、独自の調査活動を組織し、自からの手で、この陰謀で、残酷で、忌むしい事件の真相を暴き出すべきだと考える。それなしにアレコレの早まった論評を下すことはできない。

第三に私はこの事件について三つの可能性を想定しよう。一つは連合赤軍以外の何者かによって組織されたという考えであり、二つは連合赤軍内に潜入した挑発者と、外部の何者かによって共同して組織されたという考えで

あり、三つは警察が発表している連合赤軍内から発生したリンチ・殺害事件という考えである。私には今これを究明する何の手段もないが、しかし私は警察の発表内容に多大の疑問点をもっており、この三年近い時期の我々の周辺をふり返った上で、二番目の事件として確信している。私は調査が真相を糾明すること、私の疑問を解き明してくることを期待する。

第四に、赤軍派は（私自身を含めて）次の自己批判を行うべきだと考える。

① 事件が右述のいずれの場合であるにせよ、今回の事件を防止しえなかったこと、又いち早くこの事件を察知しえなかったこと、そのことによって革命運動と階級戦線に多大の打撃を与え、権力に利用手段を与えたこと、自己批判。

② もし事件が挑発者の潜入をテコとして組織されたものであるなら、この挑発者の潜入を許し、それを発見しえず、又その危険と闘うことができなかったことを、自己の弱点として真剣に総括し、自己批判すること。

③ もし連合赤軍内から発生したリンチ・殺害事件であるなら、それを生み出した思想・政治・軍事・組織・戦術の全般にわたって根本的な自己切開を行い、徹底的な根本的な自己批判を行ないごの自己批判を人民のものとしていかねばならない。自己切開し、真剣に総括し、根底的に自己批判すること、これが主要な任務である。これを曖昧にし、これを避けて通って、前を進むことはで

きない。それなしに更に革命運動の担い手となることはできない。そして同時に当面の闘い——とくに自衛隊沖繩派兵阻止闘争——に全力を注ぎ、断固その先頭に立つべきである。現実の闘いに力を尽すべきである。これと自己批判とを結合すること、このことによって新たに再出発する——それがたとえどのようなものであるとしても——礎をきづくべきである。これをしっかりと、誠実に、真剣に遂行することによって、革命運動の隊列の中に自らをおくことができるのである。

第五に我々はいずれにせよ連合赤軍の悲惨な壊滅・実践的破産と革命運動への大打撃という現実を前に、我々の根本的な総括・自己切開・自己批判を要求されているのであり、その作業を全力をあげて開始すべきであると考え。と同時に、全力をあげて、真相糾明の調査を緊急に進め、真相が明らかになるにつれて、自己批判を、事実を照らしつゝ、深め、具体化していくことが責務だと考える。私はこの文書を、私のその作業として全同志に捧げたいと思う。（必ずしも焦点はそれに合わされてはいないのだが。私はこの文書の中では、「赤軍派」の自己批判・総括はむしろ徹底して控え目な仕方である。だから。私はこの躊躇を今では後悔している。できれは近いうち一層容赦ない仕方でも提起したいと思う。）もしこの連合赤軍の悲惨な事件・壊滅が、挑発者の潜入をテコにして計画的にひき起されたものであるのなら——それはおゝいに、いや最もありうることである。

我々は挑発者との闘争という任務をしかりと自からに課さねばならない。革命運動にとってこれは避けて通ることのできないものである。「一九一二年に挑発者マリノフスキーがボルシェヴィキ中央委員会に入ったことは最悪の事態であった。彼は何十人という最も優秀な、最も献身的な同志を滅ぼし、懲役にやり、彼らのうちの多くのものの死を早めた。彼がそれ以上の害悪を引き起さなかったのは、我々の間に合法活動と非合法活動の相互関係が正しく設定されていたためである。……最も進んだ国を含めて、多くの国では、ブルジョアジーが共産党に挑発者を送り込んでいた。将来もそうするだろうということは疑う余地がない。この危険と闘う手段の一つは、合法活動と非合法活動をたくみに結合することである。」（レーニン・共産主義内の「左翼主義」小児病）組織無政府主義と闘い、組織性と規律を高め、組織員の質・団結をたえず高めることは勿論、参謀本部・指導者をとくに「かくまい」、とくに秘密にしておく必要の際にも、決して陰謀主義に陥らず、合法活動と非合法活動を結合し、非合法組織が合法的・半合法的階級諸組織によって部厚く包囲されるようにしていかなければならない。又革命的警戒心をたえず堅持しなければならぬ。（これは政治警察との闘いとも共通したものである。）このような闘いは今や階級間の革命的激突・死闘——まぎれもなく死闘が始まっていることによって我々の前に登場しているのである。（三月一五日）

〔追 ②〕

私は三月一日から一五日の半月間、或る事情からブルジョア新聞も手にすることができなかった。私が持ちうる情報はラジオのNHKの午後七時の数分間のニュースのみであった。私はそこで、「簡潔」に報道されるこの陰惨で、残酷で、忌むしい虐殺事件を耳にしつゝ、その信じることのできない残酷さ・忌むしさと、警察発表の内容（といってもこのニュースで知りうる限りでの）に関する多大の疑問点によって、「連合赤軍内リンチ殺人事件」として考えることができなかった。（私は潜入した挑発者と「闘の組織」による虐殺事件と考えてきた。）しかし、何人かの友人からのより詳しい情報に接した時、私も又信じがたい驚がく、戦慄、憔悴をもって、「連合赤軍内リンチ殺人事件」として認めなければならなかった。私の驚がく、戦慄、憔悴は、この事件の全手異常な陰惨・残酷であり、革命運動の内部からこのような信じ

がたい事件が発生したことであり、それが私が関わってきた(獄中という隔絶された場から間接的であったといえ)組織から生じたことであり、私の旧知の同志が殺害されているという四重の事実によっている。勿論私はこのような事件が、どのような理由であるからにせよ革命運動・プロレタリア運動と本質的に全く対立する反動的テロルであり、更に反革命的挑発のテロルであり、虐殺者は誰であれ反革命・挑発行為として糾弾され尽くすことが、この事件から革命運動・階級戦線を擁護するため最低限の前提だと考える。しかし同時に、私はこの事件の発生の機軸をめぐり出し、赤軍派の一切を根底から切開し、総括し、批判し尽し、そのことによって今日の革命的左翼全体が陥っている病の病根をも取り出し、治療していく作業が、是非とも、かつ緊急に必要なだと考える。病は、その身体の一部が異常な腐臭を放ちつゝ崩れ落ちた程に重症であり、この崩れ落ちた部分の膿は、全身を損いかねない程に、化膿し尽し、腐爛し尽しているのである。この腐り果て、崩れ落ちた部分の切断作業を直ちに行ない、身体全体の膿を吐き出し、新たな血を注ぎ、健康を回復しなければならぬ。革命へのこの大打撃・この大陥没を克服するには、本当に根本的な、本当に思い切った治療を施さねばならない。革命運動がこの痛手を克服し、健康な息吹きを取り戻し、新たな前進を闘い取るのにどれ程の時間が必要かを私は知らない。しかし、たゞ、誠実・精力・知力と性格の強さが必要なこ

かつ簡単に、リンチや殺害が行なわれたのか。我々はこれをどのように解釈しうるのか。我々の想像の遙か彼方にあるこの事態を。

② この想像を絶する、理解の範囲をこえる事柄にあえて踏み込めば、私は次のように考える。このファシスト的な、ギャング的な「サディズム」は以下の点に起因している。一つは軍事ニヒリズムであり、二つは自覚と団結に支えられない「鉄の規律」即ち規律の一切の源泉を失ない、涸渇した「鉄の規律」最大の無規律であり、三つは「危機と死」をめぐる悪魔的ロマン主義であり、四つは現代化・システム化・機械化された警察体制のもつ機構的ニ体制的な「存在抹殺」の兇暴性・残虐性の、それに敵対する側への投影・内面化である。ニヒリズムとロマン主義と最も機械的な、ニヒリズムの「鉄の規律」と敵の機構的ニ体制的な「存在抹殺」の投影・内面化の結合である。

第一は軍事の技術的側面、或いは技術―軍事を一切の上におき、それを目的化し、政治、或いは階級闘争をこえたもの隔絶したものとして絶対化し、それを統率する術を失なう時、必然的にもたらされる軍事ニヒリズムである。これは他ならぬブルジョア軍事論―軍事至上主義であり、戦時に全面化するものである。これが一旦敗勢に陥り、困難につき当るや、内部にどのような歪み・統制をもたらずかは、第二次大戦の日本・ドイツにみるこ

とだけは確実である。私は今この八あとがきVへの追記で、これら全てに、或いは根本的に迫ることはできない。だからメモだけを記して、近いうち、あらためて、そのために知力と精力を注いで見解を明らかにしたいと思う。① このような陰惨で、残酷な虐殺事件を我々は何に對比することによって理解しうるだろうか。戦争における虐殺行為―あのソソミ虐殺事件や、旧日本軍の南京大虐殺事件のような―によってか。それともナチスがレジスタンスに対して行なった、或いは旧特別高等警察が共産主義者に対して行なった、又フランスのアルジュリア総督府がFLNに対して行なった、更に現にベトナムのカイライ勢力の監獄に於てNLFに対して行なわれている拷問と虐殺行為によってか。或いはアメリカの南部白人(K・K・K等)が黒人に対して行なってきた、又今も行なわれているリンチ・虐殺によってか。或いはアメリカのギャングが行なうリンチ・虐殺行為によってか。しかし、その陰惨・残酷・冷酷・「組織性」は、ファシスト、人種主義者、植民地主義者、ギャング、(匪族のそれとのみ対比しうるものであり、現代では彼らにのみ特有のものであったのだ。一体このようなファシスト人種主義者、植民地主義者、ギャング、匪族にのみ特有であり、我々にとつては想像さえできず、どんな場合でも、どんな敵に対しても取ってはならず、憎しみと闘いの対象としてきたこのような方法・手段が、何故自からの内部に向けて行なわれたのか。しかも些細な理由から

はありえない。軍事のもつ機能としての殲滅・殺傷とニヒリズムが結合する時、それは歯どめを持たず、味方内部の矛盾の処理の方法に転化するであろう。

第二に自覚と団結に支えられず、その一切の源泉を失ない、涸渇し、死せる「鉄の規律」即ち最大の無規律は何故もたらされたのか。(いやこのような規律は、資本主義の飢えの規律よりも、農奴制の鞭の規律、或いはファシスト、ギャング、匪族の恐怖の規律に類似している。我々はこのレニンの「共産主義内の『左翼主義』小児病」や更には「偉大な創意」をも想起すべきであろう。その根拠は徹底した陰謀主義―一握りのゲリラ軍こそ全であるという―と共産主義政治の欠除―広くは人民内部の矛盾の処理に関する、狭くは組織生活の問題に関する―にある。「人民、たゞ人民だけが世界史の原動力である。」という時、人民の全生活・全実践・全経験の中にこそ一切の源泉があり、我々も又それに意識的に変革的に働きかけることによって、そこから一切のものを波み取り、絶えず新たなものを波み取り、蓄積していくことによって発展し、豊富化していくということである。この相互関係のうちに打ち鍛えられ、深まり、高まる自覚・団結・政治上の戦略・戦術の正しさへの確信・その検証・結合の高度化等によって規律は支えられ、点検され、強められていく。だからこそレーニンも一方で「陰謀組織」を論じつゝ、同時にその大衆性・公開性をいかに確保するかに心血を注いだのであった。

公開性をいかに確保するかに心血を注いだのであった。

完全な陰謀主義の組織は決して持続することはできない。それはロシアのテロリストの組織がそうであったように、たゞ一つの具体的行動のために全エネルギーを注ぎ、燃焼し、その行動と共に解体する。——多くは自からの死をもってあがなったのだが。いわば磨滅するのである。(又おしゃべりばかりしている非実践的組織が決して持続せず、解体していくのもこのことによっている。)それでも、尚持続し、厳格な規律を維持しようとする時、それは何を必要とするであろうか。鞭か、飢えか、恐怖か、それともある特殊なしるし或いはニヒリズム無規律の規律によってか。他方共産主義政治は組織生活の問題にこそ集中して現われる。毛沢東が赤軍の初期に、「党内の誤った思想の是正について」で組織生活の問題に力を注ぎ、朝鮮労働党五回大会がこの問題を強調するのもこの故である。(毛沢東はこの点について、「自由主義に反対する」や「党の作風を整えよう」や「指導方法の若干の問題について」等くり返し述べている。我々が毛沢東から最も学ぶべき点は、作風・工作方法の問題である。)組織生活における思想闘争—組織闘争とその方法は、資本主義批判—共産主義の根本問題である。従ってこれは又我々と人民との結合——人民内部の矛盾の処理や、現実の階級闘争・敵階級との闘争と不可分である。即ち組織生活の問題は、現実の階級闘争とその中での人々との結合関係・人民内部の矛盾の処理に対象化され、それによって打ち鍛えられ、強化され、発展していくの

である。組織生活の問題は、ブルジョア社会(そのイデオロギー・習慣・社会的連系・規律・道徳・結合形態等)とどう闘い、どう変革し、新たな社会の建設者へと自かちを高めていくかという問題として、我々が人民と結合する方法・形態・内容、人民内部の矛盾の正しい処理の仕方と共に、プロレタリア的ニヒリズムの階級闘争と相対的に貫かねばならない。これは敵階級との闘争の中で独自の独自の問題であり、同時に敵階級との闘争の中で検証され、打ち鍛えられ、又逆にそれを強める。この総体としての党—階級—大衆の相互関係こそ、共産主義とプロレタリア運動の結合であり、プロレタリアートの階級闘争である。(それを実践的に表現するものこそ、綱領—組織—戦術なのだ。)この共産主義的政治に裏付けられない規律・「鉄の規律」、警察との厳しい、凄絶な緊張関係・闘争(しかも組織された人民の基盤・陣地をもたず、それから隔絶した)からの必要性としてののみ「鉄の規律」に、人は耐えることができないであろう。尚かつそれを確保しようとする時、それはもはや無目的な規律、最も徹底したニヒリズムをもってする規律—最大の無規律を結果するだろう。何故なら規律とは常に、一定の社会的労働組織を支えるものであり、プロレタリアートの規律は、「大規模な資本主義によってつくり出され、組織され、結集され、教育され、啓蒙され、鍛えられた」「自覚し、団結した」規律として、共産主義社会を建設する規律であるから。資本主義の規律を拒絶し

つゝ、共産主義の規律へ向かうことができず、かつ「鉄の規律」を要求するとすれば、それはニヒリズム—無規律の規律、最も無自覚な、最も機械的な、最も腐敗した規律へと転落していくであろう。

第三に、まさにこのニヒリズムに基づく、最もプラグマチックで、最も無自覚で、最も機械的な、最も無規律な「鉄の規律」こそ、今日の警察の、現代化され、システム化され、機械化され、汎ゆる装備をもった、機械的ニヒリズム的「存在抹殺」攻撃のもつ兇暴性、残酷性、冷酷さ、ニヒリズムの逆投影であり、それへの屈服—内面化である。警察にあつては、その物量・機構・体制・装備、そのプラマチズム—ニヒリズムによる膨張・肥大化として現われるそれが、物量・装備・機構に絶対的限界をもつ連合赤軍にあつては、プラグマチズム—ニヒリズムによる「鉄の規律」の兇暴性・残酷性・冷酷さとして現われる。一般に闘争は、その手段・方法・形態において、常に相互に規定しあい、影響しあうものである。反革命が結束し、密集し、力を強めれば、革命は一層強力な攻撃の手段をつくり出すというように。そして共産主義的政治がしっかりと保持され、自覚と団結が拡大・深化・高度化していく限り、プロレタリアートは勝利するのである。何故なら「この革命的暴力の経済的基礎、その生命力と成功の保証であるのは、プロレタリアートが資本主義に比べて一層高度の型の、社会的労働組織を代表し、実現しているということである。こゝにこそ核心

がある。こゝにこそ力の源泉があり、共産主義の不可避的な、完全な勝利の保証があるのである。」(偉大な創意)もしこういう方向へ進んでいくことができないなら、逆に敵に影響され、同質化され、解体されていく。とくに軍事や、戦争においてしかりである。(ソ連赤軍の変質をみよ。フランスのレジスタンスが革命に転化しえなかったのもしかりである。これらは敵—ファシストよりも、同盟者—米帝・連合国軍によってであるが。)ロシアの革命運動も又、そのツァーリズムとの関係において、自からのうちに負の遺産をもったし、日本の革命運動も又、戦前の天皇制との関係において自からのうちに負の側面をもたざるをえなかった。(一時期、家父長制や、左翼天皇制と言われた問題)今日帝國主義の警察的専制が強まり、警察が機械的ニヒリズムに革命運動の抹殺—存在の抹殺—をめざしているが故に、それとの闘争—緊張・対峙は必然的に我々の内部に種々の屈折と困難の側面をもたらしださう。それに拝跪することなく、屈服することなく、自然成長に委ねることなく、プラグマチズムやニヒリズムに陥ることなく、頑強に、忍耐強く、粘り強く、自覚的ニヒリズムに對処し、解決し、克服し、あくまで共産主義の原則を貫いていかねばならない。それがどれ程時間のかゝる、困難な闘い、前進であったとしても、我々はそれによってしか勝利することはできないし、共産主義社会を建設することはできない。

第四に「危機と死」をめぐる悪魔的ロマン主義——そ

れはドイツ、イタリアのファシストの中に、とくにファシストに傾倒した詩人・芸術家、哲学者等に特徴的であり、彼らのサディズムの思想的根拠であるが、唯一の思想的根拠、相互の結びつきの絆として、リンチ一虐殺によって増巾され、かつそれを促進したものと思われる。この悲魔的なロマン主義の根源は、ロシアのナロードニキ的、「人民の意志」派的、(左翼)エス・エルのロマニズム、確固たる資本主義社会批判と階級闘争の観点の欠除、革命のロマン主義的熱望と、個々の極限化としての主体性、即ち個我を階級へと止揚していくのではなく、そのロマン化によって主体性を、個人の最も熱烈な革命的感情・精力・英雄主義・献身・自己犠牲を汲み取っていく傾向である。(往々にして、これが誤って人の要素の重視といわれてきた。)両者は相互補完的である。それこそ前マルクス主義的社会主義・非マルクス主義的革命的運動の特徴である。(主要にはバクニン主義)このロマン主義は「軍事」と「非合法」のロマン化へと実践的に帰結し、そこに「革命の現実性」と「自分の最も熱烈な憤激と、激昂した感情と、革命的精力の燃焼」を見出していったのであった。だがこれは観念の中にか發展性をもつことができず、現実性の喪失と共に増々ロマン化し、超越的観念の絶対化と、自己の現実存在の滅びをバネとするこの超越的観念への昇華・帰一という考えに導いていく。即ち「危機と死の美学」である。(この点では三島由紀夫も本質的変わりない。

勿も三島は「国体」を核として、ブルジョアインテリゲンチヤとして、ブルジョアジーの側に奉仕するのであり、革命的ロマン主義は、主観的には革命とプロレタリアートに奉仕し、革命的冒険主義をもって敵権力と最も果敢に、激烈に戦うのであるが。)だがこのような、自己に最も徹底した自己犠牲を強いるロマン主義は、同時に他者に対する最も容赦ないサディズムにも転化しうるし、両者が表裏一体のものとして、「危機と死の美学」として、自己の存在を確認し、他者との結合を確認する手段になりうるのだ。だが一担それに一步踏み出せば、不可避的に破滅に向って坂道を転げおちざるをえない。そのことによってしか自己を維持しえないのだから。果敢的にくり返されていった、あの残酷な集団リンチ一殺害は現実から隔絶し、警察の包囲と肉体上の限界をこえる程のアジト生活・移動による凄絶な緊張・危機の中におかれたロマン主義一革命的冒険主義が、尚かつその解体的危機をこえて自己を持続し、結束を確保し、純化しようとした時、「危機と死」をめぐる悪魔的ロマン主義・最も徹底したニヒリズムに陥んだに違いない。(その意味ではあの残酷な集団リンチは、虐殺者自身にとっても自己犠牲的行為なのであり、この共同の制裁行為によって又自からも或る場合にもそのような制裁を受けるという自己確認によって、相互の結束を維持する方法であったに違いない。「総括」と称して行なわれていることはそれを示している。自己否定としての他者の否定、その共

同行為化による結束。これは中世的或いは復古的秘密結社の方法であり、反動的実存主義の思想である。)ロマン主義とニヒリズム、これこそこの事件の全てをおもっている特徴である。このリンチ一虐殺事件は、日共革命左派一安保共闘の諸君によってまずもって始められたという。この諸君こそ、いわゆる「新左翼」が体質的にもってきたセクト主義・内ゲバ主義・浮動性・政治操作主義が最も遠隔だった、誠実で、謙虚で、献身的で、ひたむきで、純粋な諸君であったのであり、ロシアのナロードニキ、「人民の意志」派のテロリスト達に最も近い諸君であったのである。ネチャーエフをも遙かにこえた今回の事件は、非プロレタリア的日共産主義的運動がその背後に驚くべき反動的腐敗を育くむことをまざまざと示している。我々はこのロマン主義とニヒリズムのむごたらしい破産の彼方に、マルクスの冷徹な結論をしっかりとわがものしなければならぬ。「共産主義が資本主義から発生するものであり、歴史的に資本主義から発展するものであり、資本主義によって生み出された社会勢力の作用の結果であるという事実」「マルクスのこの結論(——資本主義社会と共産主義社会との間の、革命的転化の時期、その政治上の過渡期としてのプロレタリアートの革命的独裁)は、近代資本主義社会でプロレタリアートが演じている役割の分析と、この社会の発展についての事実、プロレタリアートとブルジョアジーとの対立する利害の非和解性についての事実とに基いている」。

『為国家和革命』)唯一の革命的階級としてのプロレタリアート(「資本主義社会の墓堀人であり、この社会を(他の社会に)代える能力のある唯一の勢力としてのプロレタリアート」このブルジョアジーとプロレタリアートだけが、この資本主義社会の基本的な勢力であるし、又そうでありうる)『農村における活動についての報告』)「小ブルジョアジーは自分自身の立場を捨て、その未来のプロレタリアートの立場へと移ってくる場合にのみ革命的である。」(『共産党宣言』)これらの見地を、そしてこの見地を初期のエス・エル批判として貫いたレーニンの見地をしっかりと把み、貫かねばならない。以上長々と引用したのは、独裁や、権力を単に軍事力の問題として考える素朴機械的唯物論の非マルクス主義を暴露するためである。だからこそ我々は共産主義とプロレタリア運動の結合に、労働者階級の政治的発達と政治的組織化をたすけることに全努力を傾注しなければならず、この原則からの一切の逸脱に反対しなければならぬ。そして現実批判日本帝国主義批判を一層深め、徹底化し、具体的現実的階級関係の総体と、プロレタリアートの具体的歴史的使命を明らかにし、(レーニンの綱領確立への論戦、分析の観点を学ぶべきである)レーニンが『カール・マルクス』の中で述べている「プロレタリアートの階級闘争の戦術」の観点にしっかりと立ち、「共産主義内の『左翼主義』小児病」の指導者一党一階級一大衆の相互関係、組織や活動態度に關する観

点をしっかりとわがものとしなければならぬ。階級的団結・階級的自覚・階級的組織性をこそ広め、深め、高め、打ち鍛え、ロマン主義やニヒリズムや小ブルジョアの半無政府主義的革命的冒険主義や陰謀主義に反対し、「プロレタリアートの闘争の一切の現れを指導する能力のある革命的な階級党を組織」していかなければならない。「革命党はそれが実際に革命的階級の運動を指導する時に初めてその名に値いするものとなることを我々は銘記しなければならない。」小ブルジョア・インテリゲンチヤによるプロレタリア運動のエスカモチーロヴァチには断固として闘わねばならない。

③ 最後に我々の進むべき道について私の考えを簡単に記しておきたい。

第一は一切の小ブルジョアの浮動性を克服し、マルクス・レーニン主義を誠実に・真剣に、ひたむきに学び、実践で点検・検証し、ボルシェヴィズムの旗を高く掲げて、共産主義とプロレタリア運動の結合を、頑強に、堅忍不拔に、組織することである。何を今更と言うべきでない。これは今日の世界革命運動全体が直面しているのだ。(例えば中国共産党にあっては、マルクス・レーニンの本をまじめに読み、真剣に学び、実践に貫こうという運動が、大規模に、粘り強く進められている。この半年間の北京周報をみれば、それがどんなに誠実に、真剣に行なわれているかは明瞭である。) 共産主義とプロレタリア運動の結合については、次のレーニンの言葉を指

示しておこう。「社会民主主義は、労働運動と社会主義との結合である。その任務は、労働運動のそれぞれの段階でのこの労働運動に受動的に奉仕することではなく、総体としての全運動の利害を代表し、この運動にその終局目標とその政治的任務を示し、この運動の政治的・思想的独自性をまもることである。」(この結合をつくりあげる過程は、非常に困難な過程であって、この過程が様々の動揺や疑惑を伴ったからといって、何も驚くにはあたらない。」「それはプロレタリアートの大衆の中に社会主義思想と政治的自覚を植えつけ、自然発生的な労働運動と切り離せないように結びついた革命党を組織する、という任務であり、「プロレタリアートの一切の闘争を帝国主義権力に対する革命的労働者党の不退転の系統的闘争に転化することである」(『我々の運動の緊要な諸任務』)

第二はこれと同じことであるが、我々の勢力を真にプロレタリア的共産主義的の革命勢力へと改造していくこと。「学び、学び、学ぶこと」「闘争・批判・改造」「闘い、教育し、訓練すること」一切の小ブルジョアの要素を克服すること、このことをしっかりと肝に銘じなければならぬ。組織・活動態度、その他全ての面で、プロレタリア的堅固さ、確固さをわがものとしなければならぬ。」

第三に、全活動の基礎に大衆路線をすえ、真の意味での階級闘争即政治闘争の見地、階級闘争の正しい戦術の

観点を徹底的に貫くことである。これはとりわけ今日軍事において必要なことである。(これについては前にふれたが、こゝでは次の点だけつけ加えておく。われわれは陰謀主義——軍事無政府主義——革命的冒険主義に反対する。もちろん、同時に、軍事日和見主義——逃亡主義——合法主義に反対する。そして武装闘争を蜂起——プロレタリア権力への計画の一環として闘いぬく。

第四に党派と無党派活動家・大衆・党派相互間、更に党派内部の矛盾・即ち人民内部の矛盾の処理の方法・形態に關して、しっかりとプロレタリア的共産主義的作風を打ち樹て、いくことである。(この点についてはどんな諸君も毛沢東思想・中国共産党に学ぶべきである。この点こそ、日本革命運動の伝統と、中国共産党の伝統に、最も重大な差があるのだ。自己批判と相互批判、団結——批判——団結、謙虚、調査研究という作風だけでもしっかりとわがものにすれば、大きく変わるであろう。

我々は政治的傾向や諸勢力を、自分自身の狭い枠と気分にもとづいて評価するのではなく、全階級の規模から「冷静に、厳密に、客観的に評価」すべく努力せねばならない。実際今日の革命的左翼の中には、誠実さ、真剣さ、冷静さ、厳格さといった要素が余りにも少なく、気分的浮動性や主観主義が多すぎるのである。(例えば「日和見主義の武装反革命への転化を粉碎せよ。」というスローガンが掲げられているが、これを掲げている諸君は、「日和見主義の武装反革命への転化」とはドイツ

革命におけるノスケIIシャイデマン一派のようなものを意味するのであり、それを粉碎するということは実践的にはそれとの内乱を意味するということ、自分自身がプロレタリアートにそのように呼びかけているということを理解しているのだろうか。本当にそう思っているならば驚くべき、かつ漫画的な超主観主義・超敗北主義であり、もし、そうではなく、単一の革命党建設の途上におけるアナルコ・サンディカリズムの流派との闘争という意味で言っているなら、これは自分の気分をそのまま政治的評価とすることによって、客観的には労働者階級のデマゴギダへ転落することである。

第五に一切の活動の糸を集中する真に革命的組織を建設し、蜂起——プロレタリア権力樹立に向けて「正規の攻囲」に着手し、「全般的な火事を、系統的に、執拗に準備し」、「政府が抑圧をまき、憎悪を刈り取っているところ」で、この政府を狩り立てるような仕方、(全国に散らばっているプロレタリア独裁と社会主義のために闘う闘士達の)軍隊・単一の軍隊を組織し「政治的反対や抗議や憤激の汎ゆる現われと結びつけて一つの総攻撃にする全国的な中央集権化された組織を建設していくことである」(レーニン)我々は高く、更に高く、ボルシェヴィズムの旗を掲げて前進しなければならぬ。(私はこの観点から、引き続いて第三部・四部で、当面する日本革命の綱領・戦術と組織の問題について述べる予定である。)

連合赤軍内に生まれた、陰惨で、残酷で、意わしい「リンチ・虐殺事件」は、連合赤軍が本当に誠実で、真剣で、ひたむきで、勇敢で、革命的熱意に満ち、献身的で忍耐強く自己犠牲的な人々によって担われていただけに、根底的な衝撃と陥没を我々にもたらした。我々は根底的な切開と総括をもってこれを克服し健康な発展のため基礎を築かねばならない。わが革命運動はこの七二年の前半という極めて重要な時期に、はかりしれない打撃と損失を蒙った。我々はこの打撃から一刻も早く立ち直り、本当に再出発する第一歩をしっかりと踏み出さねばならない。この苦痛と憔悴に満ちた日々をのりこえていく知力と性格の強さと誠実と精力が今程必要な時はない。

(三月二〇日)

¥750.-